第六巻

一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）

傾城春陽鶏（けいせいはるのとり）

傾城反魂香（けいせいはんごんかう）

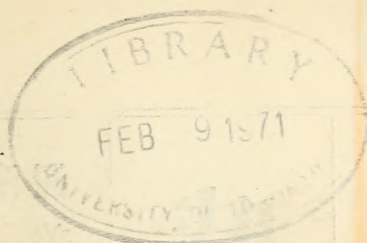
冨士見西行（ふじみさいぎやう）

昔談柄三荘太夫（むかしがたりさんしやうだいふ）

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎 共編

第六卷

時代狂言傑作集

東京 春陽堂發行

馬切り　(豐齋筆)

三七信孝
(現中村歌右衞門)

馬士
(先代片岡市藏)

解説

「一谷嫩軍記」は寶暦元年十二月、大阪豐竹座に初めて上場された義太夫劇で、作者は並木宗輔、淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏、豐竹甚六の合作になるものであるが、三段目の切、(卽ち本卷に收めたもの)迄は、宗輔の筆になつたものである。四段目の道行『花の追風』と云ふ菊の前の道行から、岡部六彌太と菊の前との件りは、前記した他の作者達が、宗輔の案に隨つて書いたのである。

この新作淨瑠璃は大好評裡に迎へられ、古今の大入りで翌年迄打續け、盆からは切に操り踊りを附けたと傳へられる。

この曲は全段で五段物、その場割を擧げて見ると、

序段の口は堀川御所の場で、本卷の序幕に當るが、原作では、熊谷も六彌太も自身に顏を出すのであるが、歌舞伎の方では立物の役者が序幕から出るのを好まない習慣があつたので、堤軍次と深谷七郎とが代理にくる事になつてゐる。又俊成から使に來る萩の侍從といふ女も、原作ではやはり菊の前がこの使に來るのである。中は北野天神の場で、義經と卿の君が花見の折柄、卿の君は自分が時忠の

娘である所から義經の身に後難の來るのを恐れて、自害する場。切は參議經盛邸の場。敦盛の身分についてはこの段に「口外へ出さねば知る人あるまじ。そもこの敦盛卿は我子にて子に非ずもとこの御臺藤の方は法皇へ宮仕へし御寵愛深うして、御胤を身にやどせしが人の妬みの强ければと、先祖平の忠盛へ白河院より下されし祇園女御の例に任せ、懷胎の身をその儘、某が妻に賜はりて出生ありしこの敦盛」とある。それ故に義經は敦盛は院の御胤とて熊谷に因果を含めるのである。經盛は院の御胤故に、平家の犧牲になるなと勸めるのを敦盛は振切つて出陣する。養女の玉織姫も後を追ふ。この前に玉織は時忠の娘であるから時忠の許しを得て、平山の武者所が妻にほしいとて大館玄蕃を使者によこす。玉織姫はけがらはしいとて玄蕃を切捨てる。かういふ經緯があるから、須磨の濱邊で平山が玉織姫をくどくのである。

二段目の口は陣門。中は組打。切は菟原の里。いづれも本卷に收めた場である。

三段目の口は彌陀六家の場。彌陀六の娘小雪（實は重盛の子）と若衆（實は敦盛）との色模樣があり。中は石塔場。切は熊谷陣屋になる。

四段目は道行の後六彌太の邸で、舅とかしづく樂人齋は實は三位中將重衡の家臣、臆病者の名を取つた後藤兵衛守長の子であり、卽ち菟原の里の太五平である。一の谷で六彌太が忠度に組みしかれた

のを太五平が忠度の右の腕を切り六彌太を助けたので、六彌太は太五平を命の親とし舅と云はせるのである。菊の前は夫の敵六彌太に一太刀恨みんとやつて來る。太五平の妹初霜は島原の太夫菅原とて六彌太に身請けされて來る。樂人齋は六彌太を殺さうとして事成就しない中に六彌太に見あらはされ、割腹して死ぬ。菊の前は夫の敵は六彌太でなく太五平である事を知り、太五平を切る。菅原、林、菊の前はその後六彌太の情でいづくともなくのがれ去る。

五段目は義經が時忠を法師にして、源氏の繁榮を祝してめでたく納まる。

さてこの作を歌舞伎に移して江戸で初めて演じたのは、寶暦七年の森田座で中村傳九郎、澤村宗十郎（二世）等の一座であつたが、役割は判明しない。次いで明和七年の六月、市村座で初代尾上菊五郎が熊谷を勤めたが、評判はよかつたと傳へられる。その次は寛政七年の三月都座で上演。その時の役割は、

熊谷、六彌太（三世澤村宗十郎）相模、菊の前（三世瀧川菊之丞）忠度、義經（二世坂東彦三郎）敦盛、小次郎（岩井粂三郎）等であつた。

右の如く種々な役者が熊谷を演じたが、熊谷役者として最も適役であつたのは、四代目の市川團十郎で、後世に傳へられた型は、大抵この人によつて定められたものだといふ。大阪では三代目の中村

（梅玉）歌右衛門がこの役を得意としたが「小兵ながら手だれの芝翫なれば故人の仕來りと違ひ、新らしき無量の思入を加へたりければ、二の口須磨の浦組討の場は古今にあるまじと評よかりき。三の切物語迄よく、幕切、切拂うたる有髮の僧の所にて、兜の下くり〳〵坊主なり。義經より暇の出るや否やわからぬに青坊主になるとは、あまりなる思入とて甚だ不評」（文化十年歸阪の折）であつたと、西澤一鳳はその著傳奇作書の中に記してゐる。しかもその後度々出し、坊主頭も見馴れた故見物も笑はずなつたと云ふ。然して今日では、皆この型によつてゐるのである。

今日行はれる熊谷の型には二通りある。一は團十郎型、一は芝翫型である。團十郎の方は七世團十郎から九代目に傳つたもの。芝翫は三代目の歌右衛門から四代目に傳はり、更に先代芝翫に傳つたものである。型の相違は隨所に見られるが、陣屋の段切に、幕外になつて坊主姿でばた〳〵と駈込むのは團十郎型であつて、芝翫の方ではたゞ引張りの見得、本卷の幕切れのやうに終るのである。出の上下も團十郎型では荒い龜甲縞を用ひるが、芝翫型ではさうでない。形容に於ては芝翫が勝り、精神に於ては團十郎が勝ると云はれてゐる。

四段目、六彌太の作りで今日上演されるものは、原作を西澤一鳳が書き直したものである。七代目團十郎の望みによつて書いたもので、田五平は後藤兵衛守長の悴とあるを、伊賀平内左衛門の悴と直

し、菅原を深谷の奥方とし、忠度は生きてゐる事にして、傾城となり入込ましたもので、俗に傾城忠度と呼ばれるものである。弘化三年稿下のもので、江口の遊君漣實は薩摩守忠度を荒璃珏、岡部六彌太を海老藏團十郎が勤つた。この作は一時新歌舞伎十八番の中に加へられた事もあつたといふ。

この作は並木宗輔の作中、最傑作の部に入るべきものである。中にも植特山即ち組討から陣屋に引續いた件、即ち熊谷と敦盛の作が傑出してゐる。淨瑠璃作者の通弊である、持つて廻りすぎた難はあるものゝ熊谷の所謂一枝を切らば一指を切る苦忠などは、寺子屋の松王と同じく歌舞伎劇ある限りは演續されるものであらう。松王程業の强くないのも却つてこの作をすつきりさしてゐる。初めに義經が岡部六彌太、熊谷直實に命を下して別々に事件を起させた手腕は、作者宗輔の得意な手法であるが、天晴な技巧と云ふべきであらう。

「馬切り」と俗に稱する一幕物は「傾城青陽鷄」といふ長い狂言の一部分である。「傾城青陽鷄」は辰岡萬作の作で、寛政六年一月、即ち大阪で云ふ二の替り狂言として、角の芝居に於て、淺尾奥次郎た書卸されたものである。

この長い狂言は、織田豊臣の世界で小田の家督相續の事から、柴田修理介勝重（勝家の事）の隱謀

があらはれ、遂に眞柴久吉、三輪五郎左衞門等の忠節によつて自滅し、小田家は信長の嫡孫三法師君によつて相續せられる迄を書いたものである。大阪の當時の正月狂言の例として、規模が實に大きく序幕には高麗の場を出し、高麗韃靼が同盟して、小田家の家督爭ひからひいて、日本國中が亂れたのに乘じて、日本を取らうとするなど、手廣い大規模狂言である。

然し柴田の叛逆といふのは表面の事であつて、實は本多上野之助の所謂「宇都宮騷動」を題材としたもので、これに松平長七郎の「日本橋の馬切り」の事蹟を交へて、幕府の目を巧みに眩ましたものであつた。卽ち柴田は本多上野之助であり、三輪五郎左衞門は大久保彥左衞門を暗示し、彥左衞門の事蹟として世に傳へられるものを巧みに應用し、小田三七信孝は松平長七郎にあてたのである。

小田三七信孝は、六十餘州に望みはない、又舊臣等が小田家の輔佐にならうとして際限のない蝸牛角上の爭ひに飽きたとて、自分から我身を追放して、あてどもなく出て行く。といふのは紛失したお家の重寶蛙聲丸の刀を搜してゐるのである。後、刀を搜し出してからも、天下を取るは本望でないと信孝法師と名をかへて、九州の地に閑居し刀を久吉に渡すやうに傳言するのである。尙馬切りの場に出る宅間小平太と云ふ男は、柴田へ一味の叛逆人であり、それを知つて信孝が切り殺す、又高野山へ納める三千兩の祠堂金は、久吉が信孝に貢ぐ爲にわざと取計らつたといふ事も傳へられてゐる。

初演の時の役割は、

三七信孝、眞柴久吉（四世市川團藏）、宅間小平太（山村友右衛門）、三輪五郎左衛門（初世淺尾爲十郞）、柴田勝重（嵐小六）等であつた。この小六は云ふ迄もなく初代の嵐雛助である。團藏の三七信孝は無類の當り藝で、團藏が演じて以來、この狂言はたゞ「馬切り」の場だけが、今日迄演續さるゝやうになつた。彼のこの役が如何に勝れてゐたかゞ窺はれる。當時の評判記にも「姿のはまりから落付いたる仕樣、よしある大將と見える」と迄激賞されてゐる。最初の興行の折病氣になつて舞臺を退いたので、嵐小六が代役で信孝に扮した。世人は小六は團藏より勝ると信じてゐたが、かへつて小六の方が劣つてゐたので、團藏は益々名聲を揚げたといふ。

この信孝を演ずる俳優は何よりも先づ品のいゝといふ條件を要する。「馬切り」の場はたゞ單に信孝の出來にのみよつて見るべき芝居である。

江戶でこの幕を演ずる時は、よく時代を足利に直し、信孝の役名も足利三七郞春孝と改めてやつたものである。

因みに「傾城靑陽鶏」の原作は、坪內逍遙渥美淸太郞氏共編の「歌舞伎狂言傑作集」第十二卷に載せられてゐる。就いて參照せられたい。

「傾城反魂香」は近松門左衞門の作。寶永七年八月、大阪竹本座に上場された操り劇である。一說には寶永五年狩野元信の百五十年忌をあてこんで、上場されたのだとも云ふ。
全曲は三段物で上中下の三つの卷になつてゐる。上の卷では、狩野四郞次郞元信が、天滿天神の神の告げにより、越前國氣比の浦へ松を畫きに下るが、目當ての松がなく、困却の折柄土佐の將監光信の娘の女郞になつた遠山に逢ひ、土佐の家の祕傳の繪本を傳授して貰ひ、遠山と元信とは深い仲になる。中は江州高島の城主左京の太夫賴賢公が上洛の留守中、執權不破の入道道犬その嫡子伴左衞門は、御家の繪師長谷部雲谷と謀り、同役名古屋山三郞と四郞次郞とを罪に落さんと企む。繪を書き上げた四郞次郞は、その繪を持つて高島の邸へ參入し、かねて許嫁の姬君銀杏の前に對面し睦事の最中に道犬等が亂入して四郞次郞を虜とする。下男の雅樂之助は力一杯防いだが、衆寡敵せず敗戰し、一方の血路を開いて將監方へ注進に行く。次は本卷に收めた吃又の件りになる。吃又とは岩佐又兵衞の事で土佐派から出て、浮世繪の一派を開いた繪師で、その事蹟も種々傳說化された人物である。切は又平お德が高島へ向ふ途中、姬君に廻り逢つた所へ雲谷一味の者が來て、その住家を取り圍む。家の中から奴、若衆、娘、猿、猫、鷲、鷹などが出て應戰して、散々に打破る。之等は皆又平の大津繪か

ら抜け出した精靈であつた。
この後は吃又には關係のない事であるが、遠山は四郞次郞に許嫁があると聞いて、憂悶して死んだが、魂はこの世にとゞまり、銀杏の前の嫁入りの途中を待受けて、姬から男を一七日の間借りて白分が四郞次郞方へ乘込む。そして香を絕やさず焚いて幻の姿をあらはす。四郞次郞は勿論それが妄執の幻とは知らず、二人で道行などがある。この景事を「三熊野かげらふ姿」と云ふ。これが『傾城反魂香』の名題の出た所以である。反魂香とは支那の漢の孝武帝が、最愛の李夫人に別れ、戀しさの餘り名香を燻じて、その姿をあり〳〵と見たといふ故事から出てゐるのである。惡者の道犬等は名古屋山三郞の忠誠によつて滅び、土佐の將監はめでたく勅勘が許されるといふに終る。
今日演ぜられる吃又は、近松の原作通りではない。後年何人かによつて改作せられたものである。原作では修理之助が虎を書き消す作りは、吃又のまだ來ない先の事になつてゐる。改作者は又平に觀客の同情を起させる爲にかくしたのであらうが、これが爲に將監が何でも又平に辛くあたる。物の道理をわきまへない師匠になつた傾きがある。筋は殆んど同一であるが、近松の原作では將監があれ程迄に憎くは響いて來ない。一利あれば一害のある改作振りである。
吃又の狂言が江戶で初めて演ぜられたのは寬政十三年（享和元年）九月中村座で、役割は、

吃の又平（四世市川團藏）、おとく（小佐川常世）、將監（市川友藏）、修理之助（市川七藏）、雅樂之助（市川荒五郎）等で「何れも大できなり」と歌舞伎年代記は記してゐる。

この狂言の興味は吃又といふ人物を吃りにした點にある。しかもあく迄篤實な人間である所に盡きざる興味があるやうに思はれる。近松としては吃又の件りより、他の部分に重きを置いて書いたものであらうが、我々の興味はやはり吃又の件にある。

「軍法富士見西行」は延享二年二月大阪竹本座に上場された操り劇。作者は並木千柳、三好松洛、竹田小出雲等三人の合作にかゝるものである。

この作の骨子となるべきものは、西行法師についての傳說と、西行の歌とを牽强附會した荒唐無稽の飜案にある。淨瑠璃作者の慣用手段を、巧みに應用したものである。全曲は五段物。今その梗概を述べると、

序段のロは、鴫立澤の場。西行法師は、院の命を受け道行振りで鴫立澤に着く。折柄源賴朝は江間小四郎義時、鼓判官賴員兩人を供に連れて來かゝり、西行に對面し軍法の奧儀を問く。西行は審かに奧儀を明かすを、鼓判官は疊の上の水練とあざけつて、誠の軍法の證據を見せよと云ふ。西行直ちに

弓矢を取つて空を飛ぶ小鳥を射落す。判官は尚減らず口をたゝいて法師の身として殺生戒を破るは如何にとなじる。西行が小鳥の矢を抜けば小鳥は飛びさる。矢先は羽を縫つたばかりであつた。頼朝は甚だ感心して、今都に狼藉を働く源義仲の心腹を探つてくれと西行に頼み、白銀の猫を與へる。中は鼓判官の義仲を罪に落さうといふ惡談合があり、切になつて義仲の妻松殿の娘葵の前の邸で、執權伊達庄司親忠の獨り娘妻菊と、その許婚の夫手塚太郎との色模樣がある。

第二段目の口は本卷に收めた序幕である。切は松波靭負の家で、貧乏暮しの所から西行の娘寫繪姫と妻の兄齋藤五郎から預かつた六代君とには、袖乞に行く事は知らせずに置く。借錢の掛取りなどが來て無暗に金を取らうとする。妻のお六は詮方なさに江口の里へ傾城奉公に出る事になり、駕籠に乘つて出かける。それがお六でなくて寫繪姫で、靭負は盲目の悲しさにとり違へたのである。寫繪姫の書置が殘る。それには夫婦の者の心遣ひが不便さに自分の身を沈めるとある。靭負の驚いて駈出す門口へ、六代御前詮議の源氏方が來る。靭負は之を相手に戰ふ中に深手を負ひ、後事を齋藤五郎に頼んで死ぬ。靭負が心盡しで半櫃の中へ隱しておいた六代御前は、手塚太郎のために奪ひ取られ、行衞知れずになる。

三段目は本卷に收めた二幕目。

四段目以後は全く西行に關係はない。ごく大略の筋を述べると、ロは手塚太郎の家で、太郎が奪ひ取つて來た靱負の子供乙石と六代御前とを育てゝ居る中、鼓判官と妻菊とが上使に來る。手塚の母が乙石の首を六代と僞つて渡す。六代は義仲の方へ引立てられる。切は義仲の館で、齋藤五郎と妹おとりは六代を救ひ出さんと館へ込む。其折に手塚に逢ひ五郎は父實盛の敵と言つて切りつけるが、それは伊達庄司で、手塚の勘當御免を（手塚は恩のある實盛を討つた科で勘當されてゐる）義仲に乞ふ。義仲は心根を不便に思ひ勘當を許し、また五郎には實盛の直垂を賜はる。直垂の下には六代が入れてあるのである。

五段目は一の谷屋島の戰を義仲が夢に見る仕組み。義仲は鼓判官を討取り源氏は榮える。

この狂言は西行法師の前身が武士であつたといふ點にのみ重きを置いて、歌人としての味は微塵も見出されないが、時代物としては華やかでもあり、山もあつて、面白いものである。これが後世迄演ぜられる原因であらう。然し現今ではあまり上演せられない。廓の場で、石黑左衞門に從ふ四人の男達の臺詞などは原作には勿論ない。これは後世舞臺を華やかにする爲に、狂言作者のつけ加へたもので、狂言作者の手柄に歸すべきものである。

「昔談柄三荘太夫」の原作は「三荘太夫五人嬢」と云ふ享保十二年八月大阪竹本座上場の操り劇で、作者は竹田出雲である。

歌舞伎の方面では、寶暦四年八月市村座に「由良千軒蟾鬼港」といふ名題で上演されてゐる。その時の役割は

人買山岡太夫、三荘太夫（二世松本幸四郎）、佐渡次郎（二世澤村宗十郎）、安壽（瀬川吉次）、對王丸（坂東彦三郎）等であつた。二世幸四郎は四世團十郎の前名である。

之等によつて寶暦十一年五月に「由良湊千軒長者」といふ義太夫が、竹本座に上場された。作者は二歩堂、近松半二、竹本三郎兵衛、三好松洛等の合作である。次いで天保八年七月市村座で「三荘太夫銑鷄藏」が上場され、三荘太夫と大和田藏之進には、六世市川團藏（當時九藏）が扮し、岩城判官とおさんには十二世市村羽左衛門が扮したと云ふ。

その次が「昔談柄三荘太夫」である。嘉永五年四月河原崎座の興行であつた。本卷の臺本はこの時のものである。其時の役割は、

山岡權六、おさん（三世嵐璃寛）、岩木判官（尾上新七）、安壽姫（市川猿藏）、對王丸（河原崎長十郎）、時廉、三荘太夫、鬼柳一學（市川海老藏）、藏之進（市川九藏）、元吉要之助（八世團十

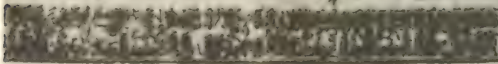
郎)等。海老藏は云ふ迄もなく七世團十郎、長十郎は後の九代目團十郎猿藏は八世や九世團十郎の兄弟で夭死した人である。璃寛は嵐村屋巖獅といつた上方役者で、最初の江戸下りの折の事である。

以上列擧した狂言は、皆少しづゝ改作されて來てゐる。鷄娘の件などは原作にはない。たゞ原作では三莊太夫に五人の娘があるが四人迄不具者であつて、たゞおさんのみが滿足な人間なのである。三莊太夫はもと都の梅津家の侍鈴村兵庫といふ者であつたが、舊主の若君梅津中將は安壽姫と許嫁と知つて、姉弟を助けておさんに供をさせて逃すのである。後に三莊太夫が斬罪にされるときまつた時、安壽姫の言葉によつて、一命は助かる事になつて、めでたく岩木の家は治まるのである。

この狂言は古來の傳說を原材として、三莊太夫を强慾非道の人間にした所に興味がある。三莊太夫の性格については、近松の「傾城酒呑童子」のひらぎの長に負つてゐる所か多いやうに思はれる。

(例によつて、本卷の校訂、解說に際しては、文學士間民夫氏の援助、研究に俟つ所多いことを附記して謝意を表する。大正十五年十一月初旬、河竹繁俊しるす。)

目次

挿繪の目次と說明

一谷嫩軍記
いちのたにふたばぐんき

一谷嫩軍記（五幕）

序幕　　堀川御所の場

役名　判官義經、深谷七郎、堤軍次、大納言時忠、醒ケ井五郎末宗、奴須磨平。卿の君、萩の侍從、等。

本舞臺三間の間高足二重。半御簾御殿。向ふ金襖瓦燈口。上手附屋體。すべて高欄附。下の方網代塀。日覆より紅白梅の釣枝。こゝに時忠冠束帶太刀。平大納言にて床几にかゝり、義經ちはや差拔金烏帽子中啓を持ちゐる。平舞臺に雜色、烏帽子半素袍にて上下に分れゐる。眞中に唐櫃を据置き、仕丁二人附添ひゐる。下り端にて幕あく。

〽戰克の將は國の爪牙、犬馬の人を勞る則、帷蓋を以て是を覆ふ、況んや大功の人に於てをや、重んぜずんばあるべからずと、漢書に見えしも宜なるかな、九郎判官義經兄の下知によつて、驕る平家を討亡し、朝家を安んじ奉ら

んと、軍慮をうながす堀川御所。

〽日夜に評議區々なり、いで其頃は壽永三年如月半、卿の君の御父平大納言時忠、竊に須磨の皇居より、入來を設けの上座にすゝめ。

時忠　イカニ方々承れ、今四海に武名輝く源家の旗色、實に朝日の登る其勢、それに由縁の時忠も、娘が婿たる判官義經、豫て語らふ一大事、首尾よく仕終せはる〴〵參着。

雜〇　旅向の警固は某兩人。

雜△　異議なく御着の上からは、全く君の御幸運、たゞ〳〵、

仕皆　お目出たう存じ奉りまする。

義經　先づ以て遠路の處御苦勞千萬にござる。シテ主人より豫て御契約の御寶の儀は、如何相成りさふらふナ。

時忠　されば〳〵、やう〳〵術をもつて神璽と八咫鏡は念なう奪ひ終せしが、唯得難きは十握の御劍、安德天皇晝夜隨身在せば思ふに任せず、先づ二色の神寶を受取り給へ。

義經　御仰せ御尤に候へども、判官義經此度の戰は、私ならぬ君の嚴命。さるによつて、此程石

清水八幡へ參籠の某、まつた身不肖なれど、某萬端守護の役目罷在れば、心置かずお渡しあつて然るべし。

〽詞すゞしく述べければ、時忠實にもと感服し。

時忠　さらばいかでか惜しむべき、神璽明鏡受取られよ。（ト思入あつて）ヤア櫃に入れ置く其品是へ。

○×　委細畏つてござります。

ト雑色○×櫃より二品を出し、

〽とありければ、義經謹んで頂拜あり。

義經　コハ忝き御念志、是偏に賢君の御働きと、如何ばかりか有難く存じ奉る。

時忠　扨又平家の要害、險阻を頼みの地理陣取、なか〳〵容易の事にあらず。則ち繪圖に認めまツこの通り。

〽取出し手に渡せば、逐一拜見ある所へ。

ト時忠懷中より袱紗包みの繪圖を取出し義經に渡す。義經取つて押開き見る。此時花道揚幕にて、

呼ビ　俊成卿よりお使者。

○×　ナニ、思寄らざるお使者とは。

義經　ハテ何事やらん。

時忠　ナニサ〱、さして驚く事なかれ、もし事露顯の上からは。

　　ト時忠義經に囁く。

義經　いかさまよろしき御手段、委細畏り奉る。

呼ビ　お使者。

　〽取次ぐ聲や長袖の、花の香名のみ萩の侍從、裲襠姿のつしりと、たばひ頃な
る白菊の露を帶びたる如くにて、おめず臆せず打通り。

　　ト花道より萩の侍從裲襠衣裳にて短冊箱を持ち來り、

義經　これは〱、思掛けなき女儀のお使者は心得ず、シテお使者の趣は。

　　ト下り端にて萩の侍從思入あつて、

萩の　成程御不審は御尤、妾は俊成が奥勤め、萩の侍從と申す者、女ながらも今日の役目を承り

逐一其由申上げるでござりませう。

義經　仔細ぞあらん、先づ〳〵是へ。

萩の　左樣ならば、御免なされて下さりませう。

〽御大將の御座近く、しとやかに手を仕へ、

ト是にて萩の侍從舞臺へよろしく來り、下に住ひ、管絃になる。

三位俊成は此程禁裏にて千載集の役、折柄旅人と覺しき者、此歌を集に加へて給はれと只管の願ひ、取上げ見れば天晴秀逸と感じながらも、私に加へん事も定かならず、御伺ひの爲參上致しましてござります。

〽短冊御前に差出せば、義經も忠度が詠歌と知れど、さあらぬ體手に取上げ、

ト義經短冊を出して見て、

義經　「さゞ波や志賀の都はあれにしを、昔ながらの山櫻かな。」（ト思入あつて）ハレ香しやあてやかや、天晴の秀逸。

〽賞美の詞を時忠打消し。

時忠　ヤア其歌、集には入れられまじ、罷ならぬ。

萩の　イヤ申し時忠卿、お聞きの通りあの歌は、主人俊成卿も感じ、君も御賞美ましますを、集に入れなと仰言るは、誤りばしあつての事か、憚りながら今一度、吟じかへて御評議を。

へ言はせも立てず。

時忠　イヤ愚か〳〵、其歌は薩摩守忠度が白髭明神へ社参の時に、志賀にて詠みしは犬打つ童も知る所、素より忠度は俊成が門弟、弟子贔屓に平家へ近寄り、後ろ暗き此使、追ひ返されよ。ソレ者共、引立てい。

○×　サ、お立ちなされい。(ト雑色○×キッと言ふ。)

萩の　イヤ滅多には立ちますまい。弟子贔屓に平家に心寄するとは、大切なる今のお詞、それには慥かな。

時忠　ホ、證據と言ふは其方が主人の菊の前と、薩摩守忠度と密通致しをる事まで知るまいと思ふか、うつけな奴の、其縁に俊成が平家を庇ふ所存といふが某が誤りか。返答致せ、ナ、何んと。

へ我も平家でありながら、前後揃はぬ詞だゝかひ、義經しばしと止め給ひ。

義經　平家方に緣ありと一旦不審立つ上は、俊成卿まで越度となり、集に入る事難かるべし、さりなから所存もあれば、此短冊は義經が預り、君へ伺ひ奉る、兎も角もはからはん、此儀立歸つて傳へられよ。

〽風雅の返答尤と時忠詞を控ゆれば、力及ばず萩の侍從、猶も摺寄り手をつかへ。

萩の　俊成も此詠歌殊の外惜しむ心に候へば、後よりよきに御差圖、偏にお願ひ申上げまする。

〽思ひ定めし言の葉も、花に嵐の時忠に、心殘して。

左樣ならば判官殿。

義經　使者のお役目大儀にこそあれ。

侍從　ハツ。

ト三味線入り亂れにて、萩の侍從會釋して悠々と花道へはひる。

〽お次の方より六彌太が郎黨深谷七郎、熊谷が家臣堤の軍次、披露を待たず立出でゝ。

ト序の舞になり、上手より深谷七郎素袍大紋立烏帽子、下手より堤の軍次同じきこしらへにて出て、兩人思入あつて、

七郎　ハツ、主人岡部六彌太忠澄出仕あるべき處、公用相重なり、それ故名代として家臣深谷七郎、

軍次　熊谷の次郎直實が郎黨堤の軍次、兩人罷出でまする儀は、唯今早飛脚をもつて、

七郎　頼朝公より御墨附到來。

ト恭しく差出せば、義經驚き頭を下げ。

義經　疎かならぬ御墨附披見致すは餘り恐れ、仔細は如何に。

七郎　西國の軍日數延引に付き再三の御催促、諫むれども是に在する時忠卿の息女、卿の君に心を奪はれ、亡慮の構へなんどゝ言ふ噂とり〴〵。

軍次　今鎌倉にては佞人多く、頼朝公に讒言申す族もありと承はれば、時移るは惡かりなん。

七郎　必定惰弱の御身なれば、三度諫めてはからふ旨と、主人忠澄が心配。

軍次　左程愚將の汚名を受けても西國出陣の氣色もなく、まつた鎌倉殿の御疑ひ、世の人口も塞がれずと、次郎直實朝暮の氣遣ひ、麾下に從ふ諸武士の面々殊ない心勞。

七郎　全く御墨附下りしは、出陣延引のお咎めと評議區々。

軍次　然るべく御賢察。

兩人　下さるべし。

時忠　イヤナニ兩人、先程より承はるに、こりや何か予に當付けたるねすり言、判官殿が我が娘卿の君が色香に溺れ、亡慮などゝは奇怪至極、耳に障つて聞きにくい、今一言いつて見よ、此座は立たせぬ、尾籠な事を。

〽はつたと怒れば堤の軍次。

軍次　コハ如何な事がお耳に障り申したな、尤鎌倉殿よりの御墨附といひ職の延引、人の嘲り世上の取沙汰。

七郎　殊に貴殿は平氏の家筋、今源平と鎬を削る唯中へ、色香を以て人を惑はせ、出陣とても猶豫の有樣、詮議に詮議致したら、其許の胸中にも覺えがあらう、ナント是でも言譯ござるか。

時忠　言譯とは片腹痛い、天利に叶ふ時忠が、身の潔白を今見せうや。

七郎
軍次　オヽそれこそ望む此場の潔白。

時忠　ハヽヽヽ、井の中の蛙侍とは汝等が事、無位無官の身をもつて、人の黑白糺さうなどと、そりや人らしき武士の言ふ事、高位も恐れず慮外の顎骨無禮至極、ソレ者共、兩人を引立てい。

○× 心得ました。

〽下知に隨ひ雜色共、左右へ別れて立掛る、難なく一人を組敷いて、既にかうよと見えけるところ。

ト七郎と軍次に雜色掛るを、兩人立廻つて一人づゝ相手によろしく立廻りあつて追込む。時忠キツとなつて太刀に手をかける。義經是を支へて、

義經　兩人控へをらう。

兩人　それぢやと申して。（ト管絃になり）

義經　高位の恐れ、憚りながら判官に愛で、御容赦なし下さるべし、唯今兩人の粗忽、時忠公の御怒り御尤至極、兩臣共によく聞かれよ、我君出陣延引も敵に油斷の御計略、謀は帷幕の内にめぐらし、勝事を千里の外に顯すこそ、始終の勝利たるべきなり、義經發向遲なはるは安德天皇所持し給ふ三種の寶、都へ返すを妬く思ひ、唐土天竺へも渡すか、若し海底の水屑とならば、寶祚の傳へます日の本は暗闇、とやせんかくやと心を痛め自づと出陣延引せし、然るに是に在す平大納言時忠卿と緣者となり、賴むより早駈入つて、是見よ神璽內侍所は我手に入りしかど、寶劍は安德帝御身を離し給はねば、手段を以て奪ひ返さん、まつた要害嚴しき平家の

備へ、繪圖に書かせて案内を知る。

ト義經以前の繪圖を取出し開き、

見よ〳〵方々。

險阻を頼みの油斷を見合せ、鵯越より眞下り、逆落しに攻入りなば、周章ふためく平家の一類、討取るは手裏にあり。

智仁勇備の良將の、軍慮を聞いて居合はす銘々、はつと感ずるばかりなり。

ト此セリフにて七郞軍次顏見合せ悦ぶ思入。時忠不審のこなし。義經思入あつて、

ナウ時忠卿、一旦緣を組みし上は別心なき婿舅、天下の爲の謀、御心に障へ給ふな。

ト時忠思入。

時忠　イヤ何事も聟義經が心に愛で、天運次第相待たん。

義經　ハヽア潔き其詞、賴朝是にあらうなら嘸や滿足。ヤア誰かある、用意の制札持ち參れ。

はつと答へて高札持ち出る、義經兩人に打向ひ。

ト近習一人ハツと奧より制札を持ち來り義經の前へ置く。義經思入あつて、床の間の生花の櫻を取つて、以前の短冊を結付け左右へ並べ、管絃になり、

いかに兩人、此度の軍は勅諚の一戰、私の趣意にあらず、六彌太は薩摩守忠度が陣へ向ひ、御願ひの御詠歌千載集に入れしかど、勅勘の御身なれば、名を顯はさず憚りて讀人知らずと記されし趣を演說し、集に入りたる其印に、此短冊を結び付けたる山櫻を送るべしと申傳へよ。

ト短冊を差出す。

七郎　委細畏つてござりまする。

義經　まつた次郎直實を召出し申付くるは、搦手の經盛敦盛固めたる、須磨の陣所へ打向ひ、若木の櫻を汝が陣屋、義經花に心を込め、先達て武藏坊辨慶に筆を取らせし此高札（ト思入あって）「此花江南所無也、一枝折盜の輩に於ては、天永紅葉の例に任せ、一枝を伐らば一指を剪るべし。」此禁札の心を諭し、若木の櫻を守護せん者、熊谷ならで外になしと申し送れ、此旨吃度心得よ。

軍次　畏つてござりまする。

へはつと兩人領掌し、心を含む制札の、外を和ぐ和歌の道、花をいたはる大將に、實あり色あり情あり恥ある時忠詞なく、不承々々に立上れば、二人の勇士も退出の底の底意も堀川や。

時忠　判官義經、予は最早退出せん。

義經　イヤ時忠卿には先づ奥殿へ。
時忠　然らば案内。
義經　兩人さらば。
七郎
軍次　ハッ。

〽深き惠みを汲みわけて、祝ひことぶく。

ト七郎は櫻の枝を持ち、軍次は制札を抱へ、時忠義經は立上り、四人よろしく。送り三重へ樂を冠せかけ、よろしく。

幕

二幕目　須磨浦組討の場

役名　熊谷次郎直實、無官太夫敦盛、平山の武者所季重、小次郎直家。玉織姫、軍兵大勢。

本舞臺三間の間上の方に陣門。正面柵矢來。すべて須磨の浦陣所の體。どんちやんにて幕あく。

〽酒極る時は亂る、樂しみ極る時は悲しむとかや、二十餘年の榮華の夢、跡なく覺めて都をひらき、平家の一門立籠る、須磨の浦の內裏の要害、前には海、上には險しき鵯越、大手は生田搦手は、一の谷の山手より、波打際まで柵結廻し、赤旗風に吹靡かせ、參議經盛の末子無官の大夫敦盛、父に代つて陣所を固め、事嚴重に見えにけり。

〽比は彌生の始めつかた、月さへ入りて暗き夜に、熊谷が一子小次郎直家、魁して初陣の功名を顯はさんと、出立つ姿は澤瀉を、一入摺つたる直垂に、小櫻縅の兒鎧猪首に着なす星兜、星の光に唯一騎、心は剛の武者草鞋、足にまかせてはやり男の、山道岩角嫌ひなく、一の谷の西の木戸、陣門に走りつき、一息吐いて四方を詠め。

ト此文句の內かすめたる遠寄せにて、花道より小次郎若衆鬘、鎧、誂への陣立のなりにて走り出て、本舞臺へ來り、あたりを見廻し、

小次　アヽ嬉しや、我より一番に魁する者もなし、後より人の續かぬ先、イデ切入らん。オヽさうぢや。

〽駈け廻れど亂杭さかも木隙間なく、嚴しく閉す陣所の門、如何はせんと見廻す内、遙かの奥に管絃の音。

ト小次郎思入あつて、陣所の傍へツカ〳〵と行きこなし、音樂聞える。

〽夜は深更に及んだり、折節山路に風もやみ、海上も波靜まれば、伎樂の調べ哀れげに、さも面白く聞えけり、小次郎は思はずも、心耳を澄まし聞惚れて。

ト小次郎思入あつて、

アヽ實にも上臈都人は情も深く心も優しと父母の物語、今こそ思ひ合せたり、アヽ斯かる亂れの世の中に、弓矢叫びの音はなく、糸竹の曲を調べ詩歌管絃を催さる、ハヽア床しさよ、如何なれば我々は邪見の田舍に生れ出、鎧兜弓矢を取り、かくやんごとなき人々を敵として立向ひ、修羅の劒を研ぐ事は淺ましやなア。

〽淺ましさよとばかりにて、覺えず涙を流したる、まだうら若き小次郎が、身

の程々を汲分けて、感ずる心ぞしをらしき、後の方に險しき足音、誰なるやらんと窺ふ内、平山の武者所鎧凜々しく駈け來り、小次郎が顏見るよりも、敵か味方か訝しく。

ト此内やはりちやん〳〵になり、花道より平山の武者所季重鎧のこしらへにて槍を持ち走り出て來り、花道にて小次郎を窺ひ見て、

平山　ヤア、それにゐるは敵か味方か、何者なるぞ。

へ聲掛くれば小次郎も透し見て。

小次　ヤア左言ふ御身は季重殿か。

ト言ひ乍ら舞臺へ來る。

平山　ム、、我より先へ來る者はよもあるまじと思ひしに、ホ、オ心懸神妙々々、外の人なら平山が先陣を爭うて一番に乘入らんが、初陣の健氣さに先陣を汝に讓る、氣遣ひなしに斬入れ〳〵。

小次　イヤナウ平山殿、あの管絃の音御聞きなされ、扨も雲の上人は又優しさが違ひますする。

平山　イヤサ、それを和殿は得知るまい。昔諸葛孔明が司馬仲達に押寄せられ、詮方盡きて櫓に登り、香を焚いて悠々と琴を彈じてゐるを見て、謀もあらんかと、我が智惠に迷うて仲達は逃

げしと聞く、アレあの管絃も其通り、ナニ怪しむ事はござらぬ、早く駈入り功名せよ、但し
和殿が恐しくば、某が先陣せうか。

小次　サアそれは。

平山　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

〽何と〳〵と氣を持たされ、血氣にはやる小次郎直家、木戸口に走り寄り、門
打叩き大音上げ。

ト是にて小次郎ツカ〳〵と行き門の扉を打叩き、大音にて、

小次　敵の陣所へ物申さん、武藏の國の住人しの黨の旗頭、熊谷の次郎直實が一子、同苗小次郎直家
先陣に向うたり、出合うて勝負々々。

〽高らかに呼ばゝれば、門内も騒ぎ立ち、すはや敵の寄せたるぞ、出合うて討
取らんと、木戸押開き押取卷き。

トどん〳〵になり陣門をあけ、内より軍兵大勢拔き連れバラ〳〵と出て、

軍兵　ソレ逃すな。

〽それ逃すなと軍兵共、俄に騒ぐ鯨波、太刀音人聲喧し。

ト小次郎軍兵を相手に立廻り、門の内へ追つてはひる。

〽平山如何と躊躇ふ内、熊谷の次郎直實、わが子の先陣心に徹し、足を空に駈け來り。

トちやん／＼にて、花道より熊谷直實、好み誂への鎧なりにて走り出て來り、平山を見て、

熊谷　ヤア平山殿候な、倅小次郎見給はずや。

平山　されば／＼、最前是へ見えしゆゑ、小次郎にいろ／＼段々、あの大勢の敵の中へ一騎討は叶はぬぞ、平に止しに召され、後詰を待つての事がよからうと種々諫めても、はやり切つたる若武者、無二無三に斬入つてござるわえ。

〽聞くより直實髮逆立ち。

熊谷　ナニ小次郎一騎にて斬込みしとナ、南無三寶、ソレ。

〽子を失ひし獅子の勢、敵の陣所へ駈入つたり。

ト熊谷こなしあつて、陣門の内へ走りはひる。

〽此處や彼處の鯨波。（ト此時奥にて）

軍兵　エイ〳〵オヽ。（ト烈しきちやん〳〵を打込む）

〽聞くに平山獨り笑み。

平山　ヘヽムヽヘヽハヽヽヽヽ、思ふ壺〳〵、親子共に袋の鼠、今の間に討たれをろ、日頃からの熊谷めと六彌太めが出頭を、くゐ〳〵と思うてゐたに、エヽ時節もあればあるもの、手を濡らさず風の神よりよい敵、其上親子も剛の者、死物狂ひと働かば、餘程敵を惱ましをらう、荒ごなしさせ討死さし、其後へ仕掛くれば、功名手柄は思ひの儘、うまいぞ〳〵。

〽ぞく〳〵勇み悦ぶ所へ、木戸口に數多の人聲。

軍兵　エヽ〳〵オヽ。

ト聲する。平山こなし。

〽すはや敵ぞと身構へし、窺ひゐるも暗紛れ、熊谷次郎直實、わが子を小脇にひん抱へ、陣所をずつと駈出で。

ト門の内より熊谷小次郎の吹替を引立て出て來り

熊谷　平山殿在するか、倅小次郎傷を負うたれば、養生加へに陣所に送らん、貴殿は殘つて手柄を召されい。

〽言捨てゝ、飛ぶが如くに急ぎ行く。

ト烈しきちやん〳〵になり、熊谷吹替を引立て花道揚幕へ走りはひる。

〽平山案に相違して、油斷ならずと躊躇ふ所へ、門內より數多の軍兵拔連れてわれ討取らんと駈出づれば、心得たりと拔合はせ、受けつ流しつ多勢を相手火花を散して挑む內、無官の大夫敦盛は六具を固め、駒を進めて乘り出し。

ト此內軍兵大勢出て平山にかゝる。早笛になり立廻りよろしくあつて、軍兵花道へ逃げてはひる。此時門內より敦盛鎧兜好みのこしらへ、馬に乘り出て來り、

〽平山を見るよりも、まつしぐらに打寄り給へば、さしつたりと渡り合ひ、しばしはさゝへ打合ひしが、先を取られて武者所、殊に大勢に取卷かれ、臆病神の誘ひてや、一足出して逃出せば、何處までもと煽り立て、後を慕うて追うて行く。

ト此內太鼓入りの鳴物になり、敦盛平山へ斬つてかゝる。槍と太刀にてよろしく立廻りあつて、トヾ平山花道へ逃げて行く。敦盛後を追つて花道へはひる。ト知らせにつき一面の浪幕を振落し。上下より岩の張物を出す。

〽敦盛卿の後を慕ひ、須磨の浦邊をうろ〳〵と。〽袖は淚の玉織姬、氣も春風や朧夜に、心細身の一腰搔込み、彼方へ走り此方へ迷ひ。（ト花道揚幕にて）

玉織　敦盛樣いなう、大夫樣いなう。

ト波の音こだまになり、花道より玉織姬緋の袴好みのこしらへにて、匕首の短刀を持ち出て來り、花道をうろ〳〵と呼びながら舞臺へ來る。

〽其處よ此處よと尋ね彷徨ひ給ひけり、早東雲に人影も、仄かに見えし山道より平山の武者所やう〳〵逃げのび須磨の浦、暫く息を吐く內に、玉織姬と見るよりも。

ト此內上手より平山出て來り玉織姬を見て、

平山　ヤ玉織ではないか、テモよい所で出逢つたり、何時ぞや京で見染めてから、目の先にちらつくやうで、起きても寢ても忘られず、思餘つてそさまの親御時忠殿へ言うたれば、遣らうとあるを幸ひ、迎ひにやつた其後で、ア、生娘なら術ながろ、まあ寢てどうしてかうしてと、ほんに〳〵首をながくして待つてゐたに、迎ひにやつた玄蕃を殺し、よう待ぼうけに召さつたなう。サア是から連れて行て、女房にするわいやい。

へ引立つれば振放し。

玉織　エ、あた厭らしい、親が許すがどうせうが、敦盛様とは二世の約束、かういふ内にも尋ね逢うて死なば一緒、邪魔しやんな。

へ駈け行くをひん抱へ。

平山　ム、敦盛を尋ねるか、コレなんぼ尋ねても敦盛の行衛、水の底まで尋ねても在所は知れまい。

玉織　そりや又何故に。

平山　オ、敦盛は唯た今、武者所が手にかけて討つてしまうた。

玉織　ヤアナント、敦盛様を討つたとや、ハア――。

へはつとばかりにどうと伏し、人目も分かず聲を上げ、歎き沈ませ給ひしが。

ト玉織姫泣落し、思入あつて懐劍を抜き、

夫の敵平山覺悟。

へ夫の敵と斬付ける腕首取つて。

ト玉織姫平山へ突いてかゝる。ちよつと立廻りあつて、平山玉織姫の腕を押へ、

平山　ヤア此奴手向ひか、もう了簡ならぬ、と言ふ所を言はぬわいやい。

（ト思入あつて）テモ此手の柔かさ尋常さ、どうも〳〵ア、武者震ひがする程どうもならぬ。コレ惡い了簡ぢや、とんと心を入替へて、おれに隨ふ氣になれば、女房に持つて可愛がるとも、どうか〳〵。

〽どうか〳〵と猫撫聲、姫は怒りの涙まじり。

玉織　エヽ世が世なら其方がやうなむくつけな侍は、側邊へも寄せつけぬに、妻になびけと穢はしい、エヽ腹が立つ。

〽又斬付ける腕首捻上げ取つて押へ。

ト平山を玉織姫又斬付ける。ちよつと立廻り玉織姫を引敷き。

平山　サア女房になろかならぬか、厭なら殺すがナント〳〵。

〽太刀拔持つて傍若無人。

ト平山太刀を拔き、玉織姫に差付ける。

玉織　オヽ殺さば殺せ此仇め、エヽ誰ぞ強い人が來て、此奴を斬つてくれぬかいなア。

〽悶え給ふぞ痛はしゝ、豪氣の平山むつとせき上げ。

平山　ヤア憎い女め、靡かぬ上に種々の雜言過言、恥面搔かされ堪忍ならぬ、生け置いては人の花

と詠めさすもむやくしい、ウヌ辛く當りし返報思ひ知れ。

〽と持つたる刀胸板ぐつと突通せば、あつと一聲苦しむ折柄、後ろの方に鬨の聲。

ト此時奥にてぢやん〳〵と鬨の聲する。

南無三追手の敵なるか、さうだ。

〽我を追ひ來る敵なるやと、後をも見ずして落失せけれ。

ト平山うろたへ玉織姫の死骸を岩の張物の内へ蹴込み、うろ〳〵して上の方へはひる。と知らせに付き切つて落す。

木蓮臺向ふ一面の須磨の浦の遠見。三段の波手摺、上下岩の張物よろしく、波の音にて道具納まる。

諷〽さるほどに御船を始めて一家皆々、舟に浮めば乘り遲れじと水際に寄れば、御座船も兵船も遙かに延び給ふ。

〽無官の大夫敦盛は、途にて敵を見失ひ、御座船に馳せ付けて、父經盛に身の上を、告げ知らすことありと、須磨の浦邊に出られしが、船一艘もあらばこそ、詮方波間に駒を乘入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。

ト波手すり高二重の上に、子役遠見の敦盛後ろ向きになり、一つ所に歩きしてゐる。

ト揚幕にて

〽かゝりける所に後より、熊谷の次郎直實。

熊谷　オヽイ〳〵。

〽オヽイ〳〵と聲を掛け、駒を早めて追かけ來り。

トかけりになり、花道より熊谷以前の馬に乗り、日の丸の陣扇を持ち出て來り

それへ渡らせ給ふは、平家方の大將軍と見奉る、正なうも敵に後を見せ給ふか、引返して勝負あれ、かく申す某は武藏の國の住人熊谷の次郎直實、見參せん、返させ給へ、オヽイ〳〵。

〽扇を上げて差招けば、敵に聲をかけられて、何か猶豫のあるべきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷も進んで寄り、互ひに打物差かざし、朝日に輝く劒の稻妻駈寄り駈寄せてう〳〵〳〵、蝶の羽返し諸あぶみ、駒の足並かツし〳〵、彼處は須磨の浦風に、鎧の袖はひら〳〵〳〵、群れゐる千鳥村千鳥、むら〳〵ぱつと引汐に、寄せては返り返りては、又打かゝる虚々實々勝負もはてしあ

らざれば。

ト鼓の合方になり、熊谷逸散に岩組の後ろへ入る。向ふ子役の敦盛正面向きになる此内子役の熊谷追駈け出て、是より兩人馬上の立廻りよろしくあつて双方太刀を打捨て、

熊谷　イデヤ組まん。

敦盛　實に尤。

ト此内始終誂へ大小入り笛になる。

〽馬上ながらにむんづと組み、えい〱〱の聲の内、互ひに鐙を踏外し兩馬が間にどうと落つ。

ト兩人馬上にて組打よろしく見得。此きつかけにチヨン〱と浪幕を振落す。此浪幕打拔の眞中へ落し兩人を隱し、磯打際の蹴込みは殘る。上手の岩組も其儘に殘る。ト早笛になり、敦盛の馬舞臺を蹴立てゝ花道へ走りはひる。道具出來次第、浪幕切つて落すと、向ふに見えし波手摺直ぐによき所へ引附ける。誂への鳴物になる。舞臺眞中より熊谷敦盛組打の見得にてせり上る。

〽すはやと見る間に、熊谷敦盛を取つて押へ。

熊谷　かく御運の極まる上は、御名を名乘り直實が高名譽れを顯はし給へ、今生に何事にても思ひ殘す事あらば、必ず達し參らせん。

敦盛　〽懇ろに申すにぞ、敦盛御聲爽かに。
オ、優しき志、敵ながらも天晴れ勇士、かく情ある武士の手にかゝり死せん事生前の面目、
我戰場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、豫てなき身と知る故に思ひおく事更になし、さりなが
ら忘れ難きは父母の御恩。我れ討死と聞給はゞ嘸と御嘆き思ひ遣る、切めて心を慰む爲討れし
後にてわが死骸、必ず父へ送り給はれ。
〽と襟搔合せ座を占め給ひ。
我こそ參議經盛の末子、無官の大夫敦盛なり。
〽名乘り給ひし痛はしさ、木石ならぬ熊谷も、見る目涙に暮れけるが、何思ひ
けん引起し、鎧の塵を打拂ひ。
熊谷　扨こそ參議經盛公の御公達にて在するよな、此君一人助けしとて、勝軍に負けもせまじ、折節
外に人もなし、一先づ此處を落ち給へ、早う〳〵。
〽早う〳〵と言ひ捨てゝ、立別れんとする所へ、後の山より武者所、數多の軍
兵聲々に。

ト此時波の音にて下の岩組の間より平山半分出掛り、舞臺をキツト見下ろし、

平山　ヤア〱熊谷、平家方の大將を組敷きながら助けるは二心に紛れなし、熊谷ぐるめ討つて捕れ。

軍兵　エイ〱オヽ。

〽熊谷ははツとばかりに、如何はせんと默然たり、敦盛卿しとやかに。

敦盛　とても遁れぬ平家の運命、爰を助かり行先にて下司下郎の手にかゝり、死恥を曝さんより、早く御身が手にかけて、人の疑ひ晴らされよ。

〽西に向つて手を合せ、御目を閉ぢて待ち給へば、痛はしながら熊谷は、御後に立廻り、彌陀の利劒と心に唱名、振上げながら、玉のやうなる御粧ひ、情なや無慘やなと、胸も張裂け氣も遲れ、太刀振上げし手も弱り、思ひに搔き暮れ討ちかねて、歎きに時も移るにぞ。

ト熊谷白刃を拔き、敦盛を斬らうとして愁ひの思入。

敦盛　ヤア後れしか熊谷、早や〱首を刎ねられよ。

〽捻ぢ向きたまふ御顔を、見るに目も暮れ心消え。

熊谷　某にも忰小次郎と申す者、丁度君の年格好、今朝軍の魁して薄傷少々負うたるゆゑ、陣屋に殘し置いたるさへ、心にかゝるは親子の仲、それを思へば今爰で討奉らば、嘸や御父經盛卿の歎きを思ひ過され、今更に。

へさしもに猛き武士も、そゞろ涙に暮れゐたる。

敦盛　ヤア愚や直實、惡人の友を捨て、善人の敵を招けとは此事、早や首討つて亡き跡の回向を賴む、さなくば生害せうか。

熊谷　マ早まり給ふな。

敦盛　ヤア熊谷、汝歎きに時移り、卑怯の汚名を取らするか。

熊谷　サアそれは。

敦盛　敦盛是にて生害せうや。

熊谷　サア。

敦盛　但し首討ち召さるゝか。

熊谷　サア。

兩人　サア〱〱。

熊谷　ムヽ。

敦盛　はや〳〵首を刎ねられよ。

熊谷　ハヽハツ。

〽諫められ。

順緣逆緣倶に菩提、未來は必ず一蓮托生、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、エイ。

〽首は前にぞ落ちにける。

ト熊谷思切つて敦盛の首を討落す。𢭏返しにて敦盛の首前へ出る。熊谷愁ひの思入にて首を取上げ。

〽人の見る目も恥しと、御首を搔抱き、曇りし聲を張り上げて。

平家方に隱れなき、無官の大夫敦盛を、熊谷の次郎直實討取つたり、勝鬨々々〳〵。

軍兵　エイ〳〵オヽ。

トどんちやん打上げる。是にて殘らず山間へはひる。

〽磯に臥したる玉織姬、絕え入りし氣も一筋に、夫を慕ふ念力の、耳に入りし

かむつくと起き。

ト此時倒れし玉織姫此聲にて起上り、這ひ出て前へ出て、

玉織　ナウしばし待つてたべ、敦盛樣を討つたとは、如何なる人か恨めしや、切めて名殘りに御顔を、一目なりとも見せて給べ。

〽言ふ聲も深傷に弱る息づかひ、見るより熊谷御首携へ歩み寄り、

熊谷　敦盛卿を慕ひ給ふは、如何なる人にてわたらせ給ふや。

〽尋ぬれば、臨終の苦しき聲音にて。

玉織　我こそは敦盛の妻と定まる玉織姫。

熊谷　スリヤ敦盛卿の御簾中、アノ玉織とや。

玉織　敦盛樣を討つたとある、シテ御首は。

熊谷　ヤ。

玉織　何處にぞ。

熊谷　ヤ。

玉織　サア其首は。

熊谷　サア其首は。

玉織　エヽモウ目が見えぬ。

熊谷　ムヽ、ナニお目が見えぬとや。（ト熊谷玉織の側へ寄り、疵口をよく〳〵見て）胎隨を貫き肺肝忽ちに塞へ、最早御目までも。（ト思入あつて）ムヽ、ア、お痛はしやなア、今は誰憚らず敦盛卿の御首、則ち爰に、

玉織　ハア――。

〽手に渡せば、わつと泣く〳〵しがみ付、膝にのせ抱きしめて、消入り絶入り歎きしが。

ト熊谷首を渡す、玉織姫縋り付いて思入。

ナウ敦盛樣か、ア果敢ない姿になり給ふ、陣屋を出させ給ひしより、御後を慕ひ方々と尋ぬる中に源氏の武士、平山の武者所われを捉へて無體の戀慕、騙し討たんも女業、此如く手にかゝり二人が二人で悲しい最期。

〽せめて別れに御顏を、見て死にたいと思へども。

深傷に心が引入れて、目さへ見えぬか悲しやなア。

〽又御首を撫さすり、宵の管絃の笛の時、後にとありしお詞が、今生後生の

筐かや。
此世の縁は薄くとも、來世は必ず末永う。
〽添ひ遂げてたべわが夫と、顏に當て身に添へて、思ひの限り聲限り、啼く音は須磨の浦千鳥、涙にひたす袖の海、引汐時と引く息の、ちしごと見えて絶え果てたり、熊谷は茫然と。

熊谷　ア、何れを見ても落の花、都の春より知らぬ身の今魂は天ざかる、鄙に下りて亡き跡を、問ふ人もなき須磨の浦、なみ／＼ならぬ人々の、成り果つる身の痛はしやなア。

〽悲歎の涙に暮れけるが、是非もなく／＼直垂の、亡骸を取納め、母衣をほどいて敦盛の、御死骸を押包み、總角取つて引結び、手綱を手繰り結ひつくる、鞍の鹽手やしを／＼と、弓手に御首携へて、右に轡の哀れ氣に、檀特山の憂き別れ。

ト此文句の内熊谷敦盛の吹替の胴人形を、馬へ母衣の緒にて結び付け、よろしく思入あつて。

悉陀太子を送りたる、車匿童子の悲しみも。

〽同じ思ひの片手綱、涙ながらに、
流轉三界無爲眞實報謝、南無阿彌陀佛〻〻〻〻〻〻。
〽歸りけり。

ト此時次第に遠見東雲の模樣、太陽を引出し、東西の窓をあける。熊谷フト首級を見愁ひに沈む。此時上下にて、

軍兵　エ、イオ、。

ト逆寄せを打込み、一足に立上る。浪間より數多の千鳥を日覆へ引上げる。熊谷首を掻込みキッと見得。一聲、カケリにて、

幕

三幕目　菟原野里の場

役名　薩摩守忠度、岡部六彌太、菟原田五平、梶原平次景高、人足廻し茂次

兵衛。倅成卿息女菊の前、菟原の林等。

本舞臺三間の間藁葺常足の二重。上手九尺の障子屋體。いつもの所門口此外に誂への生垣、林世話なりの拵にて打盤の上に洗濯物を乘せ、手拙にて打つてゐる。在郷唄にて幕あく。とテンツヽにて花道より百姓○×△□の四人鋤鍬など携へて出て來り、直に本舞臺へ來り、門口を覗き内へはひつて、

百○ コレ婆様、いつもいつもよう精が出ますの、年に似合はぬ達者ゆゑ、毎日休みといふ事なく人仕事をなんぼ其やうに稼いでも春の日永、もう仕事もしまつて、氣保養もさつしやれや。

林 ハイハイ左様しませう、したが今年は作はどうでござりませうな。

× さればいなう、婆様も知つての通り、一年の出來秋で、春の植付も一入元氣があつてようござるわいの。

△ コレ婆様、一人で不自由でござらうが、毎日畑へ行くほどに尋ねて見ますから、必ず遠慮なく用があるなら言はつしやれや。

林 オヽ其やうに親切に忝うござります、マア一服喫んで行かしやりませ、茶も温うなりましたが、一つ呑んで行かつしやりませ。

ト林茶碗土瓶などを出す。皆々取つて呑む事。

○　介意はつしやるな、兎やかう言ふ内日が闌けた、もう一と稼ぎやらうぢやござるまいか。

□　それがようござらう、そんなら婆様、明日また逢ひませう。

林　オヽモウ行かつしやるか、靜かにござれや。

ト又テンツヽになり、百姓四人花道へはひる。林後を見送り、

ハテあの衆もよう親切に。(ト思入あつて)とかう言ふ内、もう日が暮れるさうな。ドリヤ火を點さうか。

ト此内林は打盤にて洗濯物を打ちしまひ、其處らを片着けなどしてゐる。

へ世の憂きにいさゝめならぬ身の願ひ、忍びて人につげ櫛の、薩摩の守忠度は俊成卿の館より須磨の陣屋へ歸らんと、急ぎの道も行き暮れて、宿りもがなと此處彼處、荒れし軒端も疎なる、伏屋の門に立寄り給ひ。

ト此内時の鐘になり、花道より忠度壺折り衣裳庭下駄、肩蓑、笠をかざし出て來り、思入あつて門口へ來り、

忠度　都方より西國へ歌修行の旅の者、案内も知らぬ道に疲れ、日も暮れたれば迷惑致す、卒爾ながらお宿の御無心賴み入る。

〽頼み入るとぞありければ。

ト林是を聞きこなしあつて、

林　イヤ爰は所の法度にて人宿は致さねども、われも人も行き暮れて宿のないは難儀なもの、殊更優しき歌枕、御修行のお方と聞けば別條もあるまい、宿はせずともまあ〳〵はひつて、煙草でも参らつしやりませ。

〽戸口を開けて。（ト林二重より下り、門口をあけて見て、）

ヤア、あなたはどうやら見たやうな。

忠度　さう言ふ其方が面差も、どうやら覺えの、

林　オヽそれよ、前方都でお目に掛りし、忠度樣ではござりませぬか。

忠度　何さま思ひ合すれば、其方や五條三位俊成卿の館にゐやつた、菊の前が乳母でないか。

林　あなたも御無事で。

忠度　其方も健固で重疊〳〵。（ト思入あつて）シテ此家は、其方が住居か。

林　茅屋なれど此婆が。

忠度　住居とあらば暫時許しやれ。

林　マア〳〵此方へ。

ヘ先づ此方へと伴ひて、洗足盥手桶の水、浮世を忍ぶ簑笠の塵打拂ひ入り給へば、ともに林が手敏く、洗うて拭ふ袱紗物、上座に直し手をつかへ。

ト誂への合方、忠度内へはひり上座に住ふ。

マア何か差置きお尋ね申しませうは、此度源氏の軍勢平家を攻めんと都へ亂入に付き、一門殘らす西國へ落ちさせ給ふと承りましたが、あなたばかり何として今迄都にはござりました。

忠度　ホヽウ其仔細は豫て其方の知る通り、某は俊成卿の弟子といひ、別けて親しき仲なるが、此度師の撰まれし千載集に我が詠歌を加はりなば、假令敵の手にかゝり、屍は野山に曝すとも、此世の本望敷島の道を求めし甲斐あらんと、思ふ心の一筋に狐川より引返し、俊成卿の館に立越え願ひしが、かゝる時節に平家の詠歌、私に入れられずと、いまだ其沙汰なき内に、早や合戰最中と聞き心急かれて立歸る、生田の陣所も程近しとは言ひながら、暮に及ばゞ陣門も開くまじと此所へ立寄りしも、不思議の縁であつたよなア。

ヘ不思議の縁と宣ふに。

林　されば私も稚馴染の夫が不所存、置去りにして行衞知れず、折柄縁を求めて俊成樣へ乳母奉

公、養君菊の前樣御成人に付お暇申し、掛るべき忰もあつたれど、氣性が惡さに勘當致し、今獨り身の貧樂、應ぜぬ苦勞はござりませぬが、承はればあなたと菊の前樣はどうやら譯の（ト思入あつて）ホヽヽヽ、イヤ私に御遠慮はいらぬ事、それについてお話申す事もあれど、モこりや追つての事、マア〳〵遠路の草臥れ、あれへござつて御休息遊ばしませ。

忠度　いかさま旅中の勞れを休めん。（ト忠度立上りあたりを見て）ハテ閑靜なる此住居、一樹の宿りも他生の緣。

林　今宵は夜と共お物語致しませう。

忠度　旅寢の徒然、ハテ何をがな。

〽言ひつゝ矢立取出し、心にうなづき傍なる、破れたる障子へさら〳〵と、書なし給ふ三十一文字、乳母は差寄り手をつかへ。

ト此内忠度誂への扇形の矢立を出し、障子へ歌を書く、林是を見る。

忠度　行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主人なるらん。

林　かゝる中にも一首のお歌、流石は都の忠度樣、見苦しけれど奥の間へ。

忠度　林、案内。

林　からお出遊ばしませ。

〽いふも優しき持成に、貧家の塵も繕はぬ主人が案内に打連れて、一と間にこそは入り給ふ。

ト林先に、忠度思入あつて上の屋體へはひる。

〽まだ宵ながらかき曇る空も心も暗紛れ、うそ〳〵窺ふ大男、枳殻の生垣押破り、ぬつとはひつて上り口納戸へ仕掛ける差足拔足、忍び込む間に主の林、物音聞付け立出でゝ、窺ひゐるともしすまし顔、袋に入りし一腰かい込み、そろり〳〵と表の方、出でんとするを。

ト此内花道より、時の鐘にて太五平廣袖褞袍のなり、腰に酒の入りしすつぽんを提げ、うそ〳〵出て來り、下の垣根を押分け二重の横へ出て窺ひ〳〵暖簾口へはひる。袋入りの刀を盗んで出る。此内上の障子をあけ林出て來り、太五平表へ出ようとするを見て、

林　コリヤ盗人待て。

〽聲かけられてびつくりし、逃げ行く所を飛びかゝり、武者振りついて引戻せば、遁さじ遣らじと掴みつき、引張るはずみに頬冠り、脱げて落ちたる顔見

付け。

ト此内兩人やらじと爭ふ内、太五平の手拭とれる。林顔を見て、

林　ヤア、わりや太五平ぢやないか、エヽおのれは〱。

太五　エヽコレ〱母者人、聲高く言はつしやるな、盜人を捕へて見れば我子なりけりぢや、人が知つてはおれよりマア、お前の外分が惡いわいの。

林　テモ扨も情やの〱、おのれがやうな性の惡い奴が、又とあるかいやい。（ト合方）

太五　ハテあればこそ酒も飮みます、色事は此方任せ、三絃もちつくり噺るてや、喧嘩も滅多に前先の見えぬ事はせぬ、又これ〱もたんまりにしてかすりは喰ひませぬわいの、へゝ慮外ながら萬能に達した男ぢやわいの。

林　サア其惡い事が積つて、親に樣々難儀をかけ姉娘を勤め奉公にやつたもみんなおのれ故、まだ其上に上塗かけ、盜みするやうになつたは、よく〱因果な產れ性、そしてマア外でもあらう事か、親の家へはひるとは、エヽマアおのれは〱。

太五　アヽコレ〱、お前もほんに年に似合はぬ、まだな事を言はつしやるわいの、コレ、他人の所へはひるとの、忽ち此首がござらぬわいな、そこで若し見付けられても、命に氣遣ひのないや

うに、高を括つて親の家へ入つたは、我が子ながらも天晴な者ぢやと、褒めて呉れいで何ぢやゝらくどくくどくと、愚痴な事言はつしやるわいの、コレそんな事聞くと氣が詰るわいの。
ト太五平腰の吸筒より酒を出して飲む事。林是を見て思入。
「言ひつゝ腰のすつぽんから、有合ふ茶碗へどくどく。

林　それそれ其酒が止まぬから起つた事、横着な氣も出るわいなう。コリヤヤイ、見る影もない此母が人仕事してやうやうと其日を送れば、いかないかな一錢の貯へもないわいやい。

太五　サアあつて堪るものか、そのない事はおれがよう知つてゐる、ぢやによつて錢銀の望みはない、コレ此一腰が欲しさぢやわ。
ト以前の袋入りの刀を出して見せる。

林　イヤそりやならぬ、親父殿が遺して置いた重代の寶物ぢやわやい。

太五　サアそれぢやによつて、よう斬れうと思うて商ひせうにも資本はなし、仕馴れた職もなければ、人足廻しの茂次兵衛が所にかゝつてゐて歩荷持しても、儲けにくいは錢ぢや、それに毎日飯代も拂はにやならず、三文でも餘つた時は、片かは酌んでやつてのける、是ぢや濟まぬと思ふから、ふつと氣の付いたは、今源平軍の中、うそうそと見廻つて拾ひ首でもしたら、知行になる

まいものでもないと、思付きはついても丸腰ではならぬ仕事、それで此刄物を盗むとは言ふもの〻、親の物は子の物ぢや、こりやわしが貰ひますぞや。

林　アレまだそのやうな野太い事ばかり、子なれば遣れど、わりや勘當したりや他人ぢやわいやい。

太五　サア、そんなら借りませう。

林　イ丶ヤ、ならぬわやい。

太五　何でもおれが借りにやならぬ。

〽せり合ふ中へ、人足廻しの茂次兵衛が。

ト兩人爭ひゐる。テンツ丶になり、花道より茂次兵衛、かるさん三尺大風呂敷へ誂への鎧小手臑當などを包み、是を引つかたげ出て來り、門口へ來り、

茂次　コレ太五平爰にゐやるか、ヤア婆樣、何やらせり合ぢやナ、ハ丶丶丶丶、扨は勘當の詫を聞くまいといふ事か。

林　イヤ／＼詫所ぢやござらぬ、やつぱり性根が直らぬわいの。

茂次　ア丶コレ／＼直らぬとは言はれまい、おれが世話にしてから滅切とようなりました、そりやもう了簡してやらつしやれ、コリヤ／＼太五平、うつかりしてゐる所ぢやない、今度の軍につい

て、弓持槍持のと大分人夫が要るゆゑ、夫々の人を穿鑿してやつたが、まだ旗持が足らぬゆゑ、其方を雇はうと思つて一遍と尋ねた、外の事よりしんどうはせいで、マア賃がよいが行かぬか。

林　イエ〳〵なんぼ賃がようても戰場は命掛、こりや止しにしたらよからうぞや。

茂次　ハテやくたいもない、氣遣ひあれば雇はれる者は一人もござらぬ、彼方の捕人と違うて、道具持は斬合の勝負はせず、もし流れ矢でも來る時は。（ト思入あつて）

〽楯の後へちやつと隱れ。

婆樣えいか。

〽槍長刀がひらめけば、人の後へちやつと屈む。

兎角ちやほや氣轉利かして立廻れば、怪我する事はござらぬ、ほんのこけ知らずといふものぢや、其段は此茂次兵衛が請合。是則ち先樣から來た丈夫な裝束見せうか。

〽風呂敷ほどき取出すは、雜兵並の陣笠鎧、見る間に太五平ぞくつき出し。

太五　そりやおれが望む所ぢや、大勢に打交り、エイ〳〵オ、が言うて見たいわ。

茂次　そんなら直ぐに身拵へするがえいわ。

太五　そんなら一寸、此鎧着て見ようか。

茂次　サア〳〵それがよい〳〵。

〽各自に帶解きどんざ脱ぐ、襦袢の上に黒革の、鎧上帶しつかと締め。

トしころの合方。

〽一腰さすが侍の、小手臑當も似合うたと、陣笠着けて。

ト此内太五平着物を脱ぎ、茂次兵衛林手傳うて鎧小手臑當を着せる。太五平嬉しき思入。

太五　先づ是で支度は出來たが、是からマア何處へ行くのぢや。

茂次　成程、其方は先樣を知るまいから、おらが家へ往て所を聞いたがよい。

太五　オツト合點、そんなら母者人、此刀貰ひました。

林　オヽ迚もの序に折紙も添へてやりませう、待ちや〳〵。（ト林奥より折紙を出し）是は其刀の折紙ぢやほどに大事にしや。

太五　何ぢや、ア、折紙も添へて下さるか、エ、忝い〳〵。

林　コレ〳〵必ず怪我して呉れるなよ。

茂次　コレサ婆様、案じぬがよい。

太五　オヽよい、よい〳〵よんやな。

ト太五平力味返つてつッぱるこなし、林茂次兵衛思入あつて、大太鼓入りにてよろしく。

よい〳〵よいやな。

〽身振りは練物見る如く、勇み進んでこそは急ぎ行く。

ト此儘太五平は花道へはひる。林跡を見送つてゐる。

〽林は後を打眺め。

林　片輪な子が可愛いと、ありやうは不便にござる、兎にも角にもお前のお世話、忝うござりまする、お禮がてらに酒一つ進ぜたいが、奥には仕事を取散らして置きました、納戸でなとまゐつて下され。

茂次　イヤそりや無用にさつしやれ。

林　ハテ買うては進ぜぬ、餘所から貰うた諸白に、鯑の肴で唯た一つ。

茂次　それほどに言はれる事、そんなら一つ御馳走になりませうか。

林　サアマア納戸で是非ともに。

〽是非に〳〵と無理矢理に、納戸へ押遣り勝手から、銚子杯持ち行くも、子ゆゑの愛想と知られけり。

ト茂兵衛を奥へやり、林こなしあつて、銚子杯を持ち思入あつて奥へはひる。

〽風さそふ道の時雨も戀ゆゑに、身は濡鷺の菊の前、走り着いたる一つ家の、門の戸けはしく打叩き。

ト花道より菊の前廣振袖衣裝、市女笠杖にて足早に出て門口へ來り、

菊の　コレ爰あけてたもひなう。

〽あけて〳〵と宣へば、林は聞付け。

ト奥より林行燈を提げ出て來り。

林　誰ぢや〳〵。

菊の　イヤ大事ない者ぢやわいの。

林　大事ない者とは何方ぢや、誰ぢや。

菊の　ハテわしぢや、菊の前ぢやわいの。

林　ヤア〳〵心得ぬ、お姫樣ぢや。

〽庭に駈け下り戸をあけて。
ト林は門口をあけて菊の前を見て、
ほんにお姫様ぢや。マア〳〵此方へお入り遊ばしませ。
〽といふ内も何うやら氣遣ひ。（ト菊の前を内へ入れ、林思入あつて）
見れば附添ふ人もなし、何として夜に入つてお一人お出なされたぞ。
菊の　さればいの、忠度様の遊ばしたお歌の事に兎や角と、隙取る内に待兼ねて、お立ありしと聞くより早やお後を慕うて出たれども、心に任せぬ女の足、爰まで來ても追付かれず、道は知らず日は暮れる、其方の所は前方に摩耶參りの時寄つたを便り、やう〳〵尋ね當りしが、此やうに後れては、忠度様に逢ふ事は。
林　なるとも〳〵、コレ逢はれまするぞえ。
菊の　そりや又どうして。
林　コレ忠度様は先程お出なされて、奥にござりますわいの。」
菊の　ヤアそりやほんの事かいなう、ヤレ〳〵嬉しや。イヤそりや嘘ぢや、どうしてあなたが此家の内へお出なされう筈がない、コリヤ自を嬲るのかいなう。

林　ホヽヽヽ、こりやマアひよんなお疑ひ、我子にかへても大事と思ふお前樣、殊に遙々ござつたもの、噓僞を申しませうか、其證據と申すはアレあの障子へ忠度樣が、お書きなされたあの歌、あれを御覽遊ばして、お悦びなされませいなア。

菊の　何と言やる、此障子が證據とは。

〽嬉しき事を菊の前、何か樣子も白紙の、障子に殘る夫の歌、見るよりびつくり。

ほんに是こそ我夫の御手蹟、どうして爰へ來給ひしぞ、アヽ早う逢ひたい、逢はせて給ひなう。

林　成程お逢ひなされまし、ぢやが是旅疲れで休んでござる、消魂しう起さずとそつとはひつて肌身をつけ、しつぽりと御寢なされませ。

〽粹な詞に面はゆく。

菊の　オヽ乳母とした事が。

〽じやら〳〵と何ぞいの、譯もない事ばツかり。

〽言ひつゝ片頰に笑の眉、開く襖も待兼ねて、いそ〳〵として。

乳母、其方や向いてゐやいなう。

〽入り給ふ。

ト上の屋體へ菊の前を突き遣る。菊の前こなしあつて屋體の内へはひる。

〽折節納戸の暖簾口、欠伸まじりで立出る茂次兵衞。

ト奥より茂次兵衞酒に醉ひしこなしにて出て來り、

茂次　コレ婆樣。いかい雜作になりましたぞや。

林　これは扨、わしとした事が不作法な、かまひもせぬ客衆振り、許して下さりませ。

茂次　イヤモ手酌で差しつ押へつ、銚子切引掛けたりや、くついりがしてぐつたりと寢てのけた、家に大分用がある、いかい馳走になりました、又その内來ませう。

林　そんならもうお歸りでござりまするか。

茂次　オヽサ歸る事は歸るが、から醉つて見ると泊つて行きたい、年はとつてもよい程ぢや、どうぢや〳〵。（ト林を引寄せ惡身ある。林は振拂つて）

林　エヽモ年も不足のない癖に、よい加減に置かつしやれ。エヽ歸らつしやれ〳〵。

ト茂次兵衞の手を掴み引出す。

茂次　アイタ〳〵、了簡せい〳〵。

林　エヽきり〳〵歸らつしやれ。

ト門口の外へ茂次兵衞を突出す。

〽林は納戸へ入りにけり。

ト林は納戸口へはひる。茂次兵衞窺ひゐて、

〽茂次兵衞戸口に窺ひ〳〵。

茂次　今奥で樣子を聞けば、平家の大將薩摩守忠度とやらが爰へ來てゐる樣子、今見えたのは菊の前とやら、何でも此事梶原樣へ注進して褒美の金、うまい〳〵。

ト時の鐘にて、逸散に花道へはひる。

〽時しも一と間騷がしく、何の樣子か菊の前、襖をあけて裾蹴はらし、駈出で給へば林は驚き。

ト障子の内バタ〳〵にて、菊の前走り出る、と暖簾口より此物音にて、林も出て來り押止めて、

林　コレ申し姬君樣、何事が起つたか、氣色をかへてとつかはと、あなたは何處へござります、樣

子仰言れ、サアどうでござりますぞいの。

菊の　サア其樣子は、忠度樣が胴慾な、わしに暇をやるといの。」

林　ム、、そんならあなたのお腹立は尤もぢやが、高いも低いも夫が女房に暇をやるとは、よく〳〵了簡ならぬ事、其譯を立てなさらにや、コレ科ないあなたに疵がつくぞえ、マアとつくりと氣を鎭め、思案して御覽じませ。

菊の　イヤ〳〵思案までもない、其譯は立つてはあれど、互ひに思ひ初めしより、夫よ妻よと言ひ交して、一生添はうと思うたもの、緣切られては片時も、何と存へをられようぞ。

〽恨みつらみも有磯海、一思ひに身を沈め、庭の水屑となる覺悟。

止めずと死なして給ひなう。

〽死ぬる〳〵とばかりにて、後は詞も淚なる。

林　イヤ〳〵なんぼ仰言つても、乳母はどうも合點が行かぬ、是には定めて深い樣子が。

ト此時上の障子屋體の內にて、

忠度　ホ、ウ其仔細は忠度が、篤と申し聞かせん。

〽しづ〳〵と立出で給ひ。

卜上手より忠度出で二重眞中へ住ふ。大小の合方になり、

天の憎む所必ず誅罰すと、入道の不善一門の積惡によつて、かくまで傾く平家の運、此度の戰ひも十が九つ味方の敗軍、某も討死と覺悟極めし事なれば、何時を期してか添遂げん、思切つて歸られよ。

〽いへども更に聞き入れず。

陣所へ行かんとある時には、忠度女に迷ひ陣中まで具したりと、世の人口にかゝるといひ、死後まで緣を切らされば、俊成卿の御身の上、平家に親しき咎めを受け、遂には源氏の仇となつて、亡び給はん悲しさに、つれなく言放し暇を遣はせしは、忠度が師の高恩を報ぜん爲、もしも運に叶ひ戰に勝たば存へて、再び逢はんも計りがたし、それを賴みに行末の、契りを樂しみ待ち給へや。

〽口には言へど心には、是今生の別れぞと、思ひ廻せばいぢらしく、さしも武勇に張詰めし、弓弦の切れし心にて、ゐるもゐられぬ座を背け、脇目に餘る御涙、包み兼ねさせ給ふにぞ、それと悟りて菊の前。

菊の　イヤ〳〵なんぼそのやうに、再び逢はうの添れるのと潔う仰言つても、誠しからぬ身の覺悟、討死と知りながら何と見捨て去なれうぞ、何處までもお供して、生きるとも死ぬるとも、一緒でなけりや、わしや厭や〳〵。

〽酷いつれないお心でござりますわいな。

わしや厭や〳〵。

〽縋りついて泣き給へば、林も心思遣り、共に袂を絞りしが、態と諫めの聲勵まし。

林　今の程事を分け、利害を解いてお言ひなさるに、たつてお供と仰言るは、親御様へは御不孝といひ、殿御の爲には猶ならぬ。いかに姫御前なればとて、その辨へがないかいの、ア、疎ましいお子ではあるぞいなア。

〽詞を盡してとも〳〵に、諫めすゝめて否應の、應へも涙なか〳〵に、離れがたなき風情なり、折節風に誘はれて間近く聞ゆる鬨の聲、耳を貫く鐘太鼓、亂調に打立て〳〵、どつと驅け來る討手の大將、一文字に大音上げ。

ト此内皆々愁ひの思入。遠寄になり三人こなし。此時遠寄を打込む。花道より梶原立烏帽子鎧陣立の
なり、附太刀にて、花四天大勢つく棒さす又を持ち出て來り、花道にて、

梶原　平家の落人薩摩守忠度此家に忍び在する由、注進あつて慥かに聞き、召捕らん爲梶原平次景高
が向ふたり、假令鬼神なればとて、八方を取圍めば迚も遁れぬ、尋常に繩かゝれ、異議に及ば
ば踏込んで搦め捕らうか、いかに〳〵。

〽いかに〳〵と呼はつたり、人々扨は茂次兵衞が、注進せしかと驚けば、忠度
少しも動じ給はず、二人を奥へ忍ばせて。

ト忠度門口へこなしあつて兩人を奥へやり、門口をあけキツとこなし。

〽太刀押取つて突立上り。

忠度　ヤア烏滸がましや平次景高、源平互ひに鎬を削り、刄を爭ふ戰場には向はず、我、
〽一人に多勢を以つて取圍む。
こゝな卑怯者、汝如きに易々と繩かけらるゝ忠度ならず、イデヤ手並の程を見よ。
〽太刀拔放し。
汝等如きに刄物は要らぬ。

〽身繕ひ、景高いらつて。

梶原　ヤア物を言はせず討つて捕れ。

捕手　やらぬわ。

ト大太鼓入りになり、捕手打つてかゝり、疊の立廻り、皆々を相手に忠度立廻り、好みの通りあつて

トヾ寄せ太鼓になり、梶原を先に捕手花道へ逃げてはひる。

〽むら〳〵ぱつと逃失せたり、引違うて雇人茂次兵衛數多引連れ勇み立ち。

ト花道揚幕にて、

茂次　ヤレ來いやい。

皆々　ハヽア。

トちやん〳〵になり、茂次兵衛双紙を鎧にして火吹竹を差し、采配を持つて先に立ち、後より大勢四天突く棒さすまたを持ち出て來り、

茂次　ヤア〳〵青海苔、ちやアない忠度、最前此家で窺ふ所、障子に殘る落書を、見出した歌の茂次兵衛が梶原樣へ御注進、首打落すは易けれど、ならば手柄にからめ捕り、菊の前をおらゝが貰ひ巣鴨の花と作り立て、細工は流々仕上げたら、褒美はどつさり丸儲け、團子坂からころ〳〵

と首を打たうか生捕るか、二つに一つの返答は、サ、、、、ナント〳〵。

〽なんと〳〵と詰寄れば、忠度動ずる氣色もなく。

忠度　ヤア尾籠なる蛆蟲めら、汝等如きに刃物は要らぬ。

〽言ふより太刀を拔放し、斬口へ刺貫き。

茂次　ソレ。

〽双方一度に打つてかゝれば、襟髪摑んでづでんどう、疊蹴上げて投付くれば、

組子は慌て群がるを右往左往と。

ト是より鳴物。疊の立廻り十分あつて皆々追込む。忠度キツと見得。

〽ばら〳〵と驅け散らし、相手なければ忠度卿、息を休める其内も、油斷な

らざる埴生の宿り如何はして防がんと、心を配る時しもあれ、又も寄せ來る

鬨の聲、貝鐘太鼓責太鼓、手に取るやうに聞ゆれば、忠度はつと心付き。

ト此時遠寄せ烈しく、竹法螺を吹立てる、是にて忠度キツとなつて、

忠度　扨こそ景高大軍を催ほし、重ねて向ふと覺えたり、戰場ならば敵の勢、何萬騎にて圍むとも、

打破りかけ悩ませ、恥れを顯し見せんずもの、軍中に引返し願ふ詠歌も腰折れの、望みも叶はず剰へ、さしも名高き忠度が、かく茅屋に身を忍び、敵に囲まれやみ〳〵と、生捕られては後代まで、屍の恥辱名の穢れ、チエ、口惜や淺ましやなア。

〽拳を握り齒嚙をなし、怒りの涙照る月に、氷をふらすが如くにて、痛はしくも亦道理なり。

〽隙もあらせず表の方、寄せ來る軍兵むら立つ提燈、天地を照らし亂れ入るよと見る所にさはなくして、討手の大將かけ烏帽子に、花田の大紋さはやかに、長袴の括りを解き悠々然と立向ひ。

ト此内花道より軍兵二人高張を持ち、後より六彌太侍烏帽子、誂への龍神卷短冊の附きし櫻の枝を襟にさし軍兵大勢附添ひ出て、花道にて、

六彌　武藏の國の住人岡部の六彌太忠澄、忠度卿へ見參〳〵。

〽しづ〳〵と打通り、

トこなしあつて六彌太軍兵舞臺へ來る。

忠度　ナヽナント。

六彌　此度源平兩家の戰ひは、私ならぬ院宣を蒙り、範頼義經罷向へば、兩陣互ひに晴れ勝負、潔き軍はせずして拔駈けせし梶原景高、卑怯の振舞聞くに忍びず、此六彌太が罷りしは義經の嚴命。

ト大小入りの合方になる。

其仔細は先達俊成卿へお賴みありし御詠歌の內、「さゞ波や志賀の都はあれにしを、昔ながらの山櫻かな」右の御歌千載集に入りしかど、勅勘ある御身なれば、名を憚りて讀人知らずとなりし趣、則ち集に入つたる印の短冊を御覽下さるべし。

ヘ山櫻の流し枝に、結び付けたる以前の短冊、恭しく差出せば、忠度につこと打笑み給ひ。

ト六彌太櫻の枝を出す。忠度取つて、

忠度　我が詠歌を我筆の、願ひも仇花ならざる印、御芳志の山櫻、ハヽア忝しく。敵味方と隔つれば打捨置かるべかりしを、思ひ寄らざる義經の仁心にて、歌人の數に加はり、和歌の譽れを殘す生涯の本望、死んでも忘れぬ悅びぞや、迚も遁れぬ身の不運、死すべき時に死なされば死にまさる恥ありと、名もなき愚人の手にかゝり、見苦しき最期せんかと後悔せし折に、幸ひ武

勇の聞え隱れなき、六彌太に生捕らるれば忠度に恥辱はあらじ、サア寄つて繩かけられよ。

ヘ御手を廻し待ち給へば。

六彌　コハ心得ぬ御仰せ、某君の討手には參らず、敵味方の勝負は戰場、其時は互ひに時の運に任せ、但し梶原如き弱身を見かけ、拔駈けして手柄にせんと思ふやうな、六彌太と思ひ召さるゝか、ハヽヽヽ。

ヘ嘲笑へば、忠度卿は理に服し。

忠度　實に〳〵是は誤つたり、盛なる時は制し衰ふる時は制せらるゝ理、如何なれば義經といひ、汝まで誠ある一言心魂に徹し、今更返す詞なし、惜しからぬ命なれども明けなば陣所へ立歸り、華々しき勝負せん。

六彌　其時望みは御邊が首、忠度卿は我討取る。

忠度　必ず討たれよ。

六彌　おんでもない事。（ト此時鷄諸所にて鳴く）アレ〳〵八聲の鷄も鳴き、明くる間近しと申せども、路次の狼籍覺束なし、陣所へ御供仕らん。ヤア六彌太が家來共、用意の馬引け。

軍兵　ハヽア。

〽飾り立てたる黒の駒、御前に差寄する、辭するに及ばず忠度卿、鬣摑んでゆらりと召せば、一と間の内より菊の前、これなう暫しと駈出で給ふを、林は押止め立身で隱せば、岡部の六彌太それと悟つて、忠度卿の脫ぎかけ給ひし上着の袖、刀を拔いてふッつと切り。

ト此内下座より軍兵大勢、黑の馬を引出し、忠度の前へ据ゑ忠度是に乘る。ト奧より菊の前走り出るを林是を止めて、六彌太に見せぬ思入あつて、六彌太馬に乘りし忠度の右の袖を刀にて切落し思入。

六彌　コレ〳〵乳母。

〽いふにびつくり。（ト林思入ある）

ハテ扨不思議な顏せまい、總じて老女は媼といひ又うばとも呼ぶ、今宵忠度卿のお宿を申せし御褒美に是を遣はす、それとも若々しき錦の片袖、年寄が貰うて益なしと思はゞ、外に欲しがる方もあるべし、是も其人の筐と思へども、猶懷しき袖の移り香、といふ歌の心、其方が耳に、菊の前、よく心得てお受け申せ。

〽差出せば、

ト林は右の袖を取り、

林　コハ冥加ない仕合。

ト林袖を菊の前に遣る。

〽頂く右の片袖は、右の腕を落かたの戰に討死し給ひし、後の哀れと知られけり、思ひの種や淚の種、仁義の種の六彌太が。

六彌　東雲近し。

〽急がんと、先に進んでたつか弓、言はぬは言ふに彌增る、暇乞さへ泣顏の、見送る姿振返る心の種の詠歌も。

忠度　昔ながらの山櫻、

菊の　散り行く身にもさしかざす、

忠度　流れの枝の短冊も、

六彌　世々に譽れを殘す種、

林　歎きの種の、

皆々　放れ際。

へ諫めを種と隔つれど、果てし涙の悲しみを、共になづみて耳を垂れ、嘶く聲も哀れ添ふ、駒の足取り諸手綱、引別れゆく曉の、空も名残りや惜むらん。

ト此内忠度馬の上に櫻を持ち思入。菊の前、林愁ひのこなし。六彌太忠度ホット思入、持ちし櫻を懷にして行きかゝる。双方見得、段切にてよろしく

幕

四幕目　御影濱邊の場

役名　白毫の彌陀六、無官大夫敦盛卿、須股運平、百姓豐作、同雀の忠吉、同昆沙の五太右衛門、同乾り又平、同のらの馬作、同丹兵衛、同與次郎、經盛卿御臺、藤の方。

本舞臺一面の杉並木。同じく釣枝。立木。眞中に莫大なる五輪。すべて須磨濱邊の體。波の音、濱唄

にて幕あく。と右の鳴物にて上下より旅人の仕出し出て來り、捨ゼリフあつて、よろしく上下へ行違ひはひる。

〽行道筋も直ならぬ、脇の濱邊や磯傳ひ、神戸も後に湊川、流るゝ水の淀ならば、爰も繼橋かけ渡す、舟を守りの神垣や、森も茂みて置く露の、垂水の里も早過ぎて、行けば程なく上野山一の谷にぞ着きけるが、東雲近き横雲の、棚引く空も青々と、枝葉しげりし松蔭に、つゝくり立つた御影石、遠目にそれと走り寄り。

ト此文句の內浪の音にて、花道より壺折着流し右手差しの敦盛、後より彌陀六着流したつゝけ石鑿をさし出て、直に舞臺へ來て五輪へこなしあつて、

彌陀　申し爰でござります、先達遣はされた所書に合せ、私が使ひます職人共に云付けましたが、何とよう出來ましたでござりませうがな。

敦盛　いやとよ、此程平氏沒落に付、父清盛が腹心の其方ゆゑ、密に所々へ建てさせしが、如何なりしと思ふが故、忍び／＼其方が家に訪れしが、出來なして滿足せり。

彌陀　イヤモ私も打捨てゝ置く事ではござりませぬ、然しまだ笠にふりがあります、そして狂ひの出

ぬやうに勝を合すは漆喰、ドレ〳〵人の見ぬ間にさうぢや〳〵。

〽懐より蓋物取出し、重の際々塗りゐたれば。

ト彌陀六五輪に向ひ、懐より蓋物の内より漆喰を出し、鏝にて五輪の合せを直す事ある。

サア〳〵是でもう大丈夫でござります、サ格好見て下さりませ。

〽押直し、ためつすがめつ彌陀六が見るに心も消え入るばかり、敦盛卿も涙を浮め。

敦盛　頼み置いたる石塔が今こそ成就なす上は、再び其方に對面も叶ふまじ、唯儘ならぬは世の習ひはかなきものは人の身の、一生は皆夢と思へば、さのみ迷ひもあるまじ、さりながら今を限りのこの別れ、もしやは我を戀しきと思ふものだにあるならば、是を筐に與へてたべ。

〽錦の袋押開き、青葉榮えし笛竹を、渡す心も味氣なや、受取る身にもさながらに、扨はさうかと呑込んで。

彌陀　テモ忌はしい筐ぢや、是が限りの何のとそんな事は言はぬ事、然し誰ぞ欲しがる者もたんとござりませう、吃度お渡し申しませう。

ト敦盛が出せし袱紗包みの笛を受取り、たつゝけの間へ挾み、

敦盛　是にて身も、思ひ置く事はござらぬわいなう。
　へ話終らぬ其所へ、山畑稼ぐ百姓共、鋤鍬擔げどや〳〵と通りかゝつて。
　ト此時下手にて人聲する。浪の音濱唄になる。

百姓皆々　サア〳〵、ござらつしやれ〳〵。
　ト彌陀六は敦盛にこなしあつて、敦盛を杉並木の陰へ忍ばせる。と此内百姓思ひ〳〵のこしらへにて鋤鍬を擔ぎ出て來り、彌陀六を見て。

皆々　オヽ是は石屋の親父どんぢやごんせぬか。

彌陀　オイヤイ、こりや皆の衆、とうから精が出ますな。

豊作　イヤこちとらより此方さん、とうから味な所に石塔を建てさつしやつたの。

忠吉　ハテ、何を言はつしやる。親父どんは商賣ぢやによつて、何處であらうが持運んで建てねばなりませぬ。

五太　然しマア見れば立派の石塔ぢや、寺へ建てればよいになア、詸へ人が希有な奴ぢやないか。

彌陀　コレ〳〵どうした事ぢや、むざと粗相言ふまい、其施主人が爰にござるぞ、ナアお若衆樣。

我も人も亡者の爲、卒都婆一枚立てゝも三悪道を遁るゝといふ、況して大層な此石塔をお建てなさるは、御奇特なお若衆様、結構なお志でござりまするなア。

ト彌陀六は思はずこなしあつて言ふ。皆々は不思議のこなしあつて、

丹兵　コレ親父どん、お若衆の施主人のと人もないに、そりや何を言はつしやるぞえ。

彌陀　ハヽヽヽ、何とはこりやお主達はまだ目が覺めぬな。

皆々　アレまだかい、どこに人がゐるぞえ。

彌陀　ハテ是れ、爰にやい。

皆々　ハヽア、ほんに見えぬわ。（ト彌陀六あたりを見る事あつて）

彌陀　ハテ面妖な、今迄爰にござつたが、何方へござつたか、お若衆様。々々々々、々々々々。

〽呼べばとも〳〵百姓共、爰か其處かとさよろつく眼。

與次　コレ親父どん、其やうに呼ばつしやるが、此方石塔の代でも取らつしやらぬのか。

馬作　但し手附でも取つて置かしやつたか。

彌陀　さればサ聞かつしやれ、人體がよいから所も問はず、手附一文取らずぢや。

豐作　ハヽアそれで判つた〳〵、石塔をかたに。

忠吉　何ぞせしめる下工、扨は騙りに極まつた。
五太　オヽ遠くは行くまい。ナウ皆の衆。
皆々　オヽぼつかけろ〳〵。

ト皆々きつさうするを、彌陀六は引止めて、

〽皆來い〳〵と立騷げば、彌陀六は引止め。

彌陀　アヽコレ〳〵待たつしやれ〳〵、よもやそんなさもしい心のお方でもござるまい。
皆々　そりや又何故。
彌陀　サ其騙りでない證據は、わしに此やうな笛を下された。

ト以前の袱紗包みの笛を出して彌陀六皆々に見せる。

又平　ドレ〳〵見せさつしやれ、こりやマア袋が結構な金襴ぢや。
與次　そしてマアこの笛は生竹でもないが、節からちつくり枝葉がある。
豐作　いかさま是を錢にせうなら、百が物はあるまいか。
忠吉　ハテ何の錢にならう、親父どんが一杯喰つたのぢや。
彌陀　皆が言ふ通り、こんな事ならあたまで半金取つて置いたら、滿更の損もせまいに、あた酷い目

に遣はしたわえ。」

皆々　ハヽヽヽ。

〽悔むに甲斐もあら笑止や、彌陀六が抜かれたと、傳へて諸事の誂へ物、手附を取るといふ事は、此時よりと知られたり。

〽時しも後の松原より、足早に來る女は何者なると言ふ内に、走り近づく藤の局。

ト皆々こなし、矢張り右の鳴物にて花道より藤の方裲襠旅のなり、かつしきにて早足に出て來り、皆々を見て、

藤の　コレ〳〵一寸物問はう、舟寺はいづれぢやの、存じてなら敎へてたも。

又平　それは是から餘程遠いが、見れば賤しうない女中の一人旅、何故舟寺を尋ねさつしやるのぢや。

藤の　さればサ、妾は樣子あつて後より追手のかゝるもの、暫く影を隱さん爲。

ト此時彌陀六が持ちし笛を見付けて、

〽宣ふ内に目早くも、持つたる笛に目を付け給ひ。

コレそれを一寸見せてたへ。（ト思入彌陀六思入あつて笛を差出す。藤の方取つて見て）ヤヽ紛ひもな

き青葉の一管。こりや是我が子の敦盛が、肌身離さぬ秘藏の笛、どうして此方の手に入りしぞ。

　〽問はれて彌陀六不審顔、百姓共は口々に。

丹兵　其敦盛と言ふ人は此間の戰に、源氏の侍熊谷の次郎が手にかゝつて死にやつたぢやないか
い、ナア與次郎。

五太　オヽさうぢや〳〵、其時にいぢらしいは玉織とやら言ふ内裏上臈も殺されてゐたげな。

　〽聞くより御臺は。

藤の　ヤヽナニ敦盛は討たれしとや、ハア――。福原の館にて母樣無事でおさらばと、玉織諸共潔よ
う言うたが此世の暇乞、長い別れになつたかいなう。

　〽人目も恥ぢぬ叫び泣き、前後不覺に見えにける。

　ト藤の方愁ひのこなし。百姓皆々も思入あつて、

馬作　コレ親父どん、合點の行かぬ事がある、死なしやつた敦盛樣が此笛の持主なれば、此方に石塔
誂へた、お若衆と一つぢやないかや。

彌陀　さればいやい、其死んだ人が來さうなものか、心算にも考へて見い。

皆々　ほんにさうぢやの。

彌陀　ハヽア聞えた、先刻に爰まで連立つて來て、あのゝものゝと言ふ内に、掻消すやうに見えなんだわ、ハヽア扨は幽靈であつたよナ。

〽言へば皆々興ざめ顏、御臺は猶も悲しき思ひ。

〽折節遙かの松蔭より、むら／＼鳥の搏つが如く驅け來る大勢、彌陀六が見て取つて。

ト此時揚幕にて、

運平　ヤレ來いエヽ。

トチャン／＼打込む。皆々こなしあつて、

彌陀　アヽ申し／＼、あれこそ慥かに追手の者、先づ／＼あなたを隱すに、オヽ幸ひ／＼此石塔の後ろへ暫く／＼。（ト捨ゼリフにて藤の方を五輪の陰へ忍ばせる）ナント皆の衆、追手の者が今來て此處を素直に通れば、今の衆の仕合、もしも何の彼のと意地張らば、是迄平家の領地に住んだ恩返し、一働きせうぢやないか。

豊作　オヽサ／＼、銘々鋤鍬の峰打喰はせ。

忠吉　存分主人も家來も、さいなんでこまそ。

又平　コレ／＼向ふも侍ぢやによつて、負けぬやうに近村の衆へ觸廻つて呼んで來う。

五太　さうぢや／＼、さうすれば十人や二十人の侍、怖い事はないぞや。

丹兵　多勢に無勢あかんこつちや。

皆々　ぼい捲くつてこまさうわえ。

〽言ふ間もあらせず砂烟、蹴立踏立馳せ來るは、梶原が郎黨須股運平先として、數多引連れ馳せ來り。

トヂヤン／＼にて花道より、運平袢纏割羽織大小にて先に立ち、後より黑四天の捕手出て來り、

運平　コリヤ／＼百姓共鎭まれ／＼。唯今此所へ三十餘りの女が一人參つたであらう、いづれへ逃げた、有體にソレ拔かせ。

彌陀　ヘイ其女一向に。

運平　エヽ有體に申さぬと、曲事申付けるぞ。

皆々　ヘイ／＼。

豐作　ヘイ／＼左樣なら申上げます、いかにも其女此道を横筋かへに濱邊傳ひに參りました。

與次　アヽモウ彼是三里も行きましたらうが、追手の衆なら、

皆々　早くござらつしやれ〳〵。

運平　者共遁すな。

捕手　ハツ。（トキツトなり、運平捕手上手へ行きかける。皆々こなし）

皆々　アヽ申し〳〵〳〵、其方ではござりませぬ、此方の山手ぢや〳〵。

運平　然らば此道、者共續け。

ト下手の方へ行きかける。

皆々　アヽ申し〳〵其方ぢやない、此方ぢや〳〵。

運平　是は粗相な奴。

ト上手へ行きかける。

皆々　アヽ申し〳〵〳〵矢張り此方だ〳〵。（ト下手へ行きかける）

皆々　アヽイヤ〳〵此方だ〳〵。

ト百姓皆々上下へ教へる。運平捕手うろ〳〵こなし。

運平　アヽコレ〳〵目がまふ〳〵、僞りを申さず教へて呉れい〳〵。

忠吉　アヽ粗相申しては濟まぬ、申し〳〵其尋ねる女中は、あの山越えて此山越えて、彼方の方へ逃

げて行た〳〵。

運平　然らば此道、者共續け。

捕手　ハツ。

〽山手を指して、

トチャン〳〵にて、運平捕手下手へはひる。

〽跡打眺めて。

ト彌陀六思入あつて、五輪の蔭より藤の方を出し、

彌陀　ア、申し〳〵女中樣、又もや追手の來ぬ内に、此道をござりまして、舟寺と聞かつしやりませ。

藤の　ア、他生の縁とは言ひながら、禮は詞に述べがたし。

彌陀　サヽ、かういふ内も心遣ひ。

藤の　御縁もあらば、いづれも樣。

〽早う〳〵と追立てける。

ト藤の方こなしあつて上手へはひる。

彌陀　人目にかゝらぬやう、隨分共急いでござりませ。（ト見送りこなし）

皆々　サア／＼是で今の奴が來ても氣遣ひはござらぬわえ。

〽氣遣ふ此方の木陰より、須股運平小戻りなし。

トバタ／＼になり、下手より以前の運平捕手出て來り、浪の音。

運平　ヤア見付けた／＼、から言ふ事を推量して、取つて返せし追手の我々、よくも騙り、平家の落人逃がしたな、邪魔立ひろぐ土ほぜりめ、首を並べる、動きをるな。

〽息卷高く罵れば、百姓共はせゝら笑ひ。

皆々　ハヽヽヽ、こりや可笑しいわえ。

豐作　コリヤ、そつ首のちよつかいのと、汝等がほての動く間に、うつかりとしてゐようかえ。

忠吉　オヽ、是迄安穩に耕した恩返し、――

五太　平家方の女中と見たゆゑに、

又平　わし等が寄つて落しました。

運平　ヤア此奴が／＼野太い奴等、今源氏方に聞えある、天地に轟く雷と呼ばれたる梶原平三が家來番場の忠太、其又家來の須股運平に向つたりとは出過ぎたり、頤のあいたる儘の其雜言、一々に召捕つて三寸繩に括し上げ、わが帶したる此一刀に打放す。覺悟極めて直りをらう、ソレ者共。

捕手　やらぬわ。
丹兵　何を二本棒めが、ソレ打締めろ。
百姓　合點だ。
皆々

〽各自に鋤鍬大熊手、打つて掛れば運平家來とも、討つて掛りて渡り合ひ、元より達者の百姓共、腕先揃へてからさほ打ち、片端家來を打歐り、運平を押取卷き、投げたり踏んだり蹴飛ばしたり、既に急所に當りけん、うんとのつけに反返れば。

トドン〳〵になり、運平大刀へ手を掛けキツとなり、捕手に指圖する、捕手は心得て十手にて皆々へかゝる。百姓皆々は鋤鍬柄物などにて打つてかゝり立廻り、皆々は運平を打据える。是にて運平氣を失ひ倒るゝ、捕手は是を見て叶はじと下手へ逃げてはひる。皆々夢中になつて打据ゑ。

皆々　サヽどんなもんぢや〳〵。

ト皆々運平の氣を失ひしを見てびつくり。

皆々　ヤア死んだわ〳〵。
豐作　コリヤ大事ぢや〳〵、死んでは事が難しい。

忠吉　一體こりやどうしたものであらう。

五太　サアどうと言うて、爰にゐれば掛合。

又平　それではいつそ逃げた方がよからうかえ。

馬作　それがよからう。

皆々　サア皆なござれ／＼。

〽既に逃げんとする所へ庄屋の孫作、逸散に駈け來り。

ト百姓皆々上下へ立別れんとする所へ、花道より庄屋羽織袴のなりにて走り出て舞臺へ來る。浪の音消唄合方になる。

庄屋　ア、コレ／＼村の衆／＼、一人も去なす事はならぬぞ／＼。

皆々　ヤア庄屋殿がござつた／＼。

ト庄屋運平の死骸を見て、

庄屋　扨こそな／＼、コレ／＼皆の衆よう聞かしやれや、今梶原様の郎黨番場の忠太様と云ふお侍が大勢家來を連れてござつて、百姓共が狼籍致し、家來運平を殺したる由、憎い奴、當村近村の掛り合の百姓共、殘らず引立て來るべしと嚴しい云付、ア、ひよんな事して、おら迄に難儀

害を掛けさつしやつた、遅なはつたらどんな咎めに遭はうも知れぬ。おらと一緒に行て、有體に皆で言譯さつしやれ。サアござれ〳〵。

ト庄屋は百姓二三人引張り、連れ行かんとこなし、百姓思入あつて、

豐作　ア、申し〳〵待たつしやれ、庄屋樣々々々、是は此方が殺したといふ譯ではござりませぬ、今わしらが農事の出掛けへござつて、平家の落人詮議があるとて、向ふの方からドン〳〵と駈けてござつて、目がまうて石に躓き、ころりと死んだんぢや、所で頓死ぢや。

皆々　オ、其通り〳〵。

庄屋　オ、そんなら何と言ふ、御詮議があるというて、トン〳〵とござつて目が舞うて、此石に躓きトンと來てトンと死んだのか、それが定ならおらも嬉しい。

皆々　いかにも、さうぢやわいの。

與次　コレ庄屋樣、其證據はの、此死骸に一つも疵がないのが確かな證據ぢや、改めて見さつしやれ。

ト庄屋は思入あつて死骸の傍へ行き、

庄屋　ドレ〳〵わしは近目ぢやが、ヤア疵も大疵ぢや、首がない〳〵。

ト死骸を逆樣に見てこなし、皆々こなし。

皆々　ア、申し〳〵逆樣でござる〳〵。

庄屋　是は大きな粗相しました、ドレ〳〵。（ト運平をよく見て）今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札かドレ改めて、ハアーほんに何處にも疵はない、こりや皆の言ふ通り、頓死に違ひあるまいわい、よし〳〵此通り梶原樣へ申開きして來うか、（ト庄屋行きかけてこなし）ア、コレ〳〵どうも極りが惡いわ、此元の次第柄を知つた者が一緒に行つて言譯すりや濟む事ぢや。先づ梶原樣へ出て言はうには、ヘ、イ申上げます、あなたの御家來の運平樣が詮議の筋があるとて、とん〳〵と駈けてござつて、とんと躓いて死にまして頓死を致しました、證據には疵はござりませぬ、御改めの上お引取り下さりませと言へばよい。

皆々　さうさへ言へばよいのでござるか。

庄屋　此のマア言譯には誰がよからうな、オ、年の功ぢや、お主が村では口利ぢや、サア爰で一寸言うて見さつしやれ〳〵。

豐作　ア、モシ〳〵庄屋樣々々々、言ふは言ひますが、わしは口癖の念佛が邪魔になつてどうもならん。

庄屋　マア〳〵いゝわ、言うて見い〳〵。

豐作　そんなら言うて見ませう。ヘイ申上げます。南無阿彌陀佛、梶原樣お陀佛、あなたの御家來の運平樣、南無阿彌陀、何か詮議の筋あつて、とん／＼／＼と彌陀佛、躓いて、佛、そこで頓死陀佛、死骸に疵のないのが慥かな、南無阿彌證據で陀佛。

庄屋　ア、いかぬ／＼／＼、それではどうもならぬ。（ト是にて豐作念佛をいひながら控へる。庄屋思入あつて）マア誰彼と指圖せうより、不斷ちよびくさよう喋る雀の忠吉、貴樣行くがよい。

忠吉　そりやお前の指圖によつて行きは行きますが、餘り早口で何の事ぢや分りませぬぞえ。

庄屋　いゝわいやい、それを落着いて言うて見い。

ト前へ進み出て、

忠吉　ヘイ申上げます、梶原樣の家來運平樣が何か詮議の筋があるとてとん／＼と來て目暈がまうて死にました所で頓死其證據には死骸に死疵がござりませぬお改めの上お引取下さりませ。

ト早口にて言ふ。

庄屋　コレ／＼／＼さう早口では却つて失禮、判らぬわえ、ハテ困つたもの、オ、あるわ／＼、毘沙の五太右衞門がよい。サアちやんと言うて見い。

五太　そりや行きは行きますが、おりや聲が鼻へかゝりますぞ、（ト前へ出て）ヘイ梶原樣申上げま

す、あなたの家來ふん平樣、御へん議のふしがあつて、どん〳〵〳〵と來てどん死なさりました。

ト鼻へかゝりこなしある。

庄屋　扨々困つたものぢや。というて丹兵衛は咽がごろつくといふであらうし、與次郎は齒抜なり、こりやまあ差詰又平行きをらずばなるまいぞや。

又平　オヽ、おりやドヾヾヾ吃りますわえの。

庄屋　いゝわい、靜かにさへ言へば譯が判るわ、言うて見い〳〵。

又平　カヽヽヽ梶原樣、モヽヽヽヽヽ申しアヽヽヽあげます、あなたのケヽヽヽ家來スヽヽヽヽヽ須股ウヽヽヽヽ運平樣、トヽヽヽヽヽとんと來て頓死。

庄屋　エヽいかぬわ〳〵、コレ其方ぢや〳〵、野良馬作、お主ぢや。

馬作　わしは定つた事言ふと噓が出ます。（ト馬作前へ出て）梶原樣申上げます、ハクサメ、あなたのハクサメ、家來のハクサメ、運平ハクサメ。

庄屋　コレ〳〵もうよい〳〵、困つたものぢや、さう銘々讓り合つては埒があかぬ、ハテ困つたものぢや。オヽ幸ひ〳〵、爰に石を運んだ繩がある、鬮取にして當つた者が行くのぢやぞや。

五太　さうなされば、否應なしに行かねばなりますまい。

庄屋　待て〳〵、わしが今鬮を拵へて引かすわ。（トやはり浪の音合方にて、庄屋後にて繩で鬮に拵へ取出し）コレ〳〵皆に言うて置くが、結んだのを取つた者が梶原樣へ行くのぢやぞ。

皆々　オヽ合點ぢや〳〵。

庄屋　サ寶引の始まり〳〵。（ト床のメリヤスになり庄屋こなし）オツト市かゝどれ取りやる。

ト豐作出て鬮を引く

豐作　オツト合點、西國廻つて是取りやる。

庄屋　オツト市かゝどれ取りやる。（ト忠吉前へ出て）

忠吉　オツト合點、西國廻つて是取りやる。

庄屋　オツト市かゝどれ取りやる。（ト五平太右衛門前へ出て）

五太　オツト合點、西國廻つて是取りやる。

庄屋　オツト市かゝどれ取りやる。（ト又平前へ出て）

又平　オツト合點、西國廻つて是取りやる。

庄屋　オツト市かゝどれ取りやる。（ト床メリヤスにて百姓皆々鬮を引く事。トヾ庄屋殘り鬮一條持つてこなし）コレ〳〵皆の衆落はないな、行渡つたな、ハテ天窓數讀んでしたが、こりや面妖な、一

條餘つたわえ。
豐作　ハテ、そりや親の繩ぢや。庄屋樣が取りやしやるのぢや。
庄屋　ほんにさうであつた。
ト件の繩を我手に引いてこなし。皆々見て、
皆々　ヤア〳〵、結んだのは庄屋樣が當つた〳〵。
庄屋　悲しや、結んだのはおれぢやつた。
皆々　サア庄屋樣、行かしやれ〳〵〳〵。
ト皆々せり立てる。
庄屋　マア待つた〳〵〳〵。コレおりや行かう筈がない、何故と言へ、此場の樣子委細知つてゐるはお主達。
皆々　デモ鬮に當つた者が行くのぢやござんせぬか。
庄屋　南無三寶、ま一遍引直さうか。
皆々　イヤ〳〵仕直しはなりませぬ〳〵。
忠吉　コレ〳〵無理言はつしやらずと往かつしやれ〳〵。

五太　コレいつそ人手のかゝらぬやう、此死骸を庄屋殿へ負せてやらしやれ。」
馬作　ほんにこりやよい思付ぢや。
庄屋　コレ〳〵許して呉れ〳〵。
皆々　イヤさうはならぬ、サア〳〵負ふのぢや。

ト銘々寄つて件の運平の死骸を庄屋に背負はせ、繩搦げにして、繩の殘りを皆々持ちこなしある。

庄屋　待つて呉れ〳〵、了簡して呉れ、皆のもの。
五太　鬮に當れば是非がない、聲を揃へて引いて呉れ。
皆々　ヨイヤサ。
庄屋　あんまり酷い胴慾だ。
豐作　何でも彼でも引いて行け。」
皆々　ヤアヽイ――。

ト屋體囃子になり、庄屋へ繩の付きしを皆々引立て、木遣唄にて、庄屋死骸を背負ひ、山臺の思入よろしく賑かの仕組よろしく。

幕

大詰　　生田熊谷陣屋の場

役名　九郎判官義經、石屋白毫の彌陀六實は彌平兵衛宗淸、熊谷次郎直實、梶原平次景高、堤の軍次、經盛御臺藤の方、熊谷室相模等。

本舞臺三間の間本緣附高二重。正面子持筋の襖。上の方塗骨障子屋體。軒口鳩八の紋附の幕を張り、下の方竹矢來、よき所に櫻の大樹。此傍に誂への制札を建て、いつもの所へ陣門を据ゑ、日覆より見事に櫻の釣枝。すべて熊谷陣門の體よろしく、時の太鼓にて幕あく。

〽行春もいつかは冴ゑん須磨の月、平家は八島の浪にたゞよひ、源氏は花の盛りと見る、中に勝れて熊谷が、陣所は須磨に一構へ、要害嚴しき逆茂木の中に若木の花盛り、八重九重も及びなき、それかあらぬか人毎に熊谷櫻といふぞかし、花折らせじと制札を、讀んで行く人讀めぬ人、一つ所に立集り。

ト此内花道より百姓四人鋤鍬鎌などを持ち出て來り、下手へ立止り、

○ナント皆の衆見やしやれ、扨も見事に咲いたではないか。
×成程須磨の浦ではま一本ない此櫻、花も見事ぢやが、此制札も見事ぢやな。
△それ〳〵辨慶殿の筆ぢやげなが、何んだか一つも讀めぬわい、こりやまあ何と言ふ事ぢやぞいの。
□オ、それは義經樣が此花を惜しみ給ひ、一枝切らば指一本切るべしとの法度書ぢやわいの。
○ヤア何ぢやと、花の代りに指を切るとは、こりや首切る下地であらうわいの、オ、可恐やの〳〵。
×それ〳〵見てゐる內も虎の尾を踏む心地がするわい。
△兎角觸らぬ神に崇りなしの譬へぢや、皆の衆、行かうではないか。
□いかさまそれがようござらう、サアござれ〳〵。
〽花に嵐の臆病風、散り〳〵にこそ別れ行く。
ト百姓皆々下の方へはひる。
〽はる〲と尋ねて爰へ熊谷が、妻の相模は子を思ひ、夫思ひの旅姿、陣屋の軒を此處彼處尋ねしが、幕に覺えの家の紋。

ト此内花道より相模旅なり好みのこしらへ、菅笠と杖を持ち出て來る。後より若徒中間股引大小草鞋のこしらへにて附添ひ、中間旅なりにて後より両掛を擔ぎ出て來り、よろしく花道にて止りこなし。

侍　アイヤ奥様、あれなる幕に御家の定紋、必定御陣所と相見えまする。

ト相模舞臺の幕を見て、

相模　オヽさうぢや、違ひない夫の御紋。

侍　御出の趣達しませう。

相模　アヽコレ、必ず麁忽のないやうに案内しや。

侍　ハツ。

〽陣所の門へ立寄つて（ト皆々舞臺へ來り）誰ぞ頼みませう〳〵。

〽おとなふ聲に家の子なる、堤の軍次立出でゝ。

ト奥より軍次衣裳上下大小にて出て來り、門口へ向ひ、

軍次　イヤナニ何方よりの御案内なるや、主人事は他出致してござる。

相模　イヤナウ苦しうない者ぢや、爰開けて給ひなう。

軍次　ハテ聞慣れし女中の聲、樣子尋ねし上の事。（ト門口開き相模を見て）ヤ、あなたは奥樣でござりますか。

相模　ヤアそちは軍次か。

軍次　是は思掛けない御目見得、先づは御健勝にて恐悅至極。

相模　其方も無事で目出たうござるわいの。

軍次　何はしかれ、先づ〳〵是へ。

相模　其方達は次へ立つて休息しや。

家來　ハツ。

〽はつと答へて立つて行く。（ト侍中間下手へはひる）

軍次　イザお通り遊ばされませう。

〽しづ〳〵とこそ打通り。（ト合方になり相模上へ通りよろしく住ふ。軍次思入。）

軍次　シテ奥樣には火急の御用なるや、遙々との御上京、遠路の處嘸お疲れでござりませう。

相模　イヤモウ女子の足の道捗らず、爰迄來る途々も樣子を聞けば、今戰ひの最中との噂、お上にもお變りたきや、小次郞は息災でゐやるかいなう。

軍次　殿樣始め若殿小次郎樣にも、御健勝にござりまする。

相模　それ聞いて落着きました、妾が參りし樣子、わが夫へ申上げてたも。

軍次　アイヤ殿樣には今日お志の事ありとて御廟參、御歸陣の後折を見合せ。

相模　軍次、其方よいやうに。

軍次　委細畏つてござりまする。

〽挨拶とり〳〵する所へ、敦盛の母藤の局、虎口の難を遁れ來て、こけつ轉びつ花のかげ、陣屋を目懸けて走りつく。

トバタ〳〵にて花道より藤の局衣裝裲襠の上へ抱へを締め懐劍を差し走り出て來り、門口へ來り、

藤の　イヤナウ後より追手のかゝる者、影を隱して給はれや。

〽けはしき體に軍次は立つて。

軍次　尤なる事ながら、御覽の通り陣屋の儀なれば、女義は叶はぬ、外をお賴みなされませ。

相模　ア、コレ軍次、賤しからざる詞のはし、見ますれば旅のお方さうな、誰しも女子は相身互ひ、マア〳〵おはひりなされませ。（ト相模陣門を開き、藤の局を見て）あなたはどうやら。

ト是にて藤の局も相模を見て、

藤の　そもじは慥か。
相模　藤の方様。（ト兩人顏見合はせ思入あって）
藤の　相模ぢやないか。
相模　どうして是へ、思掛けない。
藤の　絕えて久しさ、
相模　此日見得。
藤の　其方も無事で、
相模　あなたもお健在で、
藤の　廻り逢うたも、
相模　盡きせぬ御緣で、
兩人　あつたなア。
相模　先づ〳〵あれへ。
　　へ先づ〳〵あれへと言ひければ、陣屋の內へ打通る。
　ト是にて相模藤の方手を取り上の方へいざなふ。

相模　思ひも寄らぬあなたのお入り、コレ軍次其方は次へナ。

軍次　ハツ、然らば奥樣、又後程お目見得仕るでござりませう。

〽軍次は立つて入りにけり、相模はやがて手をつかへ、

ト軍次となしあつて奥へはひる。相模思入あつて、

相模　誠に一昔は夢と申しまする、大内に御座遊ばす時、勤番の武士佐竹次郎と馴染み、御所を拔出て東へ下り、あなた樣の御身の上を承はれば、御懷胎の御身ながらも平家の御家門、參議經盛樣方へ御緣づき給ふとの噂、其折世盛りの平家御威勢は益〻、蔭ながら悦びましたに、此度の源平の戰ひ、御一門も散り〴〵と聞くに付、此藤の方樣は何と遊ばしたどう遊ばしたと、一人苦にしてをりましたに、マア御機嫌のよいお顏を見てお目出たいは、オヽ嬉しい事でござります。

藤の　オヽ其方も無事で目出たいわいの、さうして懷胎で出やつたが、其時の子は姬御前か男子か、息災で育てゝゐやるか。

〽ちよつと寄つても女子同志、積る言の葉繰返し、嬉し涙の種ぞかし、藤の方は涙ぐみ。

世の盛衰とは言ひながら、其時自らが産落したは、無官の太夫敦盛とて、器量發明揃うた子を、今度の軍に討死させ、夫は八島の浪にたゞよひ、我のみ殘る憂き難儀、淺ましの身の上ぢやわいなう。

〽かこち給へば。

相模　お道理でござりまする、以前の御恩の報じ時、連合に語り御身の片付後世の營み、お心任せに致しませう、以前は佐竹次郎と申し北面同樣な武士、唯今にては武藏の國の住人、私の黨の旗頭熊谷の次郎直實と、人も知つたる侍でござりまする。

〽と聞くより御臺は。

藤の　ヤアそんなら其方の連合佐竹次郎、今では熊谷の次郎といやるか。

相模　ハイ左樣でござりまする。

藤の　スリヤアノ、熊谷次郎は其方の夫よな。

〽はつと吐胸の氣を鎭め。

ナント相模、以前大内にて不義顯はれ、佐竹次郎と諸共に禁獄させよとの院宣、自が申し宥め、御所の御門を夜の内に、落してやつた覺えてか。

相模　成程其時の御恩、ナンノ忘れませうぞいな。

藤の　ム、其恩を忘れずば、助太刀して討たしてたも。

相模　スリヤ又誰を。

藤の　熊谷の次郎直實ぢやわいの。

相模　エヽ、そりや又何の恨みで。

藤の　最前も話した通り、院の御所の御胤無官の太夫敦盛を、其方が夫熊谷が討つたわいなア。」

相模　ソリヤマア眞實でござりますか。

藤の　そんなら其方は何にも知らぬか。

相模　サア遙々と東より今來て今の物語。

〽聞いて吐胸の誠しからず。

追付夫が歸り次第、様子を尋ねる其間、暫くお控へ下さりませ。

〽詞を盡し理を盡し、宥める折に表の方。

呼　梶原様のお入り。（ト是にて兩人思入）

藤の　ナニ梶原が來りしとや。

ト藤の局立掛る。相模止めて、

相模　アヽモシ、邪智深き梶原平次、見咎められては御身の御難儀、暫く奥にて御休息。

藤の　成程、さりながら今にも熊谷歸りなば。

相模　篤と實否をたゞした上、

藤の　我子の敵と極まらば、

相模　夫ながら主人の仇。

藤の　必ず討つぞや。

相模　御念に及ばぬ。

藤の　そんなら相模。

相模　お局樣。

藤の　然らば吃度。

相模　ハテ、先づお入りあられませう。

〽御臺は胸の刃納めて心奥の間へ、ともなひてこそ入りにける。

トこなしあつて相模先に藤の方附いて障子屋體へはひる。

〽程なく入り來る梶原平次景高、さら横柄に座に着けば、堤の軍次立出でゝ。

ト時の太鼓になり、花道より梶原着込みのなり立烏帽子にて出て來り、二重の上の方に住ふ。此内奥より軍次出て來り、下の方へ控へる。

梶原　梶原平次景高所用あつて推參、直實殿は居召さるか。

軍次　今日は主人直實志あつて廟參、御用あらば某へ仰せ置かれ下さりませう。

梶原　ナニ熊谷殿は他行とな。ヤア〳〵家來共、石屋の親仁め引立て參れ。

ト花道揚幕の内にて捕手皆々、

捕手　ハヽア。

〽はつと答へて科もなき、白毫の彌陀六を、平次が前へ引据ゑれば。

ト時の太鼓になり、彌陀六白髮鬘好みのこしらへにて繩にかゝり、是を軍兵引立て出て直に舞臺へ來り、

下にをらう。

ト彌陀六を眞中へ引据ゑる、梶原こなしあつて、

梶原　ヤイなまくら親仁め、おのれ何者に賴まれて敦盛が石塔建てたぞ、平家は殘らず西海へぼつく

だし、誂ふべき相手なければ、察する所源氏方の二股武士が頼みしに違ひはあるまい、サア眞直に白狀、僞るに置いては背を斷割り鉛の熱湯、鎌倉殿の御威勢で言はさにや置かぬ。

〽嚇しかけても正直一遍。

彌陀　テモ扨も御無理な御詮議、先程も申した通り、石塔の誂へ人は敦盛の幽靈、五輪の事は扨置いて、一厘も手附は取らず、其儘石塔の喰逃げ、せめて人魂でも手附に取つたら、小提灯の代りに致しませうに、冥途へ書出しはやられず、ほんの是がそんしやう菩提、有りやうに申上げ、願以此功德施一切は此通りでござります。

〽とりしめのなき返答に。

軍次　何仰言つても糠に釘、梶原殿には先づ御休息遊ばされませう。

〽軍次が詞に平次は惡智惠。

梶原　大方石塔の誂へ手も大概合點、熊谷歸らば三つ金輪にて詮議せん。ソレ者共、其奴を引立てい。

皆々　ハヽア。

梶原　軍次案內。

皆々　立たう。

〽石屋の親仁を無理矢理に、引立て奥へ連れて行く。

ト時の太鼓になり、梶原を先に軍次奥へはひる。彌陀六は軍兵に引立てられ上の方へはひる。

〽日もはや西に傾きしに、夫の歸りの遲さよと、待つ間程なく。

呼ビ　旦那のお歸り。

〽熊谷次郎直實、花の盛りの敦盛を、討つて無常を悟りしか、流石に猛き武士も、物の哀れを今ぞ知る、思ひを胸に立歸る。

ト此内奥より相模出て來りこなしあつて、花道より熊谷衣裳上下大小好みのこしらへ、物思ひの體にて出て來り、ずつと内へはひる。相模を見てキツと思入。此内軍次出て來り、

〽妻の相模を尻目にかけて居直れば、軍次はやがて覆ひになり。

ト熊谷二重よき所へゐる。軍次相模は下の方へ控へ、

軍次　先達平次景高殿、何か詮議の筋あるとて、御影の石屋を引連れお出であり、奥の一間にお待ちなされてござります。

〽委細を述ぶれば。

熊谷　ム、詮議とは何事やらん。（ト思入あつて）イヤ其方は一献を催し、梶原殿を饗し申せ、早く早く。

軍次　畏つてござりまする。

ト軍次立ちにかゝるを相模行くなと袖を引きこなし。熊谷思入。

熊谷　ハテ扨、何を猶豫致す、次へ立て。

軍次　ハツ。

〽主の詞に是非なくも、相模と顔を見合して、心を殘し入りにけり。

ト軍次相模が留めるを振り切り思入あつて奥へはひる。

〽後見送りて熊谷は。

ト合方になり相模こなしあつて煙草盆を持ち、わざ〳〵熊谷の前へ置いて、熊谷相模を見て思入。

熊谷　コリヤ女房、其方は爰へ何しに參つた、國許出立の節、陣中へは便りも無用と堅く吩咐け置いたるに詞を背くといひ、女の身で陣中へ來る事、不屆至極の女めが。

〽不興の體に相模はもぢ〳〵。

相模　其お叱りを存じながら、どうかかうかと案じるは小次郎が初陣、一里行たら樣子が知れうか、

五里來たら便りがあらうかと、七里歩み、十里歩み、百里餘りの道をつい都まで、オ、辛氣。
〽上りて聞けば一の谷とやらで、今合戰の最中と、取り〳〵の噂ゆゑ。
子に惹かさるゝは親の因果、御了簡下さりませ、マアさうして小次郎は息災でをりますかえ。
〽と問へば熊谷詞を荒らげ。

熊谷　戰場へ赴く時は命はなきもの、健固を尋ねる未練な根性、若し討死したら何とする。

相模　そりやもう小次郎が初陣に、よき大將と引組んで討死でも致したら、大抵嬉しい事ではございませぬ。
〽夫の心に隨ひし、健氣な詞に顏色直し。

熊谷　オ、小次郎が手柄と言ふは、平山の武者所と爭ひ拔駈けの功名、軍門に入りての働き、手疵少少負ひたれども、末代までの家の譽。

相模　エヽ、シテ其手疵は急所ではござりませぬか。

熊谷　ソレまだ手疵を悔む顏付、若し急所ならば悲しいか。

相模　イヽエ何のいなア、かすり疵でも負ふ程の働きは出來したと、嬉しさの餘りお尋ね、其時あな

たも小次郎と一緒にお出なされましたか。

熊谷　オヽサ、危しと見るよりも、軍門に駈入り、小次郎を無理に引立て、小脇にひん抱き我陣屋へ連れ歸り、又某は其日の軍に搦手の大將、無官の大夫敦盛の首討つて比類なき譽。

相模　エヽ。

〽話に扨はと驚く相模、後に聞きゐる御臺所。

ト相模びつくり思入。此以前より藤の方後に窺ひゐて此時懷劍を拔き、

藤の　我子の敵熊谷覺悟。

〽熊谷覺悟と突掛くるを、しつかと押へて。

ト藤の方突いてかゝるを熊谷懷劍を扇にて打落し、熊谷は藤の方を引付けて、

熊谷　ヤア敵呼はり、何奴なるぞ。

〽引寄するを女房取付き。

相模　アヽモシ聊爾なされな、あなたは藤のお局樣。

〽聞くより直實びつくりし。

熊谷　ナニ藤の局とや。（ト思入あつて、熊谷藤の方を引起し顏を見てびつくり思入）ヤア實に藤の御方、

思ひがけなき御對面。

へ飛退き敬ひ奉れば。

ト熊谷思入あつて藤の方の手を持ち上座へ直し、熊谷は下手へ來て懐劍を袖にて拭ひ持ちかへて差出し、平伏する。

藤の　コリヤ熊谷、いかに軍の習ひぢやとて、年端も行かぬ若武者を、よう酷たらしう首討つたなア、サア約束ぢや、相模、助太刀して夫を討たしや。

相模　サア其儀は。

藤の　最前言ひしは僞りか。

相模　さうではなけれど。

藤の　そんなら討たしや。

相模　サア。

藤の　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

藤の　ナ、何と。

〽何と〳〵と刀押取りせり合ひ給へば。

相模　アーイ。

〽あいと返事も胸に迫り。

コレ直實殿、敦盛樣は院の御胤と知りながら、どう心得て討たしやんした、樣子があらう其の譯は。

〽いふもせき來るうろ〳〵涙。

熊谷　ヤア愚か〳〵、此度の戰、敵と目指すは平家の一門、敦盛は扨置き誰彼と鎬を削るに用捨があらうか。（ト思入あつて）イヤナニ藤の御方、戰場の儀は是非なしと御諦め下さるべし、其日の軍の概略と、敦盛卿を討つたる次第、物語り仕らん。

〽物語らんと座を構へ。

扨も去ぬる六日の夜、早や東雲と明くる頃、一二を爭ひ拔駈の平山熊谷討取れと、切つて出でたる平家の軍勢。

〽中に一際勝れし緋縅。

さしもの平山遁ひかね。
〽濱邊を指して迯出す。
ハテ健氣なる若武者や、逃げる敵に目な掛けそ。熊谷是に控へたり、返せ戻せオ、イ〳〵。
〽扇をもつて打招けば、駒の頭を立直し、浪の打物二打三打、いざや組まんと
馬上ながらむんづと組み、兩馬が間にどうと落つ。
藤の　ヤ、ナント、其若武者を組敷いてか。
熊谷　されば御顏よく〳〵見奉れば、鐵漿黑々と細眉に、年はいざよふ我子の年輩、定めて兩親在まさん、其歎きは如何ばかりと、子を持つたる身の思ひの餘り。
〽上帶取つて引起し、塵打拂ひ。
早や落ち給へと。
相模　勸めさしやんしたか、そんなら討ち奉るお心ではなかつたの。
熊谷　サア早や落ち給へと勸むれど、一旦敵に組敷かれ、何面目に存へん、早や首取れよ熊谷と。
藤の　ナニ首取れと言うたか、健氣な事を言やつたなう。

熊谷　サア其仰せにいとゞ猶、涙は胸にせきあへず、まツ此通りに我子の小次郎、敵に組まれて命や捨てん、浅ましきは武士の習ひと太刀も抜兼ねしに。

〽逃去つたる平山が、後の山より聲高く。

〽呼はる聲。

熊谷こそ敦盛を組敷きながら助けるは、二心に極まりしと。

エヽ是非もなや、仰せ置かるゝ事あらば、傳へまゐらせんと申上ぐれば。

〽御涙を浮め給ひ。

父は波濤へ赴き給ひ、心に掛るは母人の事、昨日に變る雲井の空、定めなき世の中を如何過ぎ行き給ふらん、未來の迷ひ是一つ熊谷頼むの御一言、是非に及ばず御首を討ち奉つてござりまする。

〽話す内より藤の方。

藤の　アヽ左程母をば思ふなら、經盛殿の詞につき、何故都へは身を隱さず。

〽一の谷へは向ひしぞ。

健氣に言うた其時は、母もとも〲悦んで、勸めて遣りしが可愛やなア。
〽覺悟の上も今更に、胸も迫りて悲しやと、口說き歎かせ給ふにぞ、御尤と
は思へども、相模は態と聲勵まし。

相模　イヤ申しお局樣、御一門殘らず八島の浦へ落ち給ふ中へ踏止まり、討死なされた敦盛樣、數萬
騎に勝れたる功名、但し逃延び身を隱し人の笑ひを受け給ふが、あなたのお氣では嬉しいか、
御未練な、御卑怯でござりませうが。
〽諫めに熊谷。

熊谷　オヽ出來した〲、コリヤ女房、御臺所此處にあつては御爲にならず、片時も早く何方へも御
供せよ、サア早く行け〲、我も敦盛卿の首、實檢に供へん。
〽立上る折柄に、無常を悟す遠寺の鐘。
ト熊谷立上る。此時本釣鐘を打ち、熊谷思入あつて、
アヽ誠や淺ましきは武士の身の上、盛りの花も無常の鐘に。
ト櫻の花散りに降る。是を見て、
散ればこそいとゞ櫻は目出たかりけり。

兩人　エ。

ト三人顔見合せ、熊谷氣をかへ、

熊谷　イヤナニ軍次はをらぬか。軍次々々。

ヘ呼はる聲と諸共に、一間へこそは入りにける。

ト熊谷思入あつて奥へはひる。

藤の　ヘ日も早西に暮合頃、陣屋々々の灯火に、いとゞ悲しさ藤の方。（ト時の鐘）

ア丶思ひ出せば不便やなア、臨終の際も肌身離さず持つたるは此青葉の笛、我と我が身の石塔を建て丶貰うた價にと、渡し置いたる此笛の、我が手に入りしも親子の緣。

ト藤の方懐より袱紗包みの誂への笛を出し思入。

ヘ魂魄此世にあるならば。

何故母には見えぬぞ。

ヘ聞えぬ我子や。

懐しの此笛や。

ヘ肌に着け身に添へて、盡せぬ思ひ遣瀨なや。

ト笛を持ちいろ〳〵愁ひの思入。

相模　コレ申し其笛がよいお形見、經だらにより笛の音を、お手向なさるが直に追善、敦盛樣の御聲をば、聞くと思うて遊ばしませ。

〽勸めに隨ひ藤の方、涙にしめす歌口も、親子の緣のともづなや、障子に映るかげらうの、姿は慥かに敦盛卿、藤の方一と目見るより。

ト藤の方後向きになり右の笛を吹く、寢鳥になる。上の方障子屋體の內より敦盛の姿障子に映る。兩人見て、

藤の　ヤ、障子に映るあの影は、慥かに我子、懷しや敦盛。

〽馳け寄り給ふを相模は押留め。

ト藤の方を相模止めて、

相模　香の煙りに姿を顯し、賢力は死して再び都へ還りしも一念のなす所、あるまい事にはあらねども、訝しき障子の影、殊に親子は一世と申せば、御對面遊ばさば、お姿は消え失せん。

藤の　イヤ四十九日が其間、魂魄宇宙に迷ふと聞く、切めては逢うて唯一言。

へ振放し〳〵障子はらりとあけ給へば、姿は見えず緋縅の、鎧ばかりぞ殘りける。

ト藤の方相模の留めるを振切り、上の屋體の障子をあける。內には鎧櫃の上に緋縅の鎧兜飾りある。兩人見てびつくり。

へはつとばかりに藤の方、相模もともに取付いて。

藤の　扨は鎧の影なりしか。

相模　戀しと思ふ心から、お姿と見えましたか。

藤の　相模。

相模　お局樣。

兩人　ハヽアー―。

へ共に焦れて正體も、なき口說くこそ哀れなれ、時刻移ると次郎直實、首桶携へ立出づれば、相模は夫の袂を控へ。

ト藤の方相模泣落し愁のこなし。此內奧より熊谷好みのなりにて首桶を抱えて出る。相模是を見てこなしあつて、

相模　コレ申し熊谷殿、是が親子の御一生のお別れ、切めてお首になりともお暇乞を。
〽藤の方も涙ながら。

藤の　ナウ熊谷、其方も子のある身ではないか、野山に猛き獸さへ、子を愛しまぬはなきものを、親の思ひを辨へて、情に一目見せて給も。
〽縋り歎かせ給へども。

熊谷　イヤ實検に供へぬ内は叶ひませぬぞ。
〽はねのけ突退け行く所に、後の方に聲あつて。

ト熊谷の袖を兩人にて縋るを、熊谷振切り行かんとする。此時奥にて、

義經　ヤア〳〵熊谷、敦盛の首持参に及ばず、義經是にて實検せん。
〽一間をさつと押開き、立出で給ふ御大將。

ト此内上の屋體の障子引抜き、内に義經誂への緋縅の鎧陣立好みのこしらへ、此上に狩衣を着て、太刀をはき、金烏帽子を冠り、中啓を持ちゐる、左右に陣立のこしらへにて武者二人附添ひ、水汲二人皮床几敷革を持ち、是も控へゐる。

熊谷　ハ、ハツ。

〽はつとばかりに次郎直實、思ひ寄らねば女房も、藤の局も諸共に、呆れながらに平伏す、義經席に着き給ひ。

ト是にて熊谷二重下手に住ふ。相模は藤の局を連れ平舞臺の上の方に控へゐる。此内水汲敷皮を敷き、床几を直す。是にて義經上の方に住ふ。

義經　ヤア直實、首實檢延引といひ、軍中にて暇を賴む汝が心底訝しく、密かに來つて最前より、始終の樣子は奧にて聞く、急ぎ敦盛の首實檢せん。

〽仰せを聞くより熊谷は、はつと答へて走り出で、若木の櫻に立懸けありし、制札引拔き畏れ氣なく、義經の御前にさし置き。

ト熊谷下手の櫻の前に建てし制札を引拔き、義經の前へ首桶と一緒に差出し思入あつて、

熊谷　先つ頃堀川の御所にて、六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短冊、此熊谷には敦盛が首取れよと辨慶執筆の此制札、則ち札の面の如く御掟に任せ、敦盛の首討取りたり、御實檢下さるべし。

〽蓋押明くれば。

ト熊谷首桶の蓋をあける内跳への首を相模見て、

相模　ヤア其首は。

〽駈け寄る女房を取つて引寄せ、我子と御臺が立寄るを、熊谷首を覆ひ。

ト相模首桶の傍へ寄るを熊谷矢庭に引付け押へる、藤の方見ようとするを扇にて首を覆ひ、

熊谷　イヤサ、實檢に供へし後はお目にかける此首、餘りじたばたお騷ぎあるな。

〽熊谷に諫められ、遖女のはしたなう、寄るも寄られず悲しさの、千々に碎くる物思ひ、次郎直實謹んで。

ト此内相模を突放し、藤の方へ呑込ませる思入。

敦盛卿は君の御胤、此花江南の所無は則ち南面の嫩、一枝を切らば一指を切るべしと、花によそへし制札の面、察し申して討つたる此首、御賢慮に叶ひしか、但し直實誤りしか、御批判如何に。

〽と言上す、義經欣然と實檢在し。

ト熊谷首を差出す。義經思入あつて中啓を開き、骨の間よりよく見てこなし。

義經　ホヽウ、花を惜しむ義經が心を察し、よくも討つたり直實、敦盛に紛れなき其首級、ソレ由縁の人もあるべし、見せて名殘りを惜しませよ。

〽仰せに直實。

熊谷　コリヤ女房、敦盛の首藤の方へお目にかけよ。

相模　アイ。

〽あいとばかりに女房は、あへなき首を手に取上げ、見るも涙に塞がりて、替る我子の死顔に、胸はせきあげ身も顫はれ、持つたる首の搖ぐのを、うなづくやうに思はれて。

門出の時にふり返り、につこと笑うた面差が、あると思へば可愛さ不便さ。

〽聲さへ咽に詰らせて。

申し藤の方樣、お歎きあつた敦盛樣の此首。

ト相模首を藤の方に見せる。藤の方見てびつくり。

藤の　ヤ、これは。

相模　サイナア、コレ申し、よう御覽遊ばしてお恨晴らし、よい首ぢやと褒めておやりなされて下さりませ、此首はナ、私がお館で忍び逢ひ、懷胎ながら東へ下り産落せしは是此敦盛樣、其節あなたも御懷胎誕生ありし其御子が、無官の大夫敦盛樣、兩方ながらお腹に持ち、國を隔てゝ十

六年。

〽音信不通の主從が、お役に立つたも因果かいなア。

切めて最期は潔う。

〽死になされたかと恨めしげに、問へど夫は瞬きも、せん方涙御前を恐れ、餘所に言ひなす詞さへ、泣く音血を吐く思ひなり、藤の方は御聲曇り。

藤の　ナウ相模、今の今迄我子ぞと思ひの外な熊谷の情、其方は嘸や悲しからう、かうした事とは露知らず、敵を取らうの斬らうのと、言うた詞が恥しい、我子の爲には命の親、エ、忝いぞや、是につけても訝しきは此濱の石塔、敦盛の幽靈が建てさせたとの噂といひ、秘藏せし青葉の笛、石屋の娘が貰ひしとて我手へ入り、最前其笛吹いた時、あの障子に映りし影は、慥かに我子と思ひしが、詞もかはさず消え失せしは。

義經　イヤ其笛の音を聞いて駈出せし敦盛の幽靈、人目ありと引止め障子越しの面影は、此義經が寸志。

〽聞いて御臺は我子の無事、悟りながらも箒木の、ありとは見えて隔てられ、

又も涙に暮れ給ふ。

〽折節風に誘はれて、耳を貫く法螺貝の音、太鼓喧しく聞ゆれば、義經は勇み立ち。

ト此時遠寄の鐘を打込み、義經立上りキッとなつて、

ヤア〳〵熊谷、着到知らせの法螺の音太鼓、出陣の用意々々。

熊谷　ハヽハッ。

〽仰せに熊谷畏り、急ぎ一間へ入りにけり。

ト熊谷思入あつて奥へはひる。

〽最前より樣子聞きゐる梶原平次、一間の內より踊り出で。

ト此內上の方より以前の梶原出て來り、義經は其に構はず烏帽子裝束を脫ぎ捨て陣立のなりになる。

梶原　ヤア〳〵斯くあらんと思ひし故、石屋めが詮議に事寄せ窺ふ所、義經熊谷心を合せ敦盛を助けし段々、鎌倉へ注進する、待つてをれ。

〽言ひ捨て驅出す後の方に弦音高く、骨を貫く白羽の矢、流石の梶原堪り得ず、うんとばかりに息絕えたり。

ト梶原花道へ走り行く、よき程の上の方にエイと聲する。是にて差金の矢梶原に立つ。梶原苦しみ倒るゝ。

相模 藤の　これは。

へすは何者と言ふ内に立出づる。

ト上の方柴垣を押分け、彌陀六弓矢を掛ち、向ふを見て思入。

へ石屋の親仁。

ト彌陀六氣をかへ柴垣の影より腰を曲げ出て來り、

彌陀　お前方の邪魔になる、石こつぱを捨てゝ上げました。（ト思入あつて）最前より幽靈の講釋、承はつて先づは安堵、御用もござりませねばもうお暇申しませう。

へもうお暇と立ち行くを。

ト彌陀六花道中程まで行くと義經見て、

義經　あれ留めい。

ト是にて附添ひの侍思入。

侍　親仁待て。

彌陀　ヘイ御用でござりますか。

　ト舞臺へ戻り下の方へ控へ、

義經　其方が名は。

彌陀　ヘイ。

侍　申上げい。

彌陀　御影の里に年久しう、白毫の彌陀六といふ、親仁めでござりまする。

義經　ウム。（ト彌陀六を篤と見て思入）

侍　用事はない、立て〳〵。

彌陀　有難う存じまする。

　ト彌陀六花道へ行く。義經こなしあつて、

義經　彌平兵衞宗淸待て。

　ト彌陀六是に構はず行きかける。義經陣扇にて侍へ思入。陣立侍兩人の軍兵へ捕へろとこなし。侍兩人は呑込みツカ〳〵と來り、彌陀六を搔退け中に挾みキッとなつて、

侍　君の上意。

兩人　下にをらう。

ト兩人にて彌陀六の手を取り引据ゑる。

彌陀　私の事でござりますか。

兩人　面を上げい。

ト兩人にて彌陀六額を上げる。義經篤と見てこなし。

義經　ホヽウ誠や諺にも、至つて憎いと悲しいと嬉しいの此三つは、人間一生忘れずといふ、其昔母常盤の懐に抱かれ、伏見の里にて雪に凍へしを、汝が情をもつて親子四人助かりし嬉しさは、星霜積る雪の夜雨の朝にも、母兄達のお物語り、其時は我三歳なれども、面影は目先に殘り、見覺えのある眉間の黒子、隱しても隱されまじ、重盛卒去の其後は、行衛知れずと聞きつるが、ハテ堅固でありしか、滿足々々、

へ星をさしたる一言に。

彌陀　ハテ恐ろしい眼力ぢやなア。

へ支ゆる軍兵左手右手に刎退け〱、ツカ〱と立寄り義經の顏、穴のあくほど打眺め。

ト彌陀六は軍兵を左右へ剣退け、ツカ〳〵と舞臺へ來り、階段へ足を踏掛け、義經をキツと見て、其儘どつかと坐し

老子は生れながらに敏く、荘子は三歳にしてよく人相を知ると聞きしが、かく彌平兵衞宗清と見られた上からは。エ、義經殿、其時此方を見遁さずば、今平家の立籠る、鐵拐が峯鵯越を攻落す大將はあるまい〳〵、又池殿といひ合せ頼朝を助けずば、平家は今に榮えんもの、エ、宗清が一生の不覺、是につけても小松殿の御臨終の折から平家の運命末危し、汝武門を遁れ身を隱し一門の跡弔へと、唐土育王山へ祠堂金と忘れ形見の姫君一人預りて、御影の里へ身退き平家の一門先立ち給ふ御方々の石碑、播州一國那智高野、近國他國に建て置きし、施主の知れざる石塔は皆彌平兵衞宗清が、涙の種と御存じ知らずや、今度敦盛の石塔誂へに見えし時も、御幼少にてお別れ申せし故、御顏は見覺えねども、慥かに平家の御公達ならんと思ふより快く受合ひしが、扨は命に替りし小次郎が菩提の爲にてありけるか、エ、如何に天命歸すればとて、我が助けし頼朝義經、此小忰が軍配にて平家の一門御公達、一時に亡ぶるとは、ハアヽ。」

〽是非もなき運命やな。

平家の爲には獅子身中の蟲とは我が事、嘸や御一門陪臣の魂魄、我れを恨みん淺ましやなア。

〽或は悔み或は怒り、涙は瀧を爭へり、元來敏き大將義經。

義經　ヤア〱熊谷、申付けた品是へ持て。（ト奥にて）

熊谷　ハア、。

〽はつと答へて次郎直實、出陣の扮裝と好む所の大あらめ、鍬形の兜を着し、

家來に持たせし鎧櫃、御目通りに直し置き。

ト此内熊谷甲冑好みのこしらへにて出て來り、上の方より侍二人鎧櫃を持ち出て、眞中に置いて、侍は直にはひる。義經こなしあつて、

御諚の品持參仕つてござりまする。

義經　コリヤ親仁、其方が大切に育てる娘へ此鎧櫃を屆けて呉れよ、コリヤ彌陀六。

彌陀　ナニ彌陀六とは。

義經　宗清たれば平家の餘類、源氏の大將が賴むべき謂れなし。

彌陀　面白い、彌陀六めが賴まれて進ぜませう、したが娘へは不相應な下され物、マア内は何でござりまする、改めて見ませう。

〽蓋押明くれば敦盛卿。

ト彌陀六何心なく鎧櫃の蓋をあける。中より敦盛の吹替出かける。藤の方を見てびつくり、彌陀六もびつくり。

藤の　ヤア其方は敦盛。

〽駈寄り給へば蓋ぴつしやり。

ト寄らうとする。彌陀六蓋を締め、

相模　イヤ此内には何にもない、ホ、何もない〳〵、是でちつとは蟲が落着いた、ム、ハ、、、、。（ト思入あつて）コレ直實殿、貴殿へのお禮はコレ〳〵此制札、一枝を切らば一指を切つて、エ、忝い。

〽言ふに相模は夫に向ひ。

相模　ア、コレ我子の死んだも忠義と聞けば、もう諦めてゐながらも源平と別れし仲、敦盛樣と小次郎と取替やうが。

熊谷　ハテ最前も話した通り、手負と僞り無理に小脇に引挾み連れ歸つたが敦盛卿、又平山を起ひ駈け出したを呼返して、首打つたが小次郎さ、知れた事を。

〽するどなる、話に相模は咽び入り。

相模　ニ、[illegible]な熊谷殿、此方一人の子かいなア、逢はう〳〵と樂しんで、百里二百里來たものを、とつくりと譯も言はず、首打つたが小次郎さ、知れた事と沒義道に、叱るばかりが手柄でも。

〽ござんすまいと聲をあげ、泣きくどくこそ道理なれ。心を汲んで御大將。

義經　ヤア熊谷、西國出陣の時移る、用意はいかに〳〵。

熊谷　ハツ、先達願ひ上げし暇の一件、かくの通りにござりまする。

〽兜を取れば切拂うたる有髪の僧、義經も感心し。

ト此内熊谷兜を脫ぎ坊主鬘になる。義經見て、

義經　ホヽウさもあらん、夫れ武士の功名譽を望むも、子孫に傳へん家の面目、其傳ふべき子を先立て一軍に立たん望みは。尤も〳〵、コリヤ熊谷、願ひに任せ暇を得さするぞよ、汝堅固に出家を遂げ、父義朝や母常盤の回向を賴むぞ。

熊谷　ハ、ハツ。

〽有難しと立上り、上帶を引解き、鎧を脫げば袈裟白無垢、相模は見るより。

ト熊谷上帶を解き鎧を脫ぐ、下は白無垢の着附、墨の袈裟をかけゐる。

相模　ヤアこれは。

ト相模びつくり立掛る。

熊谷　ヤア何驚く女房、大將の御情にて軍半ばに願ひの通り、御暇をば給はりし我が本懷、熊谷が向ふは西方彌陀の國、忰小次郎が拔駈したる九品蓮臺、一つ蓮の緣を結び今より我名も蓮生と改めん、一念彌陀佛即滅無量罪、南無阿彌陀佛々々々々々々ぢやなア。

〽笑止なり。

十六年は一と昔、ア、夢であつたなア。

〽ほろりとこぼす淚の露、柊に置く初雪の、日影に解ける風情なり。

相模　我子の罪障消滅の、加勢は共に。

〽切つたる黑髮、詞はなくて御大將、藤の局も諸共に、御淚にぞ暮れ給ふ。

ト相模懷劍にて髮を切りて出す。皆々愁ひの思入。

〽長居は無益と彌陀六は、鎧櫃にれんじやくを、かけた思案の締括り。

ト鎧櫃へれんじやくをかけ、彌陀六是を脊負ひ思入あつて、

彌陀　コレ〳〵義經殿、若し又敦盛生きかへり、平家の殘黨かりあつめ、恩を仇にて返さばいかに。

義經　フムハヽヽ、それこそは義經や兄賴朝が助かりて、仇を報ひし其如く、天運次第に恨を受けん。

熊谷　實に其時は此熊谷、浮世を捨てゝ不隨者と、源平兩家に由緣はなし。

ヘ互ひに爭ふ修羅道の。

苦患を助ける。

ヘ回向の役。

彌陀　此彌陀六は折を得て、又宗清と心の還俗。

熊谷　我は心も墨染に、黒谷の法然を師と賴み教へを受けん、君には益々御安泰。

ヘお暇申すと夫婦連、石屋は藤のお局を、伴ひ出づる陣屋の軒。

ト熊谷二重より下り、相模と共に下の方、彌陀六は藤の方を伴ひ上の方、義經二重眞中に立ち、皆々よろしく思入あつて。

相模藤の　御緣があらば。

ヘと女同士。

熊谷彌陀　命があらば。

ヘと男同士。

義經　堅固で暮せ。

〽御上意に、有難涙名殘りの涙、又思ひ出す小次郎が、首を手づから御大將。

ト義經小次郎が切首を持ち思入。

彌陀　此須磨寺に取納め、末世末代敦盛と其名は朽ちぬ黄金ざね。

藤の　武藏坊が制札も、

相模　花を惜しめど花よりも、

熊谷　惜しき子を捨て、

義經　武士を捨て、アツ住所さへ定めなき、

皆々　有爲轉變の、

世の中ぢやなア。

〽互ひに見合はす顔と顔、さらば〳〵とおさらばの、聲も涙にかき曇り、別れてこそは出でゝ行く。

ト彌陀六と藤の方は下の方、熊谷相模は入れかはり、皆々よろしく引ぱりの見得段切にて、

幕

熊谷陣屋通し（終り）

傾城春陽鳥（けいせいはるのとり）

傾城春廼鷄（馬切り――一幕）

大和橋の場

役名　旅人、國侍、御家人、中間、田五作悴與四郎、小田三七信孝、宅間小平太、役人、町役人、庄屋、仲居。

本舞臺一面松の並木。後ろ淺黃幕。すべて住吉街道の體。爰に仕出し旅なり紺看板中間鎗かつぎ旅人の仕出し立掛り、住吉にて幕あく。

旅○　何と皆の衆、暮と違うて餘程暖かになつたではないか。」

旅×　さうよ、暑さ寒さも彼岸までと、モウこつちの物だ。

旅△　何であらうと此鹽梅では今年も十分でござる。

旅□　十分と云へば、俺ア今汁粉餅をうんと喰たら腹が張つてならぬ。」

旅○　扨て〳〵土民などはふびんな物だ、身共抔は武士の家來、喰物なぞはふんだん故、咄しを聞い

てもおくびが出るやうな。

旅× モシ〳〵一體喰と申しますから、喰ふ力がよろしうございます。弘法様も空海と申され、又くうや上人と申すのもござります。

旅△ それはそうだが、馬を見るやうに喰なくつてもよいではないか。

旅□ ヲヽその馬で思ひ出した、今爰へ來る道で金箱を附けた馬が、下に居ろ〳〵と云つて來たが、金でも馬でも果報な事だ。

旅○ アリヤ此の度眞柴久吉公が、信長公の回向のため、高野山へ納める祠堂金の三千兩。

旅× ムヽそんなら祠堂金に三千兩、大名は大きな物だ、三千兩寺へやるとはゑらいな。

旅△ それ見ろ、武士の大きいはその位の物だ。

旅□ そんならお寺へ三千兩上げますのかな。

旅△ ゑらい勝負だ。

旅○ 寺が三千兩有るには、中々大きい所へよいと出るだ、大變な仕事だ。

旅× 中々二朱や一貫では、手出しは出來ぬな。

旅△ 馬鹿を云へ寺が違ふわ。

旅□　さうして寺は何處だ。

旅○　寺は本能寺にて討死なされた信長公の弔ひのため。イヤ信長公と云へば、あの三七信孝公が此の頃では、田五作といふ者の家に居るといふ事だが、毎晩々々新町に通ひ、又此の頃では乳守へ通ふと聞しが、大名の子でもあんな碌でなしが出來るとはどう云ふ譯か。

旅×　大方軍をして人を殺した罰であらう。

旅△　それに違へねえ、そんな事があるから寺へ金をやるのだ。

旅○　わいら達も下として上の風聞謹しめ〳〵。

旅□　左樣でござります、大きに恐れ入りました、何と皆の衆、そろ〳〵出かけませうか。

旅○　身共も同道致さう。

皆々　左樣なら御供致しませう。

旅×　サア行きませう。

ト矢張り大坂放れてにて皆々上手へはひる。知らせにつき此の道具引いて取る。

本舞臺正面に莫大なる橋を掛け眞中上リ口、向ふ一面埓の町續きの遠見。上手用水桶。お茶屋、床几二脚並べ、柳の釣枝。同立樹。開帳札。すべて泉攝境大和橋の體。浪の音にて道具納る。ト直ぐに本

釣鐘頭に打込み唄になり、小田三七信孝五十日鬘紋付の着流し大小浮世柄にて出て來り、眞中の橋より御家人生酔のこなしにて出て花道にて行逢ひ、信孝御家人の脇差に目を附ける故震へる。直ぐに引抜き見る事。中竹べら故前へほふる。御家人脇差を取て震へ／＼逃げて花道へはひる。

信孝　馬鹿者めが。

ト又唄になり下手より國侍紅色の置手拭ひ羽織着流しばつち大小にて、詩を吟じながら出て來る。後より中間附いて出て來り花道にて行合ひ、以前の如く大小を改める。なまくら故國侍の前へ投げつける。信孝は入替りゆら／＼と舞臺へ來る。

國侍　ハテ怪しからぬ狼藉者。（ト大小を鞘に納め）ヱヽ命冥加な。（ト信孝を見る。睨みつける故國侍震へながら）俺樣じやなア。

ト花道へ逃げてはひる。續いて中間もはひる。此の内信孝唄一杯に舞臺へ來る。床几に掛け煙草を呑む。祇園ばやしに成り花道より仲居大勢後より太鼓持二人附添ひ出て花道に留り。

仲一　なんと皆さん、今日一日は私等が身體、ゆつくり遊ばうではござんせぬか。

仲二　それがようござんす、日頃からの遊び溜めた長閑な空の景色を詠め。

仲三　つくしたんぽゝひいな草。

仲四　それからは後は汐干狩。

仲一　住吉浦の濱邊まで。

太一　その住吉の岸の姫松、姫達の汐干の蛤、鹽むきを私が賞翫したい〳〵がかさね與右衛門、とはどふで有難茄子の千市扇の的とは、どうで在原の業平男とは私の事さね。

太二　ヲツト業平はこつちに、在原の業平のお化はわつちが事でげえす。

仲五　アノマア自惚れて居る事わいなア。

仲六　判らない洒落でござんすなア。

仲二　そんな事云はうより、早う往かうではござんせぬか。

皆々　それがようござんす。

ト此の時花道より田五作忰與四郎、海鼠えり合羽着流し尻からげ脚半手拭に土産物をくゝし附け、呼び乍ら出て來り。

與四　ヲヽイ〳〵、ヤレ〳〵皆さんは早い足でござんすな、それはさうとお前方は殿様に尋ね當りましたか。

仲一　サア殿さんは私等が、神前で拜んで居る内、何處へやらお出でなさんしたわいな。

仲二　又何處ぞへ隱れて私等を、尋ねさそうと思うてぢやわいなア、大方悪洒落でござんせう。

仲四　それに違ひはござんせぬ、そこらを一ぺん尋ねようではござんせぬか。

皆々　夫がようござんすわいなア。

與四　そんならお前方も尋ねて下されぬか。

皆々　さうしませうわいなア。（ト祇園ばやしにて皆々舞臺へ來り信孝を見て）

皆々　ヲヽ殿さんは爰に居なさんすわいなア。（ト皆々上下へ並ぶ）

與四　ヲヽほんに旦那様。（ト下手へひかへこなし）モシ旦那様、私は住吉へ參つてついでに貴方をお迎へ申して戻るやう、田五作殿が申されましたでござりまする、ほんに能い所でお目に掛りました、申し貴方様、御歸りなされて下さりませ。

ト信孝物云はず煙草を呑み居る。與四郎こなしあつて、

申しお前様はまアどうしたお身持でござりまする、粟座にござれば毎晩々々新町へ入り込み、やう〳〵此の間は廓通ひも止んだと思へば、又此の間から堺の乳守で居續けに、お大名ぢやというて今は御浪人の御身、親田五作は御家來筋でござります故、遊所の諸拂ひにモウ〳〵種々の事して金の。（ト云はうとしてこなしあつて）ちつとは思ひ遣つて御放埒をお止りなされて下さりませ。

ト云へども信孝取り合はぬ思入。

成程折角廓の衆を連れて、面白う住吉詣りをなされました處へ、御迎ひに來た事ぢやに依つて、乳守の衆の手前といゝお腹の立つは御尤もでござりまするが、又親父殿も尤でござりまする、内にござれば多くの刀屋を呼び寄せて、めつたむせうに脇差をお求めなさるゝ、外へござれば廓通ひ、がんぎにやすりと金の入る事ばかり、内はもう朝から晩までせがみに（ト云はうとして思入）　大體やかましい事ぢやござりませぬ、それほど取込んで居てもお前樣を大切に、コリヤ與四郎乳守へ往てお迎ひ申して來い、大切な御身を輕々しう御一人遣りましては、置かれぬと云はれます故、私がお迎ひに參りました、どうぞ親父樣の心休めるためでござります、私と一緒にお歸りなされて下さりませ、コレ〱廓の衆こなさん達も共々に、お歸りなさるゝ樣にお進め申して下されいの。

仲二　ほんにまア、さつきからあの樣に事を分けて云はしやんす程に、まア今日はお歸りなさるやう。

仲五　又今度ゆつくりと居續けさしやんせいなア、廓は私等がよいやうに云うて置きませう。

仲一　住吉樣へ參つて爰まで送つて來た、私等も共々。

仲四　お館の首尾の能いやうに、まア今日はお歸りなされて、アノお方と連立て。

皆々　今日はお歸りなさんせえなア。

與四　てもさても、こなさん達はようまア云うて下さんしたなう、なんぼ迎ひに來ても、いや〳〵いつまでも歸しませぬといふが、色里のくせで有りさうな所を、まア今日はお歸りなされませとは又廓は格別ぢや、その代り今度はわしがお供して、五日も廿日も居續けなさるゝ樣にするわ、何ときついか、サア旦那、お歸りなされて下さりませ。（トこなしあつて云ふ）

ト時の太鼓になり、花道より役人半纏ぶつさき大小にて、町役人案內して後より捕手二人附き出て直ぐに舞臺へ上手へ通り。

町役　片寄れ〳〵、控へさつしやい〳〵。

ト是にて女形皆々片寄る。役人皆々にこなしあつて。

役人　只今是へ眞柴筑前守久吉公、高野山へ祠堂金三千兩寄附なさるゝ間、往來の妨げ致すか、金箱へ少しでも凶事有ると、老若男女のわかちなく、きつと曲事申附けるぞ、必ず麁相有つては相濟まぬぞ。

町役　へイ〳〵畏りました、コレ皆よう聞かしやれたか。

役人　コリヤ町人、町へ案內いたせ。

ト時の太鼓にて町役人案内して役人捕手上手へはひる。やはりかすめし祇園ばやし。

與四　申し、モウお歸りなされませぬか。

信孝　其方は先へ歸り、田五作に追つけ金を持つて歸ると云へ。

與四　はいさうは申しませうが、其金は何處にござります。

信孝　ハテ何處に有らうと歸れと申すに。（ト叱りつける）

與四　そんなら先へ歸りませう。

女皆　私等も去なうわいなア。

信孝　さうしやれ〳〵。

仲一　今度お出での時、約束いけし人形を下さんせや。

仲二　私の約束のかんざしも。

信孝　合點ぢや〳〵。

仲三　私のも忘れて下さんすなえ。

信孝　承知致した。

與四　モシどうぞ早うお歸りなされませ。

信孝　ハテいぬると申すに。

仲一　必ず人形を忘れて下さんすな。

信孝　よいてや〳〵。

與四　早うお歸りなされませ。

信孝　まだ歸らぬか。

皆々　モシ私等が揃ひもえ。

信孝　忘れはせぬ〳〵。

與四　戻り道をお忘れなされますなえ。

信孝　エ、歸れと云ふに。（トきつと與四郎に云ふ）

與四　ハイ〳〵。

皆々　そんなら私等も、皆さん待つて居るぞえ。

信孝　行きやれ〳〵。

ト右の鳴物にて、與四郎花道へ振返り〳〵云ふ。女形皆々もこなしあつて云うてわや〳〵捨ゼリフにて花道へはひる。信孝は後見送りてこなしあつて。

小平　久吉が高野へ送る祠堂金。幸ひ〳〵。（ト此の時花道揚幕向ふにて）

明けりやアお寺の鐘が鳴るナヱー。

ト馬子唄になり花道より馬子實は宅間小平太、布團を着たる馬子にて、千兩箱を三ッ附けたる御手傳馬の口を取り出て來り。

エ、あるきやアがれ畜生め、ドウ〳〵。

ト捨ゼリフあつて舞臺へ來る。信孝は馬を上へやり過す。是にて小平太は馬を橋につなぎ、沓を履せんとこなし。信孝小平太を下手へかき退け手綱を取り、

信孝　此の金予が入用だ、置いて行け。（ト小平太びつくりして）

小平　何んだ此の金が入用だ、途方もねえ事をぬかすな。（ト信孝を見て）ヤア此方は三七信孝殿。

信孝　そちや宅間小平太。

小平　此の金が入用なぞとはいけ太い。（トどつかりと下に居て）コレ此の金はな、貴樣の親信長殿の弔ひ料、眞柴久吉公是を寄附するといふ絵符が附いてあるぞや、定めし此方・久吉が金なら取つても大事ないと高をくゝつて取る氣であらうが、そりや早や昔の信孝殿なら、そんな太平樂をいつて大事有るまいが、此方の氣儘で國遠して今では匹夫、此の小平太と同じ身の上だわ、

此の金に指でもさすとわりや盜人だ、又嘘ぢやない、聞けば此方は新町へ入り込んで馬鹿を盡す相だが、此の頃は堺の乳守で居續けして遊んでござるげな、して見りやア其の手尻が逢はぬから、コリヤ住吉街道で物取するか、イヤサ盜賊を働くのか、コレ此の祠堂金は貴樣の親の信長殿の弔ひ料、その金を阿房使ひに盜み取るのか、マ、それも尤かい、馬鹿盡くしたうても金はなし、他人の物に手を掛けると其の首が落ちる、そこで親の物は子の物と思うて此の金をたくるのか、コレ、こんたア小田家に望みはねえと廣言吐いて、我と我身を追放して小田の緣は切れてあるぞや、匹夫下郎も同然な、扶持放されのうぬらが樣な奴等が、此の街道に徘徊するは所の難儀、重ねてへちまはぬやうにメめてくれう。

ト是まで信孝空嘘吹いて煙草呑で居たりしが、此の時拔打に小平太が首打落す。小平太アツと其の儘倒れる。信孝刀を鞘に納める。此の時上手より以前の役人出て。

役人　ヤア金子を奪ひ取る盜賊、あまつさへ馬士方まで手に掛る狼籍者、繩打つて屋敷へ引く。

信孝　予が此の金子持歸りしと、久吉に達すればそちが不調法には成らぬ、此の金早く予が方へ持て、

役人　ヤア憎い盜賊、うぬ其の儘に置かうか、繩打つて此の身の申譯、サアうせう。

ト夜神樂になり、上下より雲介大勢出て信孝に打つて掛る、立廻り好みの通りあつて早切よろしく、

トゞどん〳〵になり上下橋の正面向ふより仕出し大勢出てわや〳〵と云ふ。花道より庄屋出る。信孝はおどしの白刃引提げ双方へ寄せ附けぬこなし。

庄屋　コレ〳〵町の衆、人を切つた〳〵と云はれたはどゝどいつが切つた、そいつはどゝ何處に居る。

町人　コレぢや〳〵、靜かに〳〵。（ト庄屋皆々信孝を見てびつくり）

庄屋　何んぢや〳〵、當所を騷がす狼籍に當町を支配して居る此の年寄、騷ぐによもや云分はあるまい、皆の衆騷ぐまい〳〵、騷いでよけりやア俺が騷ぐわいの。

町人　コレ落着いて居られぬ、御代官樣へ申上げねばならぬわいの。

庄屋　それを拔かるやうな御年寄ぢやないわいの、俺が來しなに組の衆を走らした、そら追つけお代官樣がござるであらう、全體何處からうせた奴ぢやぞいなう。

町人　俺も知らぬわえ。

庄屋　よいわ〳〵、俺が一理屈云つて見ようわえ。

町人　さゝさうさつしやれ〳〵。

ト庄屋きつとなつて來る。信孝を見て氣味惡相に後じさりすると、皆々後より押して前へやる。庄屋信孝と顏見合せてびつくりして兩手を突き。

庄屋　へゝゝゝ、ハゝゝゝ、是は御苦勞樣でござりまする、誠に澤山人をお切り遊ばして、へゝゝゝ御苦勞樣でござりまする。

信孝　こりや〳〵、町人共に麁相はない、靜まれ〳〵。

庄屋　へゝゝゝ、私は當所の年寄を勤める者でござりまする、何か存じませぬが、お前樣がゑらう人を切らつしやりました故、町内の騷ぎ往來が群集仕りまして、甚だ難儀に存じまする、どうぞ御無心ながら、そのお刀をお納め下さりませうならば、有難う存じまする。

信孝　ム、尤、水を掛けい。（ト件の刀を差出す）

庄屋　へイー。（ト下手の手桶を持來り信孝の持ちし刀へ水を掛ける）

信孝　ぬぐへ。

庄屋　ヱ。

信孝　ふけ〳〵。

庄屋　へゝゝ。（トふるへ〳〵庄屋傍へ行き、我手拭を出し刀をふく。是にて刀を鞘へ納る。庄屋ホッと息をつき）ヤレ〳〵嬉しや〳〵。何と年寄はゑらい者ぢやらうがな。

ト双方の仕出しに庄屋自慢する思入。

信孝　彼等は予に無禮なしたる故手打に致した、町人共は仔細は無い、恐るゝ事は無いわえ、コリヤ〳〵そな者、此の金子予が入用につき持歸ると申し聞かせよ。

ト件の馬の手綱へ手をかけ、行かんとするを庄屋留めて、

庄屋　アヽ申し〳〵、此のやうに死人が出來ましては。御檢使を乞受申さねばなりませぬ、どうぞ濟むまでお待ちなされて下さりませ、御代官樣が御出でなされたら、直ぐに貴方が斷り云うて、お歸りなされて下さりませ、左樣なければ町内はなんぼ難儀やら知れませぬ、どうぞ御聞譯下されてツイ一寸の間御待ちなされて下さりませ。（トいろ〳〵に願ふ。信孝こなし）

信孝　ムヽウ、下々の難儀とあらば暫時待つて取らせうわえ。

庄屋　それは有難うござりまする。

トそんならわしは御代官樣へ迎ひに行くと云ふ思入にて、庄屋は花道へはひる。ト大ばち寄太鼓になり花道より捕手五人東の假花道より捕手五人、いづれも襷鉢卷、對の四天にて十手を持ちツカ〳〵出て本舞臺へ來り信孝の上下を取卷き。

捕皆　上意。

トきつと信孝を見て、さてはと思入あつて双方へ行きかける。

信孝　コリヤ〳〵。（ト皆々平伏する）
皆々　ハツ。
信孝　そち達は久吉が家來よな。
皆々　ハツ御意の通りにござりまする。
信孝　三七信孝に向ひ匹夫の者共、慮外働く故手打に致した、町人共に仔細は無い、そち達取靜めてよからう。
皆々　畏つてござりまする。（ト捕手上下へこなしあつて）町人共しづまれ、控へろ〳〵。
　　ト是にて皆々捨ゼリフにてはひる。
信孝　見苦しい死骸取捨い。
皆々　ハツ。（ト上下へ片附る双方並よく平伏して）仰せの通り取計らひましてござりまする。
信孝　ム、、其方達帶刀を拔き放せ。
皆々　ゑゝ。
信孝　何も仔細は無い、早く〳〵。
皆々　ハツ。（ト刀を拔き放し見せる。双方信孝見渡しこなし）

信孝　よい納めい／＼。

皆々　ハツ。（ト皆々鞘へ納め小を抜かんとする）

信孝　イヤ／＼差添には及ばぬ／＼。

皆々　はつ。

ト信孝件の馬の手綱を取り、花道へ行く。皆々並よく並ぶ辭儀して。

信孝　予も此の砌り諸用の金子入用故、幸ひ久吉寄附の金子、三七信孝が持歸ると、此の事久吉に傳へよ。

ト皆々どうせうと云ふことなし、互ひに顔見合せる。

よいか。

皆々　はツ。

捕一　如何やうとも思召通り。

皆々　なされませ。

信孝　ム、、悦ぶ。

ト花道にて思入。木の頭。皆々は平伏する、よろしく柏子幕。ト幕外信孝思入あつて手綱取り驛路の

音頭になり。三味線唄入大拍子にて扇にて、砂煙を拂ひ〳〵ゆう〳〵と花道へはひる。知らせにつき

シヤギリ。

馬切り（終り）

傾城反魂香（けいせいはんごんかう）

傾城反魂香（吃又――一幕）

浮世又平吃の場

役名 浮世又平後に土佐の又平光起、狩野雅樂之助、土佐修理之助光澄、百姓大勢、土佐の將監、又平女房お德、將監娘お梅、下女おひやく。

本舞臺一面の淺黄幕。上下薮疊、幕の内より百姓大勢簑笠にて竹槍を持ち、わや／＼云うて居る。どんちやん竹ぼらにて幕あく。

百一　どうぢや／＼、知れましたかの。

百二　イヤモウ、三井寺の後から藤の尾まで見屆けたが、夫からとんと見失ひました、エ、殘り多い事ぢやわい。

百三　そんなら此の山科の藪際に逃げ込んだに極りましたわい。

百四　全體虎と云ふ物は話に聞きましたばかり、見た事もない毛物、珍らしい事もある物でござる。

百五　それ〳〵末代まで喉の種、一生の徳でござる。

百六　イヤ途方も無い事を云う人ぢや、おいらは田も畑も荒されて一生の迷惑でござる。

百二　サア〳〵是から庖籔へ手分をして追ひ出すやうに仕ませう。

百三　成らう事なら生捕にして、田地を荒した入れあわせを仕ませう。

百一　欲の深い事を云はずと、見附け次第に叩き殺せ〳〵。

皆々　合點じや〳〵。

ト皆々口々やかましく捨ゼリフ云ひ乍ら、矢張りどん〳〵にて花道へはひる。知らせにつき淺黄幕を切て落す。

本舞臺三間の間高足の二重竹簀の本緣。向ふ石摺襖、上手障子屋體、此の前に誂へ御影石の手水鉢。いつもの所枝折戶。下手一面高藪。ずつと上手太夫出語り臺仮し置舞臺を並べ、こゝに下女おひやくしゆろ箒を持ち掃除をして居る。矢張り勢子太鼓竹ぼらにて道具納る。トおひやく邊りを掃除して向ふへこなしあつて。

おひ　ほんにまアおびたゞしいあの人聲、殊に鐘太鼓の聞ゆるは何事が起つた事ぢややら、一走り往て尋ねて來うか、イヤ〳〵姫御前のあられもない、何のこちらが構ふ事ぢやなし、ドリヤ掃除して仕舞はうか。

へ爰に土佐の末弟浮世又平重起といふ繪書きあり、生れ附いて口吃り言舌明らかならざる上、家貧しく身代は薄き紙衣の火打箱、朝夕の煙りさへ一度を二度に追分や、大津の端に店借して、妻は繪の具夫は繪畫く、筆の軸さへ細元手、登り下りの旅人の、童ずかしの土產物、三錢五錢の商ひに命の紙もつなぎしが、日陰の師匠を重んじて、半道ばかりを夫婦連れ、夜な〳〵見舞ふぞ殊勝なる。

ト床の切にて臼挽唄になり、又平木綿やつし石持好みのなりにて藁包みを背負ひ、お德世話女房のなりにて誂への一升樽を提げて出て、捨ゼリフあつて花道に留り、兩人思入あつて又平ツカ〳〵と枝折戸へはひらうとする。

お德　コレ〳〵こちの人、如何に御浪人なればとて御師匠樣の御住居、案内もなしにはひると云ふ事か、有る物かいなう。

又平　エヽ石部金吉金あたま。

お德　ハヽヽヽヽ、もとらぬ口でその上にも、口合が云ひ度いかいなア。

又平　云ひたいおまへとかうなつた。

お徳　エヽまだかいなア。ハイお頼み申ます〳〵。
〽おとなへば下女は立出で。（ト臼挽の合方竹ぼら）
おひ　アイ〳〵、案内はどなたでござんすえ。（ト枝折戸をあける）
お徳　ハイ私でござりまする。（ト兩人顔を見合せて）
おひ　ヲヽしんきやのお徳さん、たしなましやんせ、餘所外の人の樣に何の案内が入りませう、他人がましい、サア〳〵おはひりなされませ。
お徳　はい〳〵。
〽云ふに又平女房も、會釋してぞ内に入る。（ト此の内又平お徳内へはひる）
おひ　モシ〳〵お梅さん、お徳さんや、又平さんが見えましたぞえ。
〽下女が知らせに、お梅は土間を走り出で。（ト奥より娘お梅振袖娘にて出て來り）
お梅　ヲヽ又平殿夫婦の衆、ようござんした、今日はいかい風があつて寒いに依つて、見えまいと思うたにようこそ〳〵。
お徳　此の四五日は叶ひませぬ用事がござりまして、其の上急の繪馬を請合はれまして、是ではお師匠樣へお見舞に行かれぬと、仕事をしい〳〵それぱかりを云うて居られました故、俄に夫婦連

れ立ちまして、お見舞に參りましてござりまする。

お梅　さうとは知らず此の間は、四五日も見えぬは夫婦の者が、どちらぞ氣合でも惡いかと、お案じなされど知つての通り、御浪人なされてより召し使ふ者もなし、無沙汰は許して下されや。

お德　是は〳〵有難いお詞でござりまする。（ト又平も同じく辭儀して）

お梅　私は又、今の案内は大方姉さんの方から、駕の者でもおこさんしたかと思うたわいなア。

お德　ほんに一度はお尋ね申さうと存じて居りましたが、お前樣のお姉樣、同じ廓の勤めでも遣手とやらは、町家の召使ひ同然ぢやと承りましたが、ツイにお目に掛りませぬが、京大阪の花魁にも增つた御器量で有り乍ら、なぜ遣手衆の奉公はなされまするのでござります。

お梅　サア是には云ふに云はれぬ譯があつて。（ト又平お德の袖を引き）

又平　嗚、それで判つた。

お德　判つたとわえ。

又平　死出の山の入口ぢや。

お德　何入口とわえ。

又平　一生き物を通すまい爲ぢや。

お徳　何をわつけもない事。

三人　ハヽヽヽ。

おひ　それはさうとお二人のお出でを、お知らせ申さうかいなア。

お梅　ほんにさうぢや、私が知らせませう。（ト屋體の傍へ行き）父さん、又平殿夫婦の衆が見えましたぞえ。

將監　何又平が來りしか、往て逢はうわえ。

へ物騷がしき折柄に、將監一間を立出で。

ト將監好みのなり、修理之介袴着流しにて出て來り、始終かすめし時太鼓。

ハテ合點の行かぬ稻狩の勢子太鼓、此の山科の廣野に猪猿のあらうやうもなし。

修理　但しは喧嘩人殺しでも出來ましたか、何にもせよ心得ぬ事でござりまする。

お徳　成程、御不審は御尤もでござりまする、只今も夫婦連で是へ參りまする時、大勢竹槍鋤鍬などを持つて打殺せ〳〵と云うて參ります故、尋ねましたれば虎が出たと口々に申しました。

將監　馬鹿な事を、そりや叡山か鞍馬の邊りより、猪がな出た物であらう、日本へ虎が出やう筈がない。

お徳　成程左樣でござりまする。

修理　イヤ何又平殿御夫婦の衆、最前より御挨拶も致さぬが、先生にもお二人の事御案じなさるゝ故、私も一寸お見舞に參りたう存じましたれど、筆の放されぬ事仰せつけられました故、御無沙汰の御許されて下さりませ。

又平　ナンノ〳〵。

お徳　是は〳〵、ぬしを兄弟子と思召しての只今のお詞、有難うござりまする、此の間は冷えまするにお師匠樣にも、おすこやかにてお目出度う存じまする。

將監　イヤ〳〵冷える加減か兎角持病の疝氣が、イヤモウ、何やかや新らしい病ひが年々ふへるで、いから算用が逢うて來ましたわえ。

お徳　扨てお師匠樣へ申上げまする、春にも成りますれば日も滅切りと暖かに成りまして、世間は花見の遊山のとざわ〳〵と致しまする、こなたは山陰御浪人のおつれ〳〵を慰めの爲め、嫁菜のしたしに豆腐の煮染さゝへでも持ちまして、から關守か、高觀音へ御供致し、春めく人でもお目に掛け度いとなア、常住夫婦が申して居りまする事でござりまするが、何を申しましても家內は夫婦差向ひ、同者時分で店は忙し、洗濯物は支へて居ります、仕事にははか行かず、日がな一日立づくめ、お閉なされませ、晦の夜から馬子衆が鉢卷致しまして小室節をうたふやら、夜

かばつと明けますと店一杯に人だかり、コレ〳〵見さつしやれ、あれが評判の吃りぢやぞや、どれがいの、あれかいの、ム、あれが吃りか可哀相に、あれが吃りか〳〵と。（ト此の内又平腹の立つ思入）それぢやとて違ひない事云ふのぢやわいなア、ホヽヽヽ、今ではこちの人の吃りが愛嬌に成りまして、扨て見世が繁昌致しまする、爰へも一枚彼處へともてはやされる私が嬉しさ、此の頃は着物一枚出來ました、こんな事なら持つて來てお目に掛けたらよかつたなう。

又平　ム、。

お徳　ヱ、モウ何をするやらぬらくらと急げば廻る、コリヤ瀬田鰻でござりまする、今日膳所から貰ひました、わりぬき水の大津酒、夢々しうはござりますけれど、此の春からお仕合せも直り、鰻の穴を出るやうに御世にお出遊ばしたら、御門前には大勢の御悦びの人々が、出替り立替り其時の奏者は誰であらうな。（ト又平を見る又平も思入ある）差詰めお師匠様の一番弟子、私共の又平殿、しかつめらしう出られませう。其悦びに附きまして、土佐の苗字をお許し下され、派手な場所の席書にも上下立派に。（トかまへ）シテ其元様の御家名は、ホヽホ某こそは將監様の一番弟子土佐の又平、などと申さるゝでござりませう、さうなりますれば夫婦の悦びあなた様にもお悦び、御壽命は萬々歳、御目出度い〳〵。ホヽヽヽ、私とした事が、自分の申す事

ばかり、この人の吃りと私のしゃべりとつきまぜましたら、能い頃な女夫が一對出來ませうもの、ホヽヽヽ、アヽしんど、憚り乍らお茶一ツ下さりませ。

〽ヲヽおはもじと笑ひける。（ト又平お德を見て）

又平　ヨウしやべる嚊ぢや。

將監　ヲヽ、能うこそ〳〵云うてくれた、又ねりぬき酒とは第一身が好物、その上鰻まで、瀬田鰻は風味も格別ぢやて、コリヤお梅、此の酒を奥へ持つて行つて用意して置きやれ。

おひ　アイ〳〵。（ト重さうと樽を提げて奥へはひる）

お德　コレ〳〵又平殿、その鰻をお目に掛けなさんせ。

又平　是をか、ヲヽ。（トおひやくを招き藁包みを持出す）

おひ　又平さん何ぞ用かえ。

又平　大きなはつちり。（ト仕方して見せる）

おひ　何ぢや、大きなはつちりとわえ。

又平　大きなはつちり。

おひ　大きなはつちり、何を云ふのぢやいなア。

又平　そんだら大きなほゞ。

おひ　何とえ大きなほゞ、ヲホヽヽヽ。

又平　エヽ大きなほゞ。

おひ　アレ大きなほゝとは、ハヽヽヽヽ。（ト又平じれて）

又平　エヽうぬ。（ト振りこぶしを振上げ樣叩かうとする。お德中へはひり留めて）

お德　アノ是はしたり、何を其樣に腹立て、何がほしいと云はしやんすのぢやえ。

又平　大きなほゞ。（ト仕方して見せる。お德呑込んで）

お德　ヲヽ盆と鉢がほしいと云はしやんすのかえ。

又平　そうぢやい。

お德　それ見なさんせいなア、モシ大きな鉢か、盆を貸して上げて下さんせ。

おひ　さうかいなア、何ぢやむしやうに大きなはつちりぢやの、大きなほゝぢやのとヲホヽヽヽ、よし〱。（ト盆を持て來り）又平さん是かえ。（トぬり盆を出す。又平引たくり）

又平　阿呆め。

ト藁包みより鰻を出し盆の上へ乗せる。鰻そこらを逃げ廻る。又平取放してあちこちと追廻し、トヾ

椽の下へ鰻はひる。又平あわてゝ這ひ寄りて椽の下をのぞき見て當惑のこなし、お德おひやくそれ〳〵と同じやうに追ひ廻す。

お德　嚊逃げた〳〵。

又平　是はしたり、何をさしやんすぞいなア、折角持つて來た物をとう〳〵逃してからに。

お德　嚊、だんない〳〵取れる〳〵。

又平　そりやどうしていなア。

お德　來年の煤はきに。

二人　何をいふのぢやないぞいなア。

百一　ホヽヽ、ハヽヽヽ。

ト此の時竹ぼら拵子太鼓はげしく以前の百姓出て來り。

皆々　コリヤ爰の藪の中へはひつたぞや、油斷さつしやるな。

修理　ヲヽ、合點ぢや〳〵探せ〳〵。（トわや〳〵云うて下の藪の中へはひらうとする。修理之介間附けて）コリヤ〳〵、そち達は何者なれば大勢徒黨しかゝる狼藉、此の家を誰とか思ふ、只今こそ御浪人なれ、以前江州高島家の畫所、土佐の將監樣の御閑居、慮外致すと許さぬぞ。

百二　ヤア高島でも御影でも、石の惡い事を云へば構ふ事はない。

百三　高で田畑を荒す虎を探すのぢや、邪魔すると侍とは云はさぬ。

百四　さうぢや〳〵、農業の妨げすれば誰でも彼でも。

皆々　叩き殺せ〳〵。

修理　何を。（トきつとなるを又平留めて）

又平　まゝ待て〳〵〳〵、ヲゝ俺が居る〳〵。（ト修理之介を留め百姓に向ひ）コヽヽ此の家にトヽ虎はないわい。

百一　ハヽヽ、何ぢや〳〵、をかしい奴が出だぞ、コレトヽ虎はあるわい。

又平　ナヽ無いわい。

皆々　アヽ有るわい。（ト皆々吃りの眞似をして云ふ、又平むつとして）

又平　うぬ。（ト又平立掛る。將監留めて聲掛け）

將監　コリヤ〳〵又平待て〳〵、仔細を聞いて如何やうともなる事ぢや、しづまれ〳〵。

お德　コレ〳〵お師匠樣がお留めなさる、又平殿待つしやれ〳〵。

トちつと留る。是にて又平つぶやき乍ら控へる。

將監　何お身達は百姓さうなが、何故あつて身が屋敷にて立騒ぐのぢや、サヽ樣子聞き度し。仔細は如何に。

百二　成程是はお斷り申しませぬがこつちの誤り。

百三　只今爰の藪の中へ虎を追込みましてござります故。

百四　その虎を殺して田畑を荒さぬやうにしようと、存じましての事でござりまする。

將監　何と申す、此の藪の内へ虎を追込んだ、ハヽヽヽヽ、ハテ譯もない、虎と申すものは異國の猛獸、何日本の地へ出ようか、如何に土民なればとて馬鹿な事を。

百五　イヱ〱、ほんとうの虎に違ひござりませぬ。

ト此の時風の音になり藪の中より虎あらわれる。皆々みて。

皆々　あれ〱、あそこへ出ました〱。（口々にやかましくいふ）

將監　何ぢや虎が出た、ドレ〱。

ト二重よりおり庭下駄を履き眼鏡をかけ。

〽目鏡取出し將監は、庭におり立ちためつすがめつ打詠め。

ハテ不思議や顏輝の筆に竹に虎の筆勢、少しも紛ふ方なし、然かも新筆、當時斯程に書かんず

もの狩野の筆勢が惟四郎次郎元信より外になし、頭の筆勢眼の鋭さ書きも書いたり見事々々。
へ感じ入つてぞ。
イヤ何百姓衆、是は誠の虎に非ず、名筆の畫に魂入りて拔け出したに相違なし、その證據に
はあの虎がかけて來た跡に足跡が有るまい、尋ねて見やれ。

百六　へイ／＼、それは不思議な事でござります、皆の衆氣を附けて尋ねさつしやれ／＼。

皆々　合點ぢや／＼。(ト花道をあちこち探し見て)

百三　どふぢや／＼、有るかの／＼。

皆々　ヤア無いぞ／＼。(ト又いろ／＼見て) へイどう見ても足跡はござりませぬ。(ト將監思入あつて)

將監　あるまい／＼、まだ／＼御身達に不思議な事を見せう、ア、虎をば眼前に書消して見せ申さ
う、コリや／＼硯持て／＼。

お梅　畏りました。(トお梅誠の硯と筆立を持出て能き所へ置く事)

修理　ハツ先生へお願ひ申上げまする、某拙なき筆なれども何卒筆先にてあの虎を書消したうござ
りまする、日頃より師の御恩報ずるは今此の時、あはれ此の儀御聞屆け下さりまするやう、偏
に願ひ奉る。(ト又平開いて修理之介を突退け)

又平　ヲヽお師匠様へ申上げます、兄弟子のハヽ私に仰せつけられ下されませう。

修理　何卒私に。（ト又平を引退け）

又平　イヤ私に。（ト又突のける）

修理　イヤ私に仰せ付られ下さりませうなれば、有難う存じ、

二人　まする。（兩人辭義をする）

將監　如何にも聞屆けた、修理之介、其方が願ひに任せ、試みる爲め申付ける、此の筆の先を心得たか。

修理　ハツ。（ト硯箱筆を持ち修理之介花道へ行き、下の籔へ向ひ）

〽修理之介は筆を染め、四五間あいを置きながら、虎のずんどに差向ひ、筆引く方に隨つて頭前脛後脚、胴より尾先に至るまで次第々々に失せけるは、神變術とも云つべし。

ト能き程に薄ドロ〳〵にて虎自然を消え失せる。百姓是を見て、

皆々　ヲヽアレ〳〵〳〵。（ト皆々指さしてびつくりする。修理之介舞臺へ來り）

修理　ハツ書消しましてござりまする。

將監　ヲヽ出來た〳〵、かゝる不思儀を見る上は今日より土佐の苗字を許し遣はし、今より土佐の光

澄と名乗るべし。

修理　何スリや私に土佐の苗字を下されんとな、ハヽア有難や、冥加に餘るお詞、拙き筆に心を込め書消しましたも師の御恩、須彌蒼海より上もなき、厚き御恩は此の身の餘慶、忘れは置かぬ、チエヽ有難う存じ奉りまする。

ヘ天を拜し地を拜し、悦び勇むぞ道理なり、百姓共は口々に。

百一　扨ても〳〵書きも書いたり、消しも消したり、目利も目利前代未聞の名人ではござらぬか。

百二　それ〳〵、あのやうな名人におやま畫をナ、四五人ばかり書いて貰うたらゑらい金儲けるでござらう。

百三　イヤ又俺はあの人に借錢や名目の帳面を、節季々々〳〵に書消して貰ひたうござるわいの。

皆々　何を云はしやる、ハヽヽヽヽ。

百四　時に是ではもう虎が田地を荒らす事もござるまい。

百五　是といふのも將監樣の御蔭でござる、なう皆の衆。

皆々　それ〳〵、エヽ有難うござりまする。

百六　サア此の上は早う村へいんで悦び酒としませう。サア〳〵ござれ〳〵。

ト皆々わや〳〵云ひ乍ら門口へ出で、花道へ行く。又平を見送り。

百九　何と皆の衆や、同じやうに並んで居るが、あれは兄弟子ぢやといなう。

百八　弟弟子に苗字を名乗られて、アノ理屈らしい顔を見さつしやれ。

百七　あれでも腹が立つかして、口をむづ〳〵して居れど。

百六　それさへ聞けぬ片輪者。

百五　ほんに因果なあれは吃り。

百四　それに連添ふ女房ども。

百三　又こちとらは百姓共。

百二　皆の者ども。

百一　ども致せ。

皆々　ハヽヽヽヽ。

〽我家々々へ立帰る。（ト百姓皆々花道へはひる）

〽妻のお徳は心得て。（トお徳又平の心根を察して思入）

お徳　只今見受けますれば、お驚き入つたる修理之介様の御手練、感心致しましてござりまする、あ

の様なお弟子をお持ちなされましたは、お師匠様の御仕合せ、お嬉しうござりませう、それに就きましても、御存じ知られました通り夫又平、身は貧なり片輪なり、弟弟子に土佐を名乘られ、兄弟子がうか〳〵と。

〽いつまで浮世又平と。

藤の花かたげたおやま繪や、鯰押へた瓢箪のぶら〳〵と生甲斐ない事と、身をもんで無念がり、尤とも道理とも、傍に見て居る女房の身の上では、どのやうにあらうと思召して下さります、土佐の苗字お許しのお願ひは、お梅樣まで度々申上げましたれど、お直きにお願ひ申上げまするは今日が始めて、今生の思ひ出、死しての後の石塔にも、俗名土佐の又平と御許しのお詞は、お師匠樣のお情でござりまする、御慈悲でござりまするわいなア。

〽御慈悲〳〵々々々と手を合はせ、涙にむせび入りければ、又平も手を合せ、將監を三拜し疊に喰ひつき泣き居たる、將監も不便とは思へども、態と詞を荒らげて。

將監　叉しても〳〵叶はぬ願ひ、コリヤ能く聞け、此の將監はな近江の國高島の御家來筋、則ち禁中

の繪所小栗宗丹と筆の爭ひ、其上高島の重寶雲龍の硯を宗丹たつて所望す、イヤ彼奴には持たせじ我にたべと、互ひに意地を立つのり、ツイに御前の御聞きに達し、某は勅勘受けて此の身の上、浪人住居致しても、今では小栗に隨へば富貴の身と榮ゆれども、一人の娘おみつを君傾城の勤めをさせ、子を賣つて喰ふ程の貧苦をしのぐは何故ぞ、土佐の苗字を惜しむにあらずや、修理之介は只今大功あり、そちには何の功がある、琴棊書畫晴の業、貴人高位の御座近く參るは繪書になるに、物を得云はぬ身を以て及ばぬ願ひ、似合つたやうに大津繪書いて、此の世を渡れ、サヽ茶でも呑んで立歸れ。

　ヘ愛想もなく叱られて。

お德　サヽそこがお願ひでござりまする、仰しやる通りは何一つ、取り得のない又平ではござりますれど、そこは又お師匠樣の御情、お慈悲を持ちまして。

將監　イヽヤならぬ。

お德　そこをどうぞ。

將監　アヽくどい事を。

お德　はアヽ。

〽はつとお徳は力を落し。（ト お徳泣落しこなし有つて又平が手を取り）

コレ今お師匠樣の仰しやるに、一つとして御無理は無い、此の望みの叶はぬのは、コレ又平殿。

〽こなさんを吃りに產み附けた。

親御さんを恨みさつしやれいなう。

〽悔み泣き〳〵又平も。

又平　三年先の煩ひに何で人蔘呑ませた、その時人蔘呑まずに死んだなら、今の思ひはあるまいに。

〽我咽笛をかきむしる、口に手を入れ舌をつめつて泣きけるは、ことわりせめて不便なり、折柄表に人音して。

ト 花道揚幕の中向ふはげしくバタ〳〵ぢやん〳〵になり、袴股立の雅樂之介、拔刀大わらはのなりにて走りて出來り。

雅樂　將監殿はおはするか、光信殿〳〵。

〽呼はり〳〵拔刀、素戶押開きずつと入る、將監目ばやく。

ト 將監雅樂之介にこなし有つて又平 お徳片脇へ寄る。

將監　お身は狩野の武士、雅樂之介ならずや、此の體は。

雅樂　お家の大事でござりまする。

將監　何一大事とは氣遣し、何にもせよ人目だつ、是へ〳〵。

〽伴ひ入る。

コリヤ〳〵又平、後より追人來らんも計られず、汝には似合うた役目、張番いたせ。

又平　はツ。（トきつとなつて六尺棒を持ち、ツカ〳〵と花道中程へ行き鉢卷をして兩肌ぬぎ花道へとなし）

將監　シテ〳〵樣子は何んと〳〵。

雅樂　されば〳〵、館の騷動云ふに及ばず、存知の如く姫君の御供仕り、やう〳〵切拔け此處彼處に忍びしが、主人四郎次郎行方知れず。

〽是第一の氣遣ひと、心迷ふその内に、敵は手いたく追かける、シヤ任せて置けと眞向に太刀さしかざし、向ふ敵の腕骨脚骨嫌ひなく、四角八面に切散せしが敵は大勢此方は一人。

なんなく姫君、チエヽ。」

〽奪ひ取られ、下の醍醐は雲谷が館なり、伴左衛門を始めとして、門を固めて寄せつけず、刀の刃金の續かんまでと、かけ入らんと致せしが、アイヤ〳〵主人の身の上心元なし、御後慕ひ尋ぬる所存。姫君の御事は將監殿、よろしく頼み奉る。

〽詞も足も血氣の若者、後を慕うて走り行く。

トよろしくあつて雅樂之介逸散に花道へ行き、又平を飛越し花道へはひる。

〽將監心も心ならず。

ト當惑のこなし。此の内お德花道へ行き又平を連れて本舞臺へ來る。又平首の痛むこなし。

將監　南無三しなしたり、我爲めの一大事、義賢公のお頼みは爰の事、聞捨ならぬ御家の騷動、イデ走せ向つて。（ト向ふを見て）イヤ〳〵勅勘の身の上なれば、自身には向ひ難し、とあつて打捨て置かば不忠の上塗り、行くも行かれず、ハテ如何せん。

修理　急いては事の仕損じあらん、殊にその伴左衛門は姫君に心を掛け、無體に口說くと聞くからはお命に氣遣ひなし。

將監　されば〳〵、此の上は辨舌勝れし者を選み、將軍家の上意と僞り取替へする手段は無いか。

（ト修理之介を見て）若輩者は覺束なし、御家の急變打捨て置れず、ハテ何とした物であらうなア。

〽額に小皺頬杖突き、思案小首を傾ける、又平何んぞ云ひたげに、妻の袖引き脊中突き。

又平　俺、參りませうと願うてくれ。

お徳　何を云はしやんす、今お師匠樣の云はしやるのを聞かしやんしたか、此の御用には辨舌さわやかなる者で無ければ成らぬと仰しやるに、どうしてお前が、よしに仕なさんせ。

又平　イヽヤ、俺思案があるわい。

お徳　イヽエイなア、お前ぢや行かぬわいなア。

又平　エヽ面倒な、退いて居れ。

〽辛氣をわかし女房を引退けツィと出で、師匠の前に諸手を突き、ツバを呑込んで。

トお徳をかき退け兩手を突き。

エヘヽ、お師匠樣へ申上げます、此の使ひには私を仰せ付られませふ。

〽願へば將監見やりもせず。

將監　ヤア思案半へ邪魔入るゝか、そこ退いて居れ。

〽叱られてもちつとも臆せず。

又平　イヤ〳〵お氣遣ひござりませぬ、私が分別出しては叶はぬ時は遠州祐定。（ト脇ざしを出して見せ）あつちへやるか、こつちへ取るか、首がけのばくち、命の相場は一分五厘、浮世又平親もない子も無い身から一つ、命は掃溜のちりあくた、名は須彌山と釣り替へ、命にかけて取返しまする、どうぞ此の御願ひを。（ト此の間將監かまはず思案してあちらを向く）五ツの年から奉公なしたも。（ト云うても將監物云はず上手の方へ行く。修理之介を突退け）此の使を仕遂せ、お師匠様の御苗字をつぎたい望みばつかり、どうぞ御願ひ申しまする。

トやはり將監物云はず又下手へ顔をそむける。又平お德と顔見合せ思入。又しを〳〵と立上り、下手へ來て手をつかへ。

モシどうぞ、此の使ひを私に。（トいろ〳〵云うても將監物いはず、又平思入あつて）吃りでなくばかうはあるまいに。

〽さりとはつれないお師匠ぢやと、聲を上げて泣き居たる、將監猶も聞入なく。

將監　片輪のくせに述懐涙不吉千萬、相手に成つて果てしなし、コリや修理之介、御邊向つて思案
を廻らし、姫君御朱印奪ひ返し來られよ、早く〳〵。

修理　はつ。

へ畏つたと刀引提げ立出る、又平むんずと抱き留め。（ト修理之介立掛るを又平す
がり留め）

又平　コレ待つてくれ〳〵、お師匠こそ胴欲なれ、此方は俺が弟弟子、兄弟のよしみ、俺をやつて
くれ〳〵。

修理　成程御尤もなる儀でござるが、師の命は背かれず、そこお放しなされ。

又平　イヽや放さぬ、首がちぎれてもやりはせぬ〳〵。

修理　ハテ聞分けのない、達てとあれば。（トおどしの刀を見せ）是非に及ばぬ拙者が參る妨げなさば、
兄弟子とて用捨はござらぬ。（ト鯉口の音をさしおどす。又平きつとなつて）

又平　ム、、サア切つた〳〵。

修理　ヤ。

又平　サア切れ、俺を切つてから行け〳〵。

へ行くをやらじと控へる袂、おどしの刀をびくともせず、覺悟極めし又平を、將監はつたと怒りの顏色。

將監　エ、又しても〳〵、邪魔立てひろぐ憎い奴、大事に向ひ妨げなさば、將監が手は見せぬぞ。

トきつとなる。又平思入あつて兩肌をぬぎ首飾をつきつけて。

又平　サ切らつしやりませ、切らつしやつて下されい。

將監　此奴師匠を困らせをるわい、コリヤ修理之介、此奴に構はず早や行け。」

修理　はつ。

へ飛ぶが如くに走り行く。

ト修理之介刀引提げ行くを又平しがみ附き留るを振拂ひ、逸散に走り花道へはひる。又平は追かけ花道へ行くをお德走り寄り引留める花道にて兩人摑み合ふ立廻り、トヾお德しつかりと又平を抱き留め、舞臺へやら〳〵戻り下手に引据ゑ。

お德　コレ又平殿聞分けのない、お師匠の仰しやるも構はず、去りとてはおとましい氣違ひ殿ではあるわいなう。

トきつと留る。又平お德をツク〳〵見てエイと突飛ばし。

又平　エヽ〳〵、おのれにまであなづられるか、チエヽ。
　ヘ片輪は何の報ひぞと、どうと座を組み大地を打つて、聲をも惜しまず歎け
　る、心ぞ思ひやられたり。（ト將監こなしあつて）

將監　コリヤ能う聞け、繪の道の功に依て土佐の苗字をついでこそ、手柄とも云ふべけれ、武道の功
に畫工の苗字讓るべき仔細なし、修理之介が安否も心元なし、一間に於て又一思案。
　ヘと立上るを（ト立上るをお德裾にすがりて）

お德　モシどうあつてもアノ人の、願ひは叶ひませぬか。

將監　ヤア成らぬ事を。

お德　そこをどうぞ。

將監　エヽくどいわい。（トきつと拂ひ退ける）
　ヘぎやう〳〵しくぞ奥へ入る。（ト突放して將監奥へはひる）
ト後又平うつむいて居る。お德しを〳〵と二重より下り立つて又平の傍へ來り、思入あつて又平を引
起して手を取つて。

お德　コレ又平殿、覺期さつしやれ、今生の望みは切れたぞや、モシ此の庭の手水鉢を石塔と定め、此

方の畫像を書き止め此の場で自害し、その後の送り號を待つばかり。（ト又平の手を取りホロリと思入）手も二本指も十本ありながら、何故片輪には成らしやんしたぞいなア。

へ硯引寄せ墨すれば、又平頷き筆を染め石面に差向ひ、コレ生涯の名殘りの繪、姿は苔にくつるとも名は石魂に止れと、我姿を我筆の、念力やてつしけん、厚さ尺餘の御影石、裏に通つて筆の勢、墨も消えず兩方より、一度に書いたる如くなり。

ト此の文句の内又平思入あつて、筆入より墨を出し硯箱を持ち、手水鉢の後へ廻り筆を取り書きかける、お德始終さしうつむきこなし。文句一杯に書終り下の方へ來る。お德捨ゼリフあつて水盃をする心にて手水鉢へ掛ける。又平覺期のこなし。お德柄杓を取り上げ水を汲まうとしてフト手水鉢の面を見て合點の行かぬこなし。又後ろの方を見てこなし。びつくり柄杓を取落し又平が手を取りちよいと見いといふ心にて手を引張る。又平何をするといふ思入にて一緒に手水鉢の傍へ來る。お德手水鉢の裏の方を指ざす。爰から書いたといふこなし。お德又面の方を指ざす。又平何氣なく覗き見てびつくりあわて裏の方を見たり表を見たり、お德左右より覗き互に大びつくり。

又平　嗅、ぬけた。

へ呆れ果てたるばかりなり、將監一間を走り出で石面を打見やり。

ト將監かけ出で手水鉢の裏表を見てびつくりとなしあつて。

將監　ヘ、ア奇妙々々、異國の王儀之趙子昂が石に入り木に入るも、和漢に於いては例少なし、ホ、ヲ。

ヘでかしたり〳〵。

かゝる不思議を見る上は、今日より土佐の苗字を許るし、土佐の又平光起と名乘るべし。

又平　ヱ、。

お德　何と仰しやります、左樣なら今日より又平殿に、土佐の苗字をお許しなされて下さりますか。

將監　ヲ、許さいで何とせう、コリヤ印可の卷を與ふるぞ。（ト懷中より袱紗包を取出す）

又平　スリヤ是まで。

お德　こちの人。

兩人　チエ、、有難うござります。

ヘはつとばかりに夫婦が悦び、又平は忝しとも口吃り、禮より外は涙にくれ、踊り上り飛上り、嬉し涙ぞ道理なる。

將監　ヲヽ、其の悦びは左こそ〳〵、此の勢ひに乘じ下の階闕へ立越え、姫君御朱印取返して立歸れ。

お德　その役目を又平殿に。

將監　大切の役目、そのまゝにては。（ト奥へ向ひ）誰そ居るか、身が衣服大小持て。

おひ　畏りました。

〽はいと答へてうや〳〵しく、下女が持出る廣臺に、上下衣服取揃へ、夫婦の前へさし置けば。

ト奥よりおひやく衣服大小を廣臺へ乘せ持ち出て又平の前へ置く。

將監　夫を差替へて參れ。

又平　ヘヱ、。（トお德おひやく手傳ひ手早く着替へる。おひやく奥へはひる）「ア行かうか。」

お德　サア〳〵早う行かしやんせ。（ト又立掛りに行かうとする）

將監　アイヤ待て〳〵、心剛にて志は厚けれど敵に向ひ問答せんに、その吃りでは心元ない。

お德　イヤ夫はお氣遣ひ下さりまするな、常々臺頭の舞を好みまして、私諸共シテワキにて舞はれまするが、節のある事には少しも吃られませぬ、私がついて居りまして、拍子を取て物言申させましたならば、仕負せて歸りませう。

將監　それこそ幸ひ爰に鼓もあれば、首尾よう仕負せて立歸る門出の壽、目出度う一さし舞うて立ちやれ。（ト後ろにある鼓を取りお德に渡し舞扇を又平に渡す）

お德　ハイ〱畏りました、お師匠樣の御意ぢや、目出度う立ちなさんせ。

又平　ヲヽ。

ト將監に目禮して直中へ立上り扇をかまへる。お德下手にて鼓を持ち、かけ聲をして又平思入、吃る仕組み。

〽ヲツと答へて立上り、古き舞を身の上に、なぞらへてこそ舞ひたりける。

去る程に鎌倉殿の、義經の討手に向ふべしと、武勇達者を選まれける、夫れは土佐坊是は又。

〽土佐の又平光起が、師匠の御恩を報ぜんと、身にも應ぜぬ重荷をば、大津の町や追分の、繪に塗る胡粉は安けれど、名は千金の畫師の家、今墨色を上げにけり、かくて女房は勇みをつけ。

お德　又もや御意の替らぬ内。

〽早や御立と進めける。

又平　ヲヽホヽヽヽ、いしくも申されたり。

ヘ身こそ墨繪の山水男子、紙表具の體なれども、朽ちてくちせぬ金砂子、極彩色に劣らじと、勇み進みし勢は、ゆゝしたものし我ながら。

天晴墨繪の健氣さよ。

お徳　唐繪の樊噲張良を。

又平　たてについたと思召せ、早やお暇申しまする。

ト辭義をする。お徳大小渡し是をさして花道附際へ行き。

ヘ師匠の御恩頭に頂き、とう／＼力足踏む又平は、今ぞ出世の金おとがい、天晴諸人の畫手本と、勇み勇んで急ぎ行く。

又平　嗚供せい。

將監　行け。

兩人　ハツ。

ト双方よろしく仕組み段切にて

幕

吃又（終り）

軍法富士見西行
ぐんぱふふじみさいぎやう

軍法富士見西行（富士見西行——二幕）

序幕　墨染寺の場

役名　佐藤則清入道西行、松浪靱負、齋藤五郎、鼓の十郎、幾瀬屋勘吉、靱負一子乙石等。

本舞臺三間の間通し筋塀。上手へ寄せて寺の大門。此前に大念佛供養と記したる建札を立て、下手に葭簀張りの居酒屋酒肴附めしと書いたる障子を立てかけ、舞臺眞中に埒結ひめぐらしたる櫻の大樹。日覆よりも同じく釣枝、すべて伏見墨染寺門前の體、こゝに松浪靱負盲目、黒羽二重切つぎの衣裳、深編笠の浪人のこしらへにて薦を敷き前に書附を置き、此傍に一子乙石けし坊主切つぎ衣裳にて、扇を持ち謠を謳ひ居る見得。仕出し參詣の爺婆、町人のこしらへにて五六人立ちかゝり居る。鳴物双盤にて幕あく。

爺　何と皆の衆、この櫻は墨染櫻というて當所の名木、ことも見事に咲いたではござらぬか。

婆　されば、毎年々々このお寺の大念佛の頃には、この櫻の花ざかりゆえお寺にも參詣が多いといふもの。

町人　イヤもう、今年はいつもより十倍ましての賑かさ、何とマアこの廣いお寺の庭に、見世物輕業あまたの商人。

○　所せきまで人の群集、これといふのも花の德あり、お念佛の德といふもの。

皆々　いかにもさやうぢや。

△　イヤモシ、念佛の德と申せばもう御回向の始まる時分、何とお寺へ參らうではござらぬか。

○　ほんにさうしましようわいの。

皆々　サア〳〵ござれ〳〵。

ト双盤にて皆々門の内へはひる。床淨瑠璃になる。

〽仇口々も法の庭、南無阿彌陀佛と打ちつれて、群集おしもわけられぬ、花のさとりに埋れ木の我は咲かねど花のかげ、目かいも見えぬ浪人の、身の上書いた一紙をひろげ、五つばかりな子をつれて、一錢二錢散錢の、餘りを當に謠ひ聲。

ト この浄瑠璃のうち靱負子役へよろしくこなしあつて、

靱負　地を走る獸、空をかくる翅まで親子の哀れ知らざらん。

乙石　旦那さま方、御合力をお願ひ申し上げまする。

ト こなし。此うち參詣の人々上下より行き違ふこと、莚の上へ錢を投る。

靱負　況んや佛性同體の。ありがたうぞんじまする。

〽はふるは涙か編笠の、内しめやかに見えにける、往來の内に何やともしれぬ男の立留り。

ト仕出しの往來のうちに幾瀨屋勘吉、羽織尻はし折り雪駄町人のなりにて出て來り、靱負の笠の内をのぞきあたりへこなしあつて、

〽笠のうちをばさし覗き〳〵、後先見まはしそつと立寄り。

勘吉　イヤもし謠を諷ふお人、わしは勘吉ぢやが見ればあたりに人もなし、一寸ものをいうても大事あるまいかの。

ト思入あつて双盤になり靱負こなしあつて、

靱負　ハヽア、勘吉さんとはどなたでござりまするな。

勘吉　ハテ此間わしが所へ見えて、浪人者でござるが、ちと御相談申したいことがあるというて、ソレ親子の衆にお茶漬で振舞うた、江口の幾瀬屋ぢやわいの。

籾負　ヱ、それは。（トこなし）

勘吉　ハテ大事ない〳〵、さうした形ぢやによつて相談、今日こなたの所へ行てお内儀も餘所ながら見て來ました、ついでに回向參りして行かうと思ひ爰へ來たが、ハテ能い所で逢ひましたなう。

　ト いふにこなたも近くさしより。

籾負　流石は御商賣がらほどあつてお目が早い、かうした身の上で居りまするゆゑ何かの相談、シテおたのみ申しましたる儀は、何となされて下さりまするな。

勘吉　サアその相談の事について。（トあたりへこなし）何をいふにも爰は往來、幸ひあの煮賣店は私が方から出て居る店なれば、あそこの座敷を借りましよう。コレ息子をつれてサアござれ。

　ト行かんとする。

籾負　アイヤ〳〵、悴にもこの事は聞かしたうござりませねばこれはこのまゝ。コレ乙石よ、とゝはな、あなたとつれ立つてあの煮賣屋の内に居るほどに、この敷莚や書附を取られぬやうに番し

て居いよ、かならずどつちへも行くなよ。

〽といひふくむれば。

乙石　イヤどつちへも行きやしませぬ、わしはこゝにゐて錢もらうておくほどに、早う行てござれや。

〽いふにほろりと眼にたまる、涙かくせば。

ト靱負ちよつと愁ひのこなし、勘吉思入あつて、

勘吉　イヤモウ年よりは利發な生れ、こなたもこの子はかゝりつ子、たのもしい子ぢや〳〵、直に來るほどにこゝに待つて居いよ。

乙石　アイ〳〵。

勘吉　サア御浪人、行きましよう。

〽といひつゝ涙の手を引いて、茶屋がうちへぞ誘ひ行く。

ト勘吉靱負を伴ひ下手の酒屋の内へはひる、乙石は後を見送るこなし。矢張りかすめし双盤。

〽同じ世に、住むかひもなき日かげ草、齋藤五郎重秋は、六代御前を妹に預け、父實盛の敵をば討たんとねらふ深編笠、人だち多き所をば、心がけてぞ歩み來る、父がをしへの四海波、しづかに走つてあとに附き。

ト右鳴物にて花道より齋藤五郎出てすぐ舞臺へ來る。

乙石　四海波靜かに御代も納まる時津風、御合力をお願ひ申し上げまする。

〽愛にあいもつその姿、何心なく見合す顏。

五郎　ヤそちや甥の乙石でないか。

乙石　アイ伯父さまかいなう。

〽伯父さまかいのと取りすがる、抱きしめながらぎよつとして、邊り見まはし笠とりすて。

五郎　なんともつて合點行かぬは、年端もゆかぬその方が袖乞するとは、こりや乙石、そちばかりかたゞしまた、兩親ともに袖乞するか。

乙石　イヤ母樣は家にゐて、父さまと二人謠諷うて歩きまする、今よその小父さんが來て、アレあの煮賣屋の內へ行てゞござりまする。

〽といふにかけよりすだれの內をさし覗けば、靫負が形は破紙子、やぶれふすまを下に着て、辻に立つたる厄人も及ばぬ形を見るよりも、思はずはつと胸

ふさがり、しばし涙にくれるが、思ひ續けて目を押し拭ひ。

五郎　ハヽアもつともさうあらう、主君佐藤兵衛則清殿に別れてより、十七八年の浪人、殊に主君の姫君を長々の養育、其上また某が六代御前を預けおけば、女房の緣とて麁末にせぬ義理がたい侍。五年此方目かいは見えず、針を藏につんでもたまらぬ筈、とはいふものゝ松浪靱負ともいはるゝ武士が、門口に立つて袖乞するとはさぞ無念にあらう、口惜しからう、ハテ是非もなき世のありさまぢやなう。

〽しばし涙にくれつゝも、甥の襟もと撫であげ〳〵。

ト五郎愁ひのこなし、子役へ思入あつて、

五郎　コレ乙石よ、親子が袖乞することを、妹のお六や姫君にもごぞんじあるか。

乙石　イエ〳〵、そりやどうぢややら知りませぬが、誰にもいふなと父さんのいひつけ、伯父さんも知らぬふりして、ちやつといんで下されや。

五郎　ヲヽもつとも〳〵、いかさま小男の某が知つたと思はゞ氣の毒にもあらう、負ふた子に敎へられ淺瀨を渡ると世の諺、ハテそちや利口なものぢやなう、サヽもはや謡うたはずとも、アノ茶屋へ行て休みやれ。

乙石　そんならモウ行かつしやるかや。

五郎　コレ人にしつかり附いてたゝかれなや。

乙石　アイ〳〵。

ヘ涙片手に齋藤五郎、見返り〳〵向の庭へ乙石は、茶屋が店へと別れ行く。

ト齋藤五郎は門の内へはひる、乙石下手へこなし。此時いぜんの勘吉靱負の手を引いて出で來りこなしあつて、

靱負　イヤモウ何から何までお心添へありがたうぞんじまする。

勘吉　何のその禮には及ばぬこと、人の世話はこつちが商賣、晩に夜更けて行くほどに、家では何にもいはぬこと。ナコレ。（ト靱負に囁く）よしか。（ト奥入）

靱負　委細承知いたしました。

勘吉　そんなら御浪人。

靱負　後程お目にかゝりましよう。

勘吉　ぼんよ、おとなしうしましようぞ。

ヘいひすてゝ、足早にこそ立ち歸る。

ト勘吉こなしあつて錢を投げてやり花道へはひる、後に靱負こなし。

靱負　ア丶世には御親切な人もあるものぢや。コレ乙石よ、父が店、櫻の元へ伴うて往てくれいよ。

乙石　アイ〳〵。

〽我子を杖とも柱とも、知る人ありとも白紙に、身の上書いた莚の上、押し直りしが打ちしをれ、何か思ひの謡にまぎらす聲くもり。

ト乙石靱負の手を引き莚の上へつれ行く。靱負鼓をしらべ、

靱負　悲しみの涙も眼にさへぎり、思ひのけむり。（ト謡にてこなし）

〽旅はうき世は猶うきとあきらめて、墨の衣に身をやつす、佐藤兵衛則清入道、西行法師と名を改め、頼朝のたのみによつて、再び故郷の空近く、歸り催す櫻かげ、打見にしばしたゝずみたまひ。

ト右の文句にて花道より西行法師、墨染衣旅なり風呂敷包を脊負ひ、檜笠を持ち杖をひき出て來る。花道に來ると大釣鐘をあしらふ、風の音にて櫻の花散る。

西行　誠や春の花は上求本來の梢にひらき、九夏三伏の暑ひもなく、草木國土おのづから見佛聞法の結縁、そよ吹く風に散りかゝる風情も一しほ、ハテ面白のながめぢやなア。

〽花に心もよねんなく、ながめ入つてぞおはします。

ト西行舞臺へ來り、上手よき所の岩臺へ腰をかけ櫻にこなし。

靫負　コレ乙石よ、いつもの通り散つたる花をば集めておいたかや。

乙石　イヤ、まだはきはいたしませぬわいなう。

靫負　それ〳〵それがわるい、常々もいふ通り、この花は我々がためには三代相恩の御主、散つた花でも疎略にはならぬ、往來の足にかゝらぬうち、早う集めておいたがよいぞや。

乙石　アイ〳〵。

〽乙石はすべの箒で花ちらす、わやく交りも愛らしく、西行はつく〴〵と打ながめ。

ト此うち乙石はうきを持ち出し散つたる花をはきよせること、西行この體をしばしながめゐてこなしあつて。

西行　ハテ世には念者もあればあるもの、コリヤ〳〵盲人、月を愛し花を愛する風雅あつてやさしけれども、さほどに敬ひ尊むべきいはれなし、殊に三代相恩とは花につかはるゝといふ心か、ハレ。

〽けたゝましやと述べたまへば、靫負ははつと手をつかへ。

靫負　どなたさまかはぞんじませぬが、花を敬ふを異樣におぼしめされませうが、この花の儀は往昔鳥羽の法皇崩御の砌り、この春ばかり墨染に咲けとよまれし歌の德、その年は片枝が墨に咲きそれより花を墨染櫻、所の名をも墨染と名附けしたり、この歌人は我ために作までは三代相恩、草木心なしとは申せども、主人の心魂の入つたる櫻木、敬ひかしづき申しまする。

〽敬ひかしづき候と、事こまやかに語るにぞ、西行不思議の思ひにくれ。

西行　それを主とは何者ぞ。

〽と立ち寄つて、笠の下さしのぞき〱、よく〱見れば我家來、松浪靫負がなれのはてと、見るよりはつとかたへに飛びのき、暫くためらひたまひしが水の流れと人の成行、世の盛衰とはいひながら、不便の者のなりふりや、淺ましの身のはてやと、うち涙ぐみたまひしが、彼がありさま見るにつけ、我出家して其後にて、妻子の事はどうなりしぞ、樣子聞きたや問ひたやと、かけより〱したまへども、佛の戒誓ひをば、思ひ出してよそ〱しく。

ト此うちよろしくこなしあつて涙を拂ひ、

西行　コレ〳〵盲人、傍にひろげし書附に　主をはごくむあだてとあるが、はごくむ主は男子か女子か、一人なればまだしも、若し二人なればさぞ難儀にござらうなう。

へ妻子二人はかはらずかと、いはぬばかりの問ひ事を、聲ひくなしてのたまへば、靱負は何の氣もつかず、小腰かゞめて。

靱負　こはお情け深いそのおたづね、お聞きなされて下さりませ、（ト床の合方へ草笛を入れ、靱負こなしあつて）　元私主人は歌道を好み、十七年いぜん歌修行と僞り發心して　お行衛知れず、あとにのこりし奥方は、乳呑子を抱き方々とさまよひ、終に嵯峨の奥にて御臨終。

西行　ヤアそれは。ハテ笑止なことぢやなう。（ト愁ひのこなし）

靱負　今養育いたすは其姫君、智惠附き給ふ夕より十七年の今日まで、父御のことを戀ひこがれ、雨風はげしく吹く時は、野山を家とはなされぬか、雪の夜氷を打ち割つては飢凍えはなされぬかと夜の目もあはず泣いてばつかり、あまり見る目のいたはしさ、せめて貧苦を見せまいと夫婦のものがいひ合せ、袖乞しては家へ歸ると借羽織借小袖、帯はしめでも姫君に折敷で膳はするませぬ、早う父御へお渡し申しお歎きがやめたさに、お情け深いお方と見込みつひ思はずも長

物語、おぼし當ることとござらば、何卒お知らせなされて下さりませ。

ヘといふうちよりも西行は、悲しさ辛さ身も世もあらず、心は千變萬化にかはり、胸に餘る涙をば、のみこみ〳〵押してんでも、思ひに沈む苦しさを、こたへかねてかたへに立ちのき、涙片手に兩手を合せ、心のうちに心のかため。

西行　南無西方十萬億土の我觀、釋尊彌陀佛の二佛一體たしかに聞け。

ヘ現在娘はこがれ死ぬとも、佛のいましめ破らぬ〳〵と、答へるつらさは胸がさくる骨が碎くる、悟りきつても凡夫心、有俗にかはらぬ我思ひ、未來は奈落に沈まうとも、逢ひたい見たい我子の顔、見まいと思ふはこれなんぞや。一子出家の功力によつて、九族天との教へのことば、それぱつかりがたのしみで一人の娘を思ひきり、必らず誓ひを忘れたまふな、南無阿彌陀佛々々々々々々。

ヘと唱ふるうちにも目は涙、またかけよつて靫負が顔、我子のかたみとうちながめ、どうと伏してぞ泣きたまふ、靫負はなげきの聲をとがめ。

ト西行よろしく愁ひのこなし、此うち靫負ふしぎのこなし。

靱負　御出家樣、人の歎きを身にとるが天の道とは申しながら、餘り澤なる御愁歎、もしや尋ぬるお方では。

西行　ハテ譯もない、愚僧は關東者、妻子を捨てゝ出家となり、はる〴〵と都に上り今こなたの話を聞いて、故郷のことを思ひ出し、もらひ泣をしました、我人出家といふものは、愛着の念を放れいでは、佛の心にかなはず、こなたが大事にする其娘にも此道理をいひ聞かせ、親の事を思ひ切らせて似合しき緣にもつき、盛りの花を散らさぬやうに、とてもなら世話をしやれ、袖ふり合ふも他生の緣、貧しいと聞けば合力でもしておませたいが、愚僧も貯へとてもおちやらぬ、ヲヽ幸ひ、こゝによい子供たらしがある。

〽これなと息子へおまさうと、賴朝より賜りし白銀の猫とり出し、心は娘へかたみと思ひ。

ト思入あつて頭陀袋に入れし袱紗包の銀の猫香爐とり出し、

西行　コリヤ〳〵ぼんよ爰へ來い〳〵、これをそちにおまさうぞ。

乙石　アイ〳〵。

〽さし出したまへば乙石は手に取り。

ト乙石立寄り件の猫を貰ひ

乙石　コレ父様こんな白い猫を貰うたわいの。

〽見せても見えぬ盲人の。

ト靱負猫をさぐりこなしあつて

靱負　ヲヽそりやよいことであつた、御禮を申せ、ありがたう存じまする、猫は齧血の德ありとて、一能のあるもの、思召深き下されもの、どうがな樣子のありさうな。

西行　花見んとむれつゝ人の來るのみぞ、あたら櫻の科にぞありける。

靱負　何卒打ちとけてお話を、

西行　出家する身は山の埋木、

靱負　スリヤどうあつても、

西行　たゞ何事も諸罪消滅々々々々。

〽櫻の元を足早に、散りて行衞はなかりけり。

ト西行愁ひのこなし、靱負すがると西行ふり拂ひ足早に花道へはひる、靱負後を慕ねるこなしあつて

〽すがるもかけるうつゝにも、思ひよらねば。

乙石　コレ父様、今の坊さんはどつちへ行かしやつたわいなう。

ト あたりを杖にて尋ねるこなしあつて是非なきこなし、

靱負　ナニいづれへ行かしやつたか、ア、まゝよ。貧者の親しきは無語の元、コレ乙石、モウ家へもどらうか、店を片附けやいなう。

乙石　アイ〳〵。

ト 乙石櫻の元の莚を巻きしまうこと、

〽身拵へする向ふより、鼓の判官が弟十郎定直、六代御前を詮議のため、所〳〵を歴巡る通りがけ、乙石が手にふれし、猫の香爐にきつと目をつけ。

ト 此文句のうち双盤になり花道より鼓の十郎袢天股引ぶつさき羽織大小のなりにて、黒四天四人附添ひ出て來る、乙石が手に持ちし猫の香爐に目をつけ、四天の皆々も囁き合ひ思入あつて、

十郎　ヤアのぶといやつ、見れは袖乞をする分際でアノちつぺいが大切なる香爐を所持なすは、たしかに道中の小盗人、盲めがさす業、かたりとつたか盗んだか、まづその香爐をこつちへ渡せ。

〽こつちへ渡せともぎかゝるを。

乙石　アレこはいわいなう。

ト十郎乙石の持ちし香爐を取らんとする、乙石籾負に下がる、籾負これをかこひ。

籾負　こは思ひもよらぬ唯今の仰せ、袖乞はいたせども盗みなどいたす某ならず、先刻道行く旅僧の、伜へ與へ通られし手遊びとこそ存ぜしに、大切なる香爐とあるはまづ何にもせよ、此方はもらひもの、はやまつて後悔のめさるゝな。

十郎　ヤアぬかすまい、かたじけなくも其香爐は、相州鳴立澤にて弓矢の徳を現せし功によつて、賴朝公より則清入道につかはされたる猫の香爐。

ト籾負聞耳立つこなし。

籾負　ア、イヤしばらく、其則清入道とは佐藤兵衛則清様か。

十郎　ヲ、いかにも。

籾負　ア、ホイ。さては今のが。

〽そんならさうとかけ出すを引つかんで。

ト籾負聞いてびつくりしてかけ出でんとする、捕人きつと取り卷き、

捕手四人　うごくまいぞ。

籾負　なか〳〵逃げも走りもせぬなれども、これが則清様なれば。

ト行きかけるを十郎つきたふし立ふさがり、

十郎　ヤアならぬ〳〵。ソレ餓鬼めからぶちすゑよ。

捕人　心得ました。（ト乙石を捕へんとする）

乙石　アレこはいわいなう。

〽しがみ付く、ヤレ待つた〳〵と靱負は急難途方にくれ、追ひかけ行かんもかなはゞこそ、せんかたなさに兩手をあげ。

ト乙石はこはいわいなう〳〵と靱負にしがみつく。捕人皆々乙石をもぎ放さんと立ちかゝる、これを靱負いろ〳〵あせる、つきのけ〳〵思入、盲目ゆゑせんかたなきこなし。

靱負　ヤア〳〵、一通り云ひ譯あり、心をしづめ聞いて下され、いづれもがた。

十郎　云ひ譯あらば早くぬかせ。

〽とおし靜め、座に直つて盗まぬ云ひ譯、いはんとせしが待てしばし、もらひし譯をいはゞ頼朝の音物、門前の童にやつたは捨てたも同然と後日の咎め、元より件の旅僧が主君といふでもなし、とかく猫を返せば濟むと取出せしが、いや〳〵萬一主君であつた時は、この香爐を姫君へ渡せとあるお心でつかは

されたこともあらう、すりや我君のお心を背くといふもの、ハテどうがなと猶豫のうち十郎いらつて。

十郎　ヤア手ぬるい〳〵、打ちすゑて香爐をもぎとれ。

捕人　心得ました。

〽下知に隨ひ家來ども、たゝき立つれば盲人の、我子をかゝへ香爐をかくし、遁れん逃げんとあせるほど、踏むやら蹴るやらたゝくやら、すでに危く見えたるところに、齋藤五郞寺內より、かくと見附けて飛び來り、家來の大勢一つかみ、投げのけ〳〵親子をかこひ、仁王立に立つたるは、心地よかりし次第なり。

ト始終双盤にてあしらひ、捕人を相手に執負盲目の立廻り、子役をかばふこなし、トゞさん〴〵に執負をふみすゑる。此時門の內より齋藤五郞出て來りそれと見るより此中へ割つて入りきつと見得、十郞齋藤五郞を見て、

十郎　ヤア怪しきやつの詮議の折から、さゝへ立てする素浪人。

○　こやつも大かた盜人の同類。

△　サア尋常に繩かゝれ。

五郎　ナニ小癪なる青蠅めら、慮外ひろがば手は見せぬぞ。

十郎　ソレ、ものないはせず打つてとれ。

捕人　心得ました。とつた〳〵。

〽打つてかゝるをこともせず、切立て〳〵なぐり立て、寺内をさして追ひ行けば。

ト此時寺内のうちにて

皆々　喧嘩〳〵々々々々。

〽ヤレ喧嘩よと寺の内、はつしとたつて棒ちぎり木、參詣群集は上を下、まき野の狩場の如くなり。

ト双盤にて參詣人大勢喧嘩々々々々と逃げ歩く、參詣人手に〳〵六尺棒など持ち捨ゼリフにて上下へかけ走ることあつて、トゞ上手の門はしまる。

〽あとにむざんや松浪靱負、顔も手足も疵付きて、無念とあせれど眼は見えず。

ト靱負さん〴〵に打たれ引ぬきやぶれたる着附、乙石をかゝへ苦痛のこなし、

靱負　無念なはやい〳〵。倍臣ながらも松浪靱負といはれたる武士の、いかに浮世といひながら名もなきやからに手込にあひ、かゝるうき目にあふことはいかなる宿世の業因ぞや、アヽ是非もなきありさまぢやなう。

へと立つてはこけ轉けては這ひ、つかみ廻れど相手なく、かつぱとたふれどうと伏し、苦しむ體に乙石が。

トいろ〳〵あつてどうとたふれ泣き伏す、乙石靱負にすがり、

乙石　父さまいなう〳〵。

へ撫つさすりついたはるも、持つべきものは我子ぞと。

靱負　ヲヽ、可愛いやつ、よういうてくれたなう。（ト抱きしめこなし）

へ思うては泣き、抱いては泣き。

親ゆゑ子まで苦勞する。

へふびんのものや可愛やと、抱きしめ〳〵前後にくれて泣きゐたる。

へ寺内は鹿を狩り出す如く。

ト靱負は乙石を抱きよろしく愁ひのこなし、能き時分双盤はげしくバタ〳〵の音、

大勢　そりやそつちだ〳〵。

同　こつちだ〳〵、喧嘩々々々々。（トわや〳〵人音する）
〽と追ひかくる音逃ぐる音、回向の庭の修羅道は、佛も力及ばれず、すきまを見て齋藤五郎、門のわきなる練塀の屋根を見越して。
ト上手の塀越しに齋藤五郎拔刀にて靱負にこなし、

五郎　コレ〳〵靱負何をうつかり、某は裏門から何時でも切りぬける、氣づかひせずとも〳〵逃げたく〳〵。

靱負　ヤヽ、さういふお聲は齋藤五郎殿。

五郎　ムヽ此場の事はたがひに無言、乙石歸つて母に語るなよ、ソレ父が手を引き早う行け。
〽といふ間も待たぬ相手の大勢。
ト始終双盤をあしらふ、門の内にて大勢の聲にて、

大勢　ソレ見附けた〳〵、討つて取れ。

五郎　何を小癪な。

ト五郎見返り刀をふりまはし塀の内へ飛下る。

〽得たりと五郎は飛んで下り、内は切合ふ劒の音。

ト人聲双盤だん／＼に遠くなる。かすめて本釣鐘鳴る。櫻散る。靱負こなしあつて、

〽こなたは敎へにはつと氣をつけ、立ち上れどもよろ／＼、杖と我子に助けられ、かつぐもつらき破れ笠、破れ紙衣を引きさかれ、髮はをがせの亂れ心や亂るゝ姿。

ト愁ひのこなしにて身じしらへすることあつて子役を抱へ、

靱負　これがいぜんの侍か。

〽武士の果てかと我と我が、身にも浮世もあいそつき、涙のかすみ晴れ間なく。

ト此うちかすめて本釣鐘、風の音櫻ちら／＼散る事、靱負乙石に手をひかれ花道へかゝりよろぼひ／＼行きかける、石につまづき靱負よろ／＼となる、乙石は氣あつかいしてちやつと杖をさしつけ。

乙石　父様、杖ぢや。

〽うちしをれてぞ。

ト杖を手に取り簸負杖の先を持つたる乙石に引かれひとつになつて、花道へ三重一ぱいにはひる。

幕

二幕目　江口鶴屋の場

役名　西行法師、木曾の冠者義仲、根の井小彌太、楯野六郎、石黑左衞門實は飛驒の左衞門、鶴屋長兵衞、男達白虎竹六、同左青龍藏、同朱雀南八、同石龜次團太、料理人伊介、丁稚長太郎、新造うつしゑ、傾城逢坂山、仲居おはな、同おだい、同おたま、同外四人、禿、駕籠舁二人、軍兵八入、新造、番頭新造、若い衆。

本舞臺三間の間常足二重、向ふ一面長暖簾、櫛形の欄間、上手折廻し塗骨の障子屋體、軒に青簾、埒を結びたる棣山吹の植込、三面ひさし附紺の暖簾、日覆より櫻の釣枝、下の方千本格子、鶴屋と書いたる掛行燈、こゝに仲居おはな同おたま同三人、仲居のなりにて吸物椀膳など拭いて居る、料理人伊介盆に玉子五つばかり載せ廻しゐる、すがゝき太神樂にて幕あく。

伊介　評判の俵ころばし、ひよつくり〳〵が四文でござい、お子さま方のお手遊び、お盆の上でもお膳の上でもひよくり〳〵。

はな　ヲヤ伊介さん、何をするといつて知れたものだ、こんなをかしみからとり入つてお前方を。

伊介　カウおはなさん、その通り口說き落さうといふ趣向さ。

はな　オヤいゝかと思つてそんな思ひ附なら、よその家へ行つてお客になつた時たんとおしよ、こゝぢやア通らぬぞえ。

仲居一　アイ、妾達はそんな薄つぺらなことは、大嫌ひぢやわいなア。

伊介　嫌ひもよく出來た、おまへ達を釣るにやアこんなことでなけりやア喰ひつくめえ。

仲居二　人聞の惡いことばかり、みつともないよしておくれ。

仲居三　玉子ぐらゐでいふことを聞いて、色里の奉公がならうかいなア。

伊介　こんな噓はねえ、色氣と喰氣とちやんぽんだらう。

はな　あきれたことを、料理人といふものはいきなものかと思へば、一寸したしやれが玉子とはむせつぽいぢやないかいな。

伊介　カウ〳〵、むせつぽいとはおつなせりふが出やした、それぢやアやつぱり此玉子も、おまへ達

のものだ。
仲居　ナニ妾達の玉子とはえ。
皆々　わからねえか、生だといふことさ。
伊介　ヲヤおぼえておいでよ。
　　　ト此時奥より丁稚長太郎、酒屋干物の通帳を腰へ附け鎧のやうにしてを持出て來り、
仲居　ばたばたくだつたり。（ト見得をする）
長太　ヱヽびつくりさせてからに。
仲居　番頭さんに見付られたら叱られるぞえ。
日二　カウカウ、山形屋の丁稚いゝ所へ來た、こゝへ來てみんなをいちめてやれ。
伊介　おまへ、邪魔をすると此間のことを家へ告げるぞえ。
仲居　ナニサこの子は軍の人だから、どんなに强からう、これ〳〵小僧どん、妾達は力がないから、
はな　この伊介さんを手傳つて、ひどい目にあはしておくれよ。
長太　ヲツトよし〳〵、たのまれりやアあとへは引かぬ、おれを誰と思ふ、山形屋の大將しいたけかんぴやう靑のり、かたくりの駒に打またがり敵に後をみせ先で。

ト棕櫚箒を持つて伊介の鼻へつき出す。

伊介　ハツクサメ。（トいひながら起上り箒をとつて）ヤイ／＼丁稚め、女のひいきをして何をしやアがる。

長太　何をするものか、おれが加勢してこの軍に高名するのだ。

伊介　おきやアがれ馬鹿野郎め、あんな玉子を持つて來て、家へ往つてさういへ、惡い代物をよこすと何にも買はねえぞ。

仲居皆々　ヲヤ／＼可愛さうに、とんだところへあたるねえ。

伊介　いたづら野郎め、早く家へ往つて小ぶしを持つて來いといふに。

長太　何小ぶしとはこのことか。（ト握りこぶしを出す）

伊介　くらへねえ靑丁稚め。（ト箒をふり上る仲居とめる）

長太　ア、ごめんだ／＼。アイタ、、、。

ト此時奥より鶴屋才兵衛、羽織袴にて出て來り伊介をとめて、

才兵　これさ／＼モウよさねえか、常談が本統になるから、山形屋の丁稚も早くこゝに居ずと行つて來い。

はな　小僧どん、又忘れぬうちその通帳をとつておいでといふに。
伊介　すれつからしめ。
長太　すれつからしより、唐がらしがからいぞえ。
才兵　なるほど甘口で行かねえ奴だわい、サア〱早く行けといふに。
長太　ヲツト合點、天滿の巫女の振袖、袖や袂に引きかけたやうす、かるかや心がらこそ出られた。

ト踊りながら下手へはひる。

伊介　あいつもよつぽどひようきんな丁稚だわい。
才兵　ときに伊ス公、お大盡さまはさつきから奥座敷で御酒きげん、今にもいつもの御連中がお迎ひ、まづお吸物に硯ぶた、鉢肴はお定り、お供の衆へもお膳が出るぞえ。
伊介　そりや承知いたしてをりまする。
たま　モシ〱、いつぞは聞かうと思うても折はなし、アノ義さまの四天王とやらおつしやるは、いつもの方々でござんすかえ。
伊介　どうして〱そりやア大違ひ、まづ今井樋口根の井さまと、こりや歴々のお大盡、此廓へお出陣はおそばさらずの四天王といふ、兵者が聞いてあきれる。

はな　お前もよつぽどの悪口、したが義さまのお氣に入り、髭の塵をとり〳〵に五人男の連衆の方々、其名も五色の緣をとつて、何とやらむづかしい。

才兵　それよ、靑黃赤白黑の思ひつき、此作者は誰あらう、かたい趣向も色でとく石黑さんの仕組のこんたん廓の諸わけ、何もかもずゐぶん粹な御連中、こつちもなにかに氣をつけて、座敷の所をたのみます。

仲居　そりやアお氣づかひなされまするな、萬々それはよろしうござりまする。

才兵　ヲ、えらい〳〵、さうして昨夜案内のあつた芋大盡が見える筈ぢやが、小座敷の掃除はちやつとしまうたか。

はな　それに如才はござりませぬ。

才兵　イヤ恐れ入つた、鶴屋の家の仲居の親玉、龜の甲より年の功、そなた任せにたのみました。

はな　アイ〳〵、皆さん爰を片付けようかえ。

皆々　それがようござんせう。

ト此時伊介向ふを見て、

伊介　ヤア、向ふへ見えるはたしかに客人。

皆々　ほんになア。

伊介　どりやお肴の支度をしようか。

ト伊介奥へはひる、すりがね入唄になり、花道より石黑左衞門羽織着流し大小目關笠にて、後より男達白虎竹六、朱雀南八、左青龍藏、石龜次團太いづれも着流し一本ざし尺八を後にさし、柾の下駄、男達のこしらへにて出て來り、舞臺の皆々これを見て、

才兵　これはくいつもながら四方にかゞやく朝日組のいづれもさま、お大盡さま先程より御來臨、皆さまのお出でを遲しと最前から、

女皆々　お待ち申してをりましたわいなア。

石黑　君ならで先がけするや櫻狩、手折らん枝のあらばこそ、日毎に通ふ義仲公、迎ひがてらに此廓へ來るは曲輪のよみこゑも、人目を忍ぶ目關笠、ゆるさせたまへ御めんなれ。

竹六　色も香もあるさとげしき、不斷櫻にお供する、四天王にはことならず、皆一やうの出立は、

龍藏　お傍去らずの我々は、四神の劍を表したる、丁度五人もいろどりの、よし野櫻や墨染の、

南八　小町櫻の美しい、江口の君の仇名草、今宵逢坂山櫻、花のあるじもけふこゝへ。

次團　通ひ曲輪の全盛と皆人每に夕櫻、素見ぞめきも地廻りも、かつゝくばつた犬櫻、

石黑　またしても花に風、そこのきたまへ喧嘩買、粋を通すが江戸櫻、義仲公の御遊興、花を散らすは大きな野暮、淺黄櫻にするはうが、當世だゝら大盡と、花もまばゆき朝日の君、屋敷の首尾を、

男達四人　一寸きかしやれ。

才兵　イヤモウおつしやるまでも待兼山吹、サア〱これへ。

女形皆々　お出でなさんせいなア。

石黑　いかさまそれは又かくべつ、サア皆も來やれ。

ト右の鳴物にて舞臺へ來る。仲居此うち毛氈を敷き床几を直して、才兵衞煙草盆を出して始終騷ぎ唄合方。

才兵　まづ皆さまの御入來、何はさておき酒肴を早く此所へ。

女皆々　アイ〱合點ぢやわいなア。

ト女形皆々酒肴臺の物大杯を石黑の前へ出す。

石黑　修羅の太鼓にひきかへて、治る御代の廓のけしき、此あたひ萬々金、ハテ風情ある遊里のながめ、さりながら我々が來りしこと、御前へ取次いたしてくれやれ。

はな　ハイ〳〵一寸妾がお知らせ申しませう。

　　トおはな奥へはひる、石黒杯をとり、

石黒　此杯の蒔繪は日の出、鶴屋の好み、朝日組の頭分身共が始めて順杯いたさう、酌をしやれ。

　　ト仲居酌をする。

竹六　なんといづれも、日夜をわかたず遊里の繁昌、色に色増す櫻時、これが所謂喜見城。

次團　さやう〳〵、月雪花のながめよりはるかに增る逢坂山、君も心引かされてござるもことはり傾城の、誠あるまで通ひつめ、武左家放れた朝日のきみ。

南八　色は思案の外からも、引手あまたの全盛と、いはるゝだけに下々まで、通りのよいも長らうの、吸付け煙草を格子から、よう來なましたといはれちやア、達衆もいつかぐんにやりとおつな心になるものさ。

龍藏　またそろ〳〵と受けさせるか。

三人　その受け賃は、この杯で一つ始めやれ。（ト杯を出す）

石黒　こりやあがらずばなるまい。

皆々　ドレお酌でもいたしませう。

たま

龍藏　コリヤお頭の杯、さらば見事に頂戴いたさう。

ト おたま酌をする。石黒思入あつて、

石黒　イヤ見事々々。コリヤ亭主、これなる肴は取りおいて、外になんぞ肴がありさうなものぢや。」

才兵　そのお肴ならさしづめこゝに。

ト 山吹の活けたる花生を持ち石黒が前へ直し、

梅は武士山吹は傾城と、妹背山の淨瑠璃に花づくしの文句ぢやないが、お相方の來ぬ前に見立てたところが判じもの。

石黒　さすがの亭主あつぱれ頓智、その傾城もまつこの通り。（ト山吹を花生のまゝ切捨てる）落花みぢんになる時は、そちや又何と判斷いたす。

才兵　コリヤ面白い、マア私が判斷は忠義にこつた石黒さま、花ものいはねど義さまへ、御異見なさるゝがお心なら、今見立てました逢坂山の山吹を、此通り落花して御本妻の山吹さまへ、立てる忠義と花生の、瓦の紋も巴の前、尤巴は浪頭、浪風立たず物事にまる／＼納まる御工風かと、憚りながらぞんじまする。

石黒　當意卽妙驚き入つた、さほど利發の其方がめたら月日をうか／＼と、身すぎ世すぎの世渡りに

茶屋商賣の主さへ、當座の褒美に花をくりやう。

ト いぜんの玉子を取つてヱイと才兵衞へ打付ける、才兵衞受取り、

才兵　こりやめつさうな玉子のなげ打、これを花ぢやとおつしやるは、ハ、アお寸志がありがたい。

石黑　イヤ〳〵それはさにあらず、玉子にきみといふ緣あれば、そちがもてなし君の御きげん、取りもちいたしやれ。

才兵　そこはぬからぬさし出の才兵衞、細工は粒々、仕上げて御らんに入れませう。

石黑　然らば亭主、仲居ども。皆さん一緒に、

女皆々　案內しやれ。

男皆々　サアお出なさんせ。

女皆々

ト 騷ぎ唄になり、石黑先に皆々長暖簾の內へはひる。時の鐘床の淨瑠璃にかゝる。

〽急ぎ行く、往來もしげき色里に素見ぞめきの仇口も、人は客我は間夫ぢやとたれ駕籠を、飛ばせる花の櫻時柳の糸にむすぼれて、ゆられ〳〵て來る客は、舞ひこむ鶴屋の賑ひなり。

ト踊り地にて花道より駕籠舁四つ手をかつぎ出て來り、下の方へおろす。

駕○　モシ旦那、棒組の骨折り一息にやつけました。

同△　モシ／＼女中衆々々、お客さまをおつれ申した。

ト駕籠舁兩人奥へこなし。此時奥にて、

女皆々　アイ／＼。ほんにかごやさん。

はな　今大一座のお客でいそがしさ、お茶さへあげぬ、お仙さんお茶を。」

仲居　アイ／＼、かごやさんお湯でもよいかえ。

同二　シテお客さんはどなたゞやえ。

駕○　イヤどなたか知らぬが、一寸見かけたところが田舍のお大盡さまと見えます、立派なお客でござります。

仲居　そんなら初會のお客人、それはようこそ、旦那さんを呼び申さうかえ。

皆々　お客さんへ御あいさつ、早う／＼。（ト奥より才兵衞出て）

才兵　ヤアこれは／＼初對面から座敷の案内、田舍とはいへど粋と見た、イザまづ奥へ。

ト駕籠の垂れをあげて、

西行　それへまゐるでござらう。

〽天窓よりまづ脊中をば打たぬ用心理や、土氣放れぬせむし大盡、丸頭巾に腰切の羽織着るのも前さがり、立派作りの大小も、鞘なりのする姿なり、見るに才兵衞をかしさの、齒の根をかんで。

才兵　サア〳〵お通りなされませ。

ト駕籠の内より西行衣裝羽織大小誂への頭巾大盡のこしらへ、せむしの思入にて出て來る、才兵衞思入あつて、

才兵　コレ駕籠の衆、おつむりが相輿でおもたかろ、大儀でござつた酒でものんで。

西行　アヽこれ〳〵亭主、神崎で伊丹酒ふんだくにのましておいた、其心づかひは無用々々。

〽とめるにふくれる駕籠の者。

駕〇　テモマア嘘をいふお人ぢや、お約束の駕籠代さへ六づきで紛らかして、目を引かれました。

同△　隨分御如才のない旦那、なう棒組、何もいはずに歸りませう〳〵。

ト駕籠つりて下手へはひる。

才兵　どのやうな石部さまでも、ところを我等が手を入れて黃金の花をふらさん、まづ〳〵奧へ御案

內、さうしてなにかに氣をつけて、料理萬端お吸物の用意はよいか。
皆々　ハイ〳〵、それにぬかりはござりませぬ。
はな　サアこれから大じやれといたしませう。
西行　ア、コレサ〳〵、そのやうにもてなしてもらうては卻つて困る、身はとかく傾城が望みでおちやる、いづれ全盛達のその中で、名高いお傾城をもとめたいものぢや。
はな　サア〳〵これからは、大じやれといたしませう。コレはお煙草盆お杯持つておじや。
西行　ア、またしてそのやうにしては惡い、さうして煙草やお杯は勘定の外かの。
才兵　さやうでござります、お引附と申して、コリヤあなたさまへ御馳走に、いたしますのでござりまする。
西行　御馳走とはありがたい、何でも物入りのないがよいぢや、それはさうと色里と聞くからはどれなりと執心さへいうたなら、お傾城が買はれ申すか、それが聞きたい。
才兵　そりやモウお望み次第、誰なりとお買はせまするが、シテお望みの太夫さまはどなたでござりまする。
西行　外でもない、身どもがもとめたいと申す女郎の名は、何とやら申した、何でも百人一首の歌の

やうな名であつた。
はな　百人一首の歌のやうな名とおつしやるからは、秋の田のかりほの庵といふお名もあるまいし、
たま　やくやもしほの身もこがれつゝ。ヲヽアノ奥州屋の藻鹽さまではござりませぬか。
西行　イヤ〳〵、さやうな名でもないて。
仲居　ホンニマアおきまどはせる、白菊さんではござりませぬか。
西行　イヤ〳〵、さやうな名でもない、何でも坂ぢや、坂はてる〳〵鈴鹿はくもる、相の土山雨がふる、でもない。夜をこめて鳥のそらねははかるとも、ヲヽ思ひ出した。
ト思はず大きくいふ。
才兵　エヽびつくりしました。シテその太夫さまは。
西行　世に逢坂の關はゆるさじ、逢坂山が身がのぞみぢや。
はな　もしいなア、逢坂山さんをあげようとおつしやるには、大分はながが入りますぞえ。
西行　なんぢや、はながなければならぬか。
はな　さやうでござりまする。
西行　ソレ見やれ。（ト顔を前へ出す）

皆々　そりや何の事でござりまする。

西行　ソレ見やれ、あらうが。（ト鼻をおさへて見せる。皆々見て）

皆々　ホヽヽヽ。

才兵　イヤあなたのお鼻のやうすでは、さぞ女子が好もしう思ひませう。

西行　さうとも〳〵。

才兵　モシ唯今仲居どもが花と申しましたはモシ、れこのこと、ナ山吹色の花のことでござりまする。

ト小判の形を仕方しのみこきせる、西行心付かぬこなしにて、

西行　アヽ山吹の花か。

才兵　さやうでござりまする。

西行　ハテそれならそれと早う申せばよいに、直に取りにつかはすわい。

才兵　ハテわつけもない、何をおつしります、しかしマア皆見やれ、かう見たところが、旦那さまはおつむりと申しお背中のあんばい、誠に福々しうて正眞まぎれなしの福の神、大黒さまと見えるぢやないか。

はな　ほんにさうでござんす、大黒さまなら皆の者に、チトお金をおやりなされませ。

西行　ハヽア、そんならわしが正眞の大黒のやうぢやと申すのか、それで今のやうに黄金をちらせといふたのぢやな。

才兵　さやうでござりまする、ずつとはづんでパツパと、お金をおつかひなされませ。

西行　めつさうなことをいふ人たちぢや、金銀は世界の寶、めつたむせうにまき散らして冥加につきる、亭主はまだ知らずか、大黑の託宣に此槌は寶打ち出す槌でなし、のらくらもの丶あたま打つ槌。

ト才兵衞のあたまをくらはす。

才兵　イヤこれは迷惑ぢや、何はともあれお傾城を此所へ五六人も、引摑んでまゐりませう。

ト行きかけるをとめて、

西行　アヽ五六人出されてどうなるもので、逢坂山ばかりで澤山ぢや。

才兵　そんなら逢坂山樣として、酒は二十斤ばかりもとりよせて。

西行　イヤ／＼酒もちよつぴり肴も少し、隨分下直につくが當世ぢや。

はな　さつてもきつい。

女皆　ひがさんぢやわいなア。

西行　ひがとは何のことぢや。

はな　アノひがと申しましたは、それ〳〵何でござりまする、ひがな一日のみあかしの大盡さまということでござりまする。

西行　金の出るのはいやぢやが、そちの振舞なら日がな一日、二日三日ひがぢや〳〵。

才兵　イヤひがぢや〳〵。

皆々　アヽひがをうるぞ、ひがぢや〳〵〳〵。

ト皆々手を打ちそやし立る。西行浮れながら皆々ついて奥へはひる。才兵衞殘り思入あつて、

才兵　イヤ今のお大盡さまは、きついせうがのくせとして此廓一の太夫職、アノ逢坂山さんを買ひたいとは、人は見かけによらぬもの、しかしながらアノ逢坂山太夫は此間より義大盡のあげづめ、けふも今朝から口をうけてやつたが、モウ見える時分、テモマア待たせることではあるぞ、早うござつてくれゝばよいに。（ト門口へ來り向ふを見やり思入）ヲヽ噂をすればかげとやら、向ふへ太夫さまが見えるわ〳〵〳〵。ヲヽイ〳〵〳〵。

〽けふ始めてのつき出しに、うつす姿の八文字。

トこれをすり鉦入りの唄になり、逢坂山傾城のこしらへにて若い衆長柄傘をさしかけ、禿二人附添ひ

此後に新造うつしゑ同じく長柄をさしかけ、外に新造一人誂への文庫を持ち此あと番頭新造附添ひ、若い衆一人附き花道に留る、才兵衞これを見て、

才兵　これは〳〵太夫さま、最前からあなたのお出を待ちかね鳥、しだり尾の長々しいでございました。

逢坂　そんならきつうおそかつたかえ。

才兵　おそいとも〳〵、義さまは待ちくたびれひとりかもねん、さて黒殿が赤くなつてしかつたこと〳〵、めつたに寄りつかれぬ、何といひわけいたさうやら、そこはあなたよいやうに。

逢坂　そりやモウ勤めのならひぢやもの、日毎にかはる客人の心は汲み分けて、つひどうなりとよいやうに。

才兵　さすがの全盛、それで私も落付きました、大船ぢやない引船の新造さん、櫻も恥ぢる美しさ。どうもかうもたまつたものぢやござりませぬ。

うつ　まだ廓となれぬふつゝかも、太夫さんの引立て、見やう見まねの八文字、まゐらせそろも假名書の、釘の折れか木のはしと、思うて讀んで下さんせえ。

番新　とかくお茶屋の御贔負で、妾等までもとも〳〵に、

新造　春の野邊なる早わらびも、こゝにめさしの廓育ち、

禿　かはゆがつて、

二人　下さんせえ。

番新　モシ太夫さん、寫繪さん、お待かねとあるからは、ちつとも早う鶴屋の方へ。

逢坂　ほんにさうしようわいの。

うつ　そんなら皆さん。

皆々　さアござんせいなア。

逢坂　禿來や。

禿　アイ。（トこれにて皆々本舞臺へ來る。奥より仲居殘らず出て）

たま　太夫さんござんしたかえ、最前から待ちかねて、

仲居　義さまのご機嫌はさん〴〵で、

皆々　ござんすわいなア。

逢坂　マア何事もこらへて下さんせ、妾も始めて此子を引いて出るからは、今から名をゆづつて二代の逢坂山ともいはるゝやうに、思うて足らはぬ妾が數へ、推量して下さんせ。

ト奥より仲居おはな出て、

はな　ヲヤ花魁ようお出、さいぜんから義さんのお待ちかね、酒に廻されてついとろ〳〵。コレ旦那さん、今のせむしの侍が、聞き及んだ逢坂山を呼んで來いと無理なものいひ、あげづめの譯いうても聞かばこそ、最前亭主がいづれなりともお望み次第というたからは、亭主をこゝへ呼べ、眞二つにするときつい腹立、コリヤ何としようと思はんす。

才兵　ハテ何というてそれがマアどうなるものか、道理で初めからふくら雀見るやうな、いやな侍容ちやと思うた、よい〳〵おれが行つて斷りいはう。

ト行きかけるをおはな留めて、

はな　コレお前が行かんしたら相手は侍、ことによつたら首でもとらうといはうぞえ。

才兵　氣味の惡いことといふ、シテ國侍といふ方はつきつめて困らせるぞ、しかしどうするものだ、捨てて置いたら猶々怒るであらう。

はな　マア妾が思ふには、此新造さんを逢坂山ぢやというて引合はすが、名に惚れて來た田舍の野暮、アノ器量を見たらばあたまからひつたりべつたり、それこそなまこをわらではあるまいか、この智恵はどうでござんす。

才兵　なるほどさうだ、幸ひ太夫さまが名をゆづるとおつしやつたからは、此新造さんが出來立の逢坂山さんとするのぢやの。

はな　それいなア、又それが御縁になつておなじみにならうも知れぬ。

才兵　さうとも〳〵、まづさし當つて我等がためには命の親、新造さんをお貸しなされて下さりませ。

逢坂　サア妾はどうなりと、此子の思はく、氣の毒に思はるゝわいなア。

番新　ほんにその話では、その客人は常ならぬせむしとやら、傍からかうともいはれもせず。

逢坂　困つたことであるわいなう。

〽いふに寫繪いやおうの、返事にかきくれ居たりしが。

ト寫繪思入あつて、

うつ　人の難儀を見捨てねば、佛の心にかなふとある、名代で濟むことならさうさんせ、いづれの客も勤めでも、つらさはかはらぬ勤めぢやわいなう。

〽いうて涙を押しかくす。

番新　そんならおたのみの座敷へ出てあげなさんすかえ、モシ聞きなさんしたか、そのお客へ出るといはしやんすわいなう。

才兵　それは早速の御承知ありがたうござりまする、それにて私の安堵と申すもの。

はな　太夫が御承知とあるからは、あとのとやかうないうち、ちつとも早うお引付けを、ナア申し太夫さん。

うつ　そんなら皆さんよいやうに。

才兵　モシかならず逢坂山さんといふことを。

新造うつ　そりやようござんすわいなう。

〽いひつゝ立つて寫繪は、まだ籠なれぬ鶯の、色香ふくみて入るあとに、逢坂山は見送りて。

ト皆々捨ゼリフにてうつしゑ仲居才兵衛附いて奥へはひる、逢坂見送るこなし、

逢坂　いかなる人の娘ぞや、つらい勤めに身を沈め、かなしき色を見るに附けても、いとしいものぢやなう。

〽身につまされて憂き思ひ、しをれたゝずむ折からに、物音かくす騒ぎを幸ひ、奥より出づる石黒左衞門傍を見廻し、

ト踊り地にて奥より石黒左兵衛門出て來る。

石黑　妹々。

〽呼びかければ、ハッと顔あげ逢坂山。

ト逢坂山あたりを見まはしこなしあつて、

逢坂　コレ兄さん、人はなけれども壁に耳、改つた何のことぢやぞいなア。」

〽いひつゝ寄るを聲をひそめ。

石黑　コリヤこれを見よ。

〽投げ出す一通逢坂山、取りあげてひらき見て。

ト密に書を出すを見て、

逢坂　ナニ〳〵、貴殿妹を逢坂山といふ傾城に仕立て、大望成就せんとの約束、いかゞ心元なく候、飛騨の左衛門殿へ。コレ申しおまへの本名まであらはし、コリヤマアどこから來た文でござんす。

〽問ふも小聲に答へも小聲。

石黑　どこからとはうろたへものめ、鼓の判官よりの催促狀、彼とかね〴〵心を合はせ、おのれを傾城に仕立置いたは、義仲がほだしを附けて兩國の軍を延引させ、其咎めを受けさせんと鎌倉で

は鼓判官に毒氣を吹かせ、我は都で悪事の腰押し、まんまと馬鹿に仕立、毎日毎夜の廓通ひ、某を飛騨の左衛門とも知らぬうつそり、何卒一討にとすき間を狙へど太鼓限りに寢所へ寄せず、延引しては平家へ不忠、我大望の妨げ、さるによつておのれにいひ付け、添臥の醉まぎれ、たゞ一討にさし通せといひ付けおいたを忘れたか、たゞし色に迷ひ、兄の恩義は思はぬか、コヽナ不所存ものめが。

〽はつとにらめばいかりごゑ、奥は踊の太鼓三味。

ト逢坂山を打ちすへる。此うち踊り地、

逢坂　コレ兄さん、アレ聞かしやんせ、いつも騒ぎで夜を明かす、ましてや聰き大將女に肌をゆるさうか、その夜越えては翌の夜は、馴染かさなりいとしさ増り、お主の恩も兄の忠義も今では忘れた、それぱつかりはゆるして下さんせ。

〽はつと泣き出す聲に手をあて、（ト逢坂山の口へ手をあて）

石黒　エヽ憎いやつ、よい／＼その所存なればおのれはたのまぬ、此上は思案がある。

〽突きやり蹴飛ばし、行かうとするを裾にとりつき。

逢坂　コレ待つた、思案があるといふからはこゝは放さぬ、お前の身の大事なら、夜更けて妾が手に

かけましよう。

石黒　イヽヤ早合點のみこめぬ〱、平家の御恩で育つた身の、僞りいはゞ未來は奈落、しかとさやかう。

逢坂　妾も武士の娘ぢや、誓ひし言葉に違はぬ一心。

ト能き時分長太郎窺ひ出て居る。

石黒　出かした〱、それ聞いて安心、若し仕損ぜば聲をあげよ、幇間末社も皆一味。

逢坂　スリヤ附々も同腹とや。

石黒　いふにや及ぶ、限りも近し早來やれ。

逢坂　心得ました。

長太　樣子は聞いた。

ト兩人へかゝる。逢坂山石黒よろしく長太郎を投げて切りかへす。石黒刀を拭ふ見得。騷ぎ唄にて此道具よろしくぶんまはす。

本舞臺一面の平舞臺。上の方床の間、地袋違ひ棚。掛物花生を置き、向ふ塗骨障子。下手折り廻しすべて奥座敷の體。踊り地にて道具納る。トこゝに仲居おはな其外仲居寢道具を敷いてゐる。

〽はや杯も引汐に今ぞ情の知死期時、お寢間〳〵と寢道具を、運ぶ仲居のお花が氣轉。

はな　けふのやうに客人の込み合ふことは、いつものやうに才覺をいうては中〳〵廻らぬ筈、おまへ方もちつとは手傳うてやらしやんせいなア。

仲居　おはなどんのいはしやんすことぢやが、あの義さまの御連中は床割にするときかぬと、意地惡の次團太さんが叱るぞえ。

同二　まだそればかりぢやない、居つゞけのお客も座敷をかへてくれいといふわいなア。

はな　それはマア酒の引かぬうち、氣むづかしいお客から早う寢かすことがようござんすぞえ。

仲三　そりや合點ぢやけれど、おまへの寢間はどなたぢやえ。

はな　ソレ初會のお客で背こぶのある人、大座敷はふさがる、小座敷はせまし、いつそこゝらへ敷かうわいなア。

仲居　そんなら妾等は奥へ行くぞえ。

はな　たのんだぞえ。

皆々　アイ〳〵。

ト皆々奥へはひる。おはな残り夜具を敷く事、此折奥にて、

仲居　サアお大盡さま、からお出なされませいなア。

ト矢張り踊り地にて仲居西行の案内して上より出て来る。おはなこれを見て、

はな　ム、あなたはお大盡さま、お寝間をとりました、サアこれへお出なされませいなア。

西行　これは／＼女中達、お世話た々々。

はな　何のまあ、あなたそのやうにおつしやつては、結句妾どもが困りますわいなア。

仲居　マア／＼あれへお越しなされませ。（ト蒲團の上へ据らせる）

はな　テモマアきやうといお大盡さま。

西行　イヤモウきやうといやらちかいやら、こつちはきついちかつぺいちや、早う寝さしてほしい。

はな　ハイ／＼、只今これへ太夫さんもござんせう、マア／＼これで一服めしあがりませ、ほんにマアきやうといお大盡さまのお入り、アノマア福々しいお耳。

仲居　ほんにさうでござんすなア。

はな　モシ一寸お耳を引きましようかいなア。

西行　イヤ／＼、いかに背がひくいというて耳を取られてたまるものか、こつちは早う逢坂山に逢ひ

たい、早う呼んでたも〳〵。

兩人　ハイ〳〵、只今お出でござりませうわいなア。

西行　ハテ早う呼んでたもといふに。

兩人　アイ〳〵、合點ぢやわいなア。

ト踊り地にて兩人奥へはひる。西行思入あつて、

西行　ハテアノ逢坂山は何してぞ、モウ見えさうなものぢや、ア、コレ待ちびさしいことぢや、待たるゝより待つ身になるなとは、よういうたものぢやなア。

ト思入、これを上手出語り淨瑠璃になる。

〽待つ間ほどなく襖越し、露をふくめる海棠の、まださとなれぬ寫繪が新造仲居に伴はれ、出づる座敷のおもはゆく。

トこの淨瑠璃のうち奥より寫繪番頭新造に手を引かれ、あとより新造文庫を持ち仲居おはな附きそひ出て來り、

番新　ムヽあなたはお大盡さま、これにお出なさんしたかいなア。

西行　最前から太夫の來るのを待つて居た、しかし床いそぎちやとかならず笑うて下さるな。

はな　何をマアわつけもない、今宵はしつぽり太夫さん、早うあそこへ。

ト無理に寫繪を蒲團の上へつれんとする。寫繪恥かしきこなし。

番新　ハテおまへも粹のやうにもない、大事のお客、何もいふに及ばぬわいなア。

ト此前寫繪新造に誂へのことあつて、

はな　テモマア初會から眞實らしいお方さま、うらやましいと申さうか。

うつ　エ、

はな　たんとおしげり、

皆々　なさんせいなア。

〽いひすて奥へ立つて行く、座敷々々は三味線の、絲の手品もはなやかに。

ト皆々こなしあつて奥へはひる。あとに西行あたりへ思入あつて寫繪に向ひ、

西行　コレサ、お名を聞き及んで慕うて參つた此太夫、かう出逢うたはよく／＼の縁の深さ、さてさてはや聞いたよりは年若で、むつちりとした此手の尋常なことわいの、いつから勤めて年は幾つで誰が逢坂の、

〽山とはつけたと慕ひ寄るほど身をちゞめ。

ト西行こなしあつて寫繪に寄り添ふ。寫繪ぢつとこなしあつて、

うつ　問ふも憂し問はぬもつらし武藏鐙、かゝる折にや人は死ぬらん、思へば命はつれないもの。

〽かこち涙のありさまを、客はそつとさしのぞき。

西行　何やらをかしいことというて泣く人だ、問ひたいことがあらばきり〳〵問うて早く寢たがよい、身どもは涙を買ひには來ぬわいの。

〽不興も時の緣のはし、寫繪は涙をおさへ。

うつ　世の浮き沈みは七度とやら、思へばわしほど誰よりも苦勞辛苦の身はあるまじ。

西行　ア、コレ〳〵、身の上話なら無用になされ、此方氣晴らしにまゐつたもの。

うつ　サア話すも若しや尋ねる人を。

〽御存じあらば、思はず語りを聞いてたべ。（ト合方）

元みづからは大内生れ、父は北面母は官女、互ひに若木の花の露、情の種を殘し父上には御發心、母さまには三つのとし死別れ、二人の親のお顏も覺えず。

〽あけくれ戀しゆかしいと、思ひくらす心の內、推量してたべ。

田舍人。〽とりつきなげゝば。

西行　アヽコレめつさうな、着る物へ涙がかゝるとはげるわいの、そんな話は西の海へさらりとこつかこの、コレ夜が明ける、ちやつと寝ようぢやあるまいか。

〽身もだへすれば、まあ〳〵待つてとおしとゞめ。

うつ　マアそのあと聞いてたべ、これより妾は家老の手しほで人となりはなつたれども、貧苦にせまり子のある妻を、売るを見かねて我と我身を川竹に。

〽沈みしつらさ。

恥あらはして語るのも。

〽父上尋ぬるたねにもと、知らぬ昔の物がたり。

あはれと思うて下さんせ。

〽こぼす涙をこちらでは、客はよまおくじ胸算用。

西行　アヽ涙が一しづくが六分づゝ、高いもの、酒が三てうし肴が梅干、みづから吸物ともに一両三

分五厘と拂ひをして歸らうか。

〽立つを引きとめ。（トツカ〳〵と西行をとめて）

うつ　コレ申し。

〽人は晴れの下で立つ、つれないお方ぢやマア待つてと、引とむれば。

西行　つれないとはそさまのこと、因果經を說くやうに、エ、何ぢやの親の行末を尋ねるならば、家老とやらに尋ねさしたがよいわいの。

うつ　さいなア。

西行　アレまだかいの。

うつ　悲しいはその家老の身の上、目かいは見えず敵のためにあへない最期。」

西行　南阿阿彌陀佛々々々々々々。

うつ　よう唱へて下さんした、淚の種を見せやんせう。

〽手箱の內より出す白銀細工の袖香爐、掛地一幅取り出し。

ト袋戸より文庫を出して中より掛物銀の猫の香爐を出し、

コレ見さんせ、此猫の香爐は父上のお手にふれたというて家來が妾へかたみ、又此掛地は父樣

の姿繪、母のかたみにありし昔は、佐藤兵衞則清様というて、文武の達人とやらであつたといなア。

西行　ハテそれは結構なことの。

うつ　則ち今日が父上の、御出家となられた月なり日なり。

へおまへも逢うて下さんせ、屛風を假の床柱、姿繪かけて香爐を取出し。

うつ　此焚く香が蘭奢待、反魂香でもあるならばおことばかはすこともあらうに、何をいうても繪そらごと。

へなつかしの父上様、悲しき昔のお姿や、繪に魂のあるならば、娘というてたまはれと、屛風にとりつきしがみつき。

わしや今の身はやうちんへ。（ト愁ひのこなしあつて泣伏す）

へ落ちたわいのとだうと伏し、前後不覺に泣き沈む、客はうろ〳〵きよろ〳〵と、立つたり居たりあげくには、ホツと草臥れぐにやとすはり。

西行　コリヤマア何たる目に逢ふのぢや、たゞしは夢かしらぬ、又掛地の若衆を見るやうな、わろも

わろだ、役目の鯛は釣らいで佛を釣り、坊主になるといふことがあるものか、よい〳〵身どもが尋ねて逢せてやらう、そのかはりになう、コレ〳〵泣寢入に寢入つたさうな、どうでも今夜はお伽番ぢや、アヽまゝよ、盜人に追ひぢやが物着て寢られい。

〽ふとん打ち着せ。

ト泣伏し居る寫繪に蒲團を打ちかけ其身も寐ころび思入。

西行　ドレお庭なりともふみましようか。

〽ころりとこけて、足で屛風を引廻し、暫しは夢を結ぶらん。

トこれにて西行屛風引廻す。風の音ゴンあしらふこと、

〽頃しも彌生の春風に、さそはれ出る閨のうち、さつと屛風をつきのくれば、田舍大盡ものをもいはず思案顏。

ト此文句のうち件の屛風双方へ引あける。蒲團の上に寫繪寐ころび其脇に西行思案のこなしにて居る。合方。

西行　我是非なくも賴朝にたのまれ、義仲の惡逆を諫めんため都へ歸り窺ひ聞けば、逢坂山といふ傾城に性根をうばはれたまふとの風聞。

〽こやつ殷の妲己、天下のために破戒して追ひ退けんと思ひの外。

合點の行かぬ年かつこう、娘と知つた物語、

〽聞くたび／＼に覺えある、肉親の我娘、十七年の生れた月日、逢ふ嬉しさも

餘所に見る、心のうちを推量せよ。

娘と知れても逢坂といふが氣づかひ、若し逢坂にきはまる時は、義仲は我聟同然。

〽緣にひかれて判官と、爭ひしと賴朝に思はれては、猶義仲に憎しみかゝる、

さすれば可愛うてもふびんでも、天下のために殺さにならぬ。

つきぬ緣とてふしぎにも、めぐり逢ひは逢ひながら。

〽思ひ立つたる我大願、破れんことのくやしさに、ほふけて聞いても心では、

火焔の涙をこぼせしぞや。

思へば／＼其方は宿業深き生れつき。

〽せめて產の母親が殘り居るか、育てし靭負が生きて居れば、かうした形りに

はなるまいに、佐藤兵衞が娘とも、いはるゝものが君傾城浮れ女とは何事ぞ、

唐の大和のなげきをば、三十一文字に詠みつらね、鬼神も和らがす。
西行法師が悲しみを。

へ貫之でも小町でも、腰折れにも詠まれうか、悟りきつても子ゆゑには、闇になつたか悲しやと、思はず衣類をぬぎ捨つれば、せむしと見えしは風呂敷包、西行法師の本體をあらはして、寫繪が寢すがたを、つく〴〵と打ちながめ。

ト西行よろしく愁ひのこなしあつて上着を脱ぐ。下に墨染の衣つゆを取りしなり淺黄の風呂敷包を脊負ひ畫面のなりになる。寫繪へこなしあつて、

逢うていはずとせめてまア。

へ夢になりとも見よかしと、寢顏へかゝる血の涙、こたへかねて寫繪が、ワッとばかりに泣出す、夢のさめたが別れぞと、たちのきたまふ衣にすがり。

ト西行うつしゑを飛び越え行かんとする。うつしゑワッと起上り留めて、

うつ　モシ御出家樣、親とも子とも申しませぬ、あかの他人と思し召したつた一言。

へ聞いてたべ。

繪姿と見くらべてもしやと思ひ空寢入り、それぞと聞いて飛び起きるをぢつとこたゆる辛抱は、

お前に大膽な事を致しまする勿體なさ、殊に逢坂山ならば手にかけて殺すとある、始めに僞り後に泣き、わしや逢坂山でないといふ未練ないひわけもせず、たとひ言譯たつたとて、親子の名乘りもなることか、うきつとめをしようよりは、いつそ死にたい殺してもらはうと、死ぬる覺悟もありやうは。

〽浮世にあいてのことなるぞや。

今さらいふではなけれども、逢坂山は姉女郎、妾は寫繪、けふ出始めの其證據は、コレ奥で最前拾うたこの文、これを見て疑ひはらして下さりませ。

〽さし出す文は最前の、逢坂山が讀んだる一通、西行取つて見るよりびつくり。

ト寫繪いぜんの文を出す。西行讀んで見てびつくり

西行　さては石黒左衞門めは、平家の侍飛驒の左衞門よな、鼓の判官と心を合はせおのれが妹を餌に飼ひ、事を計るかたどしました、義仲ともに平家へ一味か、賴朝のたのみはこゝ、實否を糺さん寢間はいづくぞ。

うつ　アレアノ向ふの富士の間の大座敷、今宵はわけて石黒がもてなしと仲居が噂。

西行　それこそなほ氣づかひ、猶豫はたらず、親子の名殘りは私事。

へ天下のためには火に入るとも、時こそうつれと性急に、昔の殘る則淸入道、娘もあとに引添ふて奥の一間へ。

ト兩人ぬき足にて行きかゝるこなしあつて、

ひそかに〱。

ト兩人窺ふこなしにて上手の奥へはひる。此道具靜かにぶん廻す。

本舞臺中足二重、向ふ一面の富士山の書割金襖。本緣付上手障子屋體。下手廻り緣の廊下、上下とも所々に山吹の花盛り、四ツ目垣槇の立木。眞中に結構なる金屛風をたて、朱塗の行燈を置き、本釣鐘風の音にて此道具納る。

へ行く空も、早丑滿の寢入ばな、時分はよしと石黒左衞門、寢間を窺ひぬき足さし足息をつめ、忍びよつて富士の畫の襖をそつと押開くれば、義仲公は餘念なく屛風に上着帶羽織、取亂したるありさまは、運の極めと笑つぼに入り、妹が知らせを待つ間ほどなく、緣板傳ひに來る足音、すは人こそと身をちゞめ、忍びて樣子窺ひ居る。

ト本釣鐘風の音にていぜんの石黒下手より窺ひ〳〵出て、上手の障子の内を覗き思入ある。此時バタ〳〵と下手に足音する。これにて石黒氣をかへて上の柴垣の後へかくれる。

〽入り來るは西行法師、那落までも放さぬ風呂敷、しつかと近江の太郎衣、きりりと卷上げかい〴〵しく。

ト下手より西行出て來り屏風の外に立ゐ。

西行　ヤア〳〵義仲、その身將軍の職をいたゞき、西國追討の命を受けながら、賣女に迷ひ奢りをきはめ諸卿方への狼藉我まゝ、罪を亂せと頼朝のたのみによつて。

〽佐藤兵衛則清入道西行法師、實否を糺しに向ふたり、お出やれやつと呼ばつたり。

〽石黒左衞門飛んで出で。（ト柴垣の後より石黒出て）

石黒　ヤア夜陰に一人案內もせず、寢所へ忍ぶ無禮者、そこ一寸も動かせぬ。ヤア〳〵いづれも君の寢所へ忍びし曲者、からめ捕られよ。

男達四人　心得ました。

ト上下の柴垣の間より男達四人出て上下へ取り卷く。

竹六　何者なればすゐさん至極。

四人　その名を名乘つて繩かゝれ。

　〽繩にかゝれと呼はつたり、西行じろりと打ち見やり。

西行　ム、しをらしき稻子ども、武藝は久しく捨てたれど、賴朝に逢つたる時、かけ鳥を射て手なみを見す、今又木曾が枕元、寢そびらかして眠りの夢をさましてくれん。

　〽大手をひろげて待ちかけたり。

石黑　こしやくな一言、ソレいづれも。

四人　心得ました。

　〽取つたとかゝるを右に受け、左かへしてづでんだう、左手へかゝればこなたへころり、兩手かへしに兩腰なげ、向ふの霞死活の術、さしもの大勢討ち討たれ、皆ちり〳〵に。

ト西行へかゝる。立廻りよろしくあつて四人ともに下手へ逃げてはひる。石黑きつとなつて。

石黑　いらざる坊主の腕立て、憎さも憎し、石黑が刀の切味こゝろみよ。

へ走りかゝつて振り上ぐる、當たか蹴たか石黒左衞門、ウンとのつけに反りかへる、西行見捨て。

ト拔打ちに切付る。西行そのまゝ立廻つてポンと當る。これに薄ドロ〳〵になり石黒たぢたぢとあとへ下る。西行きつと見て、

西行　ヤア義仲、我手なみに恐れて出ぬか、放埒尾籠の閨の內、恥あらはして見參々々。

へつゝと寄つてたてたる屏風引きたくれば、內に大將逢坂が懷劍持ちし腕捻ぢあげ、烏帽子裝束はなやかに立出でたまへば、さしもの西行はつと飛び退き、こはいかにと驚く顏を、はつたとねめつけ。

ト西行屏風を引きのけると內に義仲金烏帽子狩衣さしぬき、逢坂山が懷劍を持つた手を押へてゐる。

義仲　おのれ文武の德あると、世上の噂を鼻にかけ我意を振舞ふことをかしや、義仲が見參に咎の矢先で息の根とめん、受けて閻魔へ訴へよ。

へ女が持つたる懷劍もぎとりつゝ立ちたまへば、びくともせず胸くつろげてつゝと出で。

西行　西行が胸板には釋尊一代の經々、仁義禮智の五常も納め、かため置いたる胸のうち、我より邪

念の劍が立たば立てゝ見られよ、サアこゝをく。

へ的になつてぞ待ちたまふ、悶絶したる石黒左衞門、性根をつけてむつくと起き。

石黒　ヤア大將の劍に及ばず、坊主が首をこの劍。

へ飛んでかゝるを手裏劍の、はつしと來るがとたんの拍子、あへなや石黒左衞門うんとばかりに息絶えたり、なうかなしやと逢坂山は走りより。

ト石黒心づき立たんとする。義仲懐劍をとつて手裏劍に打つ。仕かけにて石黒の肩先へ立つ。これにて苦しみ落ち入る、逢坂山は死骸に取りつき、

逢坂　なう兄上、この刃物で大將の命を取らんとのいひつけを、自害する氣で受合つて死ぬるところをもぎとられ、今又おまへの命取る、此劍もいかなる因果情けない。

へ泣くより外のことぞなき、西行不思議の顏色にて。

西行　ヤアアラ心得ず、愚僧が目あての切先、出頭第一の石黒へ打ち附け給ふ御所存はな、

義仲　ホヽヲ彼は平家の侍、本名は飛驒の左衞門。

西行　ムヽそれ知つて又四天王の舊臣を遠ざけ、彼一人を御愛臣とはなぜなされしぞ、

義仲　燕雀なんぞ鴻鵠の心を知らん、四天王のいさめは理の當然、遠きをおもんぱかつて左衞門がすゝめに隨ひ、放埒堕弱に身を持つも内通さして敵の油斷、用心の網を張らすまいため。

西行　ヤア愚か〳〵、我に秘密の手立あれば敵に又智略なくてはかなはぬ、血氣の軍慮は危い〳〵。

義仲　さほどに思ふ御邊の心、我軍略を見せ申さん。かねて登せし都の間者。ヤア〳〵それに控へし桶野根の井早やまゐれ。

ト義仲向ふへこなし、此時向ふにて、

兩人　ハア――。

〽仰せにはつと桶野根の井、さしも凛々しき出立に、御前間近く立出でたり、義仲見るより。

トこの淨瑠璃にて花道より根の井小彌太、桶野六郎小具足腹卷大小好みのなりにて出で來り、根の井は上手桶野は下手へ平伏する。義仲兩人をきつと見て、

義仲　いかに兩人、都の樣子は何と〳〵。

根の　ハツ、かねて主君の御せを受け我々兩人姿をやつし、〽忍び〳〵に窺へば、鎌倉よりの内意により、主君に跡なき虚名をきせ、館に

押しよせ我君を、討つて取らんず彼が結構、我々かくと見るよりも、飛驒に隨ふ軍卒の、腕骨肩骨或は袈裟切り車切り。

ト この文句のうち根の井のりよろしくあつて、

桶野　雜兵端武者のきらいなく。

〽眞向まびさし後づけ、あたるを幸ひ切りまくり、捻首かき首縱橫無盡にかけなやまし。

ト 桶野よろしく。

根の　殘らず討取り、

桶野　立歸つて、

兩人　ござりまする。

〽木曾の耳目とかくれなき、武勇のほどぞたくましゝ。

〽義仲莞爾と笑みたまひ。

ト 兩人よろしくのりにてよろしくあるべし。

義仲　ホヽ、ヲ出かしたく〳〵、此上とも油斷なきやう示し合して何か手つがひ。

兩人　かしこまつてござりまする。

義仲　行け〳〵。

兩人　ハツ。

〽はつと答へて兩人は、かしこをさしてかけり行く。

ト兩人こなしあつて樋野は上手、根の井は下手双方へはひる。

〽大將法師に打ち向ひ。

義仲　かゝる手配りなしおくに、これにも御坊批判のあるや。

西行　ハヽア天晴するどき木曾殿の軍慮、面白し〳〵、さりながら高位高官の舘へふんごみ、月卿雲客への浪籍、科なき者を捕へなぜ拷問にはかけられしぞ。

義仲　ホヽヲその言譯はいとやすし、たとへを取つて申さん。

〽しづ〳〵立つて富士の畫の、描いたる襖兩方を、細目にひらき座に直り。

トあたりへこなしあつて正面の襖を細目にあけて、大小本調子の合方になる。

あれ見られよ西行、富士は三國一の名山、八葉の峰とはいへど繪に描く時は三つの峰、これ日本の神寶にして則ち三つに表せし山、西方を開き三つに分けたる心は一方は神鏡、此神鏡こそ

都にましします大君の御手にあり、又一方の峰は草なぎの寶劍、此御劍は須磨にましします君所持したまふ、まづこの二種は有所明白、たゞ情なきは眞中の峰にたとへたる神璽の御箱、御先代崩御の節より紛失して有所知れず、平人の手にあらうやうなし、心元なきは高位高官を思ひ舘へふん込み狼籍するも心は家さがし、三國一の名山もあれあの如く破れたる時は端山繁山、御寶とてもその如く一つかけても石瓦、日本の寶とはいはれぬ、何卒神寶を尋ね出さんと忠義にはかる狼籍も、却つて不忠のうたがひ受け、平家に勝る惡逆と世上にいはるゝ無念さを、推量あれや則清入道。

〽泪をうかめのたまふにぞ、西行法師もことはりと、思ひながらも底心をさがし見んと膝立直し。

西行　畫がきし富士を三つの寶になぞらへての言譯もつとも〳〵、さあらばこの三つの峰を、人間にとつては三德かねし名將、いづれの人を名ざすべき、御所存いかに。

〽とありければ。

義仲　ホヽヲそれこそはまづ眞中が右大將頼朝、今一方の高根は蒲の冠者範頼公、こなたのはげしき峰こそは。

西行　義仲公か。」

義仲　イ、ヤ源九郎義經。」

西行　然らば貴公の御身をば、いづれの山にたとへていはん。」

義仲　ヲ、この義仲は山にとつては愛鷹山、前にあつては敵を防ぎ後を守つて戰功なせども、終には牧の狩場となり、野飼の駒にむちうちて都をひらくは今の內、無念なとも思ふにこそ、我心底此通り。

〽ずつと立つて開きし襖、兩方一度にはつしと閉て。

あれ見られよ、まつその如く賴朝義經範賴兄弟三人、心を合せ天下をかたむるものならば、唐天竺が一つになり、平家に加勢なすとても、いつかな〳〵思ひもよらず、源氏の末は鶴龜の、猶行末もめでたからん、思ひまはせばまはすほど賴朝は果報人、いかなれば義仲は命を敵の矢先に當て、辛勞辛苦をしのぎ來て、惡人よ愚將よといはれながらも天下のためと、耳を閉ぢ口を閉ぢこたゆるつらさは湖淺し、思へば富士もまだひくし。

〽終には都を追拂はれ、屍に泥に埋もれん。

チエ、。

〽淺ましさよと良將の、仰は後に近江路や、粟津が原で流矢に命を果したまひしを、思ひ合すも哀れなり、西行悲歎の涙にくれ。

西行　その歎きはさることながら、なすことすること天下のため、まさかの時は愚僧がいで申開きまゐらせん、御縁もあらば又の參會、おいとま申す。

〽座を立ちたまへば。

義仲　ヤレ心強や西行、かくまで心底あかせども、貴僧はうたがひ晴れざるか。

西行　こはきやうがる仰せ、うたがひ晴れたればこそ此まゝにてまかりかへる。

義仲　イヽヤ蛇は一寸にして其氣を得る、最前石黒が悶絶は死活と見えて死活にあらず、眼前の神罰は何故ぞ、貴僧が脊負ひし風呂敷包は、正しく日本の寶と見た目は違はぬ、うたがひ晴れたら急いで渡してくれられよ。

〽しさつて拜をなしたまふ、頓智のほどぞたぐひき。

西行　ホヽヲあつぱれの推量なり、大君崩御の砌り某しを密かに召され、未前を察するに亂世近きにあり、汝に此神寶を預くる、三德かねし名將を見立て相渡せよとの臺命、ほどなく源平の戰は

じまろ、扨はと思ひ歌枕と世上へ云立て、遁世して諸國を廻り賴朝に逢ひたれども兄弟の愛薄き人相、此人へも渡されず、貴公は又愛に溺れ身の上のくもりさへ見えず、さるによつて此御箱、渡すことかなはぬ〳〵。

トきつといふ、義仲思入あつて、

義仲　それ。

〽聞くよりさとき大將、ひらりと庭に飛んで下り、泣沈んだる逢坂をとつてひきよせ。（ト義仲逢坂山を引きつけ）

ふびんなれども平家の餘類、愛に溺れぬ言譯せん、覺悟いたせ。

〽御佩刀に手をかけたまへば。

逢坂　元より覺悟の身の上なれば、君のお手打ち此身の本望、未來はせめてお宮仕へ、それが冥途へよい土產。

義仲　誠心全き志、あつぱれ妓女の鏡とならん、最期を淸く臨終正念。

逢坂　南無阿彌陀佛。

〽すでにかうよと見えければ。

西行　ア、コレ〳〵、其女殺さしては西行が手をおろすも同然、殺生戒を破らすか、まこと寶が受け取りたくば其女を助けて殺せ。

義仲　ホヽヲ實にもつとも、助けて殺す工夫はこれに。

〽逢坂山が黑髮を、根よりふつゝと切りたまへば。

ト義仲逢坂山の髮を切拂ふ。

逢坂　これは。

西行　ム、天晴々々、助くる仁心殺す智謀、勇は元より其身にあり、三德かねし名將へ御寶渡さん、大君へさし上げられよ。

〽脊負ふたる、風呂敷包の內よりも、神寶の御箱を取り出す、首が落ちても西行の、風呂敷包放さぬは、實にことはりと見えにける、義仲つゝしんで頂戴あり。

義仲　ありがたやかたじけなや、我大願成就せり。

〽義仲つゝしんで頂戴ある、折しも奧に聲あつて。

ト義仲西行の渡せし神寶の箱を頂き思入、此時奧にて根の井小彌太、桶野六郎の聲。

根の　ヤアいづれも、我君御出陣の時刻。

兩人　はやまゐれ。

軍兵大勢　ハアー

〽軍卒隨へ桶野根の井、小手脛當に身をかため、君の御前に立出で兩手をつかへ。

ト大小入りになり、上手より根の井、下手より桶野、立烏帽子大紋素袍のつゆをとり凜々しきなりにて軍兵附添ひ出る。

根の　敵陣の空虚をはかる今宵の手つがひ。

桶野　我君樣にも御出陣あつて、

兩人　しかるべくぞんじまする。

義仲　いかさま兩人がことば圖にあたれり。恐れ多くもこの口の本の神寶、無事に戻らせたまふ上はつゝがなく大君へさゝげ、鎌倉の追手を引受け、はなばなしき勝負のとげん。

根の　我等も君に隨うて寄せ來る敵に近江路の、粟津が原に打つて出で。

〽縱横無盡に切り立てゝ、一泡吹かせてかけちらさん。

トのりにて根の井よろしく、

桶野　たとへば敵に項羽の勇ありとも、我また何の恐るべき。

〽いでや最期のはれ軍、太刀眞向にふりかざし、こゝになぎ立てかしこに切り伏せ、血汐は秋のからにしき、紅葉染めなす皆くれない。

ト桶野のりよろしく、

根の　武名を四海にかゞやかさん。

桶野　お心安かれ。

兩人　我君さま。

〽いさみ立つたる首途の勢ひ、實に木曾殿の身内にて、四天王とも呼れたる、武勇のほどこそめざましゝ、逢坂山は泣きしほれ。

逢坂　愚痴は女子の常なれど、兄さんにははなれ君には別れ悲しきものは我ばかり、あぢきない身のなり行きぢやなア。

〽かこつも道理道心の、西行法師はこれよりも、風呂敷包の苦をのがれ。

西行　有爲轉變の世の中の、火宅を出でし西行も五戒のための此使、御本心を聞く上は愚僧も安堵。

義仲　〽お暇申すと立ち出る。

ト西行は行きかゝる。義仲こなし、

義仲　暫く待たれよ、其許頼朝に對面の砌り、白銀の猫を餞別ありしと傳へ聞く、義仲の有合せし猫を進上いたし申さん。

〽一間のうちより寫繪を呼出し、手を取りてなたへ直し置き。

ト上手の障子を開き内に寫繪いぜんのなりにて義仲伴ひ來り、

傾城は猫といふ、コレこれも娘ではない傾城寫繪、サア受取召されい西行法師。

〽懷中より一札取出し差し置けば、西行取つて押しひらき。

西行　こりや寫繪が身受の一札。

うつ　そんなら妾の身の上は。

義仲　今日よりその身は勝手次第、これが貴僧へ當座の餞別。

西行　過分々々、頼朝にもらひし猫も門前の童にやる、今またもらひし此猫も、尼道心の道連れに。

〽やるとはいへど心はたのむ、寫繪は籠中を放るゝ放し鳥。

うつ　仁心厚き君のお情け、苦界を放れて今日よりも、

逢坂　佛道教化尼道心、
義仲　出家堅固に世のいとなみ、
西行　哀別離苦も目のあたり、
根の　切るもほどくも恩愛妹脊、
桶野　操まつたき孝心貞女、
西行　名殘りはつきじさらば、
皆々　おさらば。

〽さらば〳〵の暇乞、へだつる雲の絶間なく、あらはに見えぬ襖の繪、走り歸つてつゝぼりと、打ながめ見るありさまは。

ト此うち寫繪四ツ目垣の竹を引きぬき西行に網代笠と、竹を杖にとさし出す。これにて西行花道へ行きふりかへり、双方皆々思入あつて、西行も立住ひこなしあつて、

西行　風になびく富士の煙の空に消えて、行衞もしらぬわが思ひかな。

ト義仲襖の富士と西行にこなしあつて、

義仲　富士見西行これならん。

女兩人　アヽモシ、

ト双方よろしく引張り仕組、

へ末世の繪にも傳ふらん。

トよろしく段切にて、

幕

ト幕引附ける。西行花道にて畫面の見得になると、本釣鐘にてこなしあつて花道へはひる。あとよろしくシヤギリ。

富士見西行（終り）

昔談栖三荘太夫

むかしがたり　さんしやうだいふ

當盛見立三十六花撰
三荘太夫娘 おさん

昔談柄三莊太夫（三莊太夫——五幕）

京都島原の場
三條松原の場

序幕

役名　由良湊三莊太夫、粱川數馬、大江の郡領時廉、岩木判官政氏、黑石主税、牛淵段八、馬田傳六、非人山岡權六、大和田藏之進、仲居おたつ、藝妓菊野、等。

本舞臺一面の平舞臺。向ふ長暖簾、左右共折廻し塗骨障子屋體。上下共出はひりあり。すべて島原揚屋座敷の體。こゝに舞妓二人振袖にて扇を持ち舞を舞うて居る。上手に黑石主税袴着付大小のなりにて是を見て居る。此の牛淵段八、馬田傳六着流し大小のなりにて杯押合うて居る。藝者菊野酌をして居る。此の傍に若イ衆額へ扇をかざし唄を唄うて居る。臺の物酒肴を取亂し仲居一肴を取つて仲居二三酌をして居る。此の居並びよろしく、上方唄の切にて賑やかに幕あく。

若衆　ヨウ〳〵こちの人〳〵。
皆々　ヤンヤ〳〵。（ト兩人よろしく振あつて納る。是より踊り地になり
舞子　ヲヽしんどやなア。
菊野　ほんにお前方、ちつと見ぬ間にゑらい者になつたぞえ。」
舞一　ヲヽしんき、菊野さん何云うてぢやアなア。」
舞二　たんと云うておくれや。」
菊野　イヱ〳〵本間ぢやわいなア。」
段八　コリヤ〳〵菊野その筈ぢや、皆身共が仕込み手ぢや、何ときつい者に成り居つたであらうな。
菊野　そんならお前さんの御仕込みかいなア。
仲二　ほんにお前方、能いお師匠さんを持ちなさんして、
仲三　それ〳〵仕合せ者ぢやわいなア。
舞一　アレまだいうてかいなア。
舞二　わしやいやいなア。
傳六　イヤ〳〵、何ばういやと云うても水揚は牛淵殿が受込みぢや、なアおしげ。」

。

仲一　それいなアどふで一度は。といふ中にもよいお客取つてずやなア、よう頼んだがよいわいなア。

若衆　ヨウ〱頼れてさま〱。

段八　マ、おだてゝくれな〱、ア、あつや〱。（ト段八無性に扇遣ひする）

主税　よう〱段八殿、イヤ貴公は素早い男だ、モウ口を掛けたの、身共は又そこらに執心をかけた女子がござるが、一向に相手に成り居らぬで、ほとんど心配仕るて。

段八　成程、貴殿程の武士もア、戀故に。

主税　お察し下され。（トこなし）

たつ　ア、最前から三味線弾いてしまうても、誰も太儀とも云うてはくれず、色氣は猶なし杯は下されず、ア年は取るまいもの、南無阿彌陀佛〱〱々々々々々々。

　トこなしあつて、下手にある茶碗へ銚子の酒をつぎかぶ〱飲んで居る。

若衆　時に大分お座敷がめいつて參りました、何と是から私がわに口踊りと申すのを御目に掛けませう。

女皆　そりや面白からうわいなア。

若衆　さらば是にてわに口踊りの始まり〱。（ト大平の盃を持ち立上り踊らうとする）

主税　ア、コリヤ〳〵、われが踊りでは何分にも恐れる、下に居やれ〳〵。

若衆　左様なら皆様を、一呑みに致しませうか。

主税　かしましいと申すに。

段八
傳六　ヱ、控へて居やれ。

若衆　ヘヱ、。（ト下に居る。主税こなしあつて）

主税　コリヤ〳〵菊野、是へ参れ、身が用事がある、ずつと参れ。

菊野　ヱ、。アノ私にかえ、イヱ私しや矢ツ張り爰が勝手でございます。

主税　イヤサ、身共が用事があると申すに。

菊野　ハ、イ。（トやはり立たぬ故段八傳六立つて菊野の傍へ来て）

段八　ア、コレ、さりとては愛想のない、あれは主税殿がお手前に、何か密々の御用があると御意なさる程に、早うあれへ参れ〳〵。

傳六　平日から何かと御恩を蒙る主税殿の事、我々が頼み、サア菊野、あれへ参つてくりやれ。

菊野　成程、お前様方の夫程までにお頼みぢやけれどなア。

段八　参る事はならぬと申すか。

菊野　あい。まアそんなものでござんすわいなア。
段八　うぬ憎くい女郎め、武士に隨分口叩かせ。
傳六　いやだとぬかいたれぱとて、其儘に置かうと思ふか。
段八　イザお手貸されい、此のまゝに主税殿の傍へ引立て。
傳六　夫れがよろしうござる。
段八
傳六　サア女郎め立たふ。（ト兩方より菊野を引立てようとするを）
仲一　まアく待つて下さんせ。（ト双方を引分けこなしあつて）お前樣方も何の眞似でござんすえ、コレ何ぼ藝妓さんはお前樣方のお揚げなされても、座敷の內は仲居の預り、惡い事お氣に逆らう事あらば、かうくぢやと、私になぜ云うては下さりませぬ、はい餘り手込して下さんすな、はい成りませぬわいな、コレ菊野さんお前もお前ぢや、お客にさからふ事がある物かいな、チトたしなんだが能うござんすぞえ。
菊野　サア段々とのお前のあつかひ、嬉しうござんすわいなア。
段八　何の事だ、客の贔屓もしもせずに、藝妓の肩持つ仲居とは。
傳六　神武此の方聞くが始めてだ。

段八　とても色氣に緣なき我々、

傳六　とは云ふものゝ。（ト菊野の傍へ行かうとするを）

主税　御兩所、是へござらつせえ。

段八　でも餘りな仕方、

傳六　夫ぢやに依つて。

主税　ハテ扨て、木折に行かぬが里の花、いやぢやと申さば其儘にさし置かれい、又某の胸にござれば、是よりは又手を變へ品を變へ口說落して閨の花。

段八　成程、コリヤ一段とよい御思案。

傳六　それも手活にならぬ時は。

主税　是非に及ばぬ落花狼藉。

菊野　エヽ。（トこなし）

主税　サまた能い思案もござらうわえ。

段八
傳六　御尤も。

主税　サアわつさりと酒にせう。

兩人　よろしうござらう、それ杯々。（ト兩人杯を持つて皆々の前へ置く）

仲居　アイ〳〵。

傳六　銚子持て〳〵。（ト此の時おたつ能き程に醉ふたるこなしにて、よろしく銚子を持つてべつたり座り）

たつ　お酌はいつでも相變らず、おしきせ振りにたぼの私が。

ト此の内段八杯を取り上げる。おたつ酌を仕乍らにつたりといやらしきこなし。段八見て、

段八　アヽコレ〳〵、其のしたゝるい面は取りおけ〳〵、どこで喰うたやら熟柿の匂ひがする、すつとそつちへ寄つたり〳〵。（トおたつこなしあつて）

たつ　アノさりとては戀知らず、なんぼ年寄りでも昔は花を咲かせた仲居でござんす、それが嘘ならしつぽりと抱〆めて御覽じませ、自慢ぢやないが伽羅の香は、幾夜止めても留めあかぬ、色になる氣はないかいなア、ヲヽ、しんきやと袖をふる。（ト淨瑠璃やうによろしく云ふ）

主税　はゝゝゝ、何と御兩所、しつかい氣違ひの沙汰でござる。

たつ　何ぢや氣違ひぢや、ヲヽ、氣違ひぢや、氣も違はずに何とせう、なア我が子を返せ、我が子を返さにやかみつくぞ、喰ひつくぞ。

トそこら駈け廻りこなしあつてトどふと横にねる。皆々見て、

菊野　ヲヽをかし、おたつどんのいつもの悪酒。

仲一　それいなア、とう〳〵寝て仕舞うたわいなア。

仲二　酔生でもござんせう。最前からの茶碗酒。

菊野　それはさうと、かうして居る内政大臣様のお出に間もあるまいぞえ。

仲一　サア皆打揃うて、お迎ひに行かうではござんせぬか。

若柴　成程それがよろしうござりませう。

菊野　サア皆さん、主税さん、お二人さん、是にゆるりと。

段八傳六　勝手に仕居れ。

仲一　ても悪い受でござんす。

菊野　サア行かうわいなア。

トこなしあつて上方唄になり此の同勢皆々花道へはひる。後に主税段八傳六おたつ残りこなし。主税皆々の後見送り。

主税　モウよい〳〵、おたつ起きぬか、密かに頼む仔細がある。（と是にておたつ起上り四邊を見て）

たつ　主税さん、最前あなたがお頼みの、彼のお人と仰しやるのわえ。

主税　只今迎ひに參つた政大盡、彼奴を馬鹿者に仕立てる魂膽、廓に馴れたる其方なれば、何分共に頼んだぞよ。

たつ　そりや氣遣ひはござんせぬ、客をたらして放埒者に仕立てるは、憚り乍ら私が胸に。

主税　それ聞いて身共も安堵致した。

たつ　左樣ならばあの私は奥へ參つて仕拵らへ、然し此事うまうやつたら、御祝儀は澤山下さりませうな。

主税　氣遣ひ致すな、萬事は胸に。

たつ　もし正のものがようござんすぞえ。（ト小判の形を見せる）

主税　ハテ扨て慾氣は。

たつ　エヽ。

主税　イヤサ、早う行きやれと申すに。

たつ　ハテ參りまするでござりますわいなア。（トこなしあつて唄になり奥へはひる）

主税　ハテ扨て氣さつな奴ではあるわえ。（ト四邊を思入。合方になり）ナニ御兩所、郡領公の仰せを受け、貴殿方の助力を頼み岩木を當主と申しながら、柔弱者の左衛門政氏、きやつまで片附ける

その爲に、保養と拵らへたる大江公のお進め故、心を置かず日毎の大酒、傍に附添ふ某とてもうわべは忠臣顔に見せ、そゝり立たる廓の酒、まア大半は馬鹿者に仕立てたではござらぬか。

段八　左樣々々、事成就のその上は我々が立身出世、時廉公の御前よしなに。

傳六　お取なしの儀は、何分願ふは黒石氏、此上とも。

主税　氣遣ひ召さるな、身にかへても承知致して罷りある。（トこなし。此の時花道揚幕にて）

女皆　サア〳〵早うござんせえなア。（ト主税向ふを見て）

主税　ありや殿を迎ひの女が聲、イザ御兩所御出迎ひ。

段八傳六　承知致した、イザ主税殿。（トいづれも出迎ふ事。花道揚幕にて）

女皆　サア〳〵ござんせいなア。

ト謡へ鉦入り出の唄、賑やかなる鳴物を冠せ花道より政氏羽織衣裝のこしらへ、少し酔ふたるこなしにて、舞妓兩人にて手を引いて出て來る。後より若イ衆大勢にて政氏の後より日傘をさし掛ける。此次ぎ梁川數馬衣裝上下大小謡への寶塔の箱を抱へて出る。後に菊野仲居附添ひ出る。是と同時に東の假花道より、時廉羽織衣裝大小なり、紺看板の仲間一人附いて双方よろしく花道に留り。

政氏　すめらぎの御代榮えんと東なる、陸奥山に黄金花咲くと詠ぜしは、それぞへだつる金華山。

時康　處は名に負ふ島原の、花を商ふ君達が誰が結び人を〆めもみじ。
政氏　白きを見ては夜な〳〵に、つどひ集まる曲輪の賑ひ。
時康　花を集むる一里は、實に今の世の喜見城。
政氏　樂しみ極まる廓の花、ハテひとしほの詠めぢやなア。
數馬　ハツ、君の御諚の如く、全盛並ぶ方なきいづれ劣らぬ花菖蒲、彼の古語にも申す如く、傾城傾國とはよく申したものではござりまする。
政氏　ア丶去りとは堅い〳〵、其樣な事取置け〳〵。
中間　まづ〳〵あれへお越しなされて。
時康　ハテ扨て不粹な床急ぎ。
數馬　イザ我君樣。
皆々　サアござんせいなア。（ト矢張り右の鳴物にて兩花道とも舞臺へ來る。主税となしあつて）
主税　是は〳〵我君樣には早くのお入り、御酒宴のもふけしつらひ置きましたれば、イザまづ是へ。
二人　お通りあられませう。
政氏　出迎ひ大儀。（ト政氏上手へ通る。皆々よろしく住ふ。此の内主税奥へ向ひ）

主税　御酒宴の設け、急いで是へ。（ト奥にて）

たつ　アイ〳〵。（ト此の内數馬寶塔の箱を飴き所へ直し）

數馬　ハツ、我君樣へ申上げ奉りまする、遊里とは申し乍ら全盛とは、ハテよく名附けましたものではござりませぬか。

主税　アイヤ〳〵數馬殿、そりや何を云はるゝ、御遊興の妨げ控へ召され。

ト此の内時廉笠を取り主税を見て一寸囁き合ふ。此の内おたつ杯を運ぶ。

傳六段八　ヤあなた樣は。大江の郡領時廉樣。

時廉　ム、主税を始め其方達も早これへ參つて居つたか。

主税　ハツ、我君、郡領公御出でにござりまする。

政氏　何郡領殿が。ヤ誠に貴殿は。

時廉　岩木氏、貴殿には早々との廓入りの身に、今日は鬱散の饗應にあづからんと存じ只今是へ。

政氏　その四角四面は取り置いて、只酒の事〳〵、誰ぞあるか、酌を取れ〳〵。

菊野　アイ〳〵、私がお酌をしようわいなア。（トなみ〳〵とつぐ心。政氏杯を持ち）

政氏　ヲ、そちは大分強い酌ぢやなア。ハテ美しい。(ト呑ほして)　イザ郡領公。

菊野　ハイ。(ト菊野杯を持ち時廉の傍へ持ち行く。時廉うけて)

時廉　是は大杯、コリヤ〳〵身は其様には行けぬわい。

政氏　ア、さりとては悪い手前、コリヤ〳〵只今予に酌致せる通り、ずつとつげ〳〵もつとつげやい。

菊野　アイ〳〵。(ト又酌をする)

時廉　是は迷惑々々、併し御献の此の杯、一杯受けぬも何とやら、サ、つげ〳〵。

段八　左様々々、折角我君の思召なれば。

傳六　コリヤ一旦召上られずばなりますまい。

主税　ヨウ〳〵、コリヤ郡領様にはきついお楽しみでござりまする。

三人　ヤア見事〳〵、恐れ入つてござりまする。(ト時廉ぐつと呑ほして)

時廉　ヤなか〳〵大さん、イザ政氏公、此の杯は失礼乍ら其元へ返杯。

政氏　イヤ返杯とは忝い、ドレ頂戴致さうか。(ト杯を取る)

数馬　アイヤ我君、そのお杯暫く。

政氏　なんと。

主税　コリヤ時廉公のお杯、何故あつて、

傳六
段八　止め召さる。

數馬　サアお止め申すは此の程より、日夜わかたぬ御酒宴に、かの蜂龍の大杯にて酒戰となづけし御戯れ、宿醉日毎に及びなばたとひ百藥の長たりとも、御身の害にならんは必定、そこを存じて御止め申す。憚り乍らその大さん、お控へあつて然るべく存じ奉ります。

時廉　ハヽヽヽ、かゝる席にて諫言とは、場席を知らぬアノ若者、併し忠義なものぢやなア。」

トたじる樣に云ふ。

主税　左樣々々、人並々の諫言立はまだ早い、出過ぎずとすつ込んでござれさ。

數馬　やア言葉が過ぎる主税殿、御前のお傍にありながら諫言でも入る事か、共に踊り狂ひめさるゝとは、底意の知れぬ貴殿の胸中。

主税　云はして置けばずばら／＼と、時廉公の御前と云ひ、殊に君の御前にて、底意の知れぬ胸中とは、何を以て何を證據に。

數馬　さればさ、それ聞とがめる程ならば、何故諫言入れめされぬ。

主税　それを汝に習はふか、君は正しく大國の主、是ばかりの御遊興。

數馬　ソレそれが矢張不忠の第一、千丈の堤も蟻の穴より。

主税　ヤア若輩者が何を存じて、重ねて申さば手は見せぬぞ。

數馬　見事貴殿が。

主税　おんでもない事。

兩人　何を。（ト立掛るを）

政氏　兩人控へい。

兩人　でも。

政氏　ヤア立騷いで尾籠千萬、控へ居らう。」

兩人　ハヽツ。（ト控へる）

政氏　イヤ埒もなき事を申しつのり、無禮の段々御免下されい。」

時廉　何さ〳〵、かゝる遊里に何の禮義、その斟酌には及ばぬ事、それは格別イヤナニ岩木氏、此の度今上皇帝の御願ひに依つて、日本國中の國境六十六軒へ國分寺を造營せよとの勅諚、兩人に仰せ付けられ、西三十三ケ國の奉行は某、東三十三ケ國は貴殿の受取り、普請も大半成就して殊の外お上の悅び、其上御領分の金華山より出現ありし珊瑚珠の寶塔、たぐひ稀なる寶と忝く

も天子よりの御所望、則ち其寶塔、今日某受取つて禁庭へ持參致す筈、定めて御用意でござらうな。（ト云へども答なき故）これさ岩木氏、イヤサ寶塔御持參召されたか。
政氏　成程寶塔の儀承知致した、則ち館へ歸るも面倒さに數馬めに持參致させ、後程御渡し申すであらう。コリヤ〳〵數馬、寶塔亭座敷に直し置け。
數馬　ハツ畏つてござりまする。（トこなしあつて）時廉公始めいづれも、御免下され。
ト數馬思入あつて唄になり寶塔を持ち奧へはひる。
時廉　然らば寶塔は詞に隨ひ後刻受取り持參致さう。イザ此上は所を替へて今一獻。
政氏　イヤ拙者は是にて暫時睡眠、お構ひなくともサ、お先へ。
時廉　然らば身共は奧へ參つて。イヤ何主稅兩人、酒宴のもうけ。
三人　趣向致すでござりませう。
女皆　シテ私等は。
時廉　共々參つて酌でも取れサ。
女皆　そんなら皆さん。
三人　時廉公。

時康　ドリヤもてなしに預らうか。（ト唄になり皆々奥へはひる。政氏起上り喉の乾くこなし）

政氏　酔ざめの水の味ひ下戸知らず、コリヤ誰ぞあるか、水を持て。（ト此の時奥にて）

藏之　畏つてございます。

ト是にて政氏又横になる。合方になり藏之進上下大小にて三方に袱紗包みの遺言狀をのせ持ち出て來る。政氏見て、

政氏　ヤそちは大和田藏之進、何用あつて是へ參つた。

藏之　ハツ、御所望の水を差上げんと存じ。

政氏　なんと。

藏之　君は舟臣は水、水よく舟を浮ぶといふ、臣が誠の此の水にて宿醉の眠りをおさましあれ。

ト政氏の前へ三方を出す。政氏是を見て。

政氏　ヤ、コリヤ父が遺言狀。

藏之　サア、御父君政春公、我なき後政氏が行ひあしき事あらば、我に代りて諫言せよと拙者に下さる末期の御書。

政氏　此の遺言狀を持參なせしは。

藏之　御諫言を入れんため。

政氏　ヤ。（ト思入。藏之進詰寄って）

藏之　チヱ、お情ない此方樣はなあ（ト詫への介方になり）　改め申すに及ばねど、君此度の御上京は禁庭よりの勅命にて、一ケ國に一ケ所の國分寺を造營なせよと、おろそかならぬ御役目、その造營もなほざりに日夜廓へ御遊興、たとひ佞人讒者共ふるなの辯に惱ますとも、五十四郡の岩木の御家御大切に思召さば、御止りあるべき筈、數百里へだてし陸奧まで御不行跡の相知るれば、同じ都の大内へいかで知れざる事有らん、役目麁略の御咎あらば數代續きし岩木のお家、沒收あらんも斗られず、さある時には御先祖へいかばかりなる御不孝ならずや、かゝる事とは御存じなく御臺を始め安壽姫樣、君の御無事を祈りのため、氏神岩木八幡へお庭に於て日毎の御千度、見るに忍びず夜を日につぎ御諫言を申し上げんと、今日只今都へ參内、何卒拙者が御諫言御用ひあつて、片時も早く御歸國願ひ奉る、但し國家のためを思召さず佞人讒者の言葉を用ひ、拙者が諫言お用ひなくば二度はおろか、百度千度御聞入あるまでは、此の場を去らぬ藏之進、イザ御返答が承りたうござりまする。（トきつと云ふ。政氏感心の思入あつて）

政氏　アヽ、臣なればこそ面をおかし、よくこそ諫言。（ト此の時上手屋體より時康窺ふ。政氏顔見合せ氣を呑

へて）　イヤ憎くき諫言聞く耳持たぬ。コリヤヤイ、酒池肉林の奢に長じ日夜廓に遊興なすとも、勅命蒙る國分寺造營、首尾よく成就せば身が役目の越度にならんや、五十四郡の領主たる岩木の判官政氏がかゝる遊戯はさゝいな事、入らざる諫言なさずとも汝が職たる國家の政治、なぜ守つては居らぬのぢや、イヤサ何故打捨て出立なせしぞ。（トきつと云ふ）

藏之　サ、その守るべき家國もついには沒收、改易となつては益なき下世話のたとへ、轉ばぬ先の杖とやら。

政氏　ヤア又してもいらぬ繰言、たつて申さば手は見せぬぞ。

藏之　ム、御手討合點、一命捨てゝも御諫言申すは則ち臣下の役。

政氏　まだ〳〵申すか、無禮者めが。

藏之　アイヤ、無禮にあらぬ御遺言。

政氏　ヤ。

藏之　但し御遺言をお背きあるか。

政氏　サアそれは。

藏之　御聞入あるか。

政氏　サア。

藏之　サア。

政氏　サア〳〵。

藏之　御返答承りたい。（トきつといふ。政氏時廉に思入あつてわざとけしきを變へ）

政氏　父が遺言いつかな聞かぬ。（ト立上る藏之進袖をとらへ）

藏之　すりやお聞入はござりませぬか。（ト政氏袖を振り拂ひ）

政氏　くどい事を。（ト持つたる扇をふり上る。時廉ツカ〳〵と出て政氏を留めて）

時廉　アイヤ岩木氏、お待ちなされい、最前からの一部始終一間に於て承つた。イヤ御立腹尤至極、ヤイ藏之進、アノ其方は文武に秀し侍と承つたが大きな相違、コリヤ火は火を以て靜めるといふ所へ心が附かぬか、麁忽者めが、岩木氏は陸奥にて五十四郡の主でないか、かほどの遊興なしたとてそれを放埒墮弱などゝは、科なき主を家來の身で科人に落す道理、何と岩木氏、左樣なものではござらぬか。

政氏　如何にも貴殿の仰せの如く、遊里で眞面目な異見だて、とんと浮世を知らぬ堅造、折角醉うたをさまして仕舞うた。

時廉　イヤかゝる不粋にお構ひなく、イザ設けの席へ。
政氏　御同伴仕らう。（トひよろ〳〵として立上る。時廉、藏之進を見て）
時廉　コリヤ藏之進、人聞けがしの忠義顔、此の郡領は呑込めぬ、誠忠義を思ひなば火を以て火を静むる工夫、さは威張らずと共々に、奥へ参つて座敷を持ちやれ、イヤそれとても陸奥の不骨者では成るまいわい、ハ、、、、、。イザ岩木氏奥へ参つて。
政氏　色とり共に酌をとらし。
時廉　今宵は夜と共、
政氏　呑みあかさん。（ト是にて藏之進思入あつて）
藏之　スリヤかほど申しても。
政氏　廓の酒には家藏も。
藏之　ヤ。
政氏　見返られぬわ、ハ、、、、、。

ト奥になり政氏藏之進に思入あつて時廉附き奥へはひる。後合方、藏之進残りきつと思入ありて遺言状を懐中なし。

藏之　扨ては佞人黑石等がお傍にあつておもねりへつらい、放埒堕弱になしたるか、打捨て置かばお家の大事、仕宜に依つては命を捨ても、ム、さうぢや。

ト奥へ行かうとする。數馬奥よりツカ〳〵と出て。

數馬　藏之進樣、暫く〳〵。

藏之　ヤそちは數馬か、ム、。（ト思入あつて數馬を引附け）コリヤヤイ數馬、若年なれど其方は忠臣無二の者なる故、一學殿の目がねにて此度都の御供なし、朝夕お傍にありながら、かく御身持不行跡をなぜ御諫言申し上げぬぞ、そちも廓の色香に迷ひ佞人讒者に組なせしか、見下げ果たるうつけ者めが。（ト扇にて打据ゑ突放す。數馬思入あつて）

數馬　その御疑ひはさる事乍ら、我君政氏公には誠御放埒にはござりませぬぞ。

藏之　ヤ何と。（ト合方きつぱりとなり兩人邊りへ思入あつて）

數馬　サ藏之進樣には御存じなき、御家の系圖とくより紛失、密かに詮議なしたる所郡領殿が仕業故、わざと向ふの手立に乘り、本心堕弱と見せかけしは、系圖を奪ひ返さんばかり、只今君にも御本心お明しなされん御所存ならんが、時廉殿を憚りてわざと情なき今のお言葉、それと察して君の御所存おあかし申す、藏之進樣、疑ひ晴して下さりませ。（ト是にて藏之進思入あつて）

藏之　ム、、スリヤ御本心御放埒にてはあらざるか、チエ、忝い、是でこそ我君樣、かくとは知らず今の無禮、イヤ數馬殿にも打ち打擲、拙者が麁忽は許して下され。

數馬　イヤ打つも打たるゝも私ならず、君を思ふ忠義故。

藏之　あゝ同じ臣下でありながら、君を遊里へいざなひて、

數馬　共に廓の色酒に、

藏之　性根を亂す輩もあり。

數馬　藏之進樣。

藏之　數馬殿、賴み少なき。

兩人　世の中ぢやなア。（ト兩人思入。此の時奥にて）

菊野　數馬さん〳〵、殿さんが呼んでぢやぞえ。

數馬　ハツ只今それへ。

菊野　數馬さん〳〵。

數馬　エ、忙しない、イヤ何藏之進樣、お家に仇なす時廉殿、シテ貴殿の御心腹は。

藏之　身共が心底、コレ。（ト囁く）

數馬　フム、スリヤお命を捨てられても。

藏之　手延にならぬおんてき時廉。

數馬　天晴忠義の其元ながら、國に御座ある櫻戸殿、まして幼き民千代殿、歎きの程も思召し。

藏之　アイヤ、妻子に引かるゝ性根は持たぬ、心に掛かるはお家の政治、もし某相果てなば若年なれども貴殿にも、兄一學の差圖を受け、倶に國家を賴み存ずる。

數馬　御尤もには候へども何卒御命全うして、

藏之　ハテくどい、變ぜぬ魂。

數馬　ではござれども、

藏之　エヽ、御家の大事にや替られぬわえ。

數馬　はア、左樣なれば藏之進樣。

藏之　見事穩密。

數馬　ハツ御免。（ト唄になり數馬奧へはひる。後踊り地、引違へておたつ密書を持つて出て來り）

たつ　主税樣が大事な密書ぢやに依つて、御家來林平樣に手渡しせいと仰しやつたが、あの林平樣は、ヲ、それ〱、最前一寸行つて來ると云つてぢやが、まだ戻らしやんせぬかいなア。

ト藏之進は上手に思案して居たりしが是を聞いて、

藏之　女中、その書面一寸見せやれ。

たつ　イヱ〳〵是は大事の手紙、人手に渡す物ぢやござんせぬ。

藏之　ヱ、見せやれと云ふに。

たつ　イ、ヱならぬわいなア。

藏之　ヱ、面倒な。（ト藏之進密書を引たくる。おたつびつくりして）

たつ　それをどうするのぢや。

ト掛かるを突廻してちよつと上手へ突きやり、手早く密書を讀む事あつてびつくりなし。

藏之　扨てこそ〳〵、油斷ならざる密書の文言、歸りは正しく三條松原。

たつ　それをこつちへ。（ト又掛かるを手をねぢ上げ）

藏之　殊に依つたら主從共に。

たつ　ヱ、放さぬかえ。

ト振りほどき藏之進突廻して當てる。おたつたぢ〳〵となる。

藏之　丁度宵闇、今宵を過さず（ト向ふを見込み）ソレ。（ト藏之進花道へはひる、おたつ倒れる）

段八　黒石氏。

傳六　主税どの〳〵。

主税　御兩所、それへ同道致さう。」

　　トかすめし踊り地にて主税先に段八傳六少し醉たる體にて出て來り、おたつに爪突き。

段八　ヤ、コリヤ仲居のおたつが。

傳六　如何致した。

主税　呼び生さつしやれ〳〵。（ト段八傳六はおたつを引起し活を入れる。おたつ心附き）

たつ　大事のそれは渡さぬ〳〵。（ト主税へ掛る）

主税　エ、何を致す、身共ぢやわえ。（トおたつ心附き）

たつ　ヤ、主税樣かおそかツた〳〵、最前の大事の密書をあの爰に居た侍めが。」

主税　何處に居つた侍、ム、扨ては藏之進めに、アノ密書をばひ取られしか。

三人　ヤヽヽ。

段八　察する所大伴氣取りし藏之進。

傳六　殊に密書を披見いたさば。

主税　イヤ〳〵氣遣ひ致すな、身共が思案、コレおたつ、奥へ參つて政氏めに猶も此上酒を勸めよ。

たつ　そんなら皆さん（トおたつ奥へはひる。殘りし三人こなしあつて）

段八傳六　シテ御思案はな。

主税　最早や生けては置かれぬ政氏、今宵を過さず廓より歸るを待ちうけ人知れず。

段八傳六　シテ討取る御手段は。

主税　コレ。（ト兩人に囁き）合點がいたか。

段八　スリヤ共者にお頼みあつて、

段八傳六　廓歸りを、

主税　討取る手筈。

段八傳六　シテ我々は。

主税　駕籠に附添ひ支へる體にて共々加勢を。

段八傳六　心得ました。

主税　最早や歸館に間もあるまい。

段八傳六　左樣ござらば主税殿。

主税　コリヤ密にく。（ト踊り地にて兩人奥へはひる。後思入あつて）今宵政氏を討取れば、五十四郡を時廉公が握るは目前、さう成る上は我とても多年の大望成就、ハテ待てば甘露の（トにつたり思入あつて）日和ぢやなア。

ト時の鐘踊り地にてよろしく此の道具ぶん廻す。

本舞臺向ふ一面の黒幕。常足の二重。草土手の蹴込み。二重上手に蒲鉾小屋出はひりあり。左右籔に松の立木。日覆より同じく釣枝。半月を下し。すべて三條松原邊の道具、時の鐘禪の勤めにて、此の道具納る。直ぐに花道より若イ衆大勢非人にて菰を身にまとひ、めんつう徳利竹の皮包み杯を持ち出て直ぐに舞臺へ來り。

非一　コリヤ長松よ、此頃のまんの惡さ、京三界駈け廻つても何一つ呉れ居らぬ。

非二　そりやその筈かい、ゑんとうさへちらし居らぬもの。

非三　コリヤ遠州、わりや今日ゑらい事したな。

非四　ゑらいとは何がいやい。

非三　ヱヽ隱すない、ます一升ひいて來た事知つて居るぞよ。」

非四　南無三、それがもうばれてしまうたかいやい。

非一　いくら隠しても佛の碗でかなわんぢや、まき出せ〳〵。

非二　肴は俺がはづむぞよ。

皆々　サア〳〵酒にせう〳〵。（ト捨ゼリフにて着て居た菰を敷き皆々居並び）

非一　ドレ一杯やらうかい。

非三　俺が酌せうかい。（ト酌をする）

非一　ゑらい良い酒なア、われにさすわ。

非四　ヲツト有る事の、早八瀬よふのヨイ。

非三　時に頭はまだどぶさつてか。

非一　大きな聲をするなやい、聞附けたら又ぼく喰ふぞよ。（ト捨ゼリフにて酒盛よろしく）

非三　チトこつちへもさゝぬかい。

非一　サアさすわ。（トついで見て）

非二　ヤア南無三川舟ぢや。

非二　待て〳〵良い事がある、是から皆が一致して。

非一　どうするのぢや、五條の橋下で稼がうかい。

皆々　それが良からうかい。

非一　サア皆來いやい。

非二　イヤ是から五條まで無言で行つては面白ない。」

皆々　そんなら皆で囃さうかい。

非一　俺が音頭を取るぞよ、ヤンラ千代の始めの一踊り、網打踊りが所望ぢやが合點か。」

皆々　ヲヽ扨て合點ぢや。

ト雀踊りの太鼓に合せ踊り乍ら上手へはひる。後木魚入り禪の勤めになり、花道より三莊太夫深編笠浪人のこしらへにて足早に出て來り、花道にて。

三莊　最早初更、合圖の時刻も今少し。（ト向ふを見て）ヲヽ幸ひ彼處へ行つて何かの手筈、それ〳〵。（トやはり右鳴物にて舞臺へ來り上手の小家の傍へ來り）コリヤ〳〵非人、チト頼み度き事あつてわざ〳〵是まで、サヽ出よ〳〵。（ト呼び立つれども答へなき故こなしあつて）扨ては、晝の疲れにて最早寢たか。（ト前の菰を上げ）コリヤ非人、用事がある出よ〳〵。

トきつといふを聞附け、小家の内にて非人山岡權六こなしあつて。

權六　何ぢやい〳〵、よう寢て居るにけたゝましい置かんかい、いゝヤ盆の片かわの勝負なら明日來

いやい。

ト云ひながら、權六非人好みのなりにて目をこすり〳〵出て來り。

三莊　ア、イヤ〳〵左樣な者ではない。チトそちに賴み入りたき事があつて、わざ〳〵是まで來つたのぢや、面倒乍らちよつと是まで。

權六　ア、あだどんくさい、俺に賴みとは何ぢやいなう、ヤア　お侍樣、非人小家へ夜夜中、よう寢てゐる者を起し廻つて、わしに用とは何でごんすの。

三莊　イヤ用事といふは外ならず、お身が胴骨を見込んで折入つて無心がある、何と聞入れては吳れまいか。

權六　あの乞食の俺に賴みとは。

三莊　イヤ別の事でもない、そちに貰ひ度いものがある。

權六　エ、。（トびつくりこなしあつて）見ますれば御浪人さうなが、非人めに貰ひ度いものとは、てつきりこりやア。

三莊　イヤサ、其方が身體に卷いて居るわんぼうが貰ひ度い。

權六　ア、此の着る物を。

三莊　如何にも。

權六　ハテツイ一口で濟む事を。（トこなしあつて）ヤレ〳〵新身試しの胴でも貸せと云ふのかと、あつたら膽を、ハ、、、、、。

三莊　ハ、、、、近頃無體の所望なれど。

權六　サア聞くまいものでもない、したが何ぼつゞれでも寒いひだるい大敵をふせぐ此のわんぼう、云はゞお侍の鎧兜も同じ事、大事の俺が魂なれど、わけての頼み進ぜませうが、其の代りには又そつちの魂、こつちへ預けさんせ、何と理屈ぢやア無いかいなう。

三莊　成程、此の兩腰を代りにとは尤も至極、無心を頼むそちなればおゝと云うて渡したけれど、身がわんぼう無心云ふも、チト仔細ある故今宵中にて望みを、夫までは此の魂、どうも腰が放されぬ、爰の所を。

權六　ヲット皆まで云はんすな、よし呑み込んだ。

三莊　スリヤ聞分けておくりやるか、忝い、浪人が貯への此の一包は身が魂、目前些少ながら。

ト三莊太夫懷中より紙へ包みし金を出し權六に渡す。

權六　何ぢや、コリヤ金か、エ、置はれ、こんなものはいやぢや、とサア目たりかわくはこちらが習

ひ、こんなぢや無い、俺も腹からの非人でもごんせぬ、樣子は知らねど御浪人の人體捨て、段々のお頼み流石ぢや、天晴ぢや、其の魂の此の金を乞食も身祝ひあやかつて、ちよんべなつとかりようかい、本に浮世ではあるぞ、こちらがつゞれが金になるとは、是がほんの枯木に花ぢや。（トわんぼうを脱ぎ前へつまみ出して）それ千手觀音が居りますぞえ。

三莊　ヲ、過分〳〵。直ぐさま是より此の身に掛けて。

權六　アノ身に掛けて。

三莊　恩は忘れぬ。

權六　でござりまするか。

三莊　併し此の儀は後日に沙汰なし。

權六　世の交りを捨てた乞食、その氣遣ひは。

三莊　天晴魂、此の場の返禮。（トちよつと拔きかけるを押へて）

權六　イヤその御馳走には及びませぬ。

三莊　ムヽ。非人重ねて面會。

權六　旦那樣。

三莊　慥かに歸りは向ふの道筋。

權六　ヱヽ。

三莊　是より直ぐに、さらば。（トこなしあつて三莊太夫花道へ走りはひる。權六後を見送り）

權六　テモけぶな、併し是ぢやア。（ト金包を出し數へて見てにつたり思入）　こつぶにちよんへがお餘り下あれ。（トよろしくこなしあつて本釣鐘の送りにて此の道具ぶん廻す）

本舞臺向ふ黑幕、奧深に松並木同じく釣枝、すべて三條松原通り宵闇の體、靜かなる禪の勤めにてよろしく道具納る。ト行列三重になり、花道より中間箱提灯二張持ちその後より乘物一挺中間かつぎ數馬主税段八武士等附添ひ、草履取りの若徒合羽駕籠の中間順よく出て來り、此の後より三莊太夫以前のつゞれを着て手拭を深く冠り、糸立に大小を包み是を抱へ窺ひ〳〵出て來り、本舞臺にて乘物に近附き。

三莊　ヘイ御大身樣、お手の內をくだあれまし〳〵。（ト是にて敵役三人顏見合せ思入）

數馬　コリヤ〳〵、お乘物間近く手の內なぞとは慮外千萬、下がれ〳〵。

三莊　ヘイ〳〵、下れなら下りますが、どうぞ手の內を下あれませ。（ト乘物へ近寄るを數馬へだてゝ）

數馬　ヤア又してもお乘物間近く、無禮至極のこつがい人、主君忍びの御通行殊に夜陰に及びし故、

事穏便に計らふに一曲ありげた强ねだり、おして申さば刀の手前、用捨はならぬ覺悟ひろげ。

トきつとなる是を主税留めて、

主税　アイヤ數馬殿、御立腹は御尤もなるが、たとへに申すかつたいに棒うち。

段八　相手にならぬ野伏り非人、コリヤ手の內を遣はされるがよろしうござる。（ト數馬思入あつて）

數馬　ム、助け置かれぬ奴なれどいづれもの言葉にめんじ、了簡致しくれる。ソレ曾平、手の內を遣はせ。

若徒　はつ。（ト錢を三莊太夫の前へ出す）

三莊　アイヤ、金銀に望みないわ。

數馬　ムウ金銀に望みないとは。

三莊　俺が望みは。（ト投打に左右の提灯を切落す。供廻りわつと云ふて立騷ぐ）

數馬　ヤ扨てこそ曲者。いづれも油斷しめさるな。

三人　心得てござる。

ト主税、段八、傳六拔つれて數馬へ切つて掛る。罹の勤めくらがりのもやうにてごつちやに立廻り數馬は段八傳六と立廻り乍ら上手へはひる。主税は供廻りた追散しながら下手へはひる。時の鐘忍び三

重になり乗物へ近寄る。内より戸をあけ政氏窺ふ。三莊太夫乗物の蔭へ隱れる。

政氏　歸館の路次を妨げなすは何奴なるぞ。（ト刀を持ち出る三莊太夫窺ひ寄り後より一刀に切下げる。政氏どふとなり）ヤア欺し討とは卑怯至極。

ト刀を拔き立上り切つて掛る。時の鐘誂へ合方にて立廻りよろしくあつて、三莊太夫政氏の刀を打落し切下げる。政氏三莊太夫の裾を取らへる、是にてつゞれすつぼり脱げ其のまゝ政氏を切倒し乗掛りて止めをさす。本釣鐘。是をキツカケにてチヨンと月出る。三莊太夫ホツと思入。

三莊　ハテ扨て、もろくもくたばつたさまわえ。

トにつたりと思入。此の内後へ時廉窺ひ出る。後より乗物供廻り附添ひ。

時廉　政氏めを仕止めしか。（ト三莊太夫時廉を見て）

三莊　只今止め。（ト刀を拔き血をぬぐひ納める）

時廉　ヲヽ出來した〳〵。

三莊　音に聞えし政氏故、非人姿に身をやつし、油斷を見濟しまんまと首尾よく。

時廉　天晴手柄、我が眼力に違はず健氣の働き、褒美は汝が望み通り則ち丹後の國に於て、成合の莊橋立の莊由良の莊合せて三ヶの地頭格、此の時廉が許し狀。

ト懐中より免狀を出し渡す。三莊太夫押し戴き。

三莊　多年の望み有難く頂戴仕る。（ト懐中す）

時廉　サ、人目に立たば何かの妨げ、ちつとも早く此の場をば。

三莊　然らば此のまゝ。

時廉　物數云はず早く行け。

三莊　おさらば。（ト本釣鐘の送り三莊太夫花道を走りはひる）

時廉　最早參りしか、彼に恩賞を與へ國遠致させたれば後日に詮義の愁ひなし、はて愛い奴ぢやなア。

トばた〳〵にて花道より若徒供廻り大勢走り出て來り。

若徒　はツ申し上げます、岩木の判官が家老大和田藏之進、我君を討たんと此の先なる藪の小陰に忍び居りますれば、必ず御油斷になされまするな。

時廉　ム、スリヤ何と申す、藏之進めが身共を討たんと待伏せ居るとか。

若徒　左樣にござりまする。

時廉　ヤア時廉を討たんとは及ばぬ事〳〵、掛かる事もあらんかと附け置く遠見、早速の知らせ出來した〳〵、ア、藏之進を生け置く時は後日の妨げ、屈强の手立あり、邊りに心を附けい。

若徒　ハツ。（ト邊りを見廻し窺ふこなし）

時廉　それ身共が乘物へ、その死骸を入れい。

大勢　はつ。（ト皆々手傳ひ政氏の吹かへを時廉の乘物へ入れる事）

時廉　ム、それでよし〳〵、汝等は駕籠に附添ひ身共が乘つたる體にてもてなし。（トちよつと皆々に囁く）　ナ合點か。

大勢　心得ました。

時廉　早く行け。

大勢　はつ（ト時の鐘になり、侍中間皆々乘物を守護して花道へはひる。時廉後を見送り）

時廉　これで心もさつぱりと、跡より歩み猶も樣子を、ヲヽ、それよ。

トどん合方にて花道へはひる。直にばた〳〵禪の勤めになり、上手より數馬下手より主税走りきて行合ひ顏見合せ。

主税　ヤ數馬か。

數馬　ム、主税か。

主税　覺悟。（ト切つて掛るを手早く留めて）

數馬　扨ては今宵の狼藉は。

主税　時廉公の計らひだわ。

數馬　何と。

主税　五十四郡を横領なさん我々始め家中は大半。（ト此の時後へ傳六段八出て）

段八
傳六　時廉公へ一味合體。

數馬　ム、、スリヤ時廉が謀計にて。

主税　廓歸りを道に待うけ味方の者にばらさす手立。（ト舞臺の血汐を見て）

數馬　ヤ、、此の場にしたゝる此の血汐、扨ては御主君には御最期なるか　ヤ、、、、。（トびつくり思入、きつとなつて）ム、主君の敵は大江の時廉、それに荷擔のおのれ等は飼かふ犬の畜生侍、首を並べて片端し高ぼえさせん、尋常に尻尾を卷いて覺悟なせ。

主税　何をこしやくな、いづれもそれ。

段八
傳六　心得ました。

ト禪の勸めになり、三人を相手に立廻り主税を一刀に切る。是より誂への鳴物になり、數馬段八傳六と立廻りよろしくあつて兩人を切倒す。主税這ひ寄つて數馬を切下る。是より鳴物替つて兩人手負の

立廻り、トヾ主税を切倒し此の上へ片足かけ苦痛の思入。

數馬　チエヽ口惜しや、云ひ甲斐なくも深手を負ひしか、イデ此の上は死出三途、政氏公の御供なさん。

ト刀を取直し腹へ突立て引廻す。此の見得時の鐘の送りにて此の道具ぶん廻す。

本舞臺向ふ一面の高き竹藪、上の方へ寄せて切破りにて人の出はひりあり。日覆より松の釣枝、行列三重時の鐘、蛙の聲にて此の道具よろしく納る。ト矢張り行列三重を冠せ、本釣鐘を打込む。是をキッカケに正面の藪を押し分け、藏之進袴股立りゝしきなり手槍を持出てきつと見得。ムヽとこなしあつて又上手の藪へ忍ぶ。矢張右の鳴物にて花道より以前の駕籠を先立て、侍中間附添ひ出て來る。はるか後より時廉窺ひ〳〵出て來る。駕籠舞臺へ掛ると上手の藪より藏之進進出て。

藏之　お家の怨敵、時廉觀念。

ト乘物へ突いて掛かる。此の聲を聞いて時廉下手へ忍ぶ。藏之進是を知らず乘物へ槍を突込む。手ごたへしたる思入にて槍を捨て戸をあけ政氏の死骸を引起し月影にすかし見て、

ヤヽヽヽ、コリヤ是御主君政氏公の御死骸、殊に怪しき此のつゞれ、扨ては人手に非業の御最期、ヤヽヽヽ。

トどふとなる。此の時供廻り大勢取卷き。

大勢　主殺しの網清、動くな。

藏之　何と。（ト時廉上手へ出て）

時廉　藏之進退れぬ所だ、覺悟なせ。（ト藏之進つゞれを見て）

藏之　ム、掛る證據のある上は、イヤサ卑怯未練に隱れんや。

時廉　ヲ、能き覺悟だ、ソレ。

侍　捕つた。（ト藏之進へ掛かるを附廻して）

藏之　イザ繩かけて。（ト侍兩人を投げのけ下に居るを木のかしら）

ト後へ手を廻す。時廉繩さばきをする。時の太鼓にて。

拍子幕

二幕目　扇の橋の場

役名　元吉要之助、人買込わらの牛藏、同ほらの九助、轟軍太、船頭浪六、同沖

六、山岡權六。對王丸、安壽姫、權六女房おらち、政氏御臺むつきの方。

本舞臺三間向ふ打拔濱手の遠見。上の方二間丸物の橋、此の下繋の通へる事。正面より下手三間中足の二重、打寄せの蹴込み、後松並木石の道祖神の塚、舞臺前一面浪板、笘を掛けたる丸物の船二艘外に小船一艘つなぎあり。よき所に越後の國府の橋といふ榜示杭、すべて越後の直井の浦の體。浪の音濱唄にて幕あく。ト右鳴物橋の上より船頭沖六袖の筒つぽ竹筒を提げて出る。後より船頭浪六同じこしらへにて出て來り。

浪六　ヲイ〳〵、そこへ行くはおいらと一所に船掛りして居る、由良の湊の船頭殿ではないか。

沖六　ヲ、さう云ふこなたも船掛りして居る、佐渡が島の船頭どん、どこへ行かしやつた。

浪六　俺よりはこんたが竹筒を持つて居るは、扨てはれこを買に行つたのだな。（ト飲むまねをする）

沖六　何のそんな事は此の頃は上つたり、それと云ふのが客人が思はしい買出しものがないとて、此の四五日は佛頂面で酒のさの字もかゞせぬ、それに引かへ貴樣はいゝ色だの。

浪六　イヤモこつちの舟も其通り、客人が儲け口がない故、酒法度も同然、俺は怺へても腹の蟲が怺へ居らぬ、そこで一杯氣を付けて來たのよ。

沖六　うまうやらかしたの、それに引かへこつちは酒と見せててらしを買出しよ。

浪六　さうとは知らず又附込む氣で咽を鳴らしてこんたの後を附いて來たが、大きな當違ひぢやな。

沖六　にごりでもよければ振舞はうか。

浪六　イヤモ、油の様な酒ならば、馳走になつたも同然ぢや。

兩人　ハヽヽヽヽ、サア一緒に行かう。

ト右鳴物にて兩人舞臺へ來り、小船を傳ひ左右の笘船へはひる。直に床の淨瑠璃になる。

〽越路がた、爰に直井の濱續き、御いたはしや政氏公の北の方、姫若君も諸共に、馴れもならはぬ憂き旅を、元吉要が介抱にて、扇の橋に歩み寄り。

ト浪の音にて、下より御臺むつきの方安壽姫對王丸三人とも杖と笠とを持ち、後より要之助大小半合羽旅なり柳行李桐油を兩掛にして笠を持ち出て、直ぐに舞臺へ來て、

要之　幸ひの人絶え、暫し是にて御休息遊ばしませ。

〽主從小陰に立休らひ。（ト介方になり三人とも捨石に腰を掛けてこなし。）

睦月　長の旅路をそなたの介抱、忝い共嬉しいとも禮は言葉に盡されず、我夫政氏公、都島原にて何者の仕業にや闇討に逢ひ給ひ、敵の行衞も情なや、時康が邪見にて館へとても入る事叶はず、姫諸共に追拂はれ、いづくを當にさまよふ道。

安壽　思ひがけなく弟對王、要之助に廻り逢ひ、悲しい中の悦びぞや。

對王　コレ要之助、父上樣の敵を尋ね、早う討たせてたもいなう。

要之　ホヽ、能う御意遊ばした、政氏公の御最期を幸ひ、若君まで失ひ奉り、家國を横領なさん時廉殿の謀反を察し、一學が計らひにて勿體なくも對王君を、討つたる體にもてなし、此の越後路へ落しまゐらせしと聞き某追付き奉り、御親子目出たう御對面、御舘には忠心厚き藏之進殿殘り居れば、初姬の御身の上に氣遣ひなし、やがて父君の敵を尋ね出し、御討たせ申しまする程に、必らず御氣遣ひ遊ばしまするな。

睦月　アレ聞きやつたか姬對王、要之助が頼母しい言葉、みづからは敵を討つた心地が仕ますわいの。

安壽　母上樣の御言葉の通り妾迚も悦びまする、コレ對王、そなたも嬉しう思やらうの。

對王　姬上樣の仰しやる事、是が嬉しうなうて何と致しませう。

睦月　此上ともに要之助、そなたを能きに。

三人　頼むわいなう。

へ頼む〳〵とばかりにて、果し淚の折柄に、耳驚かす遠寺の鐘。（ト時の鐘四つ鳴る。要之助思入。）

要之　是は〳〵恐れ入つたるそのお言葉、只今鳴るは最早や亥の刻、幸ひの此の松陰、今宵は是に御

一宿遊ばされませう。

〽要がすゝめ片陰に、桐油を松へ釣り夜着や、芝を蒲團に菅笠を屏風代りと主從が、是非なく勞れ臥しにけり。

ト時の鐘、要之助後の松の枝へ桐油を風よけに釣り三人を介抱して、松の陰へ野宿の體にてはひる。

〽雪國の氷を渡るうき渡世、越後の國の片ほとりに、山岡といふ狩人あり、人の目に立つ大男、すご〳〵戻る直井の浦、扇の橋にさし掛れば。

ト此の文句へ浪の音時の鐘を冠せ、下手より山岡權六五十日鬘、どてら山刀簑笠を一つにして鐵砲へくゝり付けかつぎ出て來る。

〽西に傾く月影や、欄干の片影に笠を屏風の旅勞れ、何心なく立寄つて。

ト權六橋の上にて野宿の三人を見て。

權六　コリヤ非人共か知らぬが、往還の橋臺に見れば上びた桐油の紙帳、夜廻りに見附かつたらば又ひどい目に逢ひおらう、エヽさりとは身の程知らぬ奴等、きり〳〵起きてうせ居らぬかい。

〽菅笠をまくるも知らぬ寐入ばな、すや〳〵顏をさしのぞき。（ト權六桐油の内をよく見て思入）

ハテ尋常な小倅、こちらの娘は十六七の嫁入盛り、中の女は三十餘り、顏付のよう似たは紛れもない二人の母親、ハテうまく寢込んだわえ、殘つた一人は青二才と見えるわえ、どこの人か知らねどこんな所に寢て居たら、惡い者めらの目に掛らうに、何にも知らいで寢入りばな、コリヤ餘程な旅勞れ、然し此の內が極樂であらうかい。

〽暫し見とれて立留る、山岡ふつと出來心。（トいろ〱思入あつて）

ム、スリヤ仕合せの直り口、僅かの鹿猿何十匹晝夜をかけて骨折つた所が、呑代にも通らぬ錢、まだ〱した事しようより、こいらを拐して賣渡せば、濡手で粟の懷ろ儲け、丁度幸ひ此の中から、此の湊へ佐渡ケ島と由良の湊の人買船が掛つて居れば、一目見せたら相談に乘るは知れた事、人に先手をかゝれぬ內、ちつとも早くさうだ〱。

〽心にうなづき獨り笑み、船を見合す濱傳ひ、向ふより來る前だれ掛け、取上げ髮も嗅じみて、酒屋へ通ふ備前燒。

ト浪の音濱唄にて下手よりおらち世話女房のこしらへにて、備前德利を提げ駒下駄にて出て舞臺へ來り權六を見て。

らち　ヲ、そこに居なさんすは、こちの人ぢやござんせぬか。（ト是にて權六びつくりして）

權六　ム、わりや山の神、今頃こそ〳〵一人あるき、どこへ行くのだ。

らち　ヱ、置かしやんせ、餘りお前の歸りが遲い故、迎ひ乍ら寢酒の買出し、よう氣が附いたと褒めはせで叱りさへすりや能いかと思うて、あたまごなしに山の神呼はり、置いて下さんせ。

權六　ハテ山岡が女房ぢやに依つて、山の神と云つたが無理か、コリヤ貧棒世帶の嬶の替り名よ、われも昔の苦界が放れずまだ色氣をふくむ所は、イヤ賴母しい命取りめが。（ト脊中を叩く）

らち　ほんにもう口先で生つ殺しつ女房殺しの惡性男、山稼ぎをだしにして新潟や市ふりで、おやま狂ひが初まつたも知れぬわいな。

權六　馬鹿を云へ、おやま狂ひも女狂ひも、肝心の物が無うて何が出來る物か、此の四五日の間の惡さ、是ぢやア末の事が思ひやられて、心細くなるわえ。

らち　何のまア其やうに、くよ〳〵と思はしやんすな、金錢は廻り持ち、又笑ふやうな事もあらうけれど、返らぬ事を云ふやうぢやが、二人の中へ出來た娘、育てるあだても情なく、わらの上から捨子にして生死も知れぬ因果な親子、今居やつたら丁度六ツ、せめて夫婦が朝夕の憂きを忘るゝたよりにも。

權六　成程女といふものは愚痴なものだ、そこがたとへの死んだ子の年、捨てたがきは死んだもの同

然、たとひ生きて居た所が一旦捨てたら人の物、どうして手出しがなるものか。

らち　そんならアノ子は矢つ張り此の世に。

權六　此の世も此の世、達者で人に拾はれて生れ替つた身の出世。

らち　ヱ、そりやまア何處に。

權六　イヤサ、大方生れ替つて此の世へ出て居るであらうわえ。

〽我子の出世餘所事に、聞かすを女房は知らぬが佛。

らち　何の事ぢやぞいなア、生れ替つて出た事を何のお前に尋ねうぞ、そんならどうでもアノ子は、ほんに一日しみ〴〵と顏も見ず、アヽ可哀相な事をしたわいなア。

〽涙そゆれば。

權六　ヱ、何をほへづらする事がある、商賣が暇な替り晩から夜山精出して、われが樂しみは拵らへてやるわえ、返らぬ事をくよ〳〵云つて、わづらつてはならぬ、それといふも死んだ親父が盜まれた用金を拵らへて、親の恥辱をすゝぐまでは、兎角夫婦が大事の命。

らち　さうでござんす、舅御樣の惡名をすゝいで上げるがせめての孝心、それにつけても先立つは金、今のお前の世渡りでは。

権六　イヤ〳〵、天道は人を殺さずとそんなに案じた物ぢやアねえ、さつき戻る山際に四人連の臥猪の床、親子連の猪を見附けて置いた、あれを一緒に賣渡せば、大方の金になる、必らずきな〳〵案じるな。（ト後へ思入）

らち　夫はまア〳〵耳寄りな、そんな事のある知らせか宵に出た丁子頭、悦び心で買うた酒、直に神棚へ上げ、殘りは二人が寢酒の樂しみ、サア一緒に歸らさんせ。

権六　イヤおれは爰に掛つて居る、二艘の船の船頭にちよつと話さにやならぬ用がある程に、われは先へ歸れ〳〵。

らち　あの船に用があると云はしやんすが、コレこちの人、世間の沙汰聞かしやんせぬか、此の湊へ人買船が入込み、子供大人のわかちなく、めつたむせうに連れて行くとて、子を持つた衆の氣違ひがり、此の中も市ふりの宿で、十二三の子をかどわかし舟へ乘せる所を、親達が見附けてそりや人買よ盗人よと、邊り近所が棒ちぎりで片いきになる程叩かれたといな、本にまア小氣味のよい事、併しかけ構ひのないこちとらまで、五十百出してなと思ひ入、叩かしてやりたいわい。

〽餘所の噂も山岡が、胸にこたゆる人買沙汰。

權六　エヽ役にも立たぬ事ぬかすか、ときに取つた雉子のおんどり、アノ船へ百五十づゝに賣つて置いた、風が直つて今夜にも船が出ればぼんざらばぢや。その金を取つて行く內、先へ行て酒の燗つけて待つて居や。

らち　さういふ事なら私しや先へ行く程に、必らず早う戻らんせ。

〽言葉を後にいそ〳〵と、夫に別れ戻る橋、渡り掛つて、

ト おらち上手へ行かうとして、ふと野宿の四人を見て。

見れば行暮らした旅人さうなが、他愛もなう寢入りばな、夜露が掛らば身體の毒、袖ふり合も他生の緣、ドレ〳〵わしが笠なと着せて。（ト傍にある笠を取つて着せる思入）是でよい〳〵、ほんに浮世はさま〴〵、こちらがやうな淋しい暮しでも、我家に寢れば雨露にも。それに引かへいぢらしい。

權六　エヽ、キリ〳〵行かぬか。

らち　今行く所ぢやわいなア。

〽道は眞直ぐ正直な、形は知れた備前燒、德利を提げて立歸る。

ト 浪の音を冠せおらち橋を渡り上手へはひる。

權六　ヲ、イ〳〵。
〽聲掛くれば、笘押しあけてによつと出る、由良の港の繩くらひほらの九助、今一艘は佐渡ヶ島に名を得たる込わらの牛藏、二人共に目をすり〳〵。
ト笘舟より込わらの牛藏どてら三尺帶、こちらの船よりほらの九助同じく人買のなりにて出て。
牛藏　おらが船を呼び起したを、誰かと思へばどら打の山岡、扨てはばくちの元拵へて、せんどの意趣を返しに來たのか。
九助　そんな事なら根こそげ勝まくつてやり度いが、今夜はない、あす來い〳〵。
權六　エ、譯も聞かずに先くゞりな奴等ぢや、賽事よりはわいらが商賣の、よい鳥見附けて相談に來たのぢや。
牛藏　ヲ、商賣の鳥とは面白い。
九助　此の船付けて相談せう。
牛藏　コレ〳〵船頭早く〳〵。
二人　ヲツト合點。
〽おつとまかせと二艘の舟、艫を押立て汀に漕ぎつけ。

ト浪の音牛藏の船は浪六、九助の船は沖六漕いで二重際につける。

牛藏　早速聞かうわ、コレ山岡、今云つた鳥といふのは。

九助　ひね鳥か、但し若鳥か。

權六　ヲ、サ親鳥なりと雛鳥なりと望み次第、あたま數は三人、大事の談合、立ち乍ら話もなるまい、何かの事は笘の內で。

牛藏　サア〳〵來やれ。

〽三人打連れ船に入る。（ト浪の音權六船へ乘り移る。皆々笘の間へはひる。）

〽折もこそあれ時廉が郎黨轟軍太、岩木一家の落人を、討留めんと手廻りの、侍引具し、扇の橋にさし掛れば。

ト浪の音時の太鼓になり轟軍太、半纏股引大小にて後より捕手累の四天にて附添ひ出て。

捕一　申しお旦那、あなたお一人達者なとて、我々共の足は續かぬ。

捕二　あてどもない落人の尋ね者。

四人　是からお歸りなされませ。

軍太　エ、役に立たずの家來共、御主人時廉公の仰せには、一旦館をほいまくつた岩木の一族、生け

置いては後日の仇、追附いて討取れよと仰せをうけ、遠くは行かじと思ひの外逃げ足の早い奴原、彼奴等を取得て差出せば、此の軍太は千石の御加增、勇みを附けてさがせ〳〵。

〽先に進みし橋の臺、四人が寐姿怪しやと、能く〳〵見ればまがひなし。

ト軍太先に捕手橋の方へ行かうとして野宿の四人を見附け。

皆々　扨てこそ、落人からめとれ。
心得ました。取つた〳〵。

〽捕つた〳〵と立かゝり、寐込みを押へる傍若無人、ハツと驚く要之介、人々を後にかばひ。

ト捕手四人樹油の陰へふん込み、此の内より以前の御寮安壽姫對王丸を引立て出る。要之介は是を追かけて出て、立廻りて主人を後に圍ひきつとなつて。

要之　ヤア何奴なれば夜陰の狼籍、慮外なさば手は見せぬぞ。

軍太　ヤア小癪な一言、某は大江の郡領時廉公の仰せを受け、討手に向ひし蟲軍太、姫に小わつぱ御臺諸共、首討ち落して身共に渡せ。

要之　スリヤ國盗人の獄卒たる、伯父郡領が家來よな、爰へうせたはおのれが命のねぐされ時、元吉

要之介が守護する御主人、指でもさゝばさして見よ。

軍太　ヤアほざいたり青二才め、さういふうぬが命の別れ、身共が刀で此の世の印導。

要之　小癪な事を。

〽しや小癪なと兩人が、手早く刀拔き合せ、受けつ流しつ上段下段、要が手練の太刀風に、追立てられて逃げ行くを、退さじやらじと追うて行く。

ト禪の勤めになり、軍太刀を拔き要之介と立廻り叶はずして下手へ逃げ込む。此の内に捕手四人は引立てようとする。要之介是をさゝへきつと見得。三味線入り禪の勤めになり、要之介四人を相手にし立廻りよろしくあつて、トゞ捕手花道へ逃げてはひる。要之介後追ひかけて花道へはひる。

睦月　コレなう要、長追ひしやんな。

安壽　怪我せぬ内に早う戻つてたもいなう〳〵。

〽さけび給へど甲斐もなき、轟軍太取つて返し。（ト禪の勤めにて下手より軍太走り出て來り）

軍太　ヤア國で死んだとぬかした對王めも一緒に居るは、藏之進めが計ひよな、何にもせよ首にして立歸る、覺悟なせ。

〽覺悟せよと組付けば、一期の瀨戸と三人が、拔けつ隱れつさまよふ内、船より上る山岡が、見るよりびつくり南無三寶、商ひ物を退さじと、飛び掛つてがんづかみ、投退けて仁王立。

ト軍太三人を引立てにかゝる。船の中より權六出て三人をかこひ軍太と立廻つて投げる。軍太立上りびつくり思入。

ヤア何時の間にか橫合から法外千萬、時廉公の後を追ひ詮義なす落人、何故あつて妨げなすのだ。

權六　イヤ妨げはしないが、餘り不便だと思ふから一寸さゝへたのよ。

軍太　ヤア小癪な一言、さうぬかせばうぬから先へ、觀念なせ。

〽觀念なせと切込むを引外してずでんどう、こきうを一〆め締め上げられ、ぐつとも云はれず死んでけり。（ト軍太拔いて切つて掛る。權六立廻つて軍太を締殺し。）

權六　是はいサ。

〽死骸を川へ投込めば、母君嬉しく立寄つて。（ト權六死骸を川へ蹴込む。睦月の方思入）

睦月　何國の御方か知らねども、危い場所をお救ひくだされし故、一人ならず三人まで助かる御恩は海山にくらべ難し、是々ちやつと御禮を申しやいなう。

〽悦び勇み給ひけり。

權六　イヤモ、其御禮には及びませぬ、賴むとあれば金輪際引かぬ男なれど、人の賴まぬ喧嘩は買はれぬ、大勢に只一人、今の二才どのはどうしたか、ア、コレ手がむづ〱するわえ。

〽賴めよがしに仕掛くれば、何がな便り北の方。

睦月　我々は旅の者、敵の仕業でうきめに逢ふ難儀を惠み給はれかし、世にも出でなば此の御恩。

〽忘れはせじと打しをれ、安壽對王諸共に山岡が前に手を合はせ、佛賴んで地獄とは、後にぞ思ひ知られける。（ト睦月の方は二人に思入。安壽姫對王丸手を合せる。

權六思入。）

權六　ヲ、賴むとあればそれでこつちも働きよいといふもの、ドリヤ今の二才を助けてやらうか。（ト行かうとして思入。）イヤ〱おれがいた其後へ又敵が來まい物でもない、後も氣遣ひ先もあぶなし、ヲ、幸ひのかゝり船、コレ何事もわしに任してござれ、コリコリヤ牛藏九助、ちやつと〱。

牛九　ヲイ〳〵何ぞ用か〳〵。（ト笘の中より兩人出る）

權六　コレ此の衆をちつとの間その船へ預つて貰ひ度い、樣子はさつきに云つた通り、ナ合點か。

牛藏　ヲヽサ呑込んで居る、コレ旅人、こちとらが預れば大船に乘つたと思はつしやれ。

九助　コリヤ思つたよりよい器量、近年にない堀出しもの。

權六　大事に頼むぞ。

二人　合點だ。

〽九助が船には姉弟、牛藏が船へは北の方、別々に抱乘すれば、安壽姫は不審顏。

ト牛藏の船へ睦月の方、九助が舟へ安壽姫を對王浪六沖六も出て是を介抱して船へ乘せる。

安壽　アヽコレ〳〵、母樣と我々をなぜ一つには乘せ給はぬ。

對王　母樣のお傍へ行きたいわいなう。

安壽　アノ船へなと此の船にても、一つに乘せて給はれや。

睦月　アヽコレ二人の者いかひお世話になりながら、ゑようらしい好き好み、要之介が歸るに程もあるまい、ちつとの內ぢや、あのお人次第に成つて居やいなう。

權六　ヲヽサ一つに乘せては今の奴等が取つて返した時に面倒、何事もわしに任せ、さてからして置

いて牛藏九助一寸逢ひ度い。

〽山岡買人を小陰に招き。（ト浪の音權六先に牛藏九助は船より上り、三人共下手へ來り）

佐渡が島の牛藏は、年ばいなが入口と聞いた故母の力、九助は若いのがはけがよいと云ふ故、同胞を渡した。そつちの存分望み次第、サアこつちの身の代受取らう。

牛藏　ヲヽ賣人の仕合せ、買人の幸ひ。

九助　約束通り一貫宛で。

兩人　錢渡さう。

〽錢渡さうと銘々が粮米櫃を抱へ出て、兩方よりさし出す貫ざし。

ト牛藏九助船の中より一貫からげ三抱持出て。

九助　ソレ兄弟が二貫文。

牛藏　母親が一貫文、〆めて三貫。

兩人　慥かに渡した。

權六　ヲヽ受取つた、極りに一つ打つて置け。

三人　ヨイ〳〵。（ト手を打つ事）

權六　此の圖を外さず追風の内に船を早く。
牛藏　呑込んだ、そんなら山岡。
兩人　その内逢はう。

〽顏の知らせを目に受けて、さらば〳〵も胸の内、手早く友綱解きほどき、へさきを分けて押出せば、夢ともわかず北の方。

ト浪の音牛藏九助銘々の船に乗り浪六沖六船を左右へ漕ぎ出す。睦月の方安壽姫驚き。

睦月　コレ〳〵船人待つてたべ、子供の船はそちらへ漕ぎ、何故此の船も一緒にやらぬぞいの。
安壽　母樣をいづれへ連れて行き居るのぢや。
對王　その船戻せ。
睦月　漕ぎ戻してたもいなう。

〽聲を限りにあこがるゝ、山岡は橋の欄干あたまの上から雷聲。

ト此の内權六右の錢を手拭にくゝり持ち橋の上より見下して。

權六　コリヤ恩知らずの馬鹿者めら、爰にうろたへてけつかると、追人の者が殺す、たゞそれが不便さ、人買に賣つてやるわ、思へば〳〵仕合せ者、果報な奴らだなア。

〽聞くより母上氣も消え〱。

睦月　何人買に賣つたとは胴慾や、コレ自は兎も角も、年端も行かぬ兄弟が、いづくの浦いづくの島人に買はれ行き、何と命が續かうぞ、先立ち給ふ父上に云譯もなき我身の上、子供よさらば。

ト睦月は身を投げようとする牛藏留める。

〽南無阿彌陀佛とかけ出し給へば。

牛藏　コリヤ何しをる、すんでの事に錢一貫棒に振らうと仕居つた、我が棒より此の棒の、鹽梅を見やアがれ。

〽したゝかに打つ水桶のひゞき、肝にこたへる姉弟。

ト牛藏かいにて睦月の方を打据ゑる。

安壽　ならコレ、人買ふ人も人ならば少しは哀れを知れよかし、情なの母上樣、親子は一世と申さぬか、今お果てなされていつの世にかは逢はれませう。

對王　兄弟が命は母さまの命と思ひ、又母樣の御命は兄弟の命と思ひ、

安壽　互ひに永らへあるならば、今生で今一度お顏を見る事もござりませう。

二人　必らず死んで下さりまするな。

〽お聞入無いならば、共に死なんとあせり泣き。

九助　ヱヽさい先きの悪いがき、ほえやアがるな。

〽九助が打擲、見る目もくらむ親心。（ト九助かいにて安壽姫を打つ）

睦月　なう邪見放逸や、あらくれなき打ち打擲、コリヤ姉よ弟よ、おとなしい事よう云やつた、母もよう合點して息災で居る程に、隨分仲よう辛棒して燥うてばしたもんなや、忘れても〳〵家の苗字をあらはすまいぞ、名殘は盡じ、子供よさらば。

二人　母樣おさらば。

〽名殘りは今ぞと呼かはし泣きひたしたる袖の海。

牛藏　ヱヽかしましい、あごた骨。

牛九　生骨ゝ留めてくれう。

〽口に込みわら三寸繩、舟ばりに猿つなぎ、サア押せ〳〵のさつさ聲、川口より東西へ、押しへだてたる別路や、身の行末ぞはかなけれ、山岡後を打見やり。

ト双方延上り見送るを牛藏は睦月の方、九助は安壽姫對王丸へ手拭にて猿ぐつわをかけ、友綱にてしばりながら浪六沖六船を漕ぎ上手と橋の下へ別れて船はひる。權六後見送り。

權六　僅かな猪猿取るよりも、日ばたきする間に多くの錢、氣骨は折れたがうまい仕事、慾の事ならやらず退さず、惡には根強い山岡が非道の元は死んだ親、岩木の家に奉公の、其折殿の御用金盗まれたので主人の勘當、親の恥辱をすゝがん爲め、又二つには捨てたがき、今は岩木に拾はれて養女となつたもよく〳〵因縁、惡い性根も親の恥、すゝぐもがきが不便な故、子は三界の首かせとは、ハテ能く云つた物だなア。

へ獨言する其所へ、向ふに人音折惡と、松の小陰へ身を忍ぶ。（ト權六思入あつて下手へはひる）

へ向ふ敵を追散らし、立戻る要之介、主人の姿見えぬにびつくり。

（ト花道ばた〳〵要之介拔刀にて出て舞臺へ來て思入。

要之　母君樣若君樣安壽樣いなう、對王丸樣いなう。やゝゝゝゝ、是程呼ぶに答のないは、扨は敵のとりこと成り給ひしか、ヱ、しなしたり殘念や、たとひ天地に入るとても取返さいで置くべきか。

へ驅け出せしが。

イヤ〳〵よも遠くへはござるまい、西の方か但しは東か、御臺お二方様いなう。

〽呼はり〳〵四邊を見廻し。（ト要之介道祖神の塚を見て）

ム、此の道祖神は道を教への御神なれど、要之介が今の急難、御臺御親子の御行衞知らせ給へ〳〵。

〽一心不亂手を合はせ、心に念ずる神の告げ。

ト要之介風の音にて松に掛けたる以前の菅笠能き所へ落ちるを要之介見て。

ム、此の笠に記せし文字は、西國三十三所同行二人、御親子も三人西の國、扨ては西の方こそ主人の行衞エ、、忝い。

〽主人の行衞白浪の、濱邊傳ひを尋ね行く。（ト浪の音にて要之介よろしく下手へはひる）

〽小陰に窺ふ權六が、後打見やり不審顔。

權六　ハテ合點の行かぬ、今アノ二方が對王安壽とぬかしたが、あの二人は大恩ある岩木の判官政氏の公達姫君であつたるか、ヤ、、、、。

〽あきれて立たる後より、何心なく女房が。（ト驚く。此の時橋の上からおらち出て來り）

らち　申しこちの人、最前から待つて居るに何をして居なさんす。
權六　是より直ぐにぽつ附いて取返し、奥州岩木へ御供せん。
らち　コレ申しお前、氣ばし違つてか、何をうろ〳〵。
權六　エヽ女の知つた事ぢやアねえ、そこ退け。
〽心いらだつ甲斐もなく、船ははるかに漕ぎ出す、山岡は齒がみをなし。
ト おらち縋るを突放す。浪の音はげしく此の時向ふの浪手すりへ苫船二艘放れて漕ぎ行くを權六見て。
權六　アレ〳〵最早はるかに、沖をへだつる苫船、目當に追付き。
ト 權六身ごしらへし二重へ下りる。おらち驚き。
らち　コレ待たしやんせ、血相かへてお前は何處へ。
〽爭ふ內に見附ける捨舟。（ト權六川の中の船を見て）
權六　幸ひの此の捨舟、艪かいを早めて。
〽身輕に飛乘る船の中、樣子知らねば女房が、やらじと縋る袖の海、心々の汐ざかい、夫婦の緣の友綱を、忠義に思ひ振り切つて。
ト 權六船へ飛乘る。おらち驚き友綱をとらへる故權六山刀を拔いて友綱を切る。おらちどうとなる。

是にて船はよき所へ出る。權六刀をくわへるを木のかしら。

〽跡白浪（あとしらなみ）と。

ト三重浪の音はげしく權六艪を押し立てる。おらちは呆れし思入、此の見得三重にてよろしく、

幕

三幕目

岩木館の場

役名 鬼柳一學、大和田藏之進、大江の郡領時廉、一學悴左門之助、忍び運藤、足輕鎌平、同鐵平、山岡權六。權六女房おらち、藏之進妻櫻戸、乳人呉竹、腰元あざみ、同若葉、同おあさ、後室初姫、藏之進悴竹千代。

本舞臺四間通し中足の二重本櫓付き、向ふ銀襖、上手塗骨障子書心に立て、上下後へ下げて網代塀、楓の立木、口覆より同じく釣枝。すべて奥州岩木館の體。爰に腰元あざみ、若葉、おあさの三人長柄

くわへの女蝶男蝶を折つて居る。此の見得琴唄にて幕あく。

あざ　コレ若葉殿、わしやどうも合點が行かぬは、こちの御殿のお姫様、まだお五ツのやんちや盛りをなぜ[illegible]宗様と云ふのぢやぞいの。

若葉　ヲ、あざみ殿、そなたは新参故知りやるまいが、殿様御不慮にお果てなされてより、御臺様を始め安壽姫様對王様お三人共、要之介殿を御供にて何處へ御出でなされたやら、お行衛知れず、

あさ　それ故後は御家老の一學様がお預り、御幼少なれど初姫様は對王様とお云號け故、それで後室様と申上げるのぢやわいの。

あざ　ハアそんならアノ初姫様は御兄弟ではないのかいなア。

若葉　サア、アノ初姫様は岩手の社で殿様がお拾ひなされしお子様ぢやわいの。

あざ　そんなら初姫様は、蜜柑籠へ入れてあつたお捨かいの。

あさ　是はしたり其様な事を、それはさうと此の女蝶男蝶は何の爲めに拵へたのぢやぞいの。

若葉　これは今日初姫様へ伯父君郡領様のお媒人で御養子が御出でなさるゝ故、御祝儀の支度をするのぢやわいの。

あざ　何故御養子をなさるのぢやぞいの。

あさ　サアお大名はお五ツでも一旦お云號のあつた上は、外の殿御を持つ事はならぬわいなう。

あさ　それはまアおいとしい、一生うまい味を知らずに私なぞでは辛棒が出來ぬ、なんでも大きいのや小さいのや、又長いのや、筋の澤山あるのや色々喰べわけて見ねば、うまい味が知れぬわいなア。

二人　そりやお前何の事ぢやえ。

あさ　サアコリヤ私の好きなさつま芋の話ぢやわいの。

三人　ホヽヽヽ。（ト三人笑ふ。調べになり奥より乳人呉竹出て來り）

呉竹　コレ／＼腰元衆、最前から後室樣が皆が居ぬとておむつがつてぢや、お伽に行つて下さりませ。

三人　畏りました。

あさ　私がいつものおどけ話で御氣嫌を取りませう。

呉竹　サア／＼早う往つて下さりませ。

若葉　そんなら御一緒に、

三人　參りませうわいなア。（ト調べにて三人奥へはひる。呉竹殘り）

呉竹　ほんに年の行かぬ内と云ふものは、寄るとさはると男の話、又は芝居の噂にて御上の事も思は

ずに、殿様御不慮のその上に御親子様の御行衛知れず、かてゝ加へて藏之進樣、日頃の忠義に引替へて、お主を討ちしと獄屋へ押込め、それ故鬼柳一學樣只一人の御心勞、此の上お家の成行が案じられる事ぢやわいなア。

ト思入唄になり、花道より藏之進妻櫻戸屋敷女房のこしらへ、悴武千代袴一本差しにて櫻戸に手を引かれて來り、花道にて。

武千　申し母樣、父樣のお出でに成る所はもう直かや。

櫻戸　ヲヽ、父樣のござるのは、アノ向ふの獄屋に、イヤ御殿にお出でなさるゝ故、必ずお上へ御願ひ申しそなたに逢さうわいの。

武千　早う逢はして下されや。

櫻戸　ヲヽ、逢はさいで何とせうぞいなア。（ト唄の切にて本舞臺へ來り吳竹を見て）憚りながらそれにお出でなされまするは、初姫樣のお乳の人、吳竹殿ではござりませぬか。

吳竹　是はどなたかと思うたれば、藏之進樣の御內室櫻戸樣、武千代樣も御一緒に、よう御出でなされました、いつも乍らおまめな事でござりまするな。

櫻戸　イヱ、もうどことも申しませぬ替りに、いたづらのみ致して居りまする、ホヽヽヽ、シテお

呉竹　姫様にも、御氣嫌よろしうゐらせられまするか。

櫻戸　誠に御丈夫に御成長遊ばしまする。

呉竹　それは何より御目出度う存じます。（ト是にて呉竹思入ありて）その御目出度に就きましても、お氣の毒なは櫻戸様、申さう様もない藏之進様の御身の上、深い様子のある事ではござりませうが、此の程よりの獄屋の御住居、お前様のお心の内御推量申して居りますわいな。

櫻戸　有難うござりまする、明暮お主を大切に寢ても足さへ向けませぬ夫藏之進殿、如何なる天魔の魅入りしかお主を討ちし大罪人、所詮助からぬ命故どうぞ此の子に逢はせ度く、又私も逢ひたさに忍んで館に參りましたが、藏之進殿を預りは物堅い兄一學、定めて此の事頼みましたら叱りまするでござりませう、どうぞあなたも共々にお願ひ申し上げまする。

呉竹　そりやもう御頼みなうても一學様へ、よしなにお取りなし致しませう。

櫻戸　コレ武千代、そなたも御願ひ申しやいの。

武千　アイ、おばさまお願ひ申しまする。

呉竹　アイ／＼承知しました、アヽ何にも知らぬお子でさへ。（ホロリと思入）

櫻戸　御推量なされて下さりませいな。（ト此の時花道揚幕にて）

呼び　時廉樣お入り。

吳竹　折惡い伯父君の御入りとあれば。

櫻戸　御目に掛らば此の身の大事。

吳竹　暫しの間その垣の、小陰にお忍びなされませ。

櫻戸　左樣なれば吳竹樣。

吳竹　櫻戸樣。（ト立掛り）ドレ御知らせ申しませうか。（ト床の淨瑠璃になる）

〽女同志の賴もしく、乳人は奧へ櫻戸は、垣の小陰へ忍び行く。

ト兩人思入あつて吳竹は奧へはひる。櫻戸は武千代の手を引き下手へはひる。

〽折から入來る大江の郡領、上見ぬ鷲の勢に、館の執權鬼柳一學、禮儀正しく出迎ひ。

ト是へ中の舞を冠せ花道より時廉上下大小にて出る。奧より鬼柳一學衣裳上下大小にて出て來り出迎ひ。

一學　是は〳〵伯父君郡領公には能うこそ御入來、後室初姬の名代御出迎ひ仕つてござりまする。

時廉　ヲヽ、誰かと思へば兄樣一學、出迎ひ大儀。
一學　ハツ、イザ設けの席へお通り下さりませう。
時廉　許しやれ。
〽しづ〳〵上座へ打通れば、一學は敬ひ請じ。（ト時廉上手へ通り住ふ。一學こなし有つて）
一學　伯父郡領公には御政務御繁多の中、當家跡目御媒介の下され、御苦勞の段有難き仕合せに存じ奉りまする。
時廉　何さ〳〵、是も伯父たる身の役目、さのみ苦勞にも存ぜぬ、何にもせよ乳呑み子に五十四郡を預け置く事心元なく、それ故某媒介なせし當家の養子、幸ひ今日吉日故後刻入輿致すであらう。
一學　委細承知仕つてござりまする。
時廉　イヤそれは格別、此の程より禁獄させし主殺しの藏之進、もはや成敗なしやつたか。
一學　未だ成敗の仕りませぬ。
時廉　何故成敗の致さぬのぢや。罪科極りし逆ばツつけ、何の造作もない事だ。
一學　仰せ恐れ入り奉る、殿御逝去の其後は、御幼少なれど御後室は即ち舘のあるじ、身不肖なれ

ど拙者補佐なし萬事の政治、藏之進何故主君を害せしと日夜拷問仕れど、今にそれぞと白狀せず、さすればうかつに成敗なりがたく、それ故日々延引の段恐れ入つてござりまする。

時廉　ム、さこそあらん、それと察して時廉がとくより養子を勸むるのぢや、何を云つても幼少なる後室故、何事も後室々々と子供に塗り附け埒があかぬ、今日養子相濟めば此の郡領が指圖をなし、萬事の政治致さにやならぬ、たとひ白狀致さうが致すまいが、主を殺せば逆ばツつけ竹鋸は當り前、ア、緣に引るゝ者共が嘸ぞや歎いてほへるであらう、笑止な事だム、ハヽヽヽ。

〽あくまで罵しる雜言に、無念と思へど一學が、素知らぬ體に張合なく。

一學　イヤ是とてもいらぬ事、ドリヤ養子入來致すまで、奥へ參つて休息なさん。

時廉　何さま御養子入輿は正午の刻限、いまだ餘程の間もござれば、

一學　打寛いで相待たん。

時廉　左樣なれば郡領公。

一學　後刻逢はう。

〽四邊ねめ附け一間の內、入るを遲しと小陰より、櫻戶が武千代を連れて出るを一學が、それと見やりて立たんとするを。

ト此の文句の間時廉奥へはひる。下手垣の後より櫻戸武千代を連れ出て來り、一學兩人を見て立上るを。

櫻戸　アヽモシ兄上樣、暫らくお待ち下さりませ。

〽云ふに一學尻目にかけ。

一學　ヤイそちや妹櫻戸、誰が許して此の館へは來たりしぞ。

櫻戸　サアそれは。

一學　イヤサ夫藏之進は大それた主殺しの科人、家内殘らず戸〆めになし、出入りを堅く止め置きしに御法を破るのみならず、御殿間近く來るなどとは云はうやうなき不屆きものめが、きり／＼立つて歸り居らう。

〽叱りつけられ櫻戸は。

櫻戸　サヽその御立腹は御尤も、お物堅い兄上樣故お叱り受くるを合點で、御法を破りお館へ忍んで參りましたのは、是なる武千代が明暮父樣に逢ひ度い／＼とせがみます故、どうぞ一目逢はせ度く子故に迷うて致せし事、此の子に免じてお許しなされて下さりませ、コレ武千代、父樣に逢ひたくばよう伯父樣にお願ひ申しや。

〽母が敎へに武千代は、おとなしく手をつかへ。

武千　コレ伯父樣、どうぞ父樣に逢はせて下さりませ、拜みますわいなア。

〽兩手を合せて伏拜めば、一學も言葉を和らげ、

一學　ヲヽ、尤もぢや〳〵、さぞ逢ひたからうがな、コレ伯父が云ふ事をよう聞けよ、そちが父はな、大事の〳〵お主を殺せし科人故、獄屋というて怖い恐ろしい所に居る故、可愛いそちに逢はせたうても逢はされぬ、ぢやに依つて早う家に歸れ、ヨ、そちは賢い者ぢや故、定めて聞わけたであらうな。

武千　そんなら父樣はお主樣を殺した故、わしに逢ふ事はなりませぬか、母樣どうせうぞいなう。

〽とすがり附けば。

櫻戸　道理ぢや〳〵、モシ兄上樣、此やうに此の子が逢ひたがります、たつた一目逢はせてやつて下さりませ、殊には今も承れば、今日御養子樣のお入り次第、直ぐに夫の成敗と郡領樣の仰せなれば今日逢はねばもう此世で、逢ふ事ならぬ藏之進殿、慈悲ぢや情ぢや兄上樣、どうぞ逢はせて下さりませ。

〽口説き歎くを道理とは、思へどわざと言葉を荒らげ。

一學　ヤアくど〱と返らぬ事を、たつて申さば役目の妻、御法を破りし重罪人、そのまゝには差置かぬぞ。（トあたりへ思入あつて）サ、人目に掛らぬその内に、武千代連れて早く歸れ、エ、歸れといふに。

櫻戸　イエ〱、夫に逢はぬその内はどうあつても歸られませぬ、御法を破りし科とあらば、私も此の子もとも〴〵に獄屋へやつて下さりませ。

武千　わしも一緒に行きたいわいなう。

〽幼な心に母親を、したふ心ぞいぢらしゝ。

一學　エ、左程迄に。イヤ憎きやつら、願ひの通り獄屋へ入れてくれう、ヤア〱悴左門是へ來れ。

左門　はア、。

〽はつと答へてお次より、上下姿しとやかに、左門は父に手をつかへ。

ト下手より左門之助若衆髷上下大小にて出て來り。

父上御用でござりまするか。

一學　ヲ、、そやつら二人に繩掛けい。

左門　はつ。（ト櫻戸武千代を見て）ヤコリヤ叔母樣武千代殿、何故あつてお二人に。
一學　お咎め受けし身を以つて、上の御法を破りし故。
左門　スリヤそれ故にお二人に。
一學　とく〳〵繩掛けい。
左門　畏つてはござりまするが、現在叔母や從弟の武千代。
一學　イヤたとひ緣者たればとて、科ある者をゆるさうか。
左門　ではござりますか。
一學　ヤア役目の表を粗略になすか。
左門　はツ是非に及ばぬ、叔母樣御免。
〽用意の早繩取出し、是非も淚の叔母從弟、血筋の繩ぞ掛けにける。
ト左門之助取繩を取出し兩人に繩をかける。櫻戸思入あつて。
櫻戸　エヽ胴慾な兄上樣、私は兎もあれぐわんぜない此の子に繩を掛けるとは、あんまりな情知らず、氣强いばかり武士かいなア。
〽身をふるはして櫻戸が、恨む言葉を耳にも掛けず。

一學　最早御養子輿入の刻限、見苦しき此奴等二人、廣庭へ引立てい。

左門　畏りました。

櫻戸　そんならどうでも逢ふ事は。

武千　ならぬかいなア。

一學　ヲヽ此の世の内では逢はれぬわい。

櫻戸　ハアヽ。（ト泣くを引立て）

左門　イザ叔母樣お立ちなされ。

櫻戸　それぢやと云つて。

一學　エヽきり／＼引立い。（トきつといふ）

〽引立られて親と子が、是非も泣く／＼歩み行く。（ト櫻戸武千代を左門之助附いて下手へはひる）

〽折しも表に聲高く。

呼び　御養子樣のお入り。（ト呼ぶ。一學思入あつて）

一學　早や御養子の御入りとあれば、時廉公へ申上げん。（ト奥にて）

時康　イヤ知らせに及ばぬ、聞いた〳〵。
〽一間を出る大江の郡領。(ト序の舞にて奥より時康出て來り)
待兼ねし養子の入來。(ト上手障子屋體へ向ひ)　ヤア〳〵乳人呉竹、後室を是へ。(ト上手にて)

呉竹　ハイ畏りました。サア〳〵後室様にも、

腰皆　あれへお越し遊ばしませ。
〽乳母腰元が聲々に、敬ひかしづく後室は、まだ五ッ子のいたいけながら、さもうづ高く見え給ふ。
ト是へ管弦を冠せ、奥より以前の腰元褥脇息を能き所へ置く。芥子坊主の姫、呉竹手を引き出て來り褥の上に住はせる。一擧はつと平伏なす。又花道揚幕にて。

呼び　お入り。
〽待つ間程なく香に匂ふ、つぎ木の梅の若枝も、三十餘りの大男無骨に似合はぬ長上下。
ト三味線入中の舞になり山岡權六長上下大小にて、誂への箱を抱へ出て來り花道にて。

權六　話に增さる岩木の館、屋敷の物好き庭前の風景、片山里の田舍侍、かゝる席へは初々しき汗

を覺期の敵役、住馴れぬ乍らお許しうけ、是まで來りし象潟權六、誰そお取次頼み存ずる。

時廉　待兼ねし象潟權六、養子となれば我館、何案内に及ぶべき。

一學　何はしかれそこははし近、まづ〳〵是へ。

皆々　お通りあらせられませう。

權六　然らばそれへ參るであらう。（ト右鳴物にて權六二重能き所へ住ふ。）

時廉　何と一學、郡領が見立てた養子、器量骨柄能い跡つぎであらうがな。

一學　はつ、御養子樣へ申上げます。則ち是に御座あるが當家の後室初姬君、まつた拙者事は家老鬼柳一學と申すもの。

吳竹　私事は後室樣の乳人吳竹、その外つぎ〳〵の腰元ども、

一學　自今お目かけられて、

皆々　下さりませう。

權六　何が扨て今日より養子となれば、其方どもとは主家來、萬事よしなに、イヤ又後室は某が母人、親子となりし印しには、此の一品を受納下され。

へ箱さし出す、その間に運ぶ腰元が、銚子杯熨斗昆布、行末廣き三ツ重ね、

これぞ親子の縁結び。

ト此の間權六伴の箱を初姫の前に出す。腰元皆々銚子杯を運ぶ。吳竹取次ぎ。

一學　イザ後室より御養子へ御杯を、

吳竹　畏りました。

ト謠になり吳竹持添へて初姫に杯を取らせよろしくあつて權六にさす。權六呑んで謠一杯に納る。

時廉　是で親子固めの杯、

吳竹　首尾よう相濟み、

皆々　お目出度う存じます。（ト一學初姫に向ひ）

一學　イヤ何後室樣、今日よりして御養子權六樣はあなたのお子でござりますれば、御挨拶を遊ばしませ。

吳竹　サテちやつと仰しやりませいなア。

ト吳竹初姫に呑込ませ思入。

初姫　ヲヽ我子の權六、隨分母に孝行にしておやま人形買うてたもや。

權六　ハツ、是は〳〵有難き母人のお言葉、何がさて孝行に致さいで何と致さう、御氣嫌のよいやう

になんなりとお好きな物を、澤山買うてあげまする、其替り權六も可愛がつて下されや。

初姫　ヲヽ過分〳〵。

〽ませた詞のいとさまは、つけごの鶯ひきかへる、歌にも詠まれぬ出合なり、
郡領はしたり顏。

時廉　サア一學、養子の祝儀濟む上は、藏之進を呼び出し敵の詮議致さにやならぬ。

一學　イヤその詮議はなりませぬ。

時廉　ムヽ、ならぬとはなぜならぬ。

一學　サアたとひ詮議致しても、肝心の後室樣には、藏之進は殺さぬと仰しやります、なア左樣でござりまするな。（ト思入にて言ふ）

初姫　ヲヽ殺す事はいやぢやわいの。

一學　アレあの通り、いか程お勸め申しても殺さぬとばかり御意ある故、殺せとあるまで永の牢舍、それ故詮議には及びませぬかと存じます。

〽云へば爰ぞと郡領が、知らす目顏を呑込んで。（ト時廉、權六うなづき合ひ）

權六　アイヤ一學、母人へ權六が申上げる仔細あり、母人是へ。

〽ずんど立つて權六は、後室膝に抱き上げ、心の鎌筵おし隱くし、わざと面を和らげて。

ト一學是非なき思入。具竹初姫の手を取り權六の傍へ遣る。權六抱上げてぢつと顏を見て思入あつて。

イヤ母人、只今權六が申上げる事ようお聞きなされませや。（ト誂への合方になり）大方常々附添ふ者がお勸め申上げませうが、やんちやばかり仰しやつて、殺さぬとあつては第一御不孝、あなたの爲には義理ある養父、政氏公の仇敵藏之進を殺さねば、岩木の家が立ちませぬぞや、サアそれぢやに依つて殺さうと仰しやれ、サア仰しやらぬかサア仰しやれ、ヱ、是程云うても仰しやらぬか、ム、コリヤこつちが惡かつた。

〽獨りうなづき袂より、雛の片しを取出し。（ト權六思入袂より紙雛の男雛を出し）サア母人權六が惡い事は申しませぬ、ツイ殺せと仰しやつたら、コレ〳〵此の雛を上げまする、サア是がほしくばたつた一口。

〽さア仰しやれとすかされて、人形ほしさの幼氣に。

初姫　ヲヽ、殺しやいなう。

一學　ヤ。

權六　ヲヽ殺せとはよく御意なされた、さて〳〵賢い母者人。

〽たらし込んだる工夫のわな、權六居直り言葉を荒らげ。

サア一學、後室の御意は背かれまい、藏之進めを引出し此の權六が一詮議。（ト立掛る）

〽豪氣の男。

一學　アイヤ、お待ちなされい權六樣。

權六　ムヽ待てとは何で。

一學　されば御親子のお杯は濟ましたれど、跡目の輪旨も受けぬ内岩木の家の政道は、まだ〳〵お早い、お控へなされい。

〽遣込れば急き立つ郡領。

時廉　ヤア推參なり一學、此の郡領が媒介にて岩木の養子になつたる權六、早いとは何が早い、たとひ輪旨は受けずとも、家の系圖を讓りなば、岩木の主は此の權六、イザ改めて受け取られよ。

〽懷中より一卷取り出し、渡せば權六押頂き。

ト時廉懷中より袱紗包の一卷を出し渡す。權六取つて。

權六　ハヽ忝き御賜、コリヤ一學、家の系圖が手に入つても是でも政道はならぬといふか。
一學　サアそれは。
權六　よもや違背はあるまいが。
　　〽退引きならぬ言葉詰、是非なく控ゆる折からに。
　　トてんつゝになり花道より前幕のおらち、高からげ風呂敷包を持ち出て來る。是を足輕鎌平、鐵平菖蒲革股立の足輕にて制し乍ら出て來り花道にて。
鎌平　賤しい女め下れ〱。
らち　イヱ〱私しや怪しい者ぢやごさんせぬ、此の屋敷のお殿樣にお願ひ申す事がある程に、どうぞ通して下さんせ。
鐵平　イヤ〱ならぬ〱、下れ〱。（ト爭ひ乍ら舞臺へ來る）
一學　コリヤ〱姦しい、何事ぢや。
鎌平　ヘイ〱、此の女が殿樣へ直のお願ひがあると申して、押して通りまする故、さゝへまするのでござります。
　　〽下部が言葉に、權六わざと言葉を正し。

權六　何某へ願ひある女、シテ何事の願ひぢや。

らち　ハイ〳〵、そのお願ひと申しまするは。

〽云ひつゝふつと顔見合せ。

ヤお前ぢや〳〵、こちの人ぢや、ヲ、やつぱりこちの人ぢや〳〵。

鐵平　ヤイ〳〵、御養子様をとらへてこちの人とは、不届至極下れ。

らち　イエ〳〵下らぬ、私しや女房でござんす、コレ權六どの、こなさんは〳〵、連添ふ女房に譯も云はず、ぽいと舟に飛乘つて何處へ行かしやんしたか行衛知れず、せう事なしに世帶を仕舞ひ泣の涙で諸所方々、お前の行衛を尋ねるのでいかい苦勞をしましたわいなア、それにお前は仔細らしい裾の長い上下着て、さしつけもせぬ脇差をいらぬ事に二本さし、勿體らしい顔わいなア、ア、聞えた、コリヤお前私に愛想が盡きた故、此の内へ聟入りする氣ぢやな、イヤさうはならぬ、アイならぬわいなア、私が亭主ぢやに依つて私が連れて戻つて見せう、サア山岡、戻らしやんせいなア。

一學　何山岡。

〽聞咎むるを打消して。

權六　ヤア我を捕へて亭主なぞとは、身の程知らぬ慮外者めが、ア、不便やこいつ氣違ひさうな、はゝゝゝゝコリヤ中々よい慰み、ヤイ女一體、わりや何處の者だ。

らち　アレまだぬけ〳〵とそんな事、女房も女房、お前とは一通りの仲かいなア、忘れもせぬ五年後ざこね寢祭に馴れ初めて、仲人なしに女夫となり、子まである私をば女房でないの氣違ひのと私よりお前の氣がのぼつて居るに違ひない、サア〳〵早う戻らしやんせいなア。

　　立掛るを押へだて。

鐵平　尾籠な女控へて居れ。

權六　ヤア又しても慮外な女郎め、某を誰かと思ふ。今日より岩木の跡目五十四郡の主なるぞ、僞りぬかすのぶとい女め、首ぶつ放す奴なれども、今日の祝儀に命は助くる、コリヤ此の女を門前へ叩き出せ。

足輕　ハツ畏つてござりまする、女め立たう。

らち　イエ〳〵私しやこちの人と是非共一緒に。

鐵平　エ、叶はぬ事を、きり〳〵立たう。

　　へ引立てんとするを一擧聲かけ。

一學　アイヤ、其女歸しては政道が立ちますまい。
權六　ム、政道が立たぬとは。
一學　ハテ館の跡目權六樣に云ひかけ致せし大罪人、此のまゝには歸されぬ、幸ひあなたの政道始め、さつぱりと切つて仕舞へとある、後室樣の則ち仰せ、な申し。（ト初姬へ思入）
初姬　ヲ、その女切つて仕舞へ。
權六　ヤ。
一學　ソレ切れと仰しやる、母御の御意は背かれますまい。
權六　サアそれは。
一學　但し殺せとある、藏之進が背きませうがな。
權六　サアそれは。
一學　成敗あるか。
權六　サア。
一學　お背きあるか。
權六　サア。

一學　サア。

兩人　サア〳〵。

一學　御返答が承はり度い。」

〽しつぺい返しの理屈詰、有無の返事もあらざれば。

權六　ム、成敗致さう。

一學　スリヤ御意をお背きなされぬか。

權六　如何にも後室の御意は背かれぬ、云ひ掛け致せし下素女は、某直に首打落す。

らち　エヽ。

權六　ソレその女に繩かけて廣庭へ引据ゑおけ。

鍬平　畏つてござりまする。

〽早繩たぐつていましむれば、女は狂氣の如くにて。

らち　エヽ、現在連添ふ女房に、繩かけて殺さうとは、そりや餘りぢや〳〵わいなア。

權六　餘りとは何が餘り、云ひ掛け致せし不届き奴、くど〳〵云うても返らぬ事だ、ソレ引立てい。

鐵平　ハッ、女め立たう。

らち　イヱ／＼私しや愛は立たぬ、立ちませぬわいなア。

權六　エ、目ざわりなその女、きり／＼引立てい。

らち　そんならどうでも。

權六　知らぬわい。（ト悔しき思入）

足輕　きり／＼立たう。

〽情用捨もあらけなく、引立て／＼追うて行く。（ト足輕兩人おらちを追ひ立て／＼下手へはひる。）

時康　ム、云ひ掛けひろぎし女が成敗權六が致すからは、一學そちも藏之進が詮議を、此の場で致してよからう。

一學　畏つてござりまずる。

權六　岩木の家風詮議の仕樣、後學の爲め見物致さう。

〽四邊眼にうなづき合ひ、煙草輪に吹くにく體顏。

吳竹　アイヤ後室樣には最前より餘程の間、さぞ御退屈、奧へお入り遊ばして、チトお遊びなされましたがよろしうござりますわいな。

初姫　ヲヽ皆も來い、遊ばうぞや。

權六　左樣なれば母人樣。

初姫　權六、後に遊ばうぞや。

權六　はつ。（ト辭儀をする）

吳竹　イザ奥殿へ。

皆々　入らせられませう。（ト唄になり吳竹初姫を伴ひ腰元附いて奥へはひる）

時廉　イヤ一學、早く藏之進を引ずり出せ。

一學　はつ。（ト上手に向ひ）ヤア〳〵者共、四人藏之進を是へ引け。

捕人　ハアヽ。きり〳〵歩め。

〽早引出す四人は、大和田藏之進綱淸、思はぬその身の罪科に、重き掟のしばり繩、心は解けぬ主人の館、しをれ白洲に押し直る。（ト此の文句の内よき程に）

きり〳〵歩め。

ト是をキツカケにかすめて時の太鼓になり、上手より大和田藏之進黑の一ツ着繩附きにて、黑四天の捕人四人繩を取出て眞中に引据ゑ。

下に居らう。」

へ一學傍へ立寄りて。

一學　コリヤ大和田藏之進、此の程より詮議なすに、主人を討ちしその仔細、白狀致さぬゆゑ永の牢舍申し附けしが、今日た伯父君時廉公、まつた當家の御養子權六樣の御指圖なるぞ、サヽ包まずと白狀しやれ。

へ云ふにはつと頭を下げ。

藏之　はつ此の間より申す如く、政氏公を討ち奉りしは、此の藏之進に相違ござらぬ、たゞ仔細は申さずとも主を討つたる大罪人、御家の御仕置願ひ奉る。

一學　イヽヤ其仔細白狀せざる中は、いつかな仕置得致さぬ、主君を討ちしとは分明ならず、誠討つたる者なりとも、包まるゝだけは包み隱すに、自身の白狀合點が行かぬ、サア其の心底を眞直ぐに白狀致せ。

藏之　イヤ／＼いか程白狀致せとあつても、主君を討ちしといふより外、白狀の筋毛頭ござらぬ。

一學　スリヤどの樣に申しても。

藏之　くどい事を。

一學　ハテ是非に及ばぬ。
〽物和らかき一學が、詮議に權六高笑ひ。
權六　ヤア詮議の仕やうが手ぬるいく、共樣な事ぢや白狀せまい、なぜ火水を以て拷問せぬ、詮議の仕やうはさまぐ有るに、ハテ扨て岩木の政道は生ぬるい事だなア、ム、ハ、、、。
〽とあざ笑へば圖に乘る郡領。
時廉　イヤコリヤかうなけりや叶はぬ、聞けば藏之進が女房は一學そちが妹さうな、さては兄弟の間柄故、それで生ぬるい此の詮議。
一學　コハ郡領公の仰せとも覺えず、一國の政治を預る某、妹の緣に引るゝやうな一學でござらぬ
時廉　イヤ引かれぬとは云はれまい。
權六　それとも何ぞ引かれぬといふ。
兩人　證據があるか。
一學　いかにも其證據御覽に入れん、ヤアく悴左門、最前の繩附き是へ。
藏之　ハア、。
〽はつと云ふ間も哀れげに、しほるゝ花の櫻戶親子、倶に繩目の憂き姿。

ト かすめて時の太鼓、下手より櫻戸武千代に繩かけ左門之助は繩を取り附添ひ出て來り、下手に控へ居る。

左門　ハツ、仰せに隨ひ引据ゑましてござりまする。

〽云ふに思はず藏之進、顏見合せて。

藏之　ヤツ、そち達は。

櫻戸　我夫か。

武千　父様か。

兩人　逢度かつたわいなア。

〽寄らんとするを一學が、あらげなくも押へだて。

ト 櫻戸武千代上手へ行かうとするを一學眞中にて押へて。

一學　いかに時康公、妹や聟の緣に引かれぬ一學が心の底、最前藏之進に逢ひ度いと、密に館へ參りし二人、不便に思はど內々にして、逢はせやるが人情なるに、からめ置きしも兄弟乍ら御法を破りし科人故、サ心引かれぬ是ぞ證據、イザ御疑念お晴し下されい。

〽言葉よどまず云ひ放せば、郡領も打うなづき。

時廉　ム、流石は一學感心致した、その心底を見る上は藏之進が首打落せ。
一學　ヱ。
時廉　たとひ仔細は白狀せずとも、主を討ちしと一言にて科は極まる逆ばツつけ、そこを情で死罪に行ふ、有難い事だと思ひ居らう。
一學　ではござれども。
權六　否むは矢張り妹の緣に引かるゝ心か。
一學　全く以て。
時廉　さなくば討つか。
一學　サア。
權六　但しは討たぬか。
一學　サア。
兩人　サア。
三人　サア〳〵。
時廉　心引かれぬ其力なれば。

權六　よもや否とは云はれまい。

〽ぬきさしならぬかすがい責め、一學も心を定め。

一學　いかにも討ちませう。

藏之戸　エ、。

一學　見事討つてお目に掛けう。

時廉權六　コリヤかうなうては叶はぬ筈。

一學　その代りには權六樣にも、云掛け致せし女が首、お討ちなさるでござりませうな。

權六　云ふにや及ぶ、養子になりし手柄始め、きつと成敗致して見せう。

時廉　ム、權六には女の首、又一學は藏之進が首。

權六　互ひに討つも最早たそがれ、

一學　今宵暮六ツ、鐘を合圖に。

權六　女が首は一學そちへ。

一學　藏之進が首は權六樣へ。

時廉　身共は奥で、それまで一獻。

一學　左樣ござらば御兩所樣。
時廉　鬼柳一學。
權六　然らば言葉を。（ト立上り思入あつて）つがうたぞよ。
〽言葉つがうて兩人は、打連れ奥へ入りにける。
ト時廉先に權六附いて奥へはひる。
一學　コリヤその方共は次へ立て。
捕手　はつ。（ト捕手足輕は下手へはひる）
〽家來を追やりあたりを見廻し。
一學　コレ左門、櫻戸武千代が繩を解きやれ。
〽といましめを解きほどけば。（ト左門之助櫻戸武千代の繩を解く）
左門は門外警固致せ。
左門　畏つてござりまする。
〽心得奥へ立つて行く。
一學　サア人の見ぬ間にとつくりと、藏之進殿に逢うたがよい。

櫻戸　エ。そんなら大事ござりませぬか。
一學　ヲ、大事無いとも、から對面をさゝう爲め、わざと繩を掛けたる兩人。
櫻戸　スリヤ是もお情でござりましたか、さうとは知らず恨みましたは、堪忍して下さりませいな
ア。コレ武千代よう伯父樣にお禮を申しや。
武千　アイ伯父樣、嬉しうござります。
一學　ヲ、嬉しからう〳〵、取わけそなたは一世の別れを致したがよい。
櫻戸　スリヤどうあつても。(トびつくりなす)
一學　ハテ知れた事、一旦つがひし武士の言葉反古にはならぬ。
櫻戸　そりや聞えませぬ胴慾な、なぜ助けては下さりませぬ、お前は夫の首打つて武士の意地は立ち
ませうが後に殘つた私や、此の子はどうせう〳〵、どうせうぞいなア。
〽どうせうぞいなとひれふせば、譯も涙に武千代が共に泣くこそいぢらしゝ、
藏之進は言葉を荒らげ。
藏之　コリヤ櫻戸、何をぐづ〳〵、一學殿を恨む事があるべきぞ、首討たるゝは此の身の大罪、三代
相恩のお主を手に掛け、竹鋸で引かれし上逆ばツつけにあふべきを、首討たるゝはまだしも

の事、殊には又他人ならぬ、そちが兄たる一學殿の手に掛るは此の身の本望、恨みを云ふその口でなぜ禮は云はぬのぢや。

櫻戸　何の是が禮所か、お前が死なば私も此の子も所詮生きては居ぬ覺悟、死出三途もとも〳〵に。

藏之　エヽまだ〳〵申すか、うつけ者め、仔細あつて藏之進は、數代續きし大和田の家名を汚せし主殺し、一命捨つるは元より覺悟、此の身ばかりかそち達までとも〳〵死ねば恥の恥、サア死ぬる命を永らへて、忰武千代を守り育て、一學殿を後立に恥辱をすゝぐ心はないか。

櫻戸　サアそれぢやというてどうまア是が。

藏之　ならぬと有れば是非に及ばぬ、夫婦親子の緣を切らうか。

櫻戸　サアそれは。

藏之　聞わけて死を止まるか。

櫻戸　サア。

藏之　ドヽどうぢや。

櫻戸　ハアヽ聞わけました。

藏之　ムヽそれでこそ我女房、イザ一學殿片時も早く拙者めを。

一學　云ふにや及ぶ。（ト一學思入あつて）

〽とつゝ立しが。

とは云へ最早此の世の別れ、云ひ置く事もあるならばなんなりと。

藏之　忝き貴殿の心底、此の期に及び云ひ置く事はござらねど、只心に掛るはお家の成行き、又二ツには此悴が行末頼み置くは是ばかり。コリヤ武千代爰へ來い。

武千　アイ〳〵。（ト藏之進に寄りぢつと顏を見て）。

藏之　コリヤ武千代、今此の父は死ぬ程にそちは是から伯父樣を、父と思うておとなしう、手習學問弓馬の稽古誰に劣らず精出して、天晴大和田の胤なりと人に褒められ此の父が、恥辱をすゝいでくれいよ。

〽云ひ聞かすれば武千代は、涙拭うておとなしく。

武千　アイ手習學問弓矢の稽古、おとなしう仕ます程に、どうぞ死なずに居て下さりませ。

櫻戸　ヲヽ尤もぢや〳〵、道理ぢやわいの。

藏之　死なずに居らるゝ事ならば、何のそちを殘して死なう。

〽流石子故の恩愛に迷ふ心を取直し。

ア、益なき事に未練のくり言、一學殿、必らずお笑ひ下さるな。

一學　アイヤ／＼、貴殿の心中察し申す、去り乍ら最早暮六ツに間もあるまじ、心靜かに覺悟あれ。

藏之　とくより覺悟致してござる。

〽座を構ゆれば一學も、下緒を取て早だすき、刀の寢刃哀れにも、妻子は左右
に取縋り

ト藏之進居直る。一學下緒をたすきに掛け刀を拔き鼻紙殘にて拭ふ。是を見て櫻戸武千代藏之進にすがり附き。

櫻戸　そんならどうでも。

武千　父樣には。

櫻戸　お果てなさるのかいなア。

藏之　ハテ知れた事を。（トきつと言ふ。此の時本釣鐘の六ツを打つ）

一學　ヤありやモウ暮六ツ。

藏之　近づく知死期。

櫻戸　スリヤモウ是が。

一學　此の世の別れ。

櫻戸　はア、。（ト泣伏す）

藏之　エ、未練者め。

〽と一言が此の世の別れ、武士の泣かぬ涙ぞ。

ト此の間藏之進目を閉ぢ覺悟の思入。一學刀を振り上げ引張りの見得にて、此の道具ぶん廻す。本舞臺三間の間高足の二重、本緣附白洲階子。上の方一間朱塗り骨障子屋體、向ふ銀襖、上の方登り木の松、柴垣、下の方網代塀、同じく柴垣、上下に楓の立木、日覆より青葉の楓の楓釣枝、すべて奥殿の模樣、矢張り本釣鐘の幕六ツにて道具納る。

〽哀れなり、無常を告る鐘の音に、小ぐらき庭の廣緣先、窺ひ〱時廉が、合圖の呼子吹きたつれば、茂みを出づる忍びの曲者。

ト此の間奥より以前の時廉出て來り、あたりを窺ひ呼子を出し吹く。是にて下手樹木の陰より、忍び運藤黑頭巾一本ざしにて出て來り。

運藤　時廉公。

時廉　コリヤ。（ト時の鐘合方になり）

運藤　相圖の呼子に御用でござりまするか。

時廉　ヲ、用事あり。（トあたりへ思入あつて）兼ねて當家を押領なさんと、都に於て政氏を討取らせ、手立を以て邪魔になる藏之進めに科を負はせ、今宵死刑に行ふ手立、又此の程荷擔せし象潟權六、一癖あるゑせもの故、當家へ養子に入り込ませ、五十四郡を奪はん工、十が九ツ仕負ふせたれど、滿つれば欠くるの憂を思ひ、一家といへど敵の舘、長居せんは此の身の大事、それ故密かに歸館なせば、汝は跡に忍び居て、今宵の樣子を注進致せ。

運藤　畏つてござりまする、シテ我君には只お一人。

時廉　イヤ〱門外には數多の家來、忍ばせ置けば氣遣ひなし。

運藤　左樣ござらば時廉公。

時廉　必らず人に見咎められな。

運藤　心得ました。

時廉　幸ひの此の宵闇、暗きにまぎれ、さうだ。

〽しめし合せて時廉は、門外さして出て行く。（ト時の鐘、時廉花道へはひる。運藤下手へ忍ぶ）

〽折もあらせず一間の內、腰元共が共々に。（トばた〱になり奥にて）

呉竹　後室樣を何者か、手に掛けて立退きしぞ、腰元衆詮議あれ。

皆々　心得ました。

〽上を下へと返しける。（トばた〳〵になり）

〽やゝ程過ぎて權六は、以前の箱を小脇に抱へ緣先へ立出て。

ト奥より權六以前の箱を抱へ出て來り。

權六　ヤア〳〵一學はいづれに居る、早や暮六ツは打つたるぞ。

〽呼はる聲に一學が、廣庭傳ひに入來るを、それと見るより。（ト下手より一學出て來り）

コリヤ一學、藏之進が首討つたか。

一學　如何にも御契約の通り首討つてござる、定めてあなた樣にも。

權六　念に及ばぬ討取つた、シテ藏之進が首は。

一學　只今御覽に入れん。（ト奥へ向ひ）ヤア〳〵藏之進が首級を是へ。（ト此の時奥にて）

藏之　はア、。

〽はつと答へて奥の間より、首桶携へ立出づる、藏之進を見て吹つくり。

ト奥より藏之進袴大小にて首桶を持ち出て來り、權六の前へ首桶を置く。

權六　ヤア藏之進が首討つたといひ、持參なしたる此の首桶は。

一學　心をこめし藏之進が首、御檢分下されい。

〽とさしつけられ、合點行かずと首桶の、ふた取退くればつゞれの一重。〽

ト首桶のふたを取る。内に誂へのつゞれ入れてある。

權六　や此のつゞれは。

一學　見忘れたるか、非人の山岡。

藏之　汝が所持であらうがな。

權六　なんと。（ト誂への合方になり）

藏之　御主君政氏公、都三條松原にて闇討に逢ひ給ひし、死骸の傍にあつたるつゞれ、後日の證據と某が腹心の者に詮議させしに、山岡と云ふ野伏りのつゞれなりと聞きし故、其の罪科を此の身に負けて汝が行衛を尋ねしに。

一學　計らず最前山岡とそちが女房が云ひし故、さては時廉に荷擔と云ひ主君を討ちし敵なりと、推量なして捕虜となしたり。

藏之　尋ぬる罪へ入り込みしは、天命遁れぬ其身の積惡。

一學　サア尋常に。

兩人　覺悟なせ。

　ヘと詰寄すれば。

權六　ムヽ、如何にも此のつゞれは覺えあれど、人を殺せし覺えない。

一學　此の期に及び卑怯至極。

兩人　觀念なせ。

　ヘ觀念なせと打かくれば、拔けつ潜りつ以前の白木、刃をあしらふ箱のふた、くわらりと出たは三貫文。

　ト一學藏之進切つてかゝる。權六件の箱であしらふ柏子に蓋落ちて中より三貫文の貫ざし出る。

　ヤ是は。

權六　サア此の三貫の貫ざしは、御親子樣の御行衛。

兩人　何と。

權六　云ひ掛けなせし女が首、御覽に入れて申上げん、暫くお待ち下されい。

へ刀投出しひれ伏せば、樣子あらんとためらふ兩人、權六小陰を打見やり。（ト下手へ向つて）

ヤア〳〵最前の首持參致せ。

らち　はア、。

へ小陰を出づる以前の女、抱へし首桶さし出せば。

ト下手柴垣の陰よりおらち首桶を抱へて出て一學の前へ直し置く。

一學　ヤ首を討ちしと思ひし女。

藏之　あふむ返しに持參の首は。

權六　卽ち此の身の申譯。

らち　御覽なされて、

兩人　下さりませ。

へ云ふに不審と首桶の蓋取退くれば後室の、首にびつくり仰天なし。

ト此の間一學首桶の蓋取る。中に後室の切首ある故兩人びつくり。

一學　ヤ、コリヤ後室の御首。

藏之　何故あつて討つたるぞ。

權六　親子の緣を切らん爲め。

兩人　何と。

權六　仔細は只今申上げん。

〽件の錢を箱の上、その身ははるか飛びしさり。（ト權六貫ざしを箱の上へ乘せ。）

はつ御臺樣御子樣方、お許されて下さりませ。

〽いますが如き尊敬に。

一學　シテ〱仔細は、

〽兩人左右へ詰寄れば、山岡は面を上げ。

兩人　何と〱。

權六　今更語るも面目なき此の身の懺悔、一通りお聞きなされて下さりませ。（ト胡弓入りの合方になり）

元某が親は、政氏公の父君に仕へて宮城野兵部と申す者、故あつて浪人なし我三歲のその時に兩親共に此の世を去り、土民の家に養育され親敎へざれば愚なるの譬、成人に隨ひ惡者づき

あひ、是なる女房と轉び合ひ遂に身ごもり、産れたが女子、たつきに迫りわらの上より岩木の社へ捨てたるが、即ち當家の後室初姫、まつたそれより都へ登り非人となつて暮せし折、さる浪人が望みにて此のつゞれを賣つてやりしが、政氏公を討奉る手段とは知らざりし、さてこそその時一癖ある面魂と思ひしが、案に違はず故主の敵、又某は越路へ歸り山稼に世を送りしが、扇の橋にて御臺樣姫君公達お三人を、佐渡と丹後の人買へ三貫文に賣渡し、後にて故主と聞いてびつくり、取返さんにも波濤をへだて詮方なさに國を立退き、お家の樣子窺ひしに時廉公の惡工是幸ひと荷擔なし今日此の館へ入込みしは、親子の緣をたち切つてお主を賣りしその科に、討たるゝ所存で討つたる娘、此の年月の御養育、御恩を仇で返せしは御免なされて下さりませ、まだしも武運に盡きざるか、死ぬる今際に御家の系圖、我手に入りしはお詫の一つ、此の事申せば用なき身體、イザ首討つて下されい。

〽初めてあかす權六が、言葉と共に取出だす、系圖に誠表はせり。

ト此の間權六よろしく思入、系圖は一學へ渡す。

〽二人の家老も感じ入り。

一學　ホヽヲ惡に強きは善にも強く、紛失なせし御家の系圖、手に入つたるは貴殿の働き。

藏之　殊には御親子の御行衛、主君を討らし仇敵、手掛り知れしは何より忠義。

一學　その忠義を立てんばかりに、首を討たれし後室は二人が仲の娘でありしか。

〽問はれて女房は涙を拭ひ。

らち　お話申すも涙の種、數へて見れば五ツ年先き、貧しき暮しきのたつきに迫りわらの上より紙雛の、女雛を添へて氏神の岩木の社へ捨てたる娘。

一學　ヲヽ、割符を合すその言葉、主君岩木の社にて神の授けと拾ひし水子、添えてありしは片しの女雛。

ト是にて權六首桶の男雛を出し。

權六　その片割の此の男雛、子心に欲しがつたも血筋が胸にこたへたか、最前親子と云ひし時、隨分母へ孝行に。

〽人形買うてとぐわんぜなく、甘へた言葉が一生の。

甘へ納めか情ない、親が子になり子が親になり、逆さま事も此の樣に、先立つ知らせであつたるか。

〽流石勇氣も恩愛に、亂るゝ言葉代官の手まへ、聞いて女房は猶急き上げ。

らち　ア、思ひ廻せば廻す程、果報つたない娘の生れ、邪見な親の腹を借り藁の上から捨てられたも。
〽三世の御縁で盡きずして、故主のお家へ拾はれて。
お乳よお乳母とかしづかれ、冥加にあまる身の上に、果報まけてか情ない。
〽人もあらうに現在の、親に首を切らるゝとは。
いかなる過去の宿業にてかゝる憂目を見る事か、可愛い事をしましたわいの。
〽女心にいとゞ猶、口說き歎くぞ道理なれ。
權六　ヤア、いつまで云うても返らぬ事、泣くな〳〵、エヽ、泣くなと云ふに。
〽叱りつけ。
イザ御兩所樣、御手に掛けて下さりませ、サア〳〵〳〵、お手を下して下されずばいつその事に。
〽と刀へ手を掛くれば。（ト權六刀へ手をかけ腹切らうとする藏之進留めて）
藏之　アイヤ早まられな山岡殿、貴殿の命は大事の命、政氏公を討つたる敵、つゞれを買ひし浪人の面體知りしは其元ばかり、死ぬる命を長らへて其敵を尋ねるがはるかに增さる故主へ忠義、死

なねばならぬは藏之進。」

〽云ふより早く差添拔き、腹へぐつと突立つれば、是はと驚く人々に、一間に忍びし櫻戸武千代、左門も共に走り出で。

ト藏之進手早く差添を拔き腹へ突立つる。ばた〳〵にて上手より櫻戸武千代左門之助出て來り。

櫻戸　ヤコリヤ我夫には血迷うてか。

左門　何故御切腹。

一學　思ひ極めし事乍ら。」

權六　ヱヽ早まつた事、

一權　致せしよなア。」

〽と介抱なせば、手負は苦しき息をつぎ。（ト竹笛入り誂への合方になり）

藏之　イヤ血迷ひもせぬ狂氣もせぬ、權六殿が御親子を人買の手に賣りたりとも、お命には別條なし、知らぬ事とは云ひ乍ら正しく主君の御亡骸、槍突きかけし大罪人、その場で直ぐに切腹と、刀に手は掛けたれど、證據に殘りし此のつゞれ一學殿に渡せし上と、わざと郡領が縄目に掛り、此の陸奧まで引かれしは、討つたる者の無き時は、岩木の御家斷絶ゆゑ身に覺えなき汚名を着

て、死ぬる覺悟で居たりしが、一學殿の情にて今日まで命長らへし、その甲斐あつて敵の手掛り、又御親子の御行衛知れし上は、心にかゝる事もなく、死ぬるが望の藏之進、只此の上賴み置くは權六殿には敵の在所御親子の御行衛、一學殿には御家の跡目、武千代が行末、此の事賴めば片時も早く、政氏公の御前へ參り申譯を仕らん。

〽云ふ息さへも四苦八苦。

一學　ホヽヲ忠義一圖な貴殿の心底、假りにも主君へ手向ひなせし、申譯は尤至極。

權六　とは云へあつたら武士を、死なで仕ようもあるべきに。

左門　コレ伯父樣、武千代が可哀相な、どうぞ生けてゐて下さりませ。

武千　父樣死んで下さるなや。

櫻戸　アレあの樣に子供でさへ、思ふにまして女房の身で、どの樣にまアあらうぞいなア。

〽手負にすがり泣伏せば、貰ひ淚におらちが介抱。

らち　そのお歎きは身につまされ、お道理とも御尤もとも、云ふに云はれぬ此の場の仕儀。

一學　アヽ千萬云うても返らぬくり言、言葉が未來の爲めにはならぬ。コレ藏之進殿、賴みの趣き承知せり、後氣づかはずと往生あれ。

藏之　エ、忝い、此の上は一學どの、御苦勞乍ら介錯賴む。

一學　ヲ、云ふにや及ぶ。（ト本釣鐘、皆々愁ひの思入）

權六　ア、死すべき我は助りて、あつたら勇士を惜しやなア。

一學　アイヤ藏之進殿の切腹は、時に取つて是幸ひ、主殺しの成敗なせしと時廉殿の、心許るすは案の定。

權六　實に尤も、我も娘が此の首にて岩木の根葉を打切りしと、おもねりへつらひ取入つて、猶も惡事を見出さん。

藏之　スリヤ犬死と思ひしに、權六殿の娘御の首級と共に我首も、お役に立てば死後の面目。

權六　我子の最期も門出の血祭り、悔むは愚これ爰に假りのお主の三貫文、誠の御主に兩替なし、お足達者に伴ひ歸らん、氣遣ひ召されな一學どの。

一學　ヲ、賴もし、〳〵、シテ又是より山岡どの、主君の敵を尋ねるには。

權六　最屈強の此のつゞれ、元の非人の姿となり、此の三人のお主を尋ね。

藏之　廻り逢ふのは三世の緣。

櫻戶　一世の我子二世の夫。

らち　日影も待たで朝顔の。
藏之　成行短き人の身は。
一學　老少不定定めなき。
權六　思へば夢の、
五人　浮世ぢやなア。
〽歎く涙は時知らぬ、秋野の露や山々を、染むる時雨もかくやらん。
ト皆々愁ひの思入。此の以前より上手松の立木へ以前の運藤登り窺ひ居る。一學是へ目を附け手早く手裏劍を打つ。運藤飛んでおり。
運藤　二心の權六觀念。
〽觀念せよと切込む刀、身を替して打落し、肩先すつぱと切下げられ、そのまゝ息は絶えにけり。
と運藤切つて掛るを立廻つて切倒す。一學見て。
一學　ホヽヲ潔し、片時も早く。
藏之　あの世の門出。

權六　此の世の旅
ヘ我子の別れ魂よばひ、後に見捨て。
ト本釣鐘藏之進引廻す。一學刀を持ち後ろへかゝる。櫻戸武千代すがり泣く。權六は初姫の首、つゞれを持ち行かうとするをおらち袖にすがる。双方引張りよろしく、一學權六顏見合せ。

一權　さらば。
ヘ出て行く。
ト段切にて引張りの見得よろしく

幕

四幕目　丹後國南山の場

役名　元吉要之助、醫者紋壽、由良三郎、柴苅與五作、同又六、同新太、同三六、對王丸。安壽姫。

三莊太夫

本舞臺三間、向ふ奥深に山の遠見。上下岩組、正面高足の山。上下へ黄心に登り坂、下手蔦のからみし松の立木同じく釣枝。上の方大江郡領時康領地と記したる榜示杭。舞臺前打寄せの浪板、すべて丹後の國南山の麓礒續きの體。こゝに與五作又六新太三六やつし山たつつけ、柴苅のなりにて揖火打にて煙草を呑み居る。浪の音、賑やかなる濱唄にて幕あく。

與五　何と又六、此のやうに朝に星を戴き夜は日天様の入らつしやるまで、精出しても口汚なく責使はれるとは、情ない事ではないか。

又六　此の國で由良橋立成合の地頭格、三ケの莊を名に取つて三莊太夫、日本國中に又とあるまい人遣ひの悪るさ〳〵。

新太　憎まれ者世にはゞかると長生で大金持、鬼といふはあの人の事、大方大江山の酒呑童子の兄弟であらうわい。

三六　イヤ又鬼のやうな人の娘に、おさん様のやうな優しい人、其の上都女郎にも負けぬ器量、あれがほんの鳶が鷹を生んだとはあの事ぢや。

又六　それに又此の頃、こちの内へ抱へられた兄弟の奉公人、姉は信夫、弟は忘草、つまはづれなよい生れつき。

與四　定めて能い者の子供であらうに、可愛さうな事、昨日も山の戻りがけ、忘草が柴が刈れぬと泣いて居た故、手傳うて柴を刈つてやつたので、昨夜のごろ〱よ。

新太　何ごろ〱とは、雷の事か。

三六　それよ、旦那殿の雷聲、兄弟の者に汐柴を手傳うてやつた者は、給金を呉れぬとの事、是から必らず手傳ふまいぞ。

新太　したがおさん様は兄弟の者をいとしがつて、山へ行たらば目をかけてやつてくれいとの言傳、どちらも主命なれども、銘々の身の上にはかへられぬ。

又六　さうとも〱、此後はたとひ谷へ落ちようが、どんな怪我を仕ようが構はぬがよい。

與五　何にせい、兄弟の者は可哀相な事ぢやなア。

ト時の太鼓にて花道より由良の三郎、野袴ぶつさき大小にて捕手四人附き出て舞臺へ來り。

三郎　ヤイ〱それに居るは伯父者人、三莊太夫が召使ひの者共よな。

四人　はい〱左樣でござりまする。

三郎　其方共も承れ、奥州岩木の領主政氏が娘安壽姫、弟對王丸兩人共、人買の手に渡り當國へ來りしとの風聞、からめ捕つてさし出せば褒美の金は望み次第、もし兄弟と見るならば早速に

注進せよ。

四人　畏つてござりまする。

三郎　必らずぬからぬやう、身共は是より村々へ觸れ渡らん、家來參れ。

ト時の太鼓にて三郎捕手を引連れ上手へはひる。

與五　何と皆聞いたか、兄弟のお尋ね者、もしや信夫や忘草がその兄弟ではあるまいか。

三六　そんな事に構はずと、こちとらは山へ行て一仕事やらかさう。

三人　サア〳〵來やれ〳〵。

ト浪の音、濱唄にて四人は上手へはひる。矢張り右の鳴物にて花道より紋壽半纏股引一本ざし草鞋菅笠を持ち出て來り。

紋壽　ヤレ〳〵草臥た〳〵、もう爰は時廉樣の御領分、旦那樣の家へは僅かな道、ドレ一寸休んで行かうか。(ト邊りの岩へ腰を掛け) イヤ時廉樣といへばわしが旦那樣の三莊太夫樣は、由良成合橋立と三莊の地頭格、時廉樣より許されてとんと今では大名同然、それ故わしも按摩からお氣に入つてお抱へ醫者、それはさうと合點の行かぬはアノしわい旦那樣が、多くのお金を下されて、是を路用に陸奥へ行つて、年の頃は廿四五から〳〵いふ男があらば、探して來いと密事のお

使ひ、何が五十四郡の隅々まで、足を摺りへらすばかりに探したが、似寄つた人も無い故に、せう事なしに戻つて來たが、知れぬというたら叱言であらう、ア、早く歸り度いが、叱られるのが胸づかへ、いつそ爰から、隨徳寺としようか、イヤ〳〵それよりは歸るがまし、イヤよさうか、歸らうか、コリヤどうしたらよからうなア。（ト立止る。ドン〳〵と波の音の頭を打込む。紋壽はびつくり飛びのき）はい〳〵御免なされて下さりませ。（ト思入。浪の音を聞いて）置きやアがれ浪の音だ、ハヽヽヽ、ドレ家へ歸らうか。

ト矢張り浪の音にて紋壽は上手の山間へはひる。直ぐに知らせに付き此の道具居所替りになる。

本舞臺一面向ふ打抜の海原の遠見。上下 袖山上手よき所に 大江郡領時廉領地の 榜示杭あり。松の立木、同じく釣枝、すべて由良濱邊の道具、浪の音にて納る。ト直ぐ床の淨瑠璃になる。

〽浮世とはいつの世にかは始りし、其の憂き事の身に積る、對王丸安壽姫、三莊太夫が手に渡り、賤が手業の鎌枌、汐汲桶の重きより、涙の種や別れが辻。

ト此の文句浪の音、誂への合方にて花道より安壽姫賤の女のなり、腰蓑汐くみ桶をかつぎ、對王丸やつしなり鎌を持ちきて、舞臺へ來り思入。

對王　申し姉樣、けふは猶しもお顔のやつれ、御心惡しうはござりませぬか、煩うてばし下さります

るな。

安壽　さういやるそなたの顏、每夜々々の折檻が病に成らいで何とせう、奧州五十四郡の主政氏樣の忘れ形見と云はるゝ身が、賤しい業の下素奉公、每日々々三荷の汐柴、今日は賤に助けられ歟を合せし夕の仕義、今日は誰が助けてくれよう、サア山へ行きや、わしも一緒に柴刈らう。

〽サア〳〵おぢやと先に立、行く袂に取すがり。（ト安壽姬泣乍ら山の方へ行かうとする對王留めて）

對王　コレ姉樣、わしと一緒に山へ往て、おまへの潮は誰が汲みます、人に汲んで貰うてさへ打ち打擲の棒ざんまい、ひよつとお前の身の上にもしもの事があつたらば、私しや何とせうどうせうぞ、サア〳〵濱へお出で遊ばせ、私も共に汐汲まう。

安壽　ヲヽよう云うてたもつた、弟なりやこそその樣に、姉を大事にかけてたもる、自は女子の事、そなたは大事の殿御の子、姉に構はず山へ行きや。

對王　イヱ〳〵私しや。

安壽　イヤわしが。

〽爭ふ思ひ血筋の親身。（ト兩人よろしくあつて）いつまで云うても返らぬくり言、

遲うなつては又難儀、そなたも山で柴仕事、姉も濱へ行きまする、怪我せぬやうにしてたもや。

對王　そんならお前も怪我せぬ様に。

〽頼む〳〵も泣き別れ、別れが辻を右左、一足行ては立留り。

ト兩人泣きながら安壽姫は上手、對王丸は二重の山下手へ行きかける。兩人振り返り思入。

安壽　コレ對王、まだ四方山に殘る雪、手足もこゞへ堪るまい、かならず木の根に躓いて、谷へ落ちてたもんなや。

〽と云ふも次第に遠ざかり、同じ思ひに引汐の。（ト兩人行かうとして振り返り）

對王　申し姉様、汐に誘はれ流れてばし給はるな。

〽影見ゆるまで延び上り、呼べど答へも山彦の、姿へだつる春霞、涙ながらにたどり行く。

ト兩人振り返り〳〵、よろしく上下へ別れてはひる。

〽爰に元吉要之助は、主人に廻り逢はん爲め、たどり丹後の北はづれ、胸に忠

義を由良が濱。

ト浪の音時の鐘になり、花道より元吉要之助大小半合羽旅なり菅笠を持出て、直に舞臺へ來り思入。

要之　爰は丹後の由良の濱邊、いつぞや扇の橋にて御主人樣方を人買の爲めに奪はれ、夜を日につい
で御行衛を尋ぬれど、今は是ぞと手掛りも、今里人が話を聞けば此の國の地頭三莊太夫に使は
るゝ、爪はづれよき兄弟ありとの噂、もし此の所に御座あるや、どうぞよき手掛りを、求め度
きものぢやなア。

〽思案にくれて歩行寄り見廻す坂に霜解けのしめりに殘る小さき足跡。（ト要之
助坂口を見て）

この山路に小さき足跡、柴刈る童の足跡か、もし若君の御足跡にてはあらざるか。

〽虫が知らすか此方の麓に、立つたる榜示をきつと見付け。

ム、大江の郡領時廉領分、スリヤ此の所は時廉が領分なるか、もしや御主人此の所に御座あら
ばあやふし〳〵、何は兎もあれ此の山道、一まづ尋ねて、それ〳〵。

〽神ならぬ身に淺ましく、迷ひし道へと尋ね行く。（ト要之助思入あつて上手へはひる）

〽折から山を戻り來る、以前の山がつ四人連れ。

ト浪の音、以前の四人柴を脊負ひ上手の山より出て來り。

又六　サア〳〵先づ晝仕事は是でよい、此の柴を家へ運び入れて、又東の山へ行かずばなるまい。

與五　併し最前の樣には云ふものゝ、おさん樣の折角のお賴み、忘草が柴苅る事は覺束ない。

新太　どうで此の道へ戾つて來るは知れた事、助けてやると云はずに、爰へ柴を置いて行つてやらうではあるまいか。

三六　それ〳〵人を助ければ惡うは報ふまい、銘々一抱づゝ置いて行つてやらう。

〽見やる磯邊へひた〳〵と、流れ寄つたる汐の桶。

ト浪の音はげしく舞臺前の切穴より汐桶流れて來る。

新太　アレ〳〵、あすこへ汐桶が流れて來た〳〵。

與五　ドレ〳〵流れぬ樣に取つてやらう。（與五作切穴より桶を取上げ見て）ヤ、コリヤこちの內の印の桶ぢや、コリヤてつきり信夫めがあやまつて流した物であらう、おいら達の日に掛つて幸といふもの。

三六　さうとは知らずうろ〳〵して、尋ねて居るであらう、是も爰へ汐を汲みこんで置いてやらう。

ト三六汐を汲み能き所へ置く。

又六　是でよい〳〵、内外の者に見られぬ内、早く行かうぢやないか。

三人　サア〳〵ござれ〳〵。

　〽皆々打連れ立歸る。（ト浪の音にて四人花道へはひる）

　〽御いたはしや若君は、まして手馴れぬ柴苅の、手足を茨に切りさかれ、詮方もなく〳〵おはせしが。

　ト時の鐘にて下手の山より對王丸、鎌を持ちしを〳〵と出て舞臺へ下りて。

對王　迚も運盡きし憂き身の上、生恥をさらさんよりはと思ひ切りながら、此の身が死なば姉上の嘸や悲しうおぼされん、今一度お顏が見て死に度い、戀しうござりますわいなう。

　〽しを〳〵歩行む濱邊には、桶もひしやくも浪にとられ、涙に道も見えわかぬ、坂道を下るをりしも。

　ト浪の音。上手より安壽姫、しほ〳〵として出て兩人顏を見合せ。

安壽　や對王か。

對王　姉上樣か。

　〽云ふより外に言葉なく、涙先立つばかりなり、思ひ切つて鎌追取り。（ト兩人

手を取り泣く。對王丸鎌を取つて。）

安壽　姉さまおさらば。（ト鎌にて死なうとする。安壽姫驚き留めて）

〽取直す手にすがり付き。

安壽　コリヤ氣が違うたか對王丸、何故に此の生害、まアく待つてたもいなう。

〽押留られて顏を上げ。

對王　何故とは聞えませぬ、お乳や乳人にかしづかれたる兄弟が、賤しい土民に踏まれ叩かれる口惜しさ、名字の穢れコレ姉上、放して死なして下さりませ。

安壽　ヲヽその歎きは尤ぢや、道理ぢやがわしが云ふ事よう聞きや。（ト床の合方になり）屆の橋の憂き難儀、力と頼む要も散りく、兄弟のみか母様まで人買に賣渡され、世にも稀なる此の里の、三莊太夫の膺懲心、切ない中に悲しいは母上樣、さぞ泣きくらしておはすであらう、親子は一世、死んで未來で逢はれるなら、つれない命を此の姉も、今まで生きては居ぬわいなう。

〽涙と共にのたまへば。

對王　イエく何ぼ逢度う思うても、何處を尋ねる當もなし。

安壽　ましてかよわい母樣の涙の種が病となり、もしもの事があつたなら、生きて甲斐なき兄弟を、

神も佛も是程まで、見捨て給ふかコレ弟。

對王　姉樣。

安壽　恨めしい。

兩人　世の中ぢやなア。

〽互ひにひつしと抱きつき、前後正體泣き沈む、對王は淚を拂ひ。

ト兩人よろしく。對王丸榜示杭を見て、

對王　父上樣を殺したも、家の亂れも大江の時廉、領地と書いたる文字の別れ、せめては切つて本望遂げん。

〽かよはき小腕も一念力、鎌追取て打掛くれば、みぢんに碎け飛び散つたり、磯より歸る鹽燒が始終を見すまし行き掛る。

ト對王丸鎌にて榜示杭を打つ、仕掛にて二つに割れる。浪の音にて上手より鹽燒びつちう鍬をかつぎ出る。此の體を見て思入あつて引返して下手へはひる。兩人是を知らず。

安壽　コレ對王、恨みと思ひ切つたる榜示、出來しやつた〳〵、さりながら今日の役目の汐たきゞ、一荷も持たず歸つては、憂き目に逢はん何とせう。

〽うろ〳〵見廻す此方の汐柴。（ト安壽姫以前の柴と汐を見て）
ヤア誰人の情なるか、天の與へ、嬉しや弟。

對王　姉様早う。

〽悦ぶ中にも家の首尾、泣く〳〵案じ立歸る、

ト浪の音にて對王丸件の柴を負ひ、安壽姫汐桶をやう〳〵かつぎ、思入あつて兩人花道へはひる。

〽鹽焼が注進に、由良の三郎立歸り。（ト浪の音上手より以前の由良の三郎捕手四人引連出て來り。）

三郎　家來共、汐焼が注進にて榜示を切つたる大罪人、手分して尋ね出せ。

捕人　心得ました。

〽尋ね出だせと下知の下、此方の山道そこ爰と、見附出したる要之助、中に引立て追取巻き。

ト捕手四人上手の山へはひり、直に以前の要之助を引立て來り。

捕一　何か怪しき素浪人、

四人　動くな。

要之　コリヤ御役人、何となさるゝ。
三郎　ヤア何をするとは横道者、それからめ取れ。
四人　はツ、やらぬわ。
〽畏つたと双方より、捕つたと掛かるを事ともせず、そのまゝ二人を頭轉倒、又も腕に組付くを、捻り乍らもさそくの小手かへし、右と左に投のけたり。
ト四人掛るを要之助立廻つて投げのけて。
三郎　コリヤ手向ひか。
要之　りやうじ召さるな御役人、此方身に取り覺えはござらぬ。
三郎　ヤア覺えないとは云はさぬ〳〵、榜示杭を切りしは岩木の餘類、時廉公を恨む奴に極まつた、サア尋常に覺期なせ。
〽言葉にぎつくり胸に針。
要之　ヤヽ、スリヤ榜示を切りし御咎めとな。
三郎　退れぬ所。
四人　腕廻せ。（ト是にて要之助思入）

要之　榜示を切りしなんぞとは、此の身に露いさゝか覺えなけれど、たつてとあらば刀の手前、其の分には許さぬぞ。

三郎　ヤア法外なる青二才め、觀念なせ。

へ觀念せよと切込む刀、拔き合せててう／＼、打てば開き開けば附入る早業さそく、いらつて打込む我慢の刃先き、火花を散して戰ひしが、要の手練に三郎は叶はぬゆるせと逃げて行く。

ト三郎刀を拔き切つて掛る。要之助拔き合せ立廻りあつて、トゞ三郎叶はず捕手先に三郎花道へ逃げてはひる。要之助後見送り思入。

へ相手無ければ要之助、刀を鞘へちり打ち拂ひ。（ト要之助刀を納め思入）

要之　云ひ甲斐なき木の葉侍、長追ひせんも無益の至り、只今掛りは制札を斬りし科人、もし御主人方の御仕業なれば一大事、まさかの時は此の身に引受け、何はともあれ御兄弟の御身の上、傳手を求めて、三莊太夫方へ是より直に、さうぢや／＼。

へ一人ごちつゝ旅はどき、心細道夕日陰、南にあらぬ西山へ、遠近知らぬ由良

の戸を渡るや天の橋立も、まだふみやらぬ丹後島、主人の行衛末廣さ、ゆるがぬ要番代の、濱邊も後に成合の、里を尋ねて。

ト要之助身ごしらへして行かうとする。以前の捕手二人窺ひ出て掛る。要之助立廻りあつて兩人を當て、ツカ〳〵と花道へ行く。兩人ム、と心附く。要之助小石をつぶてに打つ。兩人見事に返る。床の三重寺鐘にて、要之助花道へはひる。是を一ッぱいに

幕

大詰　由良の湊の場

役名　三莊太夫、元吉要之介、山岡權六事權藤次、由良三郎、醫者紋壽、下男與五作、同五介、同新太、同三六、國分寺同宿殘生、同宿頓才、同珍念、同歡念、對王丸。三莊太夫妻なぎさ、安壽姬、娘おさん、腰元。

本舞臺三間の間中足の二重。本緣付き。上手筋違練塀の折廻し。此の前に苅柴を積上げ山枋などを立掛

け同じく前側に汐汲桶大分並べ、いつもの所に中門を見せ、下手は板羽目、こゝに簑笠など掛けあり、下に鍬鐵まんぐわなど取散らし、すべて由良の湊三莊太夫家の體。尤も豪家のやうよろしく、浪の音麥搗唄の合方にて、賑やかに幕あく。

〽丹後の國に隱れなき、由良千軒の長者號、成合の莊橋立の莊由良の莊合して三莊の主なれば、三莊太夫と用ひられ、鹽濱野山舟持の、音に聞えし人遣ひ、辛き目見せて責使へば、山椒とも又異名せり。

ト此の間坊主鬘やつし一本ざし、旅なりの醫者紋壽、菅笠を持ち状箱を掛け花道より舞臺へ來る。下男眼介出來り双方よろしく思入あつて。

紋壽　眼介、今戻つたぞよ。

眼介　ヲヽ、お醫者の紋壽樣か、久しく見えさつしやりませなんだが、何處へござらつしやりました。

紋壽　サア旦那樣の內用で、奧州まで行つて來たがとう〳〵今戻つた。

眼介　それは大きに御苦勞樣でござりました、道理で旦那樣が此の間から、モウ歸りさうな物だと每日待つてござらつしやりました。

紋壽　定めてさうであらう、昨日今日の樣で有つたがモウ半年餘りになる、時に旦那の叱言は少しは

なくなつたかな。
眼介　どうして／＼憎まれ子世にははばかると、日にまし叱言はつのるばかり、取分けわしらは不器用故、アノでつかい目玉でにらみ附けられ、叱られてばかり居ります。
紋壽　ト、それではわしも久し振りで、又叱言を聞かずばなるまい。
〽つぶやき／＼入りにける。（と眼助案内して紋壽庭通りを上手へ兩人はひる）
〽まだ初春の暮易き、夕告鳥の聲々より、野山仕舞うて立歸る、男共が口々に。
ト波の音、テンツヽになり花道より前幕の與五作五介新太三六出て來り花道にて。
與五　ヤレ／＼いかうしんどうで有つた、然しまア今日だけの仕事は仕舞うたと云ふもの。
五介　それいやい、カウ働いては骸も骨も堪つたものではないわい。
新太　然し是から明日まではこちの身體。
三六　サア早く行て煙草でも呑まうではないか。
與五　サア來やれ／＼。
ト鳴物にて本舞臺へ來る。此の時下男三人きんぐわ鋤鍬を持ち、邊りを取片附け乍ら上手より出て双方行合ひ。

下男　ヤ、わいら大分早かつたな。

與五　手前達も仕事仕舞うたのか。

下男　イヤ／＼さうでも無いての。

五介　デモもう煙草休みして居るぢやないか。

三人　ヲツとコリヤあやまつたわえ。

三六　イヤあやまつたと云へば、ヤレ／＼今日はゑらい寒い事で有つたなア。

與五　それいやい、然しその筈もあらうかい、今朝降りた雪で山も畑もおろし大根の中を歩行くやうで、身先からぎり／＼までこゞへた。

五介　此の樣に責使ひ乍ら、喰物といへば麥八分の飯にほし菜の上置きぢや。

新太　奉公人の口はひそめ、おのれは不斷榮耀榮華、喰ひ太つた面魂ぢやないかい。

三六　ヲ、それにかてゝ加へてあの娘の惱みぢやとて、部屋から下り此の樣に鷄を飼ひちらす親父め。

與五　あいつに罰が當らずば、あたるものはあるまい。

五介　ひり／＼と辛い目見せ居る、山椒太夫とはよう附けた名ではないか。

皆々　はゝゝゝゝ。

へと口々そしる後より。（ト奥にて）

三荘　ヤアかしましいがらくためら、うぬ一々云ひ聞かす仔細がある、其處一寸も動き居るな。

皆々　そりやこそからい太夫殿。

へこそ〳〵うづまる一間より、立出る主の太夫、おのればかりはうま〳〵喰ひ暖にきて人をせこめて追ひ使ふ、大悪不道の堅親父、見るから猛き熊の毛の、蒲團を敷かせどつかと座し。

ト此の文句の間女小姓熊の皮を敷き、手あぶり長煙管附の煙草盆を持ち、眞中能き所へ直しはひる。奥より三荘太夫好みのこしらへにて出て來り、後に鹿の角の刀掛け、是に誂への大小掛けあり、三荘太夫よろしく熊の皮の上に住ひ、邊りを見廻しこなしあつて。

三荘　ヤイがらくためら、今おのれら何をぬかした、それぬかせ。

與五　ヘイ〳〵、イヤもあなたのお家に居りますは、果報な事ぢやと、なう茂介。

三六　與五作が申します通り、有難い事ぢやと皆寄りこそつて。

三荘　ム、それに又山椒太夫とは、よう附けた名とはどうしてぬかいた。

皆々　ア丶それまでを、コリヤ堪らぬ。（ト皆々ふるへ乍ら下に居る）

三莊　ヤアさは〳〵と立騒いで姦しい、極道めら、下に居らぬかい。

〽鬼一口にかみ附けられ。

皆々　はゝアイ。（ト皆々ふるへ乍ら下に居る）

三莊　ハ丶丶丶丶、ハテさて心の臟の弱い奴等、エイまアそれはそれにしてやらうが、野山仕舞うて戻つたら翌日の仕事の仕こしはせず、のらばかりかわいて人も頼まぬ雜言ぬかす、じたいそれといふも仕事が手張らぬから、翌日からはいつもの仕事に一倍まし、野から山から鹽濱まで、みぢんでものらくかわくと食留するぞ、雜言ぬかしたコリヤ褒美ぢや、又その代り今日からは、少しばかりの善根とやらぢやと思うて、九ツの鐘の鳴るまで夜なべをさせるわ。

皆々　エ丶。

三莊　ア丶コリヤ何驚く事があるぞ、一番鶏が唄うたら直ぐに起て野山へうせふ、ア丶爰な極道めらが

〽煙草輪に吹くいがみづら、男共はわな〳〵聲。

五介　ア丶コレ皆聞いたか、扨ても手ひどい云附ぢやないか。

新太　それいやい、此の上に一倍増しとは釋迦でも行かぬ地獄責。

三莊　地獄貫とは慮外千萬、何奴がぬかいた、その頬げた叩きまげてゆがめてくれう。

皆々　ヘエイ。（ト逃げようとする）

三莊　うぬら動かば身の上だぞ。

皆々　ハ、イ。（トうづくまる）

〽ずいと立つて有あふ箒のめつた打ち、斯くと聞くより女房かけ出、押しへだて。

ト三莊太夫立上り有あふ箒にて皆々を打据へる。奥よりバタ〱にて妻なぎさ、ふけたる女房のこしらへにて出て來り三莊太夫を留め。

なぎ　ア、是ははしたない太夫殿、是そなた衆も何の事ぢや、たとひ無理があらうとも主家來ぢやとあきらめて、腹も立たうが料簡して、イヤ腹立さす樣な事があるものか、わしが後で詫をするその間、早う勝手へ行きやいの。

三莊　ア、イヤ〱お婆何留める、コリヤあいつらのどぜう骨をため直すのぢや、ヱ、のきや〱、退けと云ふに。

なぎ　サアその腹立は尤もぢや、なれど今日はわしが詫まする程に、サア早う行きやらぬかいなう。

〽言葉を機に男共、皆散り〳〵に逃げて行く。（ト皆々下手へ逃げてはひる）

三荘　ア、なんの留めいでも大事ないに、ア人を使へば苦を使へぢや。

〽とつぶやき〳〵蒲團の上。（ト奥より腰元三立出て）

腰　旦那様へ申上げます、何時ぞや陸奥へお出でなされた御醫者の紋壽様が、先程歸られましてござりまする。

三荘　ム、待兼ねた、外に二十一二の男を連れて來たか。

腰二　イヱ〳〵一人で戻られました。

三荘　ム、無駄な路金を費した、いま〳〵しい事だなア。

なぎ　何の御用かおぢやつと爰へ呼んでおぢや。

三荘　イヤモウいゝ〳〵。

腰三　左様ならばよろしうござりまするか。（ト腰元三奥へはひる）

三荘　極道めらに誹つて肩も腰もめき〳〵云ふわえ。

なぎ　さいなア、お前ももう寄る年、その様に世話やかずとチト氣をねらしたがよいではないか、ドリヤわしがかうして利かぬか知らぬが、肩打つて上げうわいなう。

〽鬼の女房の佛性、あら氣も肩も打やはらぐ、流石に内の寶なり。

ト此の間なぎさ三荘太夫の肩をもむ事よろしく。

〽御痛はしや兄弟は、人の情を苅柴に、肩もくび入る手も足も、躓く石に切りさかれ、流るゝ血汐血の涙、海邊に出て汲む汐より、太夫の心汲み兼ねて、泣く〳〵連立ち歸らるゝ。

ト此の文句にて薄く波の音、花道より安壽姫汐汲みのなり、腰蓑にて汐汲桶をかつぎしほ〳〵出る。後より對王丸苅柴のなりにて誂への柴を脊負ひ、よろしく出て直ぐに舞臺へ來り。

安壽　お主様、只今歸りまして、

安對　ございまする。（ト兩人荷を下し下に住ふ。なぎさ見て）

なぎ　ヲヽ兄弟か早かつたなう、大儀々々、まア〳〵ちやつと休みやいなう。

安壽　ハイ〳〵申しお家様、私も忘草もおそなつたら又叱られうと、急げば急ぐ程荷も重く、やうやう只今、旦那様の御機嫌の損ねぬやうにお取なし、そなたも共々御願ひ申しや。

對王　アイ〳〵申しお家様、どうぞ詫して下さりませ。

なぎ　ヲヽ氣遣ひしやんな、旦那様も御機嫌がよい程にの、必らず其を案じやんな、それはさうと信

夫も嘸ぞ草外れたであらう、忘草も大分に精が出ましたわいのう、ヲヽ旦那どの、今日は兄弟乍ら殊の外精が出た樣子、見てほめてやつて、早う休息さしたがようござらうわいなう。

〽とりなす言葉も空吹く風。

三莊　ムヽ兄弟共に戻りしとな、どれ〳〵、ヲヽ信夫忘草、二人共汐も柴も助けて貰はず、一人して汲んだり刈つたりしたか、ムヽそれはようした。此處に持つて來い、吟味した上そち達が仕事に違ひなくば勝手次第に休息しろ、コリヤその品是へ持て。

〽吟味するとて取り出す目鏡の光、小氣味惡るさに二人はおづ〳〵。

ト此の間三莊太夫懷中より目鏡を出しかける。對王安壽姫おろ〳〵とふるへて居る。

なぎ　コレ忘草、怖い事は無い程にその柴を旦那殿の傍へ持ちや、ちやつと持つて行きやいなう。

〽内義の情刈柴をこは〳〵乍らさし出せば。

ト對王おづ〳〵柴を椽の上へ持つて行く。三莊太夫あちこちと引返し見る事あつて。

三莊　ムヽ是はわれが苅つた柴か。

對王　はい。（トうぢ〳〵して居る故、安壽姫わしぢやと云へとこなしゝ）はい私が刈つた柴でござりまする。

ト云ひにくさうにいふ、三莊太夫苦笑ひして。

三莊　ヲヽ、汝が出かす〳〵、なか〳〵揃ひ口が立派な、此の分なら翌日から三荷の柴に七荷まし、十荷づつ苅り居らう。

對王　エヽ。（びつくりこなし。なぎさ思入あつて）

なぎ　アヽモシ旦那殿、イヤ太夫どの、如何に云ひ度い甲斐ぢやとて、マヽ可哀相に、よう思うても見やしやんせ、アノ非力な兄弟に、コリヤ矢張今迄の數に合して了簡して。

三莊　やかましい。

なぎ　サア了簡してやらしやんしたら、惡い樣には報はぬもの。

三莊　默れ。

なぎ　アヽ子供ぢやもの、まんざらに山家育ちとも見えぬものを其やうに。

三莊　默れ。

なぎ　責遣ふたら迚も命もたまるまい。

三莊　默れ。

なぎ　子を持つてこそ人の子の、可愛さは替らぬものぢやと、云ふではござんせぬか。

三莊　默れ〳〵、默り居らう。

なぎ　ハヽアイヽヽヽヽ。

三莊　ヱヽこれ汝が其やうに、あまのぢやくな事ぬかす故、家來共が附上り、お家樣ぢやお持佛樣のとぬかし居るわい、何の〳〵、情どころかよく聞けよ、コリヤヤイわつぱめ、此の柴はわれが仕事ぢやあるまいが。

對王　イヽヱそりや私が。

三莊　イヤぬかすまい〳〵、小わつぱめ、うぬが手仕事でない事は、黑い眼で見留めて置いたわ。

なぎ　アヽコレ忘草が苅つたのぢやと、自身に云ふからよもや違ひは。

三莊　アヽわれ達が知つた事ぢやない、すつこんで居れ。

なぎ　それぢやというてそりや又あんまり。

三莊　あんまりとは何があんまり、村中へも觸を廻し此のがきめらに柴一本、助けてやるなと云ひつけて遣りしに、コリヤ見よ、此の柴の揃ひに昨日までも、今朝までも鎌の持ちやうさへ知らぬ奴、おのればかりが手業にやゆかぬ、信夫めもその汐どいつに助けて貰うた、どうでも手傳ひ手が無けりや叶はぬ、それぬかせ。

安壽　アイ〳〵。

三莊　ぬかさぬか。

安壽　アイ〱。

三莊　ぬかさぬかよ、ぬかさにやうぬら手ひどい目に。（ト立上らうとする故）

安壽　マヽ申します〱わいなア、アノ誰にも助けて貰はねど汐も汲まず柴も苅らず、泣く〱戻る道筋に、捨てゝ有つたをツイ持つて歸りましてござります。

對王　もう御堪忍なされて、

兩人　下さりませ。

三莊　堪忍とはどこへ堪忍、野太い女郎め、重ねてこりるやうに、どせう骨へ覺えさせん。（ト立上る）

安對　アレイ。（ト逃げようとするを）

三莊　うぬら身動きなさば命がないぞ。

　へ庭におり立ち山枴、又とたぐひもあら折檻。

　ト三莊太夫庭へおりて打擲しようとするをなぎさ留めて。

なぎ　ア、申し旦那どの、汐も柴もわしが斗らひ、二人の知つた事ではない、モウ堪忍してやつて下されいの、ア、ひがひすな二人をその樣なもので打つてたまるものかいの、サア早う逃げやい

の、ちやつと逃げたがよいわいなう。

〽氣をもみあせるを耳にもかけず。

三莊　ヤアおばゝ構ふな、ヤイ爰へうせぬか。

兩人　アイ。（トこなしあつて）

安壽　今度から柴も汐も一人して致しませう。

對王　どうぞ許して下さりませ。

〽詫ぶるも聞かぬ荒氣の朸、なぐり情もめつた打ち、わつと泣き出す兄弟を、かばうて女房も持てあましたる折柄に。（トなぎさ留めるを突き退け、安壽姫對王丸を引付け打擲する。）

〽主の甥由良三郎、同氣求むるいがみ面、案内もせず入り來り。

ト花道より由良三郎、摑み立て野袴ぶつさき大小なりにて出て來り、直ぐに舞臺へ來り。

三郎　是はく伯父者人、此の寒いのに庭へおりて何をいらくら、エヽコリヤ又奉公人めらが、氣隨働く故か、伯父者人の心よしを見込み、年寄りと見侮りて我儘氣隨な、是ぢやに依つてとうから三郎が申さぬ事か、果を蛸になされば其の御苦勞は掛けませぬに、アヽたで喰ふ虫も好きく

と年たけたおむすをいつまで一人身で、ア、笑止千萬、イヤ何そいつらを腰膝の立たぬやうにぶちのめしたが能うござる、なんなら身共手傳ひませうか。（ト寄らうとするをなぎさへだてゝ。）

なぎ　ア、コレ伽のそち、誰も頼むと云ひもせぬに、さし出さつしやらずとこなたはそつちへ控へて居たがようござるわいの。

三郎　成程、これも尤も、いらぬ事の腹へらし、取おけなら取おき申さう、イヤこれは内證、何伯父者人、急にお話し申さにやならぬ大公用。

三莊　何公用とは。

三郎　イヤサ時廉公より貴公様へ、火急な仰せつけがござつてわざ〳〵。

へと聞いて太夫も座に直れば。

ト是にて二重へ住ふ。三郎も二重へ上りこなし、此の内始終文句を縫つてきぬた入り合方。

三莊　コリヤ〳〵三郎、時廉公より火急な上意とは氣遣はしい、シテ〳〵様子はなゝなんとぢや。

三郎　イヤ〳〵氣遣ひ召さるゝ儀ではござらぬ、時廉公より繪姿を以てお尋ねなさるゝ兄弟、姉は安壽で弟は對王とやらいふわつぱ、見附け次第に討つてなりとも、連れ來れと嚴しい云ひつけ、即ち繪姿是にあり。（ト懐中より畫姿を二枚出して）コレ御覧なされい。

〽さし出す繪姿、庭に二人は身に冷汗、太夫は目鏡にためつすがめつ。（よろしく見る事あつて）

三莊　ム、此の對土兄弟は岩木の判官政氏の子供、ゆゑあつて我爲めにも詮議仕度き奴ばら、厄病の神で敵とやら、三郎も心を附けて、ナ合點か。

〽と聞く程怖さ兄弟は、身をふるはして居たりける、三郎重ねて。

三郎　イヤ何伯父者人、お聞きなされい、まだ大それた科人あり、今日南山の境目大江の郡領と書記した榜示杭、切折つたる曲者、からめ取らんとなしたる所、手强き奴にて取逃し後追かけしが行衞知れず、思はぬ不覺を取つてござる。

三莊　ヲ、そやつも慥かに岩木の餘類、何にもせよ大事の詮議は此の繪姿、ナ合點か。

ト安壽姫對王丸へ思入。三郎呑込み。

三郎　成程三郎とくと。

三莊　合點がいつたら奥へ來よ。

三郎　心得ました。

なぎ　それ二人の者も納戸へ行きや。

安對　有難うござりまする。

三郎　アイヤ彼奴等は。

三莊　ハテ何事も身が胸に。

三郎　然らば伯父者人。

三莊　三郎來やれ。

〽心々のへだての襖、引別れてぞ入りにける。

ト三莊太夫先に由良三郎奥へはひる。安壽姫對王丸はなぎさを拜み下手へはひる。なぎさ思入あつて上手屋體へはひる。

〽國々の、風は變れど變らぬは鄙も都も戀なれや、其の戀故に物思ふ三莊太夫が秘藏娘、おさんが心とりに、腰元はした一間を立出で。

ト此の間奥より娘おさん、振袖娘好みのなり、もの思ひのこなしにて出て來る。是に腰元四人附添ひ出て來り、文句の切れ合方。

腰一　申し皆さん、アノまア御察人樣はどうなされた、おしつらいか知らねども。

腰二　アノやうにお部屋にばかり御出でなされては、一倍の御氣のむすぼれ。

腰三　此の緣先の見晴らしで、あなたのお好きな歌がるた。

腰四　又双六なりと折花なりと、御意に入つたを遊ばして。

腰一　サアお遊び、

四人　なされませいなア。

さん　皆の者の何云やる、わしやとんと氣が浮かぬわいの。

腰一　さアその様にお前様が、明けても暮れてもお部屋にばかり、もの思はしいお顔附きで、ふさいでお出でなされます故。

腰二　おしつらいでも出ようかと、お袋様のきついお案じ。

腰三　そのやうにくよ／＼思召すは、第一あなたの御身の御損。

腰三　兎角人は心の持ちやうと申しますれば、

四人　チト浮々となされませいなア。

さん　サア我身達が其やうに云やつても、わしが心の浮かぬのは忘れもせぬ去年の夏、都見物に登つた時、葵祭りに見初めた殿御、何處の御方かお名さへも、知らで焦るゝ戀人を、慕ふ此の身の切なさを推量してたもひなう。

〽推量してとばかりにて、又も思ひに伏し沈む。

腰一　スリヤ葵祭りの其時に、お見染めなされた御方があつて、

腰二　それ故あなたはくよ〳〵と。

さん　サア是まで思ふに廻りも逢はず、アノ三郎樣の情ない、それで一倍悲しいわいなう。

腰一　何のそれなら其樣に、思召す事もござりませう、大方かういふ事であらうとお袋樣も、仰しやつてゞござりまするわいなア。

腰二　何のお隱しなされずとかうした譯ぢやとツイ早う、仰しやつたが能うござりまする。

腰三　たとひ何處の御方にせよ、是程思ふあなたのお心、屆かいで何と致しませう。

腰四　又私共も共々に、神々樣へ御願ひ申さば、

四人　逢はれぬ事はござりますまいわいなア。

〽腰元共にはげまされ、思ひまぎらす戀の道、忠義の道には迷はねど、要之介はそこ爰と、御主の有家尋ねわび、此の家の軒にたゝずみて。

ト此の內花道より元吉要之助、半合羽旅なり大小にて出て來り、直ぐに門口へ來て、

要之　アイヤ、此の家の內へ御案內申しまする。

へと音なふ聲に。

腰一　ブイ、どなた様でござりまする。

へ門の戸あくれば小腰をかゞめ。（ト腰元一立つて門口をあける。要之介會釋して）

要之　行暮せし旅の者、不知案内に難儀至極、何卒今宵一夜の舍り、御無心申したうござりまする。

腰一　申し御寮人様、お聞きなされましたか、行暮らせし旅のお人が、一夜の舍りを頼みまするが、どう致しませうぞいなア。

さん　それは何より御安い御用、こちらへお入れ申しやいの。

へ何心なく見合す顔。（トおさん門口を見る。要之介も内を覗き兩人顔を見合せ）

ヤお前は。

へとおさんはびつくり飛立つ思ひ、顔つれ〴〵と打眺め。（トおさん思入あつて）

ヲ、さうぢや〳〵、あなたぢや〳〵、能うまアお出でなされましたなア。

へ俄にいそ〳〵悦べば。

腰二　申し御寮人様、ついぞ見た事もないお方を、あなたぢや〳〵と。

四人　どうなされましたのでござりますぞいなア。

さん　サアあなたが此の年月、こがれ〳〵たお方ぢやわいなア。

腰一　ヱヽそんならあなたが、お見初めなされた、お方でござりますかいナ。

腰二　ほんにまアお焦れなされたも御尤も、とんと畫で見た八代目に、生寫しなよい殿御。

腰三　サア〳〵、あなた直々にこつちへお通し申したが、

四人　よろしうござりますわいなア。

　〽突やられてもぢ〳〵。（ト腰元四人おさんを無理に前へ出す。是にてこなしあつて）

さん　春まだ寒き雪もよひ、旅の空にはさぞかし御難儀、まア〳〵こちらへお通りなされませいなア。

要之　これは〳〵早速御承知、忝うござりまする、左樣ならばお言葉に隨ひ、御免なされて下さりませ。

　〽御免なされと草鞋の紐を、とく〳〵ちり打拂ひ、會釋こぼして打通れば、お茶よ煙草ととり〳〵に、もてなしはやすぞかしましゝ。

　ト此の間要之介草鞋をぬぎ上の方へ通る。皆々捨ゼリフにて茶煙草盆を出す。

要之　アイヤ〳〵、必らずお構ひ下さるな、イヤ見受けますれば殊なう廣き此のお家、そつじ乍ら御

主人は。へ問はれて娘は。

さん　アイ、おはもじ乍ら此の里の地頭格、三荘太夫と申しまする。

要之　ヤアノ三荘太夫殿とな、シテ又そもじは。

さん　私は娘のさんと申します者、以後は御見知り下さりませいなア。

へ聞くに要は能き便りと、胸に一物心の悦び、それと知らねば娘は嬉しく、いそ〳〵するを見て取つて、腰元共は囁き合ひ。（ト此の間腰元四人囁き合ひ思入あつて）

腰一　ドレお客様へお茶拵らへて、

四人　さし上げませう。

へ云ふを言葉の機にして、打連れ奥へ立つて行く。（ト四人奥へはひる）

へ後におさんはおもはゆく。

さん　アヽコレ〳〵、わしばかり爰に置いて、是いなう、まア〳〵待つてたもや、コレお仲、およしなう、

〽流石おぼこのあどなさに、今更何と云ひ兼ねて、あからむ顔ぞ憎からぬ、要之介もそれと悟りて。

要之　一樹の影一河の流れ、袖ふり合ふも他生の縁と逢に見ぬお方ながらかくおやさしきお志、忝うござりまする。

〽忝しといふ顔を、恨めし氣に打守り。（ト文句の切れ誂へ合方）

さん　遂に見ぬとは聞えませぬ、縁あればこそ今日の今、二歳ぶりで嬉しいお目もじ、よう思ひ出して見て下さりませいなア。

要之　イヤ思ひ出せと云はれても、こつちに覺えの無い事なれば、シテわしに逢うたと云はるゝは、そりやいづれいづくにて。

さん　モシあなたは去年の四月、葵祭りに下加加へ、お出でなされた事がござりませうが。

要之　いかにも去年は都にあつて、朋友共とつれ〲に、葵祭りを見に行つたが、そんならその時そもじには。

さん　下女はしたにいざなはれ初めての京登り、物珍らしい祭りの群集、しかも糺の鳥居先、幕打ち廻した棧敷の內。

要之　一際目立つ女中達、いづくの誰が花なるかと、見やる折しも青葉吹く、風に飛び散る古今帽子。

さん　ひよんな事をと隣りから、見ればその時あなたの御手へ。

要之　折よく受けて桟敷越し、そのまゝ帽子を戻せしが、扨てはその時まみえたる、そもじは娘であつたるか。

さん　サアその時扨ても情らしい、色も香もある方様と。

〽思ひ初めてもおぼこ氣に、なんと云ひ寄るよすがもなく、お名さへ問はずそのまゝに、ほいない別れを下加茂の、葵祭りに逢ふといふ、縁を心のうらかたに。

あなたのお身にふれられた、古今帽子を抱きしめて。

〽肌身放さず二年越し、どうぞま一度逢ひ度いと、ありとあらゆる神様や、佛様に無理いうて。

願うた甲斐あつて、嬉しい逢瀬、ようまア來ておくれなされましたなア。

〽膝にひつしとすがり附く、娘心ぞわりなけれ。

要之　夫程までの志、忘れは置かぬ、忝うござるわいの。
〽ぢつとしめたる手の内に、千束の戀やこもるらん。（ト兩人よろしく思入）
〽かゝる所へ庭口より、安壽對王兩人を引立て出る由良三郎。

三郎　がきめ、うせう。
〽出合ひ頭に顔見てびつくり。
ト此の間上手より三郎、安壽姫對王丸を引立て出て來る。是にて要之介おさん飛退く。此の時三郎要之介を見て。
ヤわれは榜示を切つたる曲者。

要之　ヤ、なんと。
〽身構へなせば兄弟は。

安對　ヤそちは。

要之　ヲヽあなたは、イヤ知らぬ〳〵、いつかな知らぬ。（ト安壽姫對王丸に呑込せる）榜示を切つた覺えは無いぞ。

三郎　ヤア知らぬというて其儘にさし置かうか、白狀せずば拷門なして。

對王　マヽイヤ榜示を切つたは。」

　へ云ふを打消し。

要之　アヽコレめつたな事を。（ト抑へ扨ては對王が切りしといふ思入あつて）一旦包み隠せしかど、かく手詰になる上は是非に及ばず、榜示を切つたは身共でござる。

三郎　扨てこそ白状、覺期なせ。

要之　イザ繩を掛けさつしやれ。

三郎　云ふにや及ぶ。

　へ取繩たぐつてしめ上ぐれば、おさんはびつくり。（三郎要之介へ繩を掛る）

さん　ヤヽ、コリヤ何故に此の繩目。

要之　サア榜示を切りし科故に。

さん　何のお前が。

安對　榜示を切りしは。

要之　アヽコレ〳〵申し何も云ふまい、知らぬ顔な、ナ娘御樣、見ず知らずの私にしをらしいお言葉、忝いが私は科人、知つた顔なさるゝとお身に難儀が掛りますぞ、ナ娘御樣、御息才なお

顔を見ればモウ思ひ置く事みぢんもない、お行衛を尋ねさまよひ、榜示を切つたは大方それと推量して此縄目、定めて不便と思召しませうが、私よりはその姿、さぞ御苦勞をなさるゝでござりませう、隨分お身を御大切に遊ばして下さりませ、モウ何もいうて下さりますな、聞けば猶更ら此の胸が、碎ける樣に思はれて。

〽と後は得云はずはら〳〵、こぼす泪は千萬無量、云はで碎くる兄弟の、心の内こそいぢらしき、娘は我身と心得て。

さん　エ、恨めしいそのお言葉、お身にかゝりし罪あつて、ともに憂目に逢ふとても、いとふ心で惚れられうか、同じ罪に落ちぬやう、かばうて下さんすお言葉は嬉しいが、お前に放れてわしや何とせう、どうせうぞいなア。

〽口說き歎けば三郎がむつと顔。

三郎　エ、舌足るい世迷ひ言、此のずりめも生白けた面で、いつの間にやら大事の娘を、よう泣くやうに仕居つたな、ほんに脊戸門へ娘も出されぬ、エイわ、その代りに手ばしからばらしてくれう。

〽脇ざし拔く手にすがるは娘、庭にもあぶく兄弟が、心をひやす氣をひやす、

いつの間にかは太夫が女房、三郎を突退け〱繩附を後に圍へば。

ト此の内なぎさ奥より出て、三郎を留め要之助を圍ふ。

ヤ、科人を成敗するに邪魔めされな、伯母者人。

なぎ　イヤ邪魔はせぬわいの。

三郎　それに何でその留立て。

なぎ　サア大それた科人なれば、人手にかけず此の方で成敗する、云はれぬ事にさし出すと、すつ込んで居召され甥の殿、餘のお人のお指圖は、憚り乍ら受けぬわいなう。

〽やり込められてちつともひるまず。

三郎　イヤすつ込んで居ますまいわい、代官所の仰せにて詮議なす三郎、今宵一番鶏の鳴くまでに、首打つて差出さねば役義が立たぬ。

なぎ　サアさういふ事なら今宵一番鶏の鳴くまでに、伯母が首討つて渡しませう。

さん　エヽ、そんならどうでもあなたをば。

なぎ　アヽコレ、わしに任して置きやいの。

三郎　エヽ何の彼のと暇潰し互ひ早いに目かりはない、伯母者人、しつかりと預けましたぞ、サア女

郎わつぱめ、立ちやれ。（ト引立てようとする）

安對　ヤ、コリヤ私等を。（ト逃げようとする三郎押へて）

三郎　ヤア身動きするな詮議がある、兩人を奧へ引立拷問するのだ。

要之　ム、。（ト立掛らうとする）

三郎　ヤアひた〳〵とその面なんだ、夜明までには首にする、併し伯母御前の手際では刃金が裏に、ハテ覺束ない。

なぎ　イヤ見事討つて見せませう。

三郎　スリヤ伯母者人が、いよ〳〵首を。

なぎ　ハテ念には及ばぬ、コレ娘、大事の科人あらわれゝばわしが爰に附いて居る、そなたは奧へ。

さん　イヱ〳〵、私も爰に居るわいなア。

なぎ　成程爰が放れともなかろ、道理ぢやがそなたが居たとて助らぬ大事の科人、何も彼も母が胸に、ハテそなたを生んだ母ぢや、何でそなたの心知らいでならうか、わしに任せて奧へ行きや。

さん　そんならどうでも。

なぎ　ハテ行きやといふに。

三郎　然らは伯母者人。

なぎ　甥のとの。

三郎　きつと言葉をつかひましたぞ、サアおさんも奥へ、兩人立たう。

〽てうど打つたる釘かすがい、母の言葉に力なく、見返る娘兄弟を、引立て一間へ入にける。

ト三郎思入、安壽姫對王丸おさんを引立て奥へはひる。

〽娘の姿見送りて、暫し涙にくれけるが、やうやく言葉おししづめ、要が傍へさし寄つて、いましめの繩切ほどき。（ト要之助の繩を解き思入あつて）

なぎ　何處の掟か知らねども片田舍に育つた娘、戀こふるも他生の緣、何卒助かる仕樣もがなと思へど叶はぬこなたの命、今宵中とあるからは云うて詮ない事なれど、あれ程までに焦るゝ娘、せめて未來は夫婦ぢやと杯なりとさせ度い賴み、それ故かゝる因果話、心を留めてとつくりと一通り、まア聞いて下されいなう。（トきつぱりとした合方になり）何を隱さうアノ娘は、曉毎に羽叩きし、鷄の聲をさけぶ、世間に稀な片輪者、情なや夫太夫は如何なる過去の惡業にや、只だ殺生を事として、假りにも人に情をかけず、慈悲善根の心なく、人の異見も女房の諫めも

聞入なき放逸邪見、その罰があの子に報ひ、夜明になれば身をふるはし、鳴く聲ばかりか身振りまで、又とあるまい鷄娘、親の邪見な胴慾を、天から憎む見せしめと、知つても直らぬ夫の心、中に立つ身の悲しさは、ありとあらゆる加持祈禱、露いさゝかも驗なければ、人の知らぬ恥しさに、娘ばかりか圍の內に多くの鷄を飼ひ置くも、その鳴き聲をまぎらす爲め、かゝる片輪な身の上も、是まで云はねば知らぬ娘、朝夕たしなむ紅白粧、髮結うてやる度々に、人に勝れて美しく見えるは親の因果にて、なぜに片輪に生れたと、思ひ廻せば廻す程、いぢらしいとも可愛いとも、云ふに云はれず苦しさに、母が泣聲まぎらす鷄はありもせで、かく淺ましき身の上を、あからさまにお話し申すも、年月焦れしあの娘、杯なりとさすなれば、夫を菩提の種となし、アノ子を勸めて出家させ、せめて未來を助けようと思うて賴む親心、推量してたべ叶へてたべ、どうぞ聞入れて杯して下されいなう。

〽賴むとばかりせきいりし、子故の闇ぞ哀れなり、要之介も涙を催し。

要之　御緣とは申し乍ら不審の話し承る、一身共に不具なりとも、心を以て形とせば何恥しからん、御息女無下に致さんやうはなし、必らず氣遣ひ召さるゝな。

なぎ　ム、スリヤ聞わけて杯をして下さるか。

要之　一旦あいと申せしからは。
なぎ　アノいよ〳〵。
要之　ハテ扨て御念に及ばぬ。
なぎ　エヽ忝い、娘に語らばさぞ悦び、善は急げと此の由早う。（トなぎさ立上る此の時、奥にて）
〽心はいそ〳〵立上る、一間の内より聲高く。
三莊　ヤアならぬ〳〵科人めに大事の娘、杯なぞとは思ひも寄らず。
〽大だら引さげゆるぎ出で。（ト奥より三莊太夫出て）
ヤイ女房、見れば科人の繩解いてあるが、誰が許してその繩解いた。
なぎ　サアこれは、ヲヽそれ〳〵わしが預る此の囚人、殊に叶はぬ事と定め、覺悟極めた上からは、逃げ隱れせうやうもなし。
三莊　ヲヽそれはそれにしてやらうが、娘が身の上聞いたる奴、片時も生けては置かぬ、面倒乍ら身が手料理、有難い事と三拜してそれへ直れ。
〽刀拔く手に取すがり。

なぎ　それその心故、娘が片輪。

三莊　ヤア馬鹿つくすな、コリヤヤイ人も賴まぬ問はず語り、邪魔立して怪我するな、エヽ其處退け
其處退け。

ヘ突退けはねのけ、既に危うき其折柄。

ト三莊太夫刀へ手を掛ける。なぎさ留める。此の時向ふにて。

呼び　御上使のお入り。（ト是にて三莊太夫向ふをきつと見て）

三莊　ムヽ、御上使とは、察する所大江の郡領時廉公より對王兄弟詮議の使ひか、何にもせよ見苦しい
其囚人、成敗は後程、コリヤ〳〵女房そやつに繩かけ、取逃さぬやう張番致せ。

なぎ　成程お差圖に任せ私が部屋へ、サ科人立ちや。

ヘ情を掛けるしばり繩、是非も涙に母親が、伴ひ部屋へ入にける。

トなぎさ先に要之助附添ひ奥へはひる。三莊太夫手を叩く。奥より紋壽醫者にて出る。三莊太夫ちよ
つと囁き奥へはひる。又揚幕にて。

呼ビ　御上使のお入り。

ヘ程なく入り來る上使の仁體、袴肩衣引かへて、肩もかゝらぬつゞれの一卷、

亂れと見えて猩々頭、のつさのさ〳〵入り來る。

ト舞掛りの調べになり花道より權藤次實は權六三立目のなりにて出て、ゆう〳〵と本舞臺へ來る。

〽流石の太夫もびつくりせしが、樣子あらんと上座に通し。

ト三莊太夫こなしにてあれへと思入する。權藤次ツカ〳〵と上手へ通りて腰を掛けようとして、床几無き故尻まくりをして大あぐらをかき、空うそぶいて居る。

三莊　御上使には見馴れぬお姿、何處如何なる方よりの御使者でござるな。

權藤　エイわしでごんすか、イヤ拙者は奧州から罷り越した。

三莊　ム、、奧州よりとは大江の郡領時廉公の御使者ならん、是は〳〵遠路の所御苦勞の御發駕、ヤア〳〵申し附けたる御上使への拜膳、用意よくば持參致せ。（ト奧にて）

紋壽　ハア、。

〽はつと答へて持出づる、使者へもてなす配膳は、花物云はさぬ山吹の、うづ高蒔繪さてこそと、大口開いてあざ笑ひ。

ト奧より紋壽かけばんの膳わんの中に、みだけ小判小粒の入りしを持ち出て權藤次の前へ直す。權藤次思入あつて。

權藤　ム、ハ、、、使者へ配膳饗應と此のもてなしは問はずとも、花もの云はさぬ山吹色、おのれが心に引くらべ、慾にまどはす此の配膳、我見る目には瓦石同然、コリヤ身にはつゞれをまとへども心は清いお乞食樣だぞ。

三莊　ヤ。

權藤　イヤサ乞食非人の手にふるゝ、むさい汚ない此の配膳、使者の俺にやア、イヤサ使者の身共の氣に叶はぬ、持つて立て。

紋壽　イヤ〳〵そりや惡い合點、コレ此の配膳はナ、それナ。（トいろ〳〵思入あつて）でございまするによつて、お取置きなさるゝ方が宜しからうと存じまするて。

權藤　サアそれだに依つて氣に入らぬ。

紋壽　そりや又何故でござりまするな。

權藤　さればでごんす、靑天井の時分ならへイ旦那樣お餘り有難うと云ひもしようが、今となつちやアめつたに是を、その釣りわなにやアまアかゝらねえ。（ト三莊太夫の方を見て氣を變へ）イヤサ、わいろをゑばに使者の身共をたらし込み、時廉公の御前をば取りつくろはん太夫が結構、それ迚も又詠みと歌、事に依つたら相談に乘るめえものでもあるめえが、是ばかりの目くされ

紋壽　金ぢやアまアいやだ、使者だぞよ、無禮であらう。（トきつといふ。三莊太夫始終權藤次の素振りを見て思入）

紋壽　ハヽヽヽハヽヽヽヽヽ、是は〳〵どうした物ぢや、これを受けぬと云ふ事があるものかいの、ハヽヽヽヽ、ハヽヽヽヽヽ、さう大たばに出かけても、コリヤお金でござりますぞえ、私ならまア取る物は取つた上、せりふは後でどうでもなる事と、申したら皆樣がお笑ひなさらうが、世のたとへも申すではござりませぬか、慾に目がなるをかしかろと、ハヽヽヽ。

權藤　ヤイ〳〵、づくにうめ、姦しい、控へ居らぬか。

紋壽　ヘエー。（トこなし）

權藤　是前より身共に對し、無禮な奴の汚らはしい、此の配膳目障りだ、とく〳〵持つて行き居らう。

紋壽　此の樣にまで品を變へ、言葉を盡して申し上げても。

權藤　まだ饗應の仕樣が足らぬ。

紋壽　エ。あの是程のお心附けでも。

權藤　此の屋體骨をふるつた迚も、俺樣のお氣にやア叶はねえや。

紋壽　ヘエヽ。（ト呆れしこなし。權藤次又きつと心附きし思入あつて）

權藤　金銀のもつて面を張り、イヤサ佞辯を以て人をなづけ、奸計を以て諸人を欺く共、此の使者は
その手ぢや行かぬ、馬鹿つくな。
へと踏み碎く、傍若無人も理の當然。
紋壽　ア、是は〳〵とばかり花の吉野山、でなくて是はまづ〳〵愚老が着服如來。
トこぼれた金を拾はうとするを、三莊太夫紋壽の首筋を取り下手へ突きやり金を拾ふ。紋壽思入あつて
ア、情なや、折角着服如來と思うた黄金佛は旦那樣がせしめ如來、我等は空しく如意輪觀音、
是から奥でドレ夜食の菩薩に有りつきませうか。
へつぶやき奥へ走り入る。（トよろしく紋壽奥へはひる）
へ始終とつくと見すます太夫、使者の傍へすり寄つて。
ト三莊太夫始終こなし權藤次の傍へよりて
三莊　イヤ何お使者、最前より始終の樣子、見聞せしに不肖の配膳、お氣に逆らひ何とも早や迷惑至
極、それは私、峠廉公より御諚の趣き、逐一仰せ聞けられ下さりませうならば。
權藤　ア、是〳〵、其長口上取置かれい、其元が聞かうと云はいでも云はねばならぬ上使の表、そも
今日の嚴命は一方ならぬ一大事、同席は如何であらう、末座へ下つて聽聞おしやれ、イヤサ聞か

三莊　つせえ、時廉公の上意には、アノ御自分へ御所望の筋あつてはる〴〵身共推參致した、コリヤ異變は成るまいがな。

權藤　コハ仰せとも存ぜず、誰あらう時廉公の仰せは勅命同然、何しに違背仕らう、何かは存ぜず身に叶うた儀でござらば。

三莊　コリヤかうありさうなもの。しかと左樣か。

權藤　御念に及ばぬ。

三莊　承引あつてまづは安堵。

へ懷中より取出す、奉書にあらぬ片しの面つう。（ト懷中よりめんつうを取出し）

貴殿の方に所持召る一品ある筈、此の面つうに納められて、さし上げよとの火急の嚴命。

權藤　ムヽ此の器に納めよとは、シテお望みのその品は。

三莊　ハテ知れた事、首切つて渡し召され

權藤　ムヽ首切れとは對王安壽、夫なれば何の手間暇、後共申さず只今直ぐに。

へお目に掛けんと立上れば。

三莊　アヽコレ〳〵、その兄弟の首ではない。

三莊　シテ又何者の、

權藤　外ではない、其元の白髪首を。

三莊　ヤ何と。

權藤　所望申しに參つたのサ。

三莊　ヤア血迷うて何をほざく、最前より言葉のはし〴〵問はずと知れた使者は僞者、叶はぬ所だ、ばけの皮をモウあらはして仕舞やれサ。

權藤　ヤア血迷うたとはおぬしの事だ。

三莊　年老つたれど三莊太夫、汝達如きが口の端に、かゝりやつながる使者應對、尊敬すれば附上り血迷うたとは何のたわ言。

權藤　イヤサ老ぼれあらがふまい、覺えがあらう、先年都三條松原にて、岩木の判官政氏殿を、卑怯にも欺し討つて立退いたる三莊太夫。

三莊　ヤ。

權藤　イヤサ驚くな、モウ手證が上つて居るぞよ、叶はぬ所と覺期して、サア尋常に素首渡せ。

三莊　ヤア此奴、云はして置けばずばら〳〵と、岩木の判官を討つたとは何のたわ言、物ほしさの高

ゆすりか、推參千萬、土邊に下つて三拜ひろげ、身の程知らぬ人非人めが。

權藤　ム、ハ、、、、、、、人非人め、人非人とはよくぬかいた、コリヤヤイ、イヤサそのあごたでほざいたかよ、非人とはおのれが事だ、身には絹布をまとへども性根の汚れし人非人めが、サア老年よつたがらくた命、惜しますと首を渡せ、イザ受取らう。

三莊　ヤア又してもその雜言、身が政氏とやらをぶつ放した、何ぞ慥かな證據があるか。

權藤　老さらばうてもそれほどに、命が惜しいか、死にともないか、此期に及び未練にも、證據呼はり片腹痛い、おのれの罪は淨玻璃のぬきさしならぬ此のつゞれ、何と覺えがあらうがな。

トつゞれを見せる。三莊太夫見てびつくりこなし。

コリヤあらがふな見覺えあらう、所は名に負ふ島原の、騷ぎの裏手でしつぽりと、居乍ら詠める宵月夜、ツイとろ〳〵と寢入りばな、夢驚かした其時に、それ此のわんぼう、おぬしに賣つたお乞食樣だ。

三莊　ヤ。

權藤　いくらじたばたもがいても、モウ手證は上つて居るわえ。

三莊　たとひ此の品身が借り受けたにもせよ、何ぞ夫が證據になるか、何を馬鹿な。

權藤　エ、置きやがれ、おけ〳〵置きさらせ、證據にならぬ此のつゞれが、政氏公の死骸の手にはどうして殘つた、イヤサどうして有つた。

三莊　サアそれは。

權藤　是でも證據にやならねえのか。

三莊　サアそれは。

權藤　素首渡すか。

三莊　サアそれは。

權藤　サア。

三莊　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

權藤　欲にとろけしねぐさり首、貰うて入れるめんつうの首桶、いやおうなしにきり〳〵やつて下さりませ。

〽破れ掛つたつゞれの證據、いかな三莊の針先でもつゞくりやうはなかりけり。

トかさに掛つていふ。三莊太夫ぢつとうつむきこなし。

サア云譯の筋あるか、よも云譯はあるまい〳〵、云譯なければ退れぬ所、尋常に素首渡すか、
サア〳〵きりきり返答しろ。

〽退引させぬ上使の手詰、傍若無人の太夫が大聲。

三莊　ヤア證據が出ようが何が出ようが、身に取つて覺えない、そんなたわ言聞いて居る暇はない、何を馬鹿な。

〽言葉荒目のあら疊、踏み散らしてぞ奥へ行く。（ト三莊太夫めんつうを踏みこわし奥へはひる。）

權藤　ヤアくわんたいなる慮外者、たとひ踏込んでも死損ないの白髮首、打落して立歸らん。

〽身拵らへして驅け行くを、女房一間を走り出で。

ト權藤次奥へ行かうとする。なぎさツカ〳〵と出て是を留め。

なぎ　アイヤ暫く御待ち下されませ、樣子は殘らず承りました、御上使樣への一つの御願、慥かに證據ある上は、迚も退れぬ夫の命、本意ならねど女房の私が、首討つて御渡し申しませう。

權藤　スリヤ其方が太夫の首を。

なぎ　サア討つ事は討ちまするが、此世の別れ暫しの御猶豫、御上使樣の御情にて。

権藤　ヲ、首打ち落す功にめで、暫時の猶豫は身共が情。

なぎ　道に迯うた事作ら、明六ツまでに夫の首。

権藤　必らず討てよ。

なぎ　成程討つてさし上げませう。

権藤　まづそれまでは。

なぎ　御上使樣。

権藤　案内しやれ。

へのさばりかへる上使の勿體、伴なひ一間に入りける。

ト送りにてなぎさ権藤次奥へはひる。直ぐに大ドロになり、心と云ふ字を日覆へ引上る。やはり薄ドロ〳〵此の間知らせあつて、日覆より舞臺一面の大欄間をくり下す。よき所に留ると本堂入口の書割の張物をばらりと一杯に下ろす。すべて國分寺本堂の綺細よろしく、道具納る。トドロ〳〵打上げる雪おろし花道バタ〳〵になり安壽姫對王丸の手を引き、こけつまろびて走り出て來り、舞臺にて突きこけると、木魚入り靜かなる禪の勤めになる。上手より同宿四人出て來り。

殘生　ヤア〳〵爰らに見馴れぬ若い小わつぱ、參詣の者とも見えぬが、コリヤ雪にふり込められたのか。

頓才　何處からまア此方衆は、來さつしやつたぞいの。

安壽　ハイ〳〵、私共は非道なお主に責使はれ、辛さの餘り家を出て、後から追人のかゝるもの。

對王　お寺と見受けて驅け込みました、どうぞお助けなされて下さりませいな。

殘生　ハヽア非道の主人と有るからは、扨ては由良の湊の三莊太夫に抱へられた人達か。

頓才　ヤレ〳〵見れば手足も疵だらけ、年端も行かぬものを可哀相に。

珍念　お師匠様はお留守なれど、人を助けるは出家の役ぢや。

歎念　二人共に助けてやる程に、

四人　案じやるな〳〵。（ト此の時花道揚幕にてわや〳〵と人聲する）

安壽　アレ〳〵アノ人聲は追人のもの。

對王　早う救うて下さりませ〳〵。

殘生　ム、合點ぢや〳〵が、見渡す通りの田舍寺、隱し所というても。

頓才　それ〳〵戸棚や押入では、直ぐにさがし居るであらう。

珍念　ヲヽ能い事がある、庫裏に釣してある經つゞら、あの中へ隱したら氣が附くまい。

歎念　成程、コリヤ能い思ひつきじや。

珍念　イヤ〳〵どうしてあの中へ二人一緒に、其上經文のつゞらへ女中を。

安壽　ア、モシ、此の身はたとひどうなるとも、譯あつて此の子は大事の身の上、どうぞ此の子の。

歎念　ヲ、さういふ事なら此の若衆どのを、つゞらへ隱してやりませう。

四人　サア早く來さつしやれ〳〵。（ト手を取て引張る）

安壽　ア、コレ對王、今いふ通りそなたは大事の身の上、母樣より兄弟がつゝがない樣にと、お渡しなされた觀音の金佛、肌身放さず持つて居た故、今まで此の身に怪我も、是をそなたに渡す程に大事に持つて必ずその身を大切に。（ト懷より服紗包厨子入りの尊像を出し渡す）

對王　姉樣のお志、しつかりと預りました。（ト受取る又人聲ばた〳〵）

四人　ヤレ〳〵近附くアノ人聲、サア〳〵早う。

對王　姉樣も隱れて下され。

頓才　ヲ、女中は庭の物置。

四人　サア〳〵早う來さしつやれ。

ト同宿兩人を連れて上手へはひる。矢張り禪の勤め雪おろしのあしらひ、花道ばた〳〵與五作五介新太三六先きに下男四人鉢卷尻からげ、銘々松明六尺棒を持ち走り出て來り。

與五　何でも雪の中の足跡は、此の寺の道續き。

五介　爰へ逃げ込んだに違ひない、ソレ探せ〱。

若衆　合點だ。（トわや〱與へ亂れ入る。直ぐにばた〱になり、四人同宿と古つゞらを爭ひ乍ら出て）

新太　外へ行かれぬ一筋道、爰へ逃げ込んだに違ひないが。

三六　物一つ無き此の古寺、只怪しいは此のつゞら。

四人　紐をほどいて。（ト四人立掛るを同宿止めて）

殘生　ア、コレ、今云ふ如く經文に違ひない、開けたら此方衆。

四人　罰が當るぞ。

四人　罰も報いも構ふものか。

同皆　イヤ〱見せる事はならぬぞ。

與五　エ、面倒な、叩きのめせ。（ト禪の勸めになり四人棒にて同宿を追ひ散らし）

五介　此の間に早くつゞらの内を。

三人　合點だ。

〽蓋取退けんと立かゝれば、不思議や俄に鳴動し、四方に輝く金色の、光と共

につゞらより、あらはれ出でし一個の童子。

ト四人つゞらの蓋を開けにかゝる。ドロ〳〵になり目くらめき一時に見事に返る。是を一時に蓋を刎退け、金蓮童子金の蓮杖を持ち出る。四人起上り是を見て。

與五　ヤコリヤ對王と思ひの外。

五介　怪しきなりのわつぱめ。

新太　化性の者か、魔性の者か。

三六　そもまづうぬは、

四人　何奴だ。

〽何奴なると呼はれば、童子は微妙の聲高く。

童子　善哉々々、我こそは對王安壽が念誦佛、觀音薩埵に仕へまつる脇士の一人金蓮童子、今姉弟が危急を救へと、薩埵の命に姿を現じ、貪慾非道の太夫が徒者、金剛夜叉の憤怒を借り、泰河の雪に埋めてくれん。

〽黄金の蓮杖小脇にかひこみ、立つたる姿ぞ勇ましゝ。

與五　ヤアたとひ觀音の云附でも、

五介　めつたに負けぬわしらがお主は、

新太　閻魔と仇名の太夫殿。

三六　此のまゝ變らば地獄責め。

四人　佛とて用捨はならぬ。

童子　何を小癪な。

與五　ソレ叩きのめせ。

三人　合點だ。

へ打つて掛かるを東西南北四方上下に方便力、おどりかゝれば都率天、ころりと前へ須彌檀返し、沈んで組付く兩人が、肩先はつしと有頂天。

ト此の間四人六尺棒にて打つて掛り立廻りあつて、文句の切より音樂の入りし謠への鳴物になり、立廻り始終どろ〳〵の樣に雪おろしを冠せ、雪降りの立廻りよろしくあつて。

へ蓮花にあらぬ吹雪の花、ちり〳〵、ぱつと逃げ出せば、何處までもと追うて行く、童子の働き觀音の、利益の程こそ。

ト四人花道へ逃げてはひる。童子向ふを見てきつと思入。どろ〳〵にて童子をきぬたにて消す。知ら

せにつき大ドロ〳〵にて、舞臺の道具居所替りになる。
本舞臺眞中二間、常足の亭座敷、大和葺本緣附き、一面に障子建切り、軒に誂へ鷄の入りし鳥籠、上の方鷄の戸居。下手所々に鷄の伏籠、後一面奥庭の遠見。すべて雪おろし、こゝに上手の立木に安壽姫對王丸繩目に掛りしばり附けあり。やはりドロ〳〵にて道具納る。ト心といふ字を日覆より兩人の後へ引いて取る。兩人是にてムヽと心附きたるこなし。かすめて雪おろし。

對王　姉さま。

安壽　弟、そんなら今のは夢であつたか、追手に探され危い所、つゞらの不思議は觀音樣の御利益、姉が渡した金佛の尊像、そなたは持つて居やらうの。

對王　アイ肌身放さず持つて居ります、その奇特やらどのやうに、叩かれても疵さへ附かぬ此の身の不思議。

安壽　此の末どうなる事かは知らねど、今一度母樣に逢ふまでは、そなたは取わけ大事の身、その尊像を大事にかけや。

對王　アイ〳〵お前も怪我せぬやうに、達者でゐて下されや。

ト此の時雪おろしはげしく、以前の與五作五介新太三六出て來り。

與五　サア〳〵二人共、連れて來いとのお主の云ひつけ。

三六　責苦に逢はすは不便だが、主と病ぢや。

四人　サア〳〵一緒に。

安壽　そんならまだ此の上に。

安對　姉弟を。

五介　鬼親父めが地獄の責め。

新太　是も前世の因縁。

與五　暇取らばおいらが身の上。

四人　サア〳〵早く來やれ〳〵。

トやはり雪おろしにて、四人安壽對王を引立て上手へはひる。淨瑠璃になり。

〽更くる夜に、由良の戸渡る柴舟の、漕ぎ放れたる歎きぞや、不便やおさんは闇の内、涙は雪とふりしきる、る積は同じ思ひにて、思ひは消えぬ埋火の、炬燵ばかりが寄邊にて、伏沈みてぞ居たりける。（ト此の淨瑠璃の切れ獨吟になる）

唄〽春はいつ、笠にふらるゝ雪よりも、つれなき人のつめたさを、六ツの歌仙も

詠みわびて、やたけ心に戀すてふ。

ト是にて正面の障子を引抜く。内におさん紫の蒲團をかけし置炬燵にもたれ居る。

さん　此のまア冷える夜に只お一人、くゝられてゐやしやんすりやさぞ寒からう、おいとしやたとひ枕は交さずとも、わしが殿御と定めたお方、今宵限りのお命にて、最早此の世で添ふ事もならぬといふは何事ぞ。何の事ぢやぞいなア。

唄へかざすや金のかんざしの、さす手引舟磯へも寄せず。

高いも低いも姫御前は、夫に附くが其身の役、夫は寒いに繩目をうけ、冷え上つて居やしやんせうに、女房のわしがぬく〳〵と炬燵に居よう筈はない。

へ云ひつゝ立つて庭の面、思ひは堅き飛石も、埋むばかりのみな白妙。

不思議の緣で見染めたお方、あんな殿御もあるものか、どうぞ逢ひ度い逢はせてたべと、頼んだ神樣佛樣、毘沙門樣も聞えませぬ、お千度打て戴く御鬮。

へ二の上つたは二世かけてと、悦んで居たものを、今逢うて今別れになるやうな、守りやうがあるものかいなア。

又金比羅様も金比羅様ぢや、人の拜む時は默つて拜まして置いて、死別れせうとてこちや拜みやせんもの、ヱ、こんな事ならいつそ逢はさず、焦れ死をするやうに、守つてくれたがよいわいなア。

〽娘心のくど〳〵と、泣いて見たり悔んで見ても、返らぬ今の身の悲しさ。

今宵かぎりのお命とて、最早此の世で逢はれぬとはコリヤまア何事、何の事ぢやぞいなう、アコレ冷えるについては猶いとしい、せめてお傍の介抱も、よるべのならぬ片男波、思ふ殿御を捨小舟。

ト此の時分雪大ぶんにふる。

唄〽沖にめら〳〵由良の戸の、おつと取楫合點ぢや、ゑいかヱ、よふそろのんこ、帆を卷立ての舟唄は、便りを松の嶋陰や、君の追手の戀風は。

ヱ、折も折とて今宵のまア、此の雪のふりやう、とても叶はぬお命なら私も共にこゝへ死、お傍で一緒に死に度いわいなア。

唄〽色のつかさを求めん手管、中をへだつるませの菊、咲きしも憎くや夕照りに、顏に紅葉の戀の鬼。

ト是よりじり〳〵と屋體を上手大臣柱の內へ七分程引き、下手より小高き土橋。誂への石燈籠を舞臺眞中へ引出し、ぐつと下手へ一間の待合を押出す。是に脇差を掛けし刀掛あり。

唄〽丹波大江の山よりも增る思ひや八雲立つ、出雲八重垣つまごめは、何處と結ばん緣の綱。

ト是までに道具納る。

〽我戀人も春の雪、あしたを待たず消える身と、思へば胸も碎け行く、岩戸の神の惠もあれば只いつまでも常闇と、空を見やれば降る雪に、いとゞ心も丑滿過ぎ。

最前聞けば一番鷄が殿御のお命、どうぞ今宵はいつまでも、夜の明けぬ樣しやうは無い事かいなア。コレ〳〵鷄よ、今宵一夜はたとひ夜が明けても必らず時を諷うてたもるなや、一番鷄がいとしい〳〵殿御の御命、鷄も心があるならば、必らず諷うてたもるなや。

〽その云ひ甲斐も情なや、早や塒々に告の鷄、羽うち羽叩きばつさばさ、おさんはびつくり見上ぐる塒。（ト上手屋體にかけし籠の鷄羽ばたきする）

ア、悲しや〳〵、アレ羽叩きするは時を告げる身づくろひ、ア、コレ是いなう、必らず泣いて

たもんなや、そこへ留めに行きたうても脊は屆かず。（ト又羽叩きする）アレ〳〵又羽叩きをするわいなう、エ、どうぞ仕様は無い事かいなう。

〽足爪立てて伸上り、詮方涙に身をもがけど、庭の羽ばたく籠の內、はつと立寄り伏籠より、抱き取り出す一羽の鷄。（ト伏籠の中より誂への鷄を出し）

ヲ、そなたは下に居るによつて能い子ぢやなア、是いなう我身までが同じ樣に、啼きやんな啼きやんな、賢い者ぢや、サア〳〵泣かずと直ぐに。

唄〽ねんねこ〳〵ねんねこせい、ねんねが守りは何處へ往た。

〽抱きしめ〳〵抱きしめて、そつと伏籠の內へ入れ、立戻つて見上ぐるとまり木、又も羽ばたき南無三寶、雪をつぶてと打つけられ、驚き庭へ飛びおりる、鷄をそのまゝ兩手に抱へ。

コレそなたは賢い程に能う聞きや。（ト床と打合せの合方）今我身が啼いてたもると、わしがもう大事の〳〵、身にも命にも替へぬ程のいとしいお方のお命がない程に、けなげ者ぢや、必らず啼いてたもんなや。

〽撫でつさすりつする内に、向ふの止り木こなたの伏籠、多くの鷄の羽うち羽ばたき、おさんはうろ〳〵氣も半亂、あなたこなたと追ひ廻す、飛石傳ひのしどろ足、褄ももすそもひら〳〵〳〵、ひらりと飛んだる鷄の、羽先摑んで大地へころり、ころ〳〵起き上つてはかけめぐり、只身一つに詮方なく、どふと伏して歎きしが、すつくと立つて泣目を拂ひ。（ト此の内よろしくあつて）

ヲヽそれよ天滿神の御歎きにて、河内の國道明寺は、今に鷄啼かぬと聞く。

〽その神力には及ばずとも、戀しと思ふ我夫に、別れを急ぐ鷄の音を。

女の一念止めいで置かうか。

〽一心こりては眼も釣り上げ、見上げ見下す鷄籠、止り木爰に追ひ詰め追ひまくられ、鷄も毛を立てとさかを怒らし、蹴爪を研いで。（トおさん引拔き誂へ鷄の羽の衣裳になる）

〽しゝむらを呼ばんとすれどおさんの心、煩惱の犬となり鷹となり、追ひつ追はれつ遁れがたのゝ狩場の不思議、八寒地獄畜生界、心は紅蓮大紅蓮、とけ

て亂れて黒髪も、ばら〳〵鷄の羽風と共に。（ト此の内薄ドロ〳〵始終狂ひよろしく）

へ多くの鷄を捻りする、蹴殺ししめ殺す、報ひは目前我身の上、思はず知らず

羽ばたきし、一聲さけぶ鷄の聲。

ア、悲しや、今啼いたのは何處ぢやぞいなう。

へ何處の鷄ぞと見廻し〳〵、思はず見やる池の面、我身の上かは白雪の、明り

に詠めて思はず立退き。（ト橋の上より池へうつる影を見て）

ヤア〳〵情なや、我姿生乍ら鷄となり、翼生じて今の聲も、我啼き聲であつたるか。

へ始めて知りし我啼き聲、一鷄うたへば萬鷄諷ふ、函谷關の關の戸も明方近き

あまたの啼き聲。（ト一時に所々にて鷄笛）

ア、淺ましや、親の因果の身に報い、此の姿となつたれば、所詮此の世に生き永らへる心はな

し、ヲ、それよ、此の身を殺して夫に代り、殿御の命を助けいで置かうか。

へ念力こつては髮逆立ち、とさかを怒らし白雪を蹴立て踏み立て待合に、掛け

たる一腰逆手に取り、鷄の報いを目前に、咽笛さけば血は紅、恐ろしなん

ども。

ト此の内待合の刀掛けに掛けてありし脇差を取り、是にて自害なしよろしくあつて三重ドロ〳〵にて、舞臺一杯の雪幕を振り落し、雪おろしにてつなぎ、道具出來次第雪幕を切つて落す。本舞臺元の道具に戻る。二重眞中に熊の皮を敷き、三莊太夫以前のなり脇息に掛り長煙管にて煙草を呑み居る後に刀掛けあり、上手に誂への大飯斗、火鉢に火澤山おこしあり、平舞臺下手に安壽姫對王、上手に要之介繩にかゝり、松にくゝられぢつとうつむき居る。雪おろし時の鐘三重にて道具納る。

〽雪氣の空、むざんなるかな三人は、身を降る雪に埋められ胸の氷は日に解けて、思ひは解けぬしばり繩、目も當られずいぢらしく、物の哀れも白髮の親父、大飯斗に寄り掛り。

ト淨瑠璃の切、鈴入り合方。

三莊　ア、降るは〳〵、三階いの雪見燈籠もまさに埋もれて皆白妙となりけらし、詠めに飽かぬ雪の庭、どうも云へぬ此の景色、埒放れし小鳥めら、凍え死に居る心地よさ、コリヤ、ヤイわいら泣くか、寒いか、ヲ、尤、可哀や〳〵、寒くばきり〳〵云うて仕舞へ、岩木のがきめらであらうがな。

安對　イエ〳〵、そんなものぢやござんせぬわいなア。

三莊　コリヤこちらの毛二才め、大江の郡領と書いたる榜示杭切り居つたは、おのれも岩木の餘類に極つた、サア有様に白狀せい。

要之　ヲヽたとひ岩木の餘類でなくとも、郡領と書いたる札を切り割りしは時廉公に恨みある者、入らざる馬鹿念押さずとも、片時も早く首討つた。

三莊　ムヽ首さし延べし丈夫の魂、女郎もがきもづぶとい面、コリヤ一應ではぬかすまい、此の上は肉を削り骨をひしいでも云はさにや置かぬ、今謳ひしは一番鶏、所詮甘く云つたとて一通りではぬかし居るまい。ヲヽぬかすなよ、コリヤむごい目を見ずばなるまい。

〽火ばしを炭火にさし込み〳〵。

三莊　ヤイ忘草。

對王　ハヽイ。

三莊　信夫よ。

安壽　ハイ。

三莊　兄弟の者よく聞けよ、元來我は大江郡領様より三莊を預りの代官格、おろそかならぬ此度の

役、此の畫姿に似寄りのうぬら、打捨てては役目が立たぬわ、サアうぬらが親は岩木判官と云はうがな。

對王　イエ〳〵その樣なものではござりませぬ。

三莊　そんなら岩木が忰ではないか。

對王　ハイ。

三莊　ヤイ信夫よ、わりや岩木判官が娘安壽姫、忘草は對王丸であらうがな。

安壽　イエ〳〵勿體ない、お主樣に何の噓を申しませう、兄弟共左樣な者ではござりませぬ。

三莊　そんなら兄弟共岩木の餘類ではないか、コリヤ、能く物を合點しろ、モウかうなつたら云うても云はす、又云はずとも云はさにや置かぬ、サアどつちからなりと白狀しろ。

安壽　イヱ〳〵、如何やうに御尋ねなされても。

對王　此の事ばかりは存じませぬ。

三莊　そんならどうでもわいらは知らぬな。

兩人　ハイお許しなされて下さりませ。

三莊　エヽしぶとい奴等、又靑二才めも榜示を切つたは我科などと間に合ひ口、合點が行かぬ、ヤイ

二才め、此の二人の奴等は岩木の餘類と云ふ事、われが知らぬ筈はない、サアきり〳〵とぬかして仕舞へ。

要之　只今も申す通り、榜示を切りしは大江に仇ある某が業、岩木の餘類とは思ひも寄らぬ、左様な事を申さずとも、少しも早く成敗あれ。

三莊　ヤアしぶとい二才め、よし〳〵餘類で無くば今目の前で二人を栲問、ヤイ二人乍ら是を見ろ、此の火鉢にくべたる燒鐵、しぶというぬらがどてつ腹へ。

安對　ヱ、、。

三莊　憂い目辛い目、年寄つてしたくもないが、是も役目だ覺期しろ。

〽邪見のほむらに燃え立つ燒鐵、傍に掛けたる手拭に、しつかと卷きて庭に下り立ち、目先へ突つけ。（ト手拭かけの手拭を取り火ばしを持ち庭へ下り）

ヤイどちらからでも白狀しろ。

兩人　サアそれは。

三莊　忘草、わりや對王丸であらうがな。

對王　サそれは。

三莊　信夫め、我は安壽姫か。

安壽　サアそれは。

三莊　此の二才めは、うぬらが家來であらうがな。

安壽　イヱ〳〵左樣ではござりませぬ。

對王　申し御主樣、私を殺して姉樣をお助けなされて下さりませ、申し姉樣、扇の橋で母樣のお言葉必ず忘れて下さりまするなえ。

安壽　ヲヽよう云うてたもつた、年端も行かぬそなたの眞實な心から、姉を助けんとの心ざし、申しお主樣、私は女の事、どうぞ弟をお助けなされて、私を殺して下さりませ。

對王　イヱ〳〵私を。

安壽　イヱ私を。

對王　イヤ姉樣を。

安壽　イヤ弟を。

兩人　お助けなされて下さりませ。

〽と爭ふ兄弟、せちがふ太夫。

三莊　イヤそりやならぬ、さつきにから樣々と言葉を盡し、會釋して聞かせても、聞入れぬ小びつちよめら、ぬかさぬからは此の燒鐵、背骨をかけてたつた一さし、それでも云はぬか。

兩人　サアそれは。

三人　サア〳〵。

三莊　どゝどうだ。

〽あなたこなたへ突つける、折しも降り來る大雪に、八寒地獄苛責の責め、中に立つたる太夫が獄卒、傍にあぶ〳〵要が身もだへ、天道樣誠あるならば、此のいましめを解きたまへ、日本國の神々にも見放されたか淺ましやと、三人が淚一時に由良橋立に成合の、うしほ滿ち來る如くなり、三莊太夫大口開き（ト此の間三莊太夫兩人をさいなむ。要之介いろ〳〵思入。此の時明六つの鐘鳴る）

ハヽヽヽ、いつまで云つても返らぬくり言、アノ鐘はもう明六ツ、二人の奴等が詮議は後、青二才めが首打落し、上使めの鼻明かさん。

〽まつかうかさに拜み打ち、拔けつくゞりつ身をかはす、怖々二人が支ゆれば、

切先外れて不思議にも繩の切れしは天の加護、切込む刀打落され、ひるむ所を討入る要、刀追取り太夫が肩先き、ばらりずんと切下ぐれば、うんとのつけに倒れ伏す。

ト三莊太夫火ばしを捨て刀にて要之助へ切つて行く。要之助文句通りの立廻りに繩切れる。刀を取り三莊太夫を直ちに切下げる。三莊太夫苦しみ倒れる。

要之　爰は危なしまづ〳〵奧へ、强惡人の三莊太夫觀念ひろげ。

〽二人を追ひやり身づくろひ、仕止めん物と打込む刀、引はずして丁ど受止め、刃の面にきつと目をつけ。

ト安壽姬對王丸奧へはひる。要之助懷中せし短刀にて三莊太夫へ切つて行く。兩人立廻つてきつと思入。

三莊　ヤ見覺えある此の刀、是を所持する其方は。

要之　何を小癪な。

〽又切つけるをしつかと受止め。（トよろしく立廻つて）

三莊　さし裏に不動の梵字、月山が自作の刀、スリヤ日頃尋ぬる悴であつたか。

要之　ヤア此の期に及び僞り表裏の卑怯者、御二方の仇敵、サア尋常に覺期せよ。

〽と詰寄れば手疵に屈せぬ三莊太夫、何思ひけん落ちたる刀、取るより早く我と我腹へぐつと突立てる、なう悲しやと駈け出す女房。（ト三莊太夫刀を取り後腹へ突込む。奥よりなぎさ出て）

なぎ　コレ太夫殿、日頃の惡心つもり〳〵、果ては其身の仇なるか、但しは狂氣か、悲しやなア。

〽取附き歎くを突退け〳〵、目を見開らき。

三莊　悴要之助、能く無事で居てくれたなア。

要之　ヤ、某を眞實の悴とは。

三莊　ホ、不審は尤も、そちが實の親ぢやわやい。

要之　エ、。

三莊　其證據はその刀、さし裏に不動の梵字、月山が自作の刀。

要之　シテ此の刀を證據にて、悴と仰しやる其仔細は。

三莊　ヲ、證據と云ふは汝が刀、語り聞すも恥しや、過ぎ行く此の身のさんげ話、コリヤよう聞けよ。（ト竹笛入りの合方になり。）それ其方のさし裏には、不動の梵字月山が作、所持致したが慥か

な證據、元來我も奧州生れ、鈴村豐後と云ひし者、浪々の内出來たる汝、その刀を殘し女房共は國に置き去り我はそれより當國へ、さまよひ來り緣あつて此の家へ入聟、千軒長者と用ひられしは、我運の開けし所と悅んだが因果の始り、慾惡眼のしとみとなり、國の妻子の事までも、忘れ果てたる放埒無慘、むさぼり集むる金銀にて、面張る我が心の汚なさ、胴慾邪險、人の恨みの報い報うた鷄娘、それにもこりぬ我性根、何卒汝を尋ね出し、共に榮耀にあらせんと、子故の慾に眼もくらみ、時廉に賴まれ手に掛けし、岩木殿は可愛と思ふ我子の御主人、すりや此の親は主殺し、我首取つて大恩の主君へせめて忠義にせよ。

へ子故の闇の思出に、鐵のやうなる魂も、今ぞとろけてはら〳〵、止め兼ねたる親と子が、涙汲み出す如くなり。

要之　ハヽア初めて聞いたる御物語、扨ては年月こがれたる親人にて候か、斯くまで厚き御惠み、神ならぬ身の情なや、主人の敵と手に掛けしは、取も直さず親殺し。

三莊　知らぬ事とて悴が主人を。

要之　揃ひも揃ひし、

三莊　不義不孝。

要之　かくまで早き報いと因果。

三莊　敵同士が親子となり、

要之　かゝる憂き目を見る事か、親人樣、

三莊　悴、親子は一世、能う顏見せてくれいやい。

〽引よせ〳〵抱きしめ、放れ難なき有樣に、母は涙の顏を上げ。（ト兩人よろしく）

なぎ　コレ親父殿何と云はつしやる、娘がしたうた殿御と云ふは、此方が國に殘した子か、エ、神ならぬ身の情なや、知らぬ事故戀したふ夫の命が助けたいと狂ひ〳〵て、可哀や娘ははかない最期をしましたぞいなう。

三莊　ヤ、、、、スリヤ娘めも非業な最期を遂げたるか。

要之　是と云ふも皆我故、不便な事を致せしよなア。

〽悲歎の涙にくれければ。

なぎ　アイヤ〳〵、結句死んだが娘が仕合せ、生きて居たとて添はれぬ緣、コレ。

〽魂中有にあるならば。

母が云ふ事よう聞きやいなう。そなたが慕うた男といふは腹こそ替れ胤は一つの、はし折りかゞみの兄妹ぢやわいなう、それぢやによつて此の世はおろか未來までも添ふ事ならぬとあきらめて、賽の河原へ往てたもや。

〽何の因果で此のやうな、悲しい目には逢ふ事ぞ。

戀しと思ふ心根が、家のむね放れずうろ〳〵と、さぞや迷うて居やるであらう。

〽迷うてなりと今一目、姿形を見せてたも、逢ひ度いわいのと伏し轉び、あだえ歎くぞ哀れなり。（トよろしく泣落す。要之助こなしあつて）

要之　父の切腹母の歎き妹の身の上、かた〴〵以て捨てられねどまだ其上に重きは主人、御二人共いづくにまします、氣づかはしや。

〽見やる一間に由良三郎。（ト上手の障子の内にて）

三郎　ヤア對王安壽に極まつた、觀念ひろげ。

權藤　エイ。

〽鋭くひゞく刀の鍔音、障子蹴放し山岡が、三郎の首たづさへ、兄弟守護なし

控ゆれば。

ト上手障子を引拔く。權藤次野袴ぶつさき大小にて、三郎が首を持ち上の方に安壽姫對王丸控へ居る。

要之助見て。

要之　ヤ、御二方には御安泰なるか、エ、忝い、シテ其許は何人にて。

權藤　ホ、ヲ不審な仔細、つぶさに申上げん。

〽山岡はるかに飛しさり。（ト權藤次舞臺へ下りて）

御母公御二方を政氏公の御一族とも知らず、扇の橋にて賣渡せし某、御不審に思召すは道理至極、譯を申せば長い事ながら御家來筋、此の國にまします由を聞きし故、尋ね參りし甲斐あつて、御機嫌よき御有樣見奉りし身の大慶、御母公も佐渡が島にましませした、彼處を救ひ出し奉り、目出度く御親子御對面は某が方寸の内にあり、必ず氣遣ひ召さるゝな。

〽毒藥變じて忽ちに、あらはす素性流石にも、心岩木の忠臣なり。

要之　ハ、忝し、御臺所と云ひ御二方の先途、見屆け下されんとは要が安堵此の上なし、情なきは某、惡人にもせよ現在の父を討つたる親殺し、何面目に永らへて、生恥を見んより潔く切腹なさん、この上ともに御主人方の御身の上、たゞ〳〵頼むは山岡殿、早やおさらば。

〽引拔く刀山岡もぎとり。

權藤　ヲヽ、親殺しの科人、成敗のしやうあり、覺悟なせ。

〽要が片袖すつぱと押切り。（ト權藤次要ノ助の片袖を切りて）

晉の豫讓のためしに習ひ、親子羽翼の片袖を切つて仕舞へば他人と他人、餘つた骸は此の非人が貰うて去ぬるはお定り、今死ぬる命延はり、主人の先途を見るが忠義、必す共に早まつて、犬死なさるな要殿。

〽諫める言葉に要之介、忝しと一禮に、手負の太夫も悦び涙。

三莊　山岡殿の情にて、悴にあらぬその若者、死ぬる命を助ける仁心、禮は言葉に。コリヤ必ず忠義を忘るゝな。

〽豪氣の太夫よろぼひ〳〵立上つて、緣先にかけたる竹樋引下し。

ト三莊太夫苦しみ乍ら立て竹樋を取る。

主殺しの大罪は捉極まる竹鋸、御兄弟の爲めには親御の敵、サア姫君若君、一引づゝ引いてたべ、要も引け、引かぬか、引いてたべ、引いて成佛させてたべ。

へと竹樋に抜身持添ひ首に當て、エイ〳〵と引切る有樣、なう情なやと女房要取附くを、突退け〳〵首押切り、つひに空しく成り果てる、はつと泣入る妻よりも。

ト三莊太夫我手に首を切つて落入る。皆々思入。

へ不便と見やる安壽姫、親子が歎き山岡が、貰ひ涙に對王丸、心さとくも勇みを附け。

對王　ホ、其の歎きは理りながら、これも敵郡領故。

へ恨みを晴す會稽の、今宵の雪は幸先よし、不倶戴天の仇敵、打ち亡ぼして手向けなん。

忠と孝とのみちのく山。

安壽　黄金花咲く古郷へ。

へ再びかざる錦木の、朽ちせぬ家名千代八千代、さゞれいしづゑ岩木の榮。

縮むは元吉。

對王　山岡兩人。

　へ云ふに山岡勇みの大音。

權藤　仰せにや及ぶべき、當の敵は大江の時廉、榮華に誇りし油斷を見込み。

　へたとひ味方は小勢なりとも、心一致にせめ入らば、思ひ設けぬ事なれば、酒宴亂舞に心をゆだね武略にうとき大江が風聲、爰に押し寄せ彼處にほつ詰め、もみ立て〱ぼつくだし、强欲非道の鐵頭、討取らんは手裏にあり。

要之　ホヽホヽウ潔し面白し。（トのりになり）是より直樣出發なし他日の鬱憤晴らすは此の時。

　へ都を餘所に丹波路や、山又山を打越えて、彼が在城へ逆寄せなし、小勢は夜討と孫呉が言葉、合にあひあふ合言葉。

月よ花よと互ひのかけ聲。

　へやす〱怨敵討取つて、目出たく參會。

權藤　ム、。

要之　ム、。

兩人　ム、ハ、、、、、。

權藤　悅べ元吉。

要之　云ふにや及ぶ。

〽勇み立つたる二人の若者、山岡重ねて。

權藤　イザお立ち。

〽進む權六しほるゝ要、四苦八苦の思ひを愛に。

要之　生者必滅定めなく。

なぎ　勸むる門は無常門。

權藤　此方は敵を討取る門出。

安壽　逢うて別るゝ會者定離。

對王　枯木に花の返り咲き。

權藤　世はさまぐの、

皆々　成行きぢやなア。

〽心を波に打寄する、由良の湊の千軒長者と、その名を今に殘しける。

ト皆々よろしく引張りの見得にて

幕

三莊太夫（終り）

大正十五年十二月十二日印刷
大正十五年十二月十五日發行

『時代狂言傑作集』第六卷
定價金參圓

檢印

編纂者　河竹繁俊
　　　　濱村米藏
　　　　渥美清太郎

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　和田利彦

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
　　　　瀧澤一郎

印刷所　東京市牛込區加賀町一丁目十二番地
　　　　株式會社秀英舍

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　春陽堂
　　　　（電話大手五一、四二一〇番
　　　　振替東京一一六一七番）

河竹繁俊氏
濱村米藏氏　共編
渥美清太郎氏

歌舞伎劇大系（全三十卷）各冊

時代・世話狂言傑作集各十五卷

四百頁乃至四百八十頁校訂
嚴密解説詳細挿繪豐富
定價　參圓　送料八錢
春陽堂發行

世話狂言傑作集（全十五卷）

第一卷（既刊）　四谷怪談。法界坊。嫁切り。梅川忠兵衛。
第二卷（同）　天竺德兵衛。幡隨院長兵衛。酒屋。清玄。
第三卷（同）　八百屋お七。鈴木主水。乳貰ひ。宿無團七。
第四卷（同）　唐人殺し。堀川。野崎村。五大力。
第五卷（同）　女歌舞伎。殿樣彌次。來山。名工柿右衛門。鼓の里。裏表心曲尺。（榎本虎彥集）
第六卷（同）　累物語。白石噺。鬼神お松。夏祭り。
第七卷（同）　め組の喧嘩。三人片輪。上野戰爭。松田の仇討。（竹柴其水集）
第八卷（同）　朝顏日記。二人新兵衛。廓文章。梅の由兵衛。
第九卷（同）　伊勢音頭。明烏。心中天網島。月桂川。
（以下續刊、卷次、內容には多少の變更あるべし）

時代狂言傑作集（全十五卷）

第一卷（既刊）　義經千本櫻。石切梶原。扇屋熊谷。蓮生物語。卅三間堂。
第二卷（同）　高野山。嫗山姥。玉三。義經腰越狀。新薄雪物語。
第三卷（同）　阿漕。菅原。板額。山門五三桐。
第四卷（同）　先代萩。國性爺。辨慶上使。蘭平物狂。彥山權現。
第五卷（同）　鬼一法眼。盛綱陣屋。阿古屋琴責。袖萩祭文。伊賀越。
第六卷（同）　廿四孝。平家女護島。宅兵衛上使。鎌倉三代記。
第七卷（續同）　ひらがな盛衰記、伊勢物語。岸姬松。輝虎配膳。
第八卷（同）　伊賀越。阿古屋網盛綱。安達ケ原。有職鎌倉山。
第九卷（同）　一の谷。富士見西行。楠昔噺。八陣。
（以下續刊、卷次、內容には多少の變更あるべし）